

小泉八雲全集

第十一卷

東京

第一書房



西大久保邸　庭園より見たる書斎

譯者

落合貞三郎
大谷正信
田部隆次

小泉八雲全集第十一卷目次

きまぐれ

クリーオール小品

神戸クロニクル社説（拔萃）

隨筆八種

きまぐれ

これ等のきまぐれは、ニュー・オーリアンズの奇異なる生活に關する私の印象である。これは熱帶の都會の夢である、すべてその中を通じて一つの雙生的思想が流れてゐる――戀愛と死。

萬聖節の夜

萬聖節[譯者註一]の夜——深く澄んで、白い月の光に滿たされた夜。して、優しい『風』が西方から來て、墓地の間を『陰影』に囁きながら、彷徨つて歩いた。

すると、墓地には花があつた。

花は月の顏をのぞき込んだ。それから、花からは種々の目に見えぬ香氣が夜の空へ上つて行つた。

して、『風』が、花に吹きつけたので、花の柔らかな眼瞼は閉ぢ始めて、その香りは月光の中にだんだん稀薄となつた。して、『風』は花が夢をも見ない深い眠りに落ち入らうとしてゐるのを、醒まさうとしても駄目であつた。

何故なら、花の香りはその見えない魂の幽靈に外ならぬからである。して、花は月光の中にうなだれて、十二時には、永遠にその眼を閉ぢ、その生命の匂ひは消え去つた。

そこで、『風』はしばらく古い白色の墓の間で悲んで、絲杉と『陰影』に囁いた。『これは供物ではなかつたか？』

すると、『陰影』と絲杉は、神祕な返答をして、凄いお辭儀をした。しかし『風』は質ねた。『誰れに對する供物であつたか？』して、『陰影』は絲杉と共に沈默を守つてゐた。

それから、『風』は幽靈のやうに、白い墓の罅隙へ入つて、暗黑の中で囁き、そこから出てきた後、戰いて悲んだ。

して、『陰影』もまたをののいて、絲杉は夜の空に溜息を洩らした

『これは不思議だ』と、『風』は嗚咽した。『して、私には合點が行かない。夢さへ死んでゐる暗黑の裡に棲むものに、何故この供物をするのだらう？』

しかし樹木と『陰影』は答へなかつた。また空洞のある墓も、何等の聲を發しなかつた

その時、『南風』がやつてきて、蜜柑の森にささやいたり、その翼の微風で棕櫚の長い頭髮をもたげたり、また澤山の花の魂を、もとの墓の場處へつれて歸つたりした。して、『南風』は花の魂に囁いた。『返答をなさい。小さな幽靈達。私の悲んでゐる兄弟に返答をなさい』

して、花の魂共は、死人の棲める白い都會の、あらゆる白い町々を芳香に馥郁たらしめ

乍ら答へていつた——

『私共は愛する者を奪はれた人々が、全愛の神にささげる愛の手向けです。父のないものが、一切の父に捧げる犧牲です。死人のことに就いては、私共は知りません——無限の祕密は、私共に洩らしてないのですから——私共はただ彼等が、決して眠ることのない天父の眼の下に眠つてゐるのを知つてゐるだけです。あなたは花が死ぬるのを御覽になりましたが、その香氣は風の翼の中に生きて、神の全世界を芳ばしくしてゐるのです。善行い芳ばしい匂ひも、またさうではありませんか？それは行爲の後にも生きてゐます——死んだ人の愛の思ひ出も、またさうではありませんか？それは生ける人の心を和らげます』

すると、絲杉は『陰影』と共に、應答するかのやうに頭を低げた。それから、『西風』は歎くことをやめて、その紗のやうな翼をひろげ、朝日の昇る方へ飛んで行つた。

月は沈んで、長い影を更に長くした。『南風』は絲杉を愛撫してから、花の幽靈達をつれて、光りの消え行く星の方へと、高く翔け上つた。

譯者註一　天主教に於ては、十一月一日が諸聖徒を祭る日となつてゐる。

譯者註二　『いとすぎ』は、墓地に植ゑるものとなつてゐる。

悪魔の紅玉

『ラ・ラザ・ラチナ』新聞のリマ府通信員、リカード・パルマは、西班牙の征服時代に迄溯つて、南米の珍談傳説を蒐集してゐる。『悪魔の紅玉』と題せる、次の物語はその一つである――

名高い冒險家のヂュアン・ド・ラ・トルレが、リマ府に近い或る墓て、莫大の財寶を發見して、それを横領した時、西班牙の兵士は印度人の舊砦古墳の間に珍寶を探さうとして、さながら狂氣に取り憑かれたやうてあつた。さて、大尉ディーゴ・グミールの中隊に屬する三人の弩手があつた。彼等はミラフロール人の墓から財寶を探すため同盟を結び、發掘のため既に數週間を費やしたが、極めて僅少の價値ある品をも見出す事ができなかつた。

一五四七年の受苦日（譯者註）に、その日の神聖をも顧ることなく――人間の貪慾に取つては、神聖も何もあつたものてはないから――この三人の弩手は、朝も午後も、汗を流し、氣息を切らして、骨折つた甲斐もなく――三ペセタの價ある小飾り物や、陶器の斷片さへ現はれ

ないて――ただ一個の木乃伊を發見しただけてあつた。そこて、彼等は惡魔の王に降參してしまつて、天帝に呪咀を放ち、怖ろしい惡口雜言を極めたので、惡魔さへも兩耳を掩はざるを得ないやうになつた。

もはや太陽は沒してゐた。して、冒險家共は鄙吝な印度人輩が、威儀堂々と純金や純銀の床上に身を横たへたまま葬られなかつた愚鈍の罪を呪ひながら、リマ府へ引上げようとしてゐた。すると、一人の西班牙兵は、木伊乃を激しく蹴とばしたので、それは可也の距離を轉々して行つた。微光を發する寶石が、その髑髏から落ちた。して、ゆるやかに木乃伊の後へ轉がつて行つた。

『それは何といふ種類の小蠟燭だらう？』と、一人の兵士は叫んだ。『まあ！何といふ光輝燦然たる紅玉だ！』

して、彼は寶石の方へ歩いて行かうとした。すると、骸骨を蹴つた男て、しかも非常に暴慢な奴が、言葉を以て彼を遮り止めた――

『君、止まり給へ！その紅玉は僕のものだよ。木乃伊を發見したのは、僕だつたから』

『畜生！貴樣はあちらへ行つてしまへ。最初にそれが光るのを見たのは、僕だつたのだ。死んでも他人に渡すものか！』

第三の男が、劍を拔いて、頭の上でふり廻はし、ひゆうひゆう鳴らしながら、怒號した。

『それて、僕は何てもないのか？』

『惡魔の女房にさへも、僕の手から、それをもぎ取らせるものか！』と、暴慢漢は短刀の鞘を拂つていつた。

そこて、三人の仲間の間に、怖ろしい格闘が始まつた。

翌日、人々は格闘者の一人の死骸を發見した。また、他の二人は身に傷の穴が明いて、懺悔聽聞僧を求めてゐた。死ぬる前に、彼等は紅玉のことを物語つて、それが兇惡陰凄なる光りを放つて、彼等の格闘を照らしたことを述べた。しかし、その紅玉は、後になつて遂に見つからなかつた。傳說はその起原を惡魔に歸してゐる。して、いつも受苦日には、この物語て有名になつたヂュリアナ墓地から、その忌まはしい光りのきらめくのが、旅人の目に見えるといふことてある。

譯者註　基督磔刑の日に當り、復活祭の前の金曜日。基督信徒に取つて最も嚴肅なる日。

樂屋

——ストラコツシユ歌劇の夕の記念——

舞臺の背後は、すべて假僞と空虚と醜惡だ——脚光が星の如く列んだ前て、音樂につれて動く、しなやかな四肢の優美は、塡めこんだ鋸屑の怜悧なる撒布によるのだ——それから、我々が美しいと眺める顏の幻影は、梨園の恐ろしい祕密に精通せる人々のみが、その隱し場所を知つてゐる、脂膏の壺と眞珠の粉の箱に含まるる魔術によつて作られてゐるのだ——右のやうな、さまざまの廣く傳播せる、深く誤つた信念を、一般俗衆の心裡へ始めて吹き込んだものは、たしかに詩人の性情を缺いてゐたに違ひない。

否、樂屋こそ宛然たる神仙界だ。緞帳はたしかにその神祕を無風流漢の眼から隱す幕である。この神仙界は、クリスマスの贈物の繪本に描いてある技巧的空想の如く、はつきりした鋭い輪廓を有つてゐないが、神祕の朦朧裡を通じて、霧のかかつた山水、ぼんやりし

た影、輝ける形像などの動いてゐる別乾坤なのである。實際、舞臺の上よりも、舞臺裏には、一層力强い魅惑の世界がある――かの舞臺に於ける白い手足や美しい顏のあらゆる活躍、影のやうな曠野や平原の移動、山や森が變化したり、武者修行物語に於ける如く都會が隱見出沒したり、『亞剌比亞夜話』に於ける如く茅屋が化して宮殿となつたりする光景などは、幕裏に於て、見えざる手によつて夜每に行はるる大妖術のただ一小部分に過ぎない。して、迂囘せる廊下や燈光の薄暗い通路を辿つて、兩側に連らなる役者部屋の戶から、小鬼共が神祕不思議な、畫布で構へた森とモスリン製の小川の邊で、瓦斯燈の光を浴び乍ら遊山をするため、紫や銀色や深紅や黃金色の粧ひをするのが、垣間見らるる處を過ぎてから、別世界の境內に達すると、輝ける座席の圓棧敷が遙かの彼方、技術的照明の中に彎曲してゐるのが見え、その圓棧敷の觀客は却つて樂屋の人々のため我れ知らず役者となつてくる。ここに至つて實際魅力は始まつてくる。まだ何等の幻滅はない。劇の女神はその外側の面帕を揭げた。しかし更に破り難き面帕が殘つてゐて、彼女の顏の不思議を隱してゐる。かの模擬的生命の心臟――模擬ではあるが、溫かで眞實である――は、君が身のほとりに鼓動を打つてゐる。しかし君には、その脈搏がわかるか？君は祕密の眞中に居り、魔法師の最奧の室に居る――しかもその魔術は、依然として君にはわからぬ。君は劇的妖

術の蜃氣樓に、あまりにも近寄り過ぎてゐるのである――一切のものは消え失せたか、またば崩壞して、幽靈のやうな廢頽に歸してしまつた。城郭の名殘、壞れた都市の斷片――種々の世紀の光景が引裂かれたり、凸凹になつたりして、廢殘のものがごつちやに押込まれて、神祕な時代錯誤をなしてゐるのが、君を圍繞したり隱蔽してゐる。しかしその調和せる全體を理解するためには、君は燦爛たる殿堂の外側の圈内へ、高い面前の前面へ退歩せねばならない。君の周圍は幾多の碎はされた世界から作られたる世界である――天上の月世界の如き、綺麗な廢墟の世界――途切れた光りと陰影と幽靈のさまよへる暗黑の世界――奔放なる夢――妖怪の所業である。君は自ら滿足して、幻滅を求めないのがよい。何故なら、この神祕界の神々に取つては、人間の好奇心は最も嫌惡すべきものだからである。君が神仙界にゐるのを知るだけで、滿足するがよい。小鬼共のすべての行爲を知ることは、人間に許されてないと悟るがよい。森林は扮擬であり、城郭は空中の樓閣よりも稀薄で、また白い像は北歐の夢にある小妖女のやうな綺麗な空虚であつても、介意するに足らぬではないか?――小鬼も侏儒も鬼女も實在て、觸知し得べく、薔薇色の温かい生命を帶びて、鼓動に慄へてゐるのだ。

恐らくは、君は古代の劇場のことを考へるだらう――それはうるはしい曲線を呈せる丘

陵の胸と胸の間に置かれた、大理石の酒杯のやうな形をなせる場庭に、無限の天空の裏を壁畫とせる圓天井を戴き、紫色の山や淺葱色の海や緑玉の如き橄欖の森など、自然の最も濃艶なる美を舞臺の背景とせる劇場であつた。しかしその古代劇場の美しい實景も、觀客を魅する點に於ては、現代劇場の神秘幽玄には及ばなかつた——この神秘は、あまりに微妙で『白晝』の視線に堪へ難い——この幽玄は、ただ夜間だけ働く妖精によつて作られる。一筋の光線が射し込んでも、この薄明世界の妙趣を破碎するだらう。不思議！この奇異境では、思想が取りとめなく逍遙遊することと！君は現在、實際の世界に生きてゐるのだといふこと、君の眼界と紫石英のやうな星の空の間には、ただ彩色を施せる天井が介在するのみだといふこと、ニュー・オーリアンズの街頭や、バナナの樹が月光の下に點頭しつつある西郊の庭園と君の間を隔つるものは、ただ漆喰で固めた煉瓦の壁だけだといふこと、かやうな現實を想起するよりも、二千年前のことを夢みる方が一層容易である。何となれば、この秘密境の魔鬼が、君の身邊にその妖術を織りめぐらしてゐるからである。さまざまの昔の人物の姿が、恰も魔術使の鋼鐵鏡裡に於ける如く、君の眼前を通過して行く——天鵞絨のやうに華麗な伊太利諸都市の貴族、長靴を穿き拍車を附けた流賊の隊長、ウフキッチ畫廊にその肖像が懸けられてゐる美人の幻影、十六世紀の僧正などが通過する。マクベス

の妖婆も、これに優さつた魔法を演じたてあらうか？——或る妖術鬼技によつて操られたラシネーの作に成る一聯の活人畫も、これ以上てあつたてあらうか？面白い時代錯誤十六世紀の服裝が十七世紀のと幾らか混淆したり、婦人の美のために史實を犧牲にしたりなど——のために、魅力の人間的性質を曝露することがあつても、幻想は破れないて依然存留する。君は魔法によつてロレンゾ・ディ・メヂチの時代に住んてゐるのだ。だから人人が君に伊太利語て挨拶するのも不可思議てはない。

忽然地震のやうな拍手喝采が起こる。圓棧敷の座席は、また隱されて、この畫布や繪具の世界は、君の耳邊てひつくり返つてゐる。十九世紀の日常の衣服を著けて、破壞と再建の仕事に働いてゐる職工達のために、暫く呪文の力は解ける。これらの職工に取つては、夢想者や幕裏の徜徉者は唾棄すべき、癪に障はる連中なのてある。去つて行け、南京蟲！

左樣、君が喫驚するのも尤もだ！——君は以前に彼女を見たことがある。何處て？——何時？古いクリーオール・オペラ館からあまり遠からぬ、小さな佛國人の店て見たのだ。この場所の魅力が彼女を一個の小妖精に變化せしめたのてある。實際、君は彼女がかくまでに綺麗になり得たことを驚愕してゐる——沙翁のヴアイオラも、ゴーティエーのグラシオサも、今この舊世紀の服裝をつけて、夢かと思はるゝばかり白く優美て、しなやかなる

彼女の眉目好さには及ばなかつた。しかも、まだまだクリーオール娘が續々と見受けられる――ニュー・オーリアンズの奇異な場所に住む人々には馴染みの顔てある。黑色メリーノ羊毛製の、おとなしい日常服は、神の蝶が隱れてゐる蛹殼に過ぎないことを示してゐる不思議の祕訣は何てあるか？

突然王と王女、隊長と叛賊、兵士と僧侶、廷臣と貴族など、多種多樣な群集の中から、白い仙女の面影が見える――これは趾頭旋回（ピルエット）を踊る乙女達てある。君は彼等を注視しても、見られる恐れはない。何故なら、他の人々は彼等を氣に留めないからてある――戴冠式の裝束を着けた國王は、コフエチユア王のやうに、愛らしい田舍娘とウォルッ踊を踊つてゐる。また女王は、西班牙のクリスチナ女王のやうに、兵士と差向ひに話し合つてゐる。踊り手達は何となく輕快て、空氣の如く、揮發油の如き印象を與へる――止つたり飛んだりするが、歩行しない、半開の翼を有てる壯麗なる蠅の一種のやうに思はれる。これらの細く、しなやかな四肢の現實に直面しては、鋸屑といふ下劣な觀念は消えてしまふ。彼等は舞踊の準備として、小さな連續運動を行つてゐる。それは幾つかの蠱惑的な心像を挑發し、あらゆる媚態艶姿を喚起する――それはヒッポミーニーズを追かけようとしてゐるアタランタてある。それは翼をゆすぶつてゐる蝶てある。それは音を立てない器用さて羽毛を整

へる白鳥である。しかし舞踊の飛翔が終はつて、劇場が喝采のため振動する時、踊り手は氣息奄々、長時間の勝負の後における力士よりも、もつと躁はしく呼吸し乍ら、蔭の方へ引込む。その時、親切な叱聲を發して聽衆の喝采を止め、無智の徒輩がただ自身の娛樂を求めんがために再演の希望を連呼するのを咎める仁慈の人々に對しては、感謝の念が起こつてくる。

それから、すべてこれらの模擬的情熱の傀儡を動かす劇的の絲を操る後見人は、その朗かな聲を神祕な舞臺のあらゆる隅々へまで徹底させ乍らも、脚光の前へは洩れないやうにして、再びその忠實なる任務を始める――和合と不幸の物語は、管絃樂隊と歌ひ手によつて續けられる――一方、喧囂の騷ぎ聲は、木造の岩や畫布の樹木やモスリン製の無音の河などの間に聞こえる。君は眞似ごとのオペラをさほど注意することは出來ない。それは環狀席に坐つてゐる聽衆のすることである。調子多樣なる人生のオペラこそは、君の魂を包んで奪つてしまふ――幕の背後の所作は、必らずしも悉ごく現實の模擬といふのではなく、眞に目に見え、手に觸れて感じ得らるゝ生命の演戲であることを君に悟らせる――この演戲は、かの愛よりも更に强き死の蔭が燈光を消し、黑い喪色の大きな幕を下ろすまで、幾千の場面を經ねばならない。かやうに夢をみながら、君はまた月光を白く浴びたる街頭に

立つてゐる！燈光、仙女、王、隊長は失せてしまつてゐる。友よ、君は夢みてゐたのではないが、仙界を見た人の心は、悄然たるものだ。

旅　八

伊太利人は數時間私共一同を恍惚たらしめた。窓に向つて氣味わるげに點頭するバナナの樹葉の上方では、大きな黄色の月が次第に高い空へ上つて行つた。廣間の中では、一團の熱心なる傾聽者——ニュー・オーリアンズと、また恐らくはマルセールにのみ見出さるるやうな世界各國からの雜多な浮浪人の群——が、語り手の黑い眼と快き聲に惹きつけられ、皆じつとして、輝ける燈下に卓を圍んで坐つてゐた。旅人の語調にはおのづから音樂があつた。彼は魔術使が魔術を演ずる如くに、語りながら唄つた。して、銘々に向つてその國語で話しかけて、彼は東洋のことを語つた。何故なら、彼は諸國を遍歴したことがあるから。して、遙かに、三日月形の灣の、向うの方の入江に、ギリシャ語の名を有する長い優美な船が、彼を待ち受けて碇泊してゐた。その船は明朝の東天紅と共に、その白帆を

展げて出立しようとしてゐる、

『あなたは喫煙家でゐらつしやいますね』と、旅人は立ち上がつて去らうとする時、亭主に向つていつた。『土耳古のパイプを一本差上げませう。コンスタンチノープルから持つてきたのです』

それはムール式藝術の様式に隨つて、血赤色の粘土から作られ、して、その燈臺は回教寺院（モスク）の高尖塔（ミナレット）を纏れる裝飾のやうな、鍍金細工の彫刻が施してあつた。して、アラビヤ語の神秘な言葉が深く刻まれた、その派手な雁首には、ダマスカスの庭園を偲ばせるやうな、微かな芳香が、附着してゐた。

＊　＊　＊

その音樂的な話し聲は、疾くに止んでしまつて、客達は去つて行つて、室内の燈火は消された。一と筋の月光が、戸外の灌木の繁つた間から射し込んできて、夜の空へ芳ばしき魂を吐いてゐる花壇の上へ落ちた。唯だ亭主のみは殘つてゐた――彼はこの地方のよりも大きな月のこと、もつと猛烈な夏のことを夢想してゐた。また、無實の天を貫いて聳立せる白の鋭い高尖塔と、噴泉の多い東洋の娯樂園を偲んでゐた。して、パイプはその奇異神

祕なる匂ひを放つて、恰も回敎教主の薔薇園に於ける夏の夜の芳ばしい呼吸のやうであつた。空では、紫石英の深い色の間に、天上界の永遠なる燈火が燦然と輝いてゐた。して、遠くからはかの旅人の聲の如く、流るゝやうにうるはしい調子で、回敎の祈禱時刻を呼報する人の聲が、尖塔の上から叫ぶやうに思はれた――『すべて汝等寢に就かんとする者は、決して眠り給ふことなき神に汝等の靈を委ねよ』

紙鳶の夢

クリーォール人の都會で、夏季の贅澤となつてゐる張り出した露臺から、青く澄んだ夜の空を眺めると、電信線がくつきりと空に描いてゐる細い黑絲が、目につくことがある。昨夜も『電氣の蜘蛛』が地球に張り廻はした大きな網の、限りなく擴がつてゐる絲を見た。すると、その絲の上に派手な蠅の胴體のやうな無數の紙鳶の破片が、ひらひら羽搏いてゐた――そのぼろぼろの形の物は奇異な線を成して連續し、遙かに地平線の遠くに延びて、細線が見えなくなる點より更に向うへと、電氣の使者の通路を辿つて行つてゐる。

これらの見すぼらしい破片が、夜の一様な色に蔽はれて、その色合は見分け難く、ただ影法師が空に浮かんでゐる形の奇怪さ――力なげに前後に搖れながら、恰も罪人の痩せた屍が曝し臺の上て、日光のために木乃伊となつたやうなのがある――絕望と死の苦悶に於ける如く、猛烈に翩翻してゐるのもある――或るものは、空飛ぶ惡鬼の如く、棲木の上て、怪舞亂踏してゐる――また或るものは、突き刺された鳥の如く、翼は硬くなつて、針金の罠に附着したまま、動き得ないて、不慮の運命に驚愕自失せるものの如く、白い眼て睥睨してゐる。

すべてこれ等のものは、兒童の功名心の破壞を代表せるものてある――一つ一つが、或る兒童の快樂の破片なのてある。屹度そのために泣いたり、口惜し淚に枕をぬらして夢に見たのも數多いことだらう。して、遠く薄靑い地平線の方へ向つて背を伸ばし乍ら、私共は不規則な點々の色が果てしなく續いてゐるのを眺めた。して、一つ一つの小點は、或る小さな悲痛を示してゐることを思ひ出した。

それから自然に私共は、これ等の兒童輩が虛勢を張つて、その損失を忍んだ狀況について沈思せざるを得なかつた。哀れな紙鳶の小さな持主達の心は、さまざまの紙鳶の性質に於けるよりは一層互に異つてゐた。泣いたのもあらうが、子供らしい勇敢さを發揮して、

一笑に附して、損失を忘れてしまつたのもあるに相違ない。或ものは、疑ひもなく、この世は全く邪曲だと考へ、電線の如きものを發明すべきではなかつたと考へたのであらう。また或る兒童は批評的に因果の問題を考へて、若い哲學者として、經驗から學ぶ處あらうと覺悟し、今後は電線が穽を張つてゐない場處で、同樣の娛樂を求めようと決心した。更にまた或る兒童は苦い經驗から何等得る處もなく、ただ新しい紙鳶を造つては、それを惡戲好きな風のするがままに放任し、風はまた謀叛的にもそれを紙鳶と鳥の敵なる、貪慾飽き足らざる電線に渡してしまつた。

子供は大人の父であると云はれてゐるではないか？ して、私共は夏の夜の紫色の深い空に燃えつつある星を仰ぎながら、もつと大きく生長した子供が天に反抗して飛翔させる紙鳶のことを夢想した。戀と信仰の玩具――功名心と痴愚の玩具――咄々怪奇の極なる決心と自惚れじみた理想の玩具――空想と空望の玩具――希望の紙鳶――派手な色のものや、灰色なのや、金ぴかの箔を散らしたもの、愼しやかにあつさりとしたもの――それらのものが空に昇り、高く翔つて、世の輕薄な風に煽られては、遂にただかの『運命の女魔法使』が、すべての人間に對して紡ぐ、ほどけ難く限りなき絲の偉大なる織物の中へもつれ込んでしまふのである。

『私が述べてゐたことは』と、醫者は言葉をつづけた。『始めて何か或る新しいものを見たり聞いたりした場合、私共は驚愕を感ずるのですが、それは見たり聞いたりしたものの斬新なるがためでなく、心中に於ける奇異なる反響のためだといふことなのです。私は反響と申しましたが、記憶の反響といふ言葉を使つた方が、一層よいのでせう。私共はその新しいものを、これまで見たことも、聞いたこともないといふことを確實に知つてゐながらも、いつか限りなく隔絶せる時期に於て見たり、聞いたりしたやうに思はれるのです。拉甸の古い作家は、この現象を前生存在說の證據と考へました。佛敎徒の說によれば、靈魂はその數百萬年彷徨遍歷の際、輪廻の度毎に見聞した一切の事物の微かなる記憶を保つてゐて、また現在肉體となつて生存せる人々は、幾劫年の生前に見聞した朦朧として幽靈のやうな事物の思ひ出を有つてゐるのです。この現象の存在には、何等の疑ひもありません。私は佛敎の信者でもなく、また靈魂の信者でもないのです。しかし私はこれらの漠然

たる記憶の存在を、遺傳的な頭腦の印象に歸するのです』

『それはどういふ意味です。お醫者樣』と、一人の寄宿人が訊ねた。

『何、かうなのです。記憶は黑子や母斑や身體的或は精神的特徴と全く同じやうに遺傳すると申すのです。私共人間の頭腦には、或る明敏な著者が書いてゐる通り、シナイ山の谷にある岩石の如く、長く連續せる「思想」の隊商によつて、滿面に文字が彫つてあります。五官の媒介によつて頭腦が印象を受けると、そこへ象形文字のやうな刻銘が殘る。その刻銘は顯微鏡に照らしては見えないけれども、矢張り實際には存在してゐる。だから父母の頭腦にあるこれ等の形象が、子供の頭腦の中へ再現しない筈はないのです――記憶の眼に對しては、段々薄くなつて、段々讀み難くなるにしても、全然消えて見えなくなるといふことはありませんよ』

長い間の沈默がつゞいた。月はますます高く昇つた。バナナの葉は搖るがなかつた。空氣はまだ晝間の熱で灼けてゐた。また、蒼穹の星は、南方の夜の空にのみ見らるゝ輝きを以て燦めいた。星の光の外、森羅萬象、一切のものが夢みてゐるやうに思はれた。して、私共もまた無限界のことを夢みてゐた。

『お醫者樣』と、始終默つてゐた、髯の生えた旅人がいつた。『私は一つお訊ねを致し

たい。私は西印度諸島、新西蘭、加奈陀、墨西哥などに住んだことがあるので、幾らか漫遊者を以て自任してゐます。また、私は確な記憶力も有つてゐます。私は一度見たことのある都市の光景は、滅多に忘れません。そこの町々辻々も覺えてゐるのです。それでは、どういふ譯で、私が斷然決して見たことのない場處を夢に見たり、また、私が世界のどんな地方に於ても、目が醒めてゐる間には、聞いた、覺えのない言葉を睡眠中、耳にするのでせうか？』

醫者は微笑んだ。『君はその夢の中で見える場處の叙述ができますか？』と、彼は質問を發した。

『できます。私は百回以上も、夢に見たのですから。時には、引續いて一年間も見ないことがあります。すると、また一週間、毎夜つづけて見るのです。して、いつもその奇異な言葉を聞きます。

『私は大きな港から、その場處へ航海します。その港の周圍には、白い切り石の大きな埠頭場が連らなつてゐて、運搬や交通の烈しいため、平らに磨滅してゐます。その邊には、太陽の光線が輝き亘つてゐます。熱帶の果物が山積してあるし、葡萄酒や油類や香料が澤山あります。青や黄などの派手やかな色の着物をきた人が、うようよと群らがつてゐます。

不思議にも地中海の或る港らしい考へがするのです。

『それから私は長い航海の後、奇異な國へ到着します。私は上陸のことを覺えてゐないが、ただ大きな都會を覺えてゐます。それは歐米の都會と建築を異にしてゐます。家屋は高く、町は幅が狹隘で、奇怪な風趣を呈してゐるのです。私が夢に見たやうな建築を、私は西班牙で幾らか見たことがあります。が、西班牙のものは、古いムーア式建築だつたのです。

『その都會の一部分に、一個の堂々たる建物があつて、その載ける二つの優美な圓屋根は、頗る濃い碧空へ、白い胸の如く聳えてゐます。圓屋根の附近には高い、非常にすらりとした、白い塔があります。石造の白い長い梯子が、宮殿だか、何だかわからぬ、この建物の影を蘸たしてゐる、靜かな水面へ降つて行つてるのです。水邊を歩いてゐる、大きな嘴と赫々たる色の羽毛を有つた鳥が見えます。私はこんな鳥を、剝製では見たことがあつても、活きたのは、夢の外に絶對に見たことがないのです。尤も私はその剝製の鳥は、果たして何處から來たのか記憶しません。

『その都會は西歐の大都會の大きさのやうに、私は感ずるのです。私は見ないけれども、さう感ずるのです。その町々を通じて、人間の大きな流れが動いてゐます。人種は色が黒

く、優美です。容貌は纖弱で、毛髮は黑く、眞直ぐに立つてゐます。女は腰まで裸體なのもゐて、また非常に綺麗です。大きな耳環ときらきらした金屬製の珍らしい裝飾を附けてゐます。男は頭巾を被つて、派手やかな色の着物をきてゐます。非常に輕さうな服裝をしたのもあるが、白衣を着けたのが頗る多いのです！すべて私が先きに述べたやうな奇異な言葉を話します。それから、騾馬や象や私共の牛とは異つた家畜がゐます。それは頭と肩の間に隆肉があるのです』

『それだけですか？』と、醫者が訊ねた。

『私の記憶してゐるのは、それが全部です』

『君は印度にゐたことがありますか？』

『否』

『君は藝術の媒介――書籍、版畫、寫眞――によつてさへ、印度を見たことはないのですか？』

『私は印度に關する插畫の書物を一冊も讀んだことはないと思ひます。印度から齎された物品と、數葉の畫――薄葉の紙に描いたもの――を見たことがありますが、これは極めて近年のことです。私は今敍述した場面のやうなものを、繪畫で見たことはないのです』

『何時頃から、君はそんな場處のことを夢に見てゐたのです?』
『それは少年の頃からです』
『君のお父さんが印度にゐた事がありますか?それとも、お母さんがゐたのですか?』
『私の父はゐたことがあります。私の母はゐませんでした。しかし、父は私の子供の時、そこで死にました。私は歐洲で生まれたのです』
『遺傳的印象!』と、醫者は叫んだ。『それで一切、君の輪廻の話がわかつたのです。父の記憶が子供へ傳はつて行くのです。多分三代乃至四代までも傳はります。君はこれまで見たこともなく、また將來恐らくは見ることもない印度の都會を夢みるといふのは、何故でせうか?それは眼と耳の媒介によつて、或る英國の印度旅行者の頭腦に與へられた纖細な、目に見えないやうな印象が、寒い地方で生まれた彼の子供に遺傳してゐるからです。子供は決して東洋を見たことはないが、しかも永久、彼の心には東洋の幻が浮かんで出るのです』

幽靈の接吻

劇場は滿員てあつた。何を演じてゐたのか、私は記憶しない。私は俳優を觀察する時間も有たなかつた。ただどんなに建物が大きく見えたかを覺えてゐるだけだ。後方を顧ると、座席の層が飾光の線を成して、一段一段と高く重疊してゐて、殆ど視覺の判別力の達しかねる圓棧敷の場處まて、人の顏の大海が擴がつてゐるのを私は見た。天井は青色て、中央に大きな玲瓏たるランプが月の如く懸かつてゐた。非常に高くて、吊つてある鏈が見えないほどてあつた。座席はすべて黑色てあつた。劇場には黑い天鵞絨の幕が繞らされてゐるやうに、私は思つた。幕の緣には銀の緣飾りが施され、涙のやうにきらきらしてゐるやうてあつた。觀客はすべて白衣を着けてゐた。

眞白の衣裳！——私は或る熱帶地方の都會の劇場にゐるのではないかと思つた——何故に眞白の衣裳だらう？私は臆測することができなかつた。折々遙かに遠い張出し窓から、月光を浴びた風景と、巨大な蜘蛛のやうな、搖曳する影を投じてゐる棕櫚の頂冠が認めら

れるやうにも思はれた。空氣は異薰を帶びて、心地よかつた。それは睡氣を誘ふやうな空氣であつた――その罌粟の交じつた空氣の中では、數限り無き、翩翻たる白扇が、毫も颯颯の音響を發しなかつた。

不思議な靜肅と沈默があつた。私の眼の外、すべての視線は舞臺の方へ向けられてゐた。私は舞臺の方面以外、あらゆる方面を凝視した！私が何故に舞臺の方を殆ど眺めなかつたのか、私は想像ができない。誰れ人も私に注目しなかつた。その大きな會衆の中で、私だけ唯だ一人黑い服裝をしてゐて、白い光の中に於ける眇たる一黑點であることを認めてゐるものは、誰れ一人もないやうであつた。

次第々々に俳優の聲が、私には他界から――亡者の世界から――洩れる細い囁きの如く、微かになつて行くやうに思はれた。それから、音樂は音樂でなく、ただ過去に聞いたことはあつても、忘れてしまつた歌の記憶の如く、聽者の心の中にある反響に過ぎないやうに思はれた。

私が奇異にも既知の顏――いつか何處かて見たことのある顏――と思ふのがあつた。しかし誰れ一人として私を認める者はなかつた。

一人の女が私の前に坐つてゐた――女神アフロダイティの如く輝ける金髮を有つた、色の白い女。私が彼女に眼を注いだ時、私の心臓が烈しく動悸を打つたのを、私は不思議に堪へなかつた。それが突然私の胸から飛び出して、跳ねて彼女の足許へ行かうとするかのやうに感ぜられた。私は彼女の頸の纖細な運動を見守つた。そこには幾本かの亂れた毛髮が、象牙の柱に纏はる黄金の繩の如く、輝かしく垂れてゐた――頰の柔らかな曲線は、半ば熟せる桃の天鵞絨の如き表面に、微紅を輝かせてゐた――唇は優美な弓形を呈して、それは二千年後の今日も、最後の戀人の接吻によるかの如く、依然として濡れてゐるやうに見える、ナイダス（譯音註）のゥヰーナス女神の唇の如く甘美に見えた。しかし、私は彼女の眼を見ることができなかつた。

※　　※　　※

すると、奇異な欲望が私の心中に起こつた――その唇を接吻したいといふ强烈な願ひが起こつた。私の感情は『然り』といつた――私の理性は『否』と囁いた。私の上へ急に向けられさうな幾千の眼のことを、私は考へた。私は後へ振り向いた。すると、劇場全部が一層大きくなつたやうに見えた――圓環狀の座席は、後方へ退いて、大ランプは更に高く昇

つたやうに思はれた。聽衆は恰も『最後の審判』の光景の如くに莫大な數であつた。して、私の心臟は非常に激しく搏つたので、俳優の聲よりも高い、その熱烈な慟悸が聽こえた。私はその音が洩れて、私の上方にゐる白衣の男女の全群集に、私の心事を曝露しては困ると思つた。しかし、誰れにも聞こえないやうであつた。また誰れも私を見てゐるやうでもなかつた。每瞬間ますます壓倒的に、不可抗的になつてくる狂氣じみた衝動の結果を考へて、私は竦然戰慄した。

しかも私の感情は答へた――『其双唇の一接吻は、一萬囘の死の苦痛に値するだらう』

＊　＊　＊

私は起ち上がつたことを記憶しない。ただ彼女の側にぴつたり寄り添つて坐つて、彼女の芳ばしい吐息を呼吸し乍ら、熱帶の夜の紫石英の空に似た、深い眼を凝視してゐたことを覺えてゐる。私は彼女の唇頭へ烈しく私の唇を押しつけた――私は名狀し難き歡喜と勝利の竦動を感じた――私は溫かい柔らかな脣が、私の脣に合ふため捲き返つて、私の接吻に酬いるのを感じた！

すると、非常な恐怖が忽然、私を襲つた。して、白衣の男女の全群集が、沈默の裡に起

立して、幾萬の眼が私を眺めた。

私は微かな、美はしい聲を聽いた――丁度死んだ戀人が、夢に音づれてくる時に、私共に聞こえるやうな聲。

『貴郎は私に接吻なさいました。誓約は永久に結ばれたのです』

＊　＊　＊

して、私がもう一度眼をあげてみると、すべての座席は墳墓であつた。またすべての白衣は經帷子であつた。私の上にはまだ一つの光りが、青い屋根の中に輝いてゐた。しかしそれは永久の蒼穹に輝く白い月の光であつた。白い墳墓が凄い層をなして、地平線の際涯まで遙かに連らなつてゐた――私が演劇を見たと思つてゐた場處には、私はただ高い納骨堂を見た――して、その夜の芳ばしき匂ひは、墓上に消え行く花の呼吸に過ぎないことを、私は知つた！

譯者註　名工プラキシテイリーズ作の裸體のヴイナス像。小亞細亞海岸のナイダス市の殿堂に安置されたもの。今は羅馬法王宮殿に保存されてゐる。

黒い愛の神

部屋には、小さな繪が掛かつてゐた。して、私は燈火を取り上げてそれを熟視した。私は何故眠れなかつたか知らぬ。多分旅行の興奮のためであつたのだらう。

厚味のある、立派な、金色の額縁は、私がこれまで見た中で最も珍奇な種類の繪を圍んでゐた。一人の女が、天鵞絨の枕に頭を載せ、片方の腕は擡げて、その同じ片方の肩を美しい胸の一部と共に露はし、黒い背景にくつきり浮き出てゐる。私が言つた通り、畫幅は小さかつた。その若い婦人は、明らかに右腕を下にして凭りかかつてゐた。しかしただ天鵞絨の枕に載せられた彼女の頭と白い咽喉、一本の美しい腕と胸の一部だけ、見えてゐた。

畫家は絶妙な技術を以て、看者が枕の上に宿れる美貌に顔を近寄せるため、臥床――畫面には現はれてゐない――の端に屈んだ心持ちになるやうに工夫してゐた。それは人間が夢想し得る最も魅惑的な顔であつた――双頰には、何とも云へぬ紅潮を湛へ――半ば閉ぢた眼は、柔らかな、潤ひのある光りを帯び――太陽の如くに輝ける髮――肉色の唇――卵

形の輪廓！しかも、これが悉ゝく深黒の背景によつて、一層精彩を發揮してゐる。左の耳朶に、私は珍らしい耳環を認めた――黒玉製の小さな愛の神（キューピッド）が、彼の弓の兩端に捉まつてぶら下がつてゐて海の貝殼の如く纖麗な、微かに薔薇色を呈せる美しい耳と其弓とを繋いでゐる小さな金鎖から、弓をもぎ取らうとしてゐる。何といふ奇異な耳環であつたらう！私は其黒い愛の神は道ならぬ戀、惠まれなかつた戀の運命を司どつてゐるのかと怪んだ。

　しかし、その繪について最も珍らしいことは、美しい女の態度と容貌であつた。半ば反り返つた彼女の頭は、眼を半ば閉ぢ、優しい微笑を含んで、接吻を要求してゐるやうに見えた。兩唇は待ち焦がれた風に突き出されてゐた。私は殆ど彼女の匂ひ高き呼吸を感じうるやうな想像を描いた。圓々とした腕の下に、輝いた絹のやうな毳毛が、小さな渦を卷いてゐるのを私は認めた。腕は接吻を施してくれる人の、頭の周圍に延ばさうとしてゐるかの如く、擴げられてゐた　私は畫家の技倆に驚いた。いかなる寫眞も、どんなに精巧な色彩を加へても、このやうな効果を現はし得ないだらう。滑かな肩の光澤、脈管、微細の點までも示すことはできないだらう。またその繪は不思議な魅力を有つてゐた。それは私が活きた美人、薔薇色の鼓動を打てる實際の人物を眺めてゐるやうな印象を與へた。ランプの動搖する光りの下に、私は一回、唇が動き、眼が閃めくと思つたことがあつた。頭も接

吻を受けるため、自ら畫布から出ようとするやうに見えた。多分愚かなことではあつたらうが、私はそれを接吻せざるを得なかつた——一回でなく百回も。すると、私は急に危惧を感じた。出血する影像や神祕な繪畫や幽靈の棲む掛け錦の物語が、私の念頭に浮かんだ。して、異鄕の他人の家で獨りぼつちの私は、奇異に神經過敏に感じた。私は卓上に燈を置いたまま、寢に就いた。

しかし眠れなかつた。少許うとうとしたと思ふと、直ぐに私は私の側近く、枕に載つた美しい頭を見た——同じ微笑、同じ唇、金髮、愛撫するやうな瞼の下の絹の如き毬毛を見た。私は起ち上がつて、衣を着け、煙管に火を點け、燈光を消して、暗黑の中で煙草を吸つてゐた。たうとう薄靑い日の光が窓から射し込んできた。遠方にはシイエラ連嶺の白い鋸齒狀が、紅く輝いて、眠りを醒まさせる車馬の音も聞こえ出した。

下男が私の部屋の戶を叩いて叫んだ。

* * *

出立の際に、私はその畫幅のことを主人に訊ねた。

彼は微笑を洩らし乍ら答へた。『あれは或る狂人が描いたのですよ』

『でも、誰れです?』と、私は訊ねた。『狂人であつたにせよ、なかつたにせよ、天才だつたのですね』

『私はその人の名さへ覺えてゐません。彼は死んでしまひました。瘋癲病院でも彼に繪を描くことを許しました。すると、彼の精神を鎭めたのです。私は彼の死後、遺族からその畫幅を貰ひ受けました。遺族はそれを手放すのを欣んで、どうしても代金を受け取りませんでした』

＊　＊　＊

私はその繪のことを全然忘れてゐたが、五年ほど前のこと、私は墨西哥市の小さな町を通つたことがあつた。不意に私の注意は、西班牙の猶太人が營んでゐる陰氣な店の窓で見附けた二三の物品に惹かれた。それは一對の耳環と二個の小さな黑玉製の愛の神であつた。愛の神は頭の上に弓を揭げ、その弓は細い金鎖で耳環の鉤に結ばれてあつた！

私は刹那にその繪を思ひ出した！それから、その晩を！

＊　＊　＊

『お客様、實際相當の代價を戴かなくては、その品々は賣りたくありません。そのやうな一對は、またと手に入りません。私はそれを彫つた人を知つてゐます。それは畫家の注文によつて作られたのです。彼はわざわざ意匠を齎して、ここへ來ました。或る女に贈る積りであつたのです』と、色の黒い寶石商は語つた。

『墨西哥の女？』

『いえ、亞米利加の女てした』

『色の白い、黒眼の――その頃多分二十歳位て――少々薔薇色を帶びたた？』

『まあ、どうしてお客様は彼女を御存じてす？彼女の名は、ヂヨセフキタと世間て呼んてゐました。あの男が彼女を殺したのを御存じてせうね。嫉妬のためてす。眠つてゐる際に斬られたらしく、死んてもまだ微笑が浮かんてゐたさうてす。私は競賣の折、耳環を手に入れたのてす』

『それから畫家は？』

『氣が狂つて、――て死にました。或る人々の說ては、彼は女を殺した時に、最早發狂してゐたとのことてす。もし實際耳環が御入用なら、六十ペーソスて賣りませう。原價は百五十ペーソスてした』

私が花であつた時

私は嘗て美しい大きな花であつた。私の雪の如き杯には、その上へ來て止まる、虹の翼を有てる昆蟲を醉はせるほど濃厚な香が滿ちてゐて、私を見た人をして、古代羅馬皇帝の饗宴に用ひられた沒藥の杯の美を想起せしめた。

輝ける夏の間、蜂は始終私のために唄つた。風は蒸暑の時に私を撫でた。『露の精』は夜間、私の白い杯を滿たした。象の耳よりも潤い葉の大きな植物が、さながら活ける青玉の龍蓋を以て私を蔽うた。

遙かの遠方に、神祕な永遠の讃歌を唄つてゐる河の聲と、百々千々の鳥の音を私は聽いた。夜間私は繻子の如き花瓣の中から、星の限りなき行列を覗いた。晝間私は太陽の眼に對して、いつも私の黃金色の心を向けてゐた。

寶玉の胸を有てる蜂鳥が『日の出の里』から飛んできて、私の側に止つて、私の杯に名殘を留めてゐる芳ばしい露を飲んだ。して、私に異鄉の驚異を唄つた――魔法遣ひの庭に

のみ生える黒い薔薇のことや、ただ熱帯の月に向つてのみその蕾を開いて、その香は死を與へる幽靈の百合のことなど。

＊　　＊　　＊

人々は私の生命の青玉の絲を斷つて、私を彼女の髪の中へ挿した。その見事な頭髪の、夜の如き暗黑裡に於て、星のやうに燦めいて、かの拘束された贄とは異つて、死の遲々たる痛苦を私は感じなかつた。私の生命の香が、彼女の血液に混じて、彼女の心の祕奧へ入り込むのを私は感じた。そして、私がただ花に過ぎないことを私は悲んだ。

＊　　＊　　＊

その夜、私共は諸共に死んだ。私はどうして彼女が死んだのかを知らない。私は彼女と永遠の眠りを共にしようと望んでゐた。しかし、凄い風が窓扉から入つてきて、私の枯葉を引裂き、紛々たる白い破片として、枕の上へ撒き散らしてしまつた。それでも私の亡靈は、微薫の如く依稀として靜肅な室に彷徨し、蠟燭の炎の邊に徘徊した。

私と種類を異にせる他のいろいろの花が、彼女の休息所の地上に咲いてゐる。彼等の花瓣の薔薇色の中に生きてゐるのは、彼女の血液である。彼等の葉に芳香を與へてゐるのは、彼女の呼吸である。彼等の透明な緑色の葉脈を活かしてゐるのは、彼女の生命である。しかし夏の日の死を歎く、慈悲深き『露の精』は、夜の不思議な時刻に、私を擡げて、彼女の墓に滴ちる水晶の涙に私を混じらせる。

＊　＊　＊

『君はこのやうな説を荒唐不稽の空想と呼ぶけれども』と、醫師は熱心に燃えた顏を月光に輝かして、立ち上がり乍ら言つた。『それは永遠のアイシスの神が、彼女の怖ろしい顏を蔽つてゐる神祕的面帕に外ならないのです。東洋の偉大な知識に比べると、深遠な獨逸哲學も淺薄で、近代の汎神説は煙よりも漠然たるものです。近世の最大思想家輩の學説

は、羅馬の名がまだ世界に聞こえなかつた時代に、印度では教へられてゐたのです。して、今日の科學研究は、私共が愚かにも狂人の夢と見做してゐた東洋最古の信仰を全然確證したのです』

『でも、靈魂の轉生といふ觀念は、狂人の夢としか言へないでせう』

『あゝ、靈魂！靈魂！』と、彼は暗黑の中で紅玉の如く光るまで、葉卷煙草を強く吸ひこみ乍ら答へた。『私共は靈魂とは沒交渉です。私共は事實を取扱つてゐるのです。輪廻はただ廣大なる自然的事實の哲學的象徵であつて、それを理解しないものにのみ奇怪に思はれるのです――丁度金剛石の眼を有し、髑髏の數珠をつけた醜惡な印度の偶像が、婆羅門僧に取つては、俗人の理解し得ない深奥玄妙の眞理を現はしてゐるやうなものです。私共は物質と力の永遠性を意識してゐるから――旋轉する宇宙の實質は、陶工の手に於ける粘土の如く、絶えず數限りなく移り變つて行く形狀に、昔も今も未來も作られることを知つてゐるから――外形のみ敢果なく消えるのであつて、私共の肉體の一原子と雖も太初から存在し、また永遠に存在して行つて、世界の融解する熱のため山岳が蠟の如く溶け去つた後までも殘ることを知つてゐるから――轉生の說を單に空想と見做すことは不可能なのです。私共の筋肉の一粒毎に、私共の出生前、いかなる詩人が夢みたよりも更に驚くべき

幾百萬の轉生を經たのです。して、私共の一人一人の心に搏動する生命力は、始終宇宙の永遠的輪廻の中に搏動してゐたのです。私共の血液の極少分量も、人類文明の始まらぬ前に、幾百萬の生物の脈管を流れてゐたのに相違ありません――飛翔したり、匍匐したり、深海の底に棲んだりして――して、恐らくは日光の中に浮かぶ各分子は、人間の感情の鼓動につれて顫へたのでせう。私が踏んでゐる脚下の土は、生きて、愛情を有つてゐたのです。して、恐ろしい實驗室の中で、粘土を作り變へて、新しい形の生物とする自然は、この粘土をして再び活きて、希望を抱いたり、苦痛を感じたりさせるのでせう。私は大膽にも、君が嘗て接吻を與へた最も紅い色の唇や、君の顏が映つた最も輝いた眼の實質が、幾轉生を經たことを君に囁いてもよろしいのです。私共は過去に於て無數の生涯を通つたのです。私共は花となつて生き、鳥となつて生き、大洋の蒼淵に棲んでゐたのです――私共は靜かな堅い巖の中に眠り、轟々たる波濤の中に動いてゐました――私共は男であつたし、また女でもあつたのです――私共はタルマッド經典の中にある天使の如く、一千回も私共の性を變へたのです。して、現在の宇宙が消滅して、星の火は燃え盡きた後にも、依然私共は果てしなき輪廻を續けるでせう。かかる事實を知つてゐる以上は、東洋の説を一笑に附することができるでせうか？」

『しかし循環的周期の説は――』

『それも同様に嚴肅な眞理です。物質と力は無窮であることを知つてゐるから、私共は變形の萬花鏡もまた、無窮に旋轉せねばならぬことを知つてゐます。しかし、萬花鏡裡の色彩分子は有限なのだから、ただ一定數の結合しかできないのです。永續して行く物質も、要素の數は有限ではないでせうか？もしさうなら、要素の結合も、またその數が有限でなくてはならぬ譯です。して、永遠の力は、形態を造りつづけて行かねばならぬから、ただその働きを繰返し得るのみです。だから、一旦起こつたことのある一切のものは、以前に始終起こつてゐたに違ひなく、又莫大の間隔を置き乍ら、今後も永遠を通じて再び起こるだらうと、私共は信ぜねばならないのです。私共が九月六日の夜、相會して坐つてゐるのは、これが始めてではないのです――私共は同じく他の九月に於て、この通りに坐つたことが幾回もあつたのです。同一で、しかも同一でない他のニユー・オーリアンズ市に於て、この通りに坐つたことが、千萬億回もあつたのです。また未來幾永劫を通じて千萬億回もあるのでせう。私は私の通りで、しかも異つてゐるでせう。私は同一な、しかも異つた葉巻を吸つてゐるでせう。君が坐る椅子は、これと同じく滑かな背に、同じ搔痕を止めてゐるでせう。して、私共は同じ談話を交じへるでせう。今宵と同じく親切な婦人が、同質の

一瓶の葡萄酒を齎してくるでせう。して、この奇異なクリーオール人の家に於て、同一の人々が會合することとなるでせう。これと同じやうな樹木が、歩道に、その影を投ずるでせう。して、私共の頭の上には、今と同じく無限の夜の空に、金色の世界が、綺羅群を成して輝いてゐるでせう　新しい星や新しい世界も現はれるでせうが、それでも私共は千萬億年の昔、矢張り現在と同じく煩悶したり、希望したり、戀愛したりしたのだといふことを、今この刹那に於て知つてゐる如く知るに止まるでせう。諸君、左樣なら！

　彼は葉卷の吸ひ殘しを蔓草の中へ投げ捨てた。すると、それは紅い閃光の雨を灑いて叢間に消えた。して、彼の跫音は永久に消えた。否、永久ではない。假令この世に於て最早彼を見ることはなくても、私共は幾周期、幾永劫を通じて再び彼を見ないだらうか？さうだ、遺憾にも永久に消えたのだ。假令幾周期、幾永劫を通じて再び彼を見ることがあつても、永遠無窮、いつも彼が同一の境遇の下に、同一の刹那に於て、去つて行くといふことはないではないか？

不死の人

私は三千年間生きてきてゐる。私は人間と世界に飽きた。この地球は私のやうなものに取つては、あまりに小さくなつた。この天空は、落ちてきて、私を潰しさうな灰色な鉛の圓天井のやうに見える。

私の頭には一本の銀髪もない。三十世紀間の塵埃も、私の眼を曇らせてゐない。それても私は地球に飽きた。

私は一千の國語を語る。また、諸大陸の顏は、書籍の文字の如く私によくわかつてゐる。天界は限なく卷物の如く私の眼前に展開されてゐる。それから、地球の內部も私に對して何等の祕密を有たぬ。

私は大洋の最深底に知識を搜した――砂が骨のやうな乾いた音をたてて、黃色の波を流してゐる沙漠に――納骨堂の腐敗の中に、また塚窖の隱れたる驚愕すべきものの中に――ドゥラギリの處女雪の中に――人跡未だ到らざる森林の恐ろしき迷路の中に――死火山の

胎内に——河湖の水面には、河馬の背が散見したり、鰐魚の甲が光つたりしてゐる地方に——墨のやうな海面に、幽靈の如き氷河が泛かべる世界の極端に——山岳は原始時代の地震に引裂かれて、滿目ただ乾涸して、ぎざぎざの刻み目を呈し、絶えて一點の生物を見ざる處、例へば月世界の如く、人類の發生前に、夙くも流れの止んだ激湍の殘せる、乾いた河床や、海底が連らなつてゐる奇異な土地に。

あらゆる世紀のあらゆる知識、あらゆる事物に關する、人間のあらゆる巧妙熟練は私のものである。しかも更に多く私のものである!

何故なら、『生』と『死』が彼等の最古の祕密を私に囁いたので、從來人間が知らうと欲して無效に終はつたことが、私に取つては悉く神祕を失つてゐるからである。

私はこの些々たる小世界の一切の快樂を味はつたのではないか?——その快樂は、私の體格よりも弱い體格を消耗して、灰塵に歸せしめたであらう。

私は埃及人や印度の諸侯や羅馬皇帝と共に殿堂を築いた——私は征服者を助けて世界を征服した——私はシーベースやバビロンの支配者と共に、亂舞宴飮の夜を明かした——私は酒に醉ひ、血に醉つた!

この世の諸王國とすべて彼等の富と榮華は私のものであつた。

かのアーキミーディーズが望んだ槓杆を以て、私は帝國を擡げ、王朝を顚覆せしめた。否！神の如く、私は掌裡に世界を握つた。

男子の心を愉快ならしめるため、青春の美と女の愛情が與へうる一切のものを私は有つた——いかなるアッシリヤの王も、ソロモン大王も、サマルカンドの支配者も、バグダッドの教主も、東印度の酋長も、私の如くに戀愛を味はつた者はない。また私の數限りなき戀愛に於て、私はすべて人間が、その心で考へたり、望んだり、その手で不滅と呼ばるゝペンテリカスの大理石に結晶させたものの實現を見た。——しかも、それは私の鐵の如き手足に比ぶれば、果敢ないものであつた。

して、國王達が彼等の永遠の夢を鑄つた埃及の薔薇色の花崗岩の如くに、私は依然として血色がよい。

しかし、私はこの世界に倦きた！

私は一切私の欲求を遂げた。これまで私が望んだもので、私の獲てゐないものは一つもない——現在私が空しく望んで、しかも、絶對に獲ることのできないものは別として。

この全地球に、私の伴侶は一人もない。私を理解し得る智力ある者も、私の價値を認めて愛を注ぎ得る情熱ある者もない。

若し私が知つてゐることを吐露すれば、いかなる人も理解することはできないだらう。若し私の知識を書いたなら、いかなる人間の頭腦も、私の思想を悟ることはできないだらう　私は人間の形を帶び、人間の成しうる一切のことを成し得るので――しかも、人間が成しうるよりは一層完全に――私はこれ等の脆弱な仲間と共に生活し、その無能力な知的水準に降つて、その貧弱な事業を模倣せねばならぬ。叡智を有ち乍ら！神々が女を愛し得るために、人間の水準に降つたことを唄つた希臘の夢想家は、どんなに狂氣じみてゐたのだらう！

昔、私は子を生むことを恐れた――その子に私の不朽の若さを遺傳することとなつたのであらう――私はこの世の誰れにでも、私の祕密を分與することを嫉視したのであつた。今やその時代は過ぎ去つた。頽廢せる現代に生まれた私の子は、決して私に適はしき伴侶となることはできない。彼が私の思想を僅でも理解しうるのは、大洋がその海底を變へ、新大陸が綠玉の淵から起こり、新しい人種が地上に現はれた後を待たねばならぬ。

未來は私に取つて何等の樂みを貯へてゐない――私は幾千萬年の世相を豫知してゐる。一切以前にあつたことは、またあるだらう。未來一切のことは過去にあつたのだ。私は沙漠にゐる如くに孤獨だ。何故なら、世間の男達は私の眼には操り人形の如く見え、また現

在生きてゐる女の聲は、私の耳に毫も愉快を與へないから。

ただ風の聲と海の音に私は耳を傾ける――しかし、これ等のものさへ私に退屈を感じさせる。何故なら、彼等は三千年前にも、古木老岩の間で、今日と同じ音樂を私に囁き、同じ頌歌を私にきかせたから。

今夜で私は月の蒼盈を三萬六千九百　眺めたことになるだらう。して、私の眼は、その白い顏を見詰めるのに飽き果てた。

噫ゝ！もし私が二個の太陽に照らされ、大きな月の衆團に取り捲かれてゐる別世界へ移ることができたら、私は欣んで無窮の歲月を通じて生活して行かう。それは私の知識と均しい知識、私の伴侶たるに適はしき智力を有する者と、多分私が愛し得るやうな女のゐる世界である。その女はスカンディネーヴキアの寓話にある幽靈の如き女や、或はこの小さな地球の弱い母の如き空虛な女でなく、不死の子供を生むに適せる、永久に衰へざる美人である。

悲しいことには、私の意志よりも偉大て、私の知識よりも深い力が存在してゐる――それは『火の如く聾て、夜の如く盲』の力である。その力が永久に私をこの人間界に束縛してゐる。

私はプロミーシユースが岩に縛られて、絶えず『絶望』の禿鷹の鋭き嘴に内臟を齧じられつつ苦悶したやうに、いつまでも日を送つて行かねばならぬか？または、私のこの光榮ある身體を永久に破壞して了はねばならぬか？

私は太陽が暗くなつて、冷却するまでも活きることはできる。それでも最早この上活きて行くには、あまり倦怠を感じてゐる。

私は全然死んで了うだらう――丁度禽獸が死ぬる如くに。また人間の形を帶びてゐる、最もつまらぬ人物が死ぬる如くに――して、人間の思想が捕捉しうるやうな、何等の書いた思想を後に留めないで行くのだ。私は飛ぶ煙の如く、影の如く、大洋の波頭に浮かぶ泡の如く、吹き消された蠟燭の炎の如く消滅して、誰れ人も私を知らぬこととなるだらう。三千年間絶えず鼓動してゐたこの心臟、地球のあらゆる地方の土を踏んだこの足、諸國民の運命を作つたこの手、地上のあるゆる人が知つてゐたよりは、その一千倍の知識を有するこの頭腦も、やがては亡くなつて了うだらう。それでも、この腦――人間が夢に描く神に劣らぬ腦――地上の知識のあらゆる記錄を納めてある殿堂――の驚くべき機關を粉碎破壞するといふのは！

月が上つた！あゝ白く死せる世界！汝も私の如く感情を備へてゐるならば、汝はどんなに欣んで、無邊の夜の空を死骸の如く環ることを止め、私に隨つて、夢さへ死せる、一層暗い無窮の世界へ行くことだらう！

※　※　※

死んだクリーオール人の夢

墨西哥灣の水は、熱帶の夜の暑さを受けて、微温てあつた。私が棕櫚て縁をとられた濱邊へ向けて泳いで行く時に、大きな月が見おろしてゐた。して、振返つてみると、船の索具が、くつきりと月の面を遮つてゐた。何の音もしなかつた。漣波は恐れてゐるかの如く、靜かに褐色の砂を嘗めてゐた。蕃紅花（さふらん）や肉桂や睡氣を催す花の香を帶びた微風が、水の上を渡つてきた——星は平常の夜よりも一層大きく見えた——十字星座の光は、一つの瞬きもせずにじいつと輝いた——私は怖はくて暫時停まつた——何故といふに、長い、凄い溜息

を放つて、夜が呼吸するのを、私は聽くやうに思つたからである。この空想は忽然起こつて、また忽然去つた。船の鐘は朝の第一時を報じた。私は子供の時遊んだ濱邊へ再び上がつて、棕櫚の樹間を通じて、彼方の奇異な町の青白い家々を眺めた。その町から二十七年前、兩手は血まみれになつて、私は脫走したのであつた。

＊　　＊　　＊

町は深い眠りに襲はれ、番人も私が通る時、眠つてゐたのは、魔の夜であつたのであらうか？それは解らない。しかし彼が眠つてゐたのは、彼に取つて仕合せだつた！私は『死の影』のやうに古い門を靜かに通り拔けて、突き出てた露臺が投ぜる影の中を經て、熱帶の月の照らしてゐない廣小路に沿つて、寺院の塔が步道の上に暗い鬼の姿を呈してゐる邊を過ぎたり、狹い街路で、仰げば星の散らばつてゐる空が、一筋の青いリボンのやうで、露臺の鋭い突端のため、そのリボンは鋸齒狀に見える處へ入つたり、また白い月光の下へ出てて、さながら婚禮の室の如き香に滿てる暖かい空氣を吸つたり、更にまた進んで、一千年の間、苛責を受けて、根や枝が扭れて、曲つてゐる古い綠杉が、物凄い影を墓地に垂れてゐる處へ來た。

巨大な蜘蛛が墓の壁と壁の間に、月光を浴びながら蛛網を吐いた――蝮蛇が私の足の上を滑つた――大蝙蝠が星の下を彷徨つた。して、螢は屍體の燐光の如く、死者の休息所の邊をぐるぐる飛び廻はつた。大きな蔓が菌類と共に、大理石を綠の色に抱擁した――常春藤はその蜥蜴の如き足を石の中へ埋めた――攀援莖植物は墓碑の上を、アイシス女神の面帕のやうに厚く覆つた。しかし、私は彼女の墓を發見した！私は心に誓つてゐた通り、死と地獄を冒しても、その墓に達し得たのであらう！

私は爬蟲類の如くに大理石に附着してゐた有毒植物類を引裂いた――しかし、私の手から、彼女の名の上へ血が流れて傳はつた――して、私は接吻を施さうとして、一箇所も赤くない處を發見し得なかつた。それから、私の指から滴る血が、足許に散らばつてゐる、引き抜かれた草木の葉の上へ、溶けた鉛の如く、重たげな、死んだ音を立て、落ちるのを聽いた。

＊　＊　＊

それから、死んだ歳月がその霧の墓から現はれて、私の周圍へ立つた！私が彼女の最初の接吻を受けた場處の青苔の壇を私は見た。その接吻は、私の血管に狂熱を滿たしたので

あつた。また裸體て舞踊せる少年の浮彫を施した大理石の甕――睡蓮て口を塞がれて止まつた噴泉――月に向つて咲く奇怪な花などを私は見た。それから、彼女を見た！――彼女が着てゐる羽の如く輕い白衣から洩れてゐる、コリント風銅像のやうに波狀を呈せる身體の輪廓――クリーオール風の眼――突出せる、情熱的な口――それから、かの永遠に殘酷な、また永遠に神祕的な埃及の微笑、スフキンクス怪像の微笑を見た。その微笑は、私が彼女の足を接吻するため、蟲の如く彼女の前へ身を投げて、私を蹂躪して呉れ、私に唾を吐きかけて呉れと絶叫しても駄目であつた時に、彼女が帶びてゐたものであつた！しかも、私の復讐に燃えた猛烈な刹那の後、その埃及の微笑は、恰も青銅に永久、型を留めたやうに、依然彼女の暗い顔の上に殘つてゐた。

＊　＊　＊

攀援莖植物の中に、さらさらの音もなく、枯葉の戰ぐこともないのに、彼女は私の前に立つてゐた！私の心臟は鼓動を止めたやうに思はれた――私は夜間南極圈の海を航した際のやうな冷氣に襲はれた。彼女は昔と同じく白衣を着け、頭髮の中には螢の光りの如きものが輝き、昔と同じく不可思議な、小鬼のやうな微笑を帶びてゐた。すると、突然冷氣は、

恰も血液の各細胞が火山の火に熱せられたやうな血液の大激變と共に消滅した。何故なら、ソロモンの雅歌の珍らしい言葉――『戀は死よりも强し』――が、遠い反響のやうに私にひびいたからである。

私は恐怖心が私の聲を繋いてゐた束縛を破つた――私は彼女に言葉をかけた。私は聲を揚げて泣いた――私は血の淚を灑いだ。

すると、昔の聲が私に答へた。その聲は低く、銀のやうに響き、また西印度の暑い夜の空に呼び交はす鳥の聲の如く、嘲弄するやうな美はしさを含んでゐた――

『私は貴郞が私に歸つてくるのを知つてゐました――幾ら長い間、異國の土地、異國の海に彷徨つても。

『貴郞は私が死んだと思つたのですか？否、私はそんなに早くは死にません！私はずつとこの長い年月の間、生きてゐたのです。私は今後も續いて生きて行きます。して、貴郞はまた私を訪ねるため、夜の盜人の如く、ここへ歸つて來ねばなりません。

『私がどんな風に生きてゐたか、貴郞は御存じですか？私はずつとこの長い年月の間、始終貴郞が灑いだ熱い淚の中に――靜かな夜間や淋しい海上で貴郞を襲つた苦しい悔恨の中に――誰れも見てゐない場合、熱烈なる煩悶から發散する、貴郞の青春と生命の吐息の

中に――貴郎の夢に浮かび出てて、貴郎が孤獨でゐることを懊惱させる、種々の幻影の中に、――それらのものの中に、私は生きてゐたのです！しかし、貴郎は私に接吻　――』

私は再び白い光の中に彼女を眺めた――昔と同じ不思議な美しい顏、同じスフキンクス像の微笑を私は見た――私は空虚な墓が、その内部までも廣く口を開けてゐるのを見た、――私は墓の影と私の影が、くつきり地上に横たはつてゐるのを見た――それから、私の面前の丈の高い白い姿は、月に對して毫も影を投じてゐないことを私は發見した。して、忽然星の下に、遠寺の鐘の如く、朗々と、眠を醒ます番人の頌歌が響いた。

碑銘

『野鳥が夏を求めるやうに、乾度貴郎は私の處へ戻つて下さるに違ひありません』と、女は囁いた。『貴郎の血管の中に、一滴の血でも、貴郎が私を思つて下さる度毎に、燃えて熱くならないのがあるでせうか？私がここにゐますために、今この瞬間、貴郎の心臟は一層速く鼓動を打たないでせうか？その心臟は私のものです――貴郎の弱い意志が幾ら反

抗しても、その心臓は私のいふことに從ひます――貴郎が去つた後も、私の奴隸となつてゐるてせう。貴郎は私の脣頭て魅力をかけられたのてす。私は眼に見えぬ絲て鳥を繫いてゐる如くに、貴郎を繫いてゐます。しかも私の絲は眼に見えない、手に觸れないものてあつても、貴郎の意志よりも强いものてす。貴郎が飛んて行つても、私の願ひて貴郎を抑へてゐる範圍を越えては飛べません。逃げて行つても、私は夜の夢に貴郎の許へ行きます。して、貴郎が心臓の搏動に醒まされて、起きて見た時、暗黑と思ひ出の中に孤獨の身を見出すてせう。貴郎が誰れ人の腕に擁かれて寢てゐようと、私は幽靈の如く來て、中間へ割り込むてせう。貴郎が幾ら多くの接吻を與へても、それを悉〻く受けるのは私なのてす。幾ら世界中を放浪遍歷しても、私の思ひ出をふり捨てることはてきないてせう。して、印度の太陽の下にゐても、極光の現はれる北方にゐても、私を想ひ出てる時、貴郎の脈搏は速く打つてせう。貴郎が私を愛しないといふのは、虛僞をいつてゐるのてす！貴郎の心臓は、その生ける牢獄から脫し得るなら、私の足もとへそれ自身を投げ出だしたく思つてゐるてせう！貴郎は戾つて下さるのてせう』

＊　＊　＊

心の平安を求めて得られなかつた、幾年月を徒費した後に、私は彼女へ戻つて行つた。それは凄まじい風が吹いて、影は飛び、奇異な雲は嵐に追はれて、月の顔を掠めて逃げる夜てあつた。『お前は忌まはしい魔女だ。しかし私は歸つてきた！』と、私は叫んだ。

すると、彼女は死人の足許に點燈されてゐる蠟燭の如き白い指て、私の脣を押へながら、ただ微笑して囁いた。『私に隨いてお出てなさい』

して、私は彼女に隨いて行つた。

雷が東の方て呟いた。地平線は電光て顫へた。夜の鳥はけたたましく鳴いた。やがて私共が墓地の鐵門へ達して、彼女の手が觸れると、それはぎゆうと唸り聲を發して開いた。音も立てないて、彼女は墓の並んてゐる間を通つて行つた。して、彼女の足が塚に觸れると、炎を發した——土螢の火の如く、冷たく白い死んだ炎。

途切れては輝く月光の錯覺てあつたか？それとも、眞に死人が起き上がつて、私共に婚禮の行列の如く隨いて來たのてあつたか？

または、雷の振動に過ぎなかつたか？それとも、私がその墓の上に立つた時、土地が震るへたのてあつたか？

『少しの間も、貴郎の背後を顧てはいけません。さうてないと、貴郎の生命は奪はれま

すから』と、彼女は呟いた。

※　　　※　　　※

しかし、苔の黒ずんだ碑面に刻まれた名を讀まうとする奇異な願ひが、私に起こつた。丁度その時、嵐が雲を拂つて、月の顏を見せた。

して、私の側の黒い影は囁いた。『それを讀んではいけません！』

すると、月はまた隱れた。私は熱情を籠めて囁いた。『私は去ることはできない！是非とも、この碑面の名を讀まないでは』

やがて東方に電光一閃すると共に、ぱつとその名は照明された。して、苦しい思ひ出が私を襲つた。私は飛び行く雲と、青ざめた星に向つて、煩悶の叫びを揚げた。

再び大地は私の足もとで顫へた。すると、一つの白い姿が、蒸氣の騰る如く墓の中から上つてきて、私の前に立つた。私は青年の夢に浮かぶ幻の美人の唇のやうな、有るか無きかの唇から接吻を與へられたのを感じた。して、そよ吹く夏の嵐の囁きの如く微かな、消えた聲の反響が呟いた——『愛は死よりも強いのです！私は貴郎を救ふため、永遠の夜から歸つてきました！』

アフロダイティーと王の囚人

コリント式大理石の柱が堂々と相連らなつて、そのアカントス葉飾の柱頭は、磨き上げられた大理石の柱から百尺も上に聳えてゐる――ハドリアン皇帝時代の古い寄木細工――アフロダイティー女神に献げられた一切の犠牲を描けるポンペイ式壁畫――驚くべき枝附燭臺を擡げてゐる裸體の銅像――赤土燒の怪異な美しい奇品――ペンテリクス產大理石にて製せる奇蹟的藝術品――ソロモンの雅歌のやうに人を醉はせる香を以て宮殿を滿たした焚香の容器を支へてゐる三脚架――かやうなものの眞中に、一列の噴泉が嚠喨たる音を立ててゐる。その中には、水の女神(ニンフ)が彼等の白い、滑かな石の股を露はし、また彼等の大理石の形體を、美と調和する有らゆる限りの姿勢に曲げてゐる。桃金孃の花園と、ダフニーの森の如く神祕な暗い月桂樹の森が、深綠の世界を宮殿の周圍に繞らしてゐて、その間處々パロス產大理石の森の女神(ドライアッド)によつて白く染め拔かれてゐる――壇の上には、滿面の花が生ける毛氈を敷きつめてゐる――それから、一筋の川が建物の東の壁と大理石の階段を洗つ

て流れてゐる。これは國王が復讐心から造つたものであるが、全く驚異と富と珍奇の世界であつた。すべてこれ等の魅惑的な希臘の大理石や美を硬化せる銅像の中に、生きた人間はただ一人しかゐなかつた。一人の僕婢も見えなかつた。一つの聲も聞こえなかつた。その奇異な樂園からは、一つの出口もなかつた。ここには國王の囚人が幽閉されて、目に見えぬ人の手で、食を調へられ用を辨ぜられてゐるといふこと――贅澤な飲食物を陳べた食卓が、一定の時刻に大理石の敷石の下から上がつてくるといふこと――それから、蜜を加へて甘美にされたる東方の最も芳醇な酒の香煙が、彼の食堂を薰らせてゐるといふことが、世間で噂されてゐた。藝術が注入し得る一切のもの、黃金で獲らるゝ一切のもの、世界の富によつて創造されうる一切のものが彼に備つてゐた――ただ人間の聲を聽くことと、顏を見ることとはできなかつた。獲得されない美の面前で氣を狂はせること、ピグマリオン[譯者註]の恍惚的な神話を實現しようと空しく眷戀憔悴すること、美の夢にあこがれて死んでしまうこと、――これが國王の宣告であつた！

＊　＊　＊

理想美に適はしき生ける形を作らうといふ努力のために、空しくその生命を燃燒せしめ、

灰燼に歸せしめた幾多藝術家の手腕によつて、石や寶玉や永久的青銅を用ひて作られた、あらゆる美しいものよりも更に美しい一個のアフロダイティーの像が、黑い大理石の臺座の上に、彼女の裸體美の最高の調和を現はしてゐた。廣やかな、磨き上げられた臺座は、彼女の身體の神々しい詩趣――紺碧なイーヂーアン海の波の泡から生まれ出でた姿――を黑檀の鏡のやうに活映してゐた。熱帶的の光澤、黃金色の暖かさが、この動かない像に横溢してゐるやうに見えた。これはプラクシテイリーズよりも更に偉大なる天才によつて、愛の夢を大理石に結晶させたものであつた。この輝ける女神の姿態は、後世の修飾者によつて、基督教的時代錯誤の羞恥の趣きを與へられてゐなかつた。恰も戀人を迎へようとしてゐるかの如く、兩腕を差しのべて、彼女の胸のあらゆる痛絕快絕な曲線は、看者の眼に直面してゐた。また、片足を少許進めて、接吻を與へんかために步み寄らうとしてゐるやうであつた。それから、臺座の黑い大理石に嵌めた眞鍮板には、五箇國の古代語で、つぎの銘が記されてゐた――

『戀に狂つた人の手で作られた私は、私を凝視するすべての人を狂はせる。私と共に孤獨の生活を營むやうに呪はれた人は、私の足許で戀の爲め焦がれ死をする覺悟をするがよい。若者や美人によつて崇拜された古代の神々は、死んでしまつた。どんな神の力でも、

この石の胸の中へ生きた心を入れることはできない。またこの立派な手足へ生命の温かき柔軟性と薔薇色を附與することもできない』

＊　＊　＊

像の立てる室の周圍には、大理石の壁板が張りつめられ、酒神祭(バッカス)の浮彫――粗野な森の神や牧神が亂飲狂舞、猥りがましく縺れ合つたり絡んだりしてゐる――が刻まれてゐた。斑岩の神壇上には、戀愛の神によつて嘉賞される桃金孃の葉を焚いた聖火が、低い炎をちらちらさせてゐた。犧牲の鳩は、室外の大理石を敷きつめた庭で、鳴いたり、戲れたりしてゐた。水晶のやうな噴水の音は、戸口に近く聞こえた。噴泉の中では、美しい女性の怪物が、彼等のしなやかな脇腹を蛇のとぐろのやうに交錯させ、彼等の青銅の腕で怪奇な杯を支へ、生きた水がその杯から跳ねてゐた。芳ばしい肉感的な空氣が、コリント市の風流者に知られた薫香の名殘を浮かべて、柔らかな燈光の斷ぜられたこの聖殿を滿たしてゐた。して、閾の兩側には、黑白二個の大理石像が立つてゐた――死の神の白い兄弟なる愛の神と、愛の神の黑い兄弟て、永久に消えた松明を持てる死の神。

して、國王に囚人が聖火を燃やしつづけ、女神の足許て鳩の血を屠つてゐることを知つ

た。して、これに對して、女神は永遠の若々しさと、變はることなき美しさと、その身體の偉大なる魅力の意識を示せる、永久的微笑を浮かべてゐるのみであることをも、國王は知つた。何故なら、祕密の看守が宮殿へ參つて報告したから――

『四人が始めて女神の美の恐ろしき神聖を見た時、彼は生命を奪はれたもののやうに倒れて、そのまま長くじつとしてゐました』

すると、王は沈思しながら、答へていつた――

『アフロダイティーは最早鳩の血で宥めることはできない。人間の血――强い心と火山の如き情熱を有つた人の血――でなくては駄目だ。四人は若く、强く、且つ藝術家だ！だから、やがて死ぬるに違ひない。慈悲の心を以て、死の武器を女神の足許へ備へて置くがよい。彼女の犧牲者が自らを贄（いけにへ）として献げ得るやうに』

*　*　*

さて、祕密の使者は宦官であつた。彼等は再び參內して、銀髯の王の耳に私語した――

『彼は再び鳩の血を灑ぎました。それから、ホーマーの聖頌を唄ひ、時頭に汗が滲み出てるまで、大理石の像を接吻しました――それでも、女神は依然殘酷な美しい微笑を湛へて

ゐます』

すると、王は答へた――

『それは全く朕の希望通りだ』

また使者が參內してきて、鐵のやうな眼付の王の耳に低語いた――

『彼は淚て女神の足を洗つてゐます。彼の心臟は大理石の指で破碎されたやうに苦んでゐます。彼は最早喰べず眠らず、また青銅の噴泉の水も飲みません。して、女神は依然永久的な美しい微笑を湛へてゐます。無情無慈悲のままです』

して、王は答へた――

『それは丁度、朕の欲した通りだ』

* * *

やがて、或る朝のこと、紅い日がほのぼのと輝き出した時、人々は囚人が死んでゐるのを見出した。彼は兩腕を最後の抱擁のため、女神の兩脚へ狂氣的に投げ掛け、彼の頰を女神の大理石の足に載せてゐた。彼の心臟のすべての血は、胸の傷口から迸り出てて、黑い大理石の臺座の上に溢れ、五箇國の古代語を刻める眞鍮板の面を滴下して、更に寄木細工

の鋪床の上を流れ、大理石の閾を越え、『死』の兄弟なる『愛』の像と、『愛』の兄弟なる『死』の像の前を過ぎ、遂に犧牲の鳩が水を飲んでゐた靑銅の噴泉の水に混入した。して、蛇の女體の周圍では、泉水が薔薇色に紅かつた。して、死人の上で、女神は依然無慈悲な、美はしい、嘲弄の永久的微笑を湛へてゐた。

『三週間、彼は女の足許で生きながらへたのだ』と、王は呟いた。『白髮の霜を戴いてゐる朕でさへ、一時間彼女を眺めてゐられさうもない！』して、地獄の死の谷から現はれた亡靈の如き悔恨の影が、さつと王の花崗岩のやうな顏を掠めた。王は叫んだ。『彼女を微塵に粉碎してしまへ。玻璃の器物を破碎する如くに』

しかし王の從者共は、彼女の律動的な四肢の白い魅惑を眺めると、低頭平身してしまつた。誰れも敢てこの美の女怪に一指を加へ得るものがなかつた。木の葉が火のために萎れる如く、彼女の美に對して男子の心は、脆くも縮んでしまつた。して、アフロダイティーは永遠の若々しさと、不朽の美しさと、人間の情熱に對する絕えざる嘲弄の微笑を彼等の上に注いでゐた。

譯者註　神話によれば、サイプラスの王、ピグマリオンは自ら彫刻した乙女の象牙像の美しさに對する戀

愛の餘、愛の女神に祈つて、その像に生命を吹き込んで貰つて、これと結婚し一、子を擧げた。

黄金泉

これは西班牙領亞米利加から流浪して來た老人が、養老院で西班牙の老僧に向つて、夏の夜の明け方に打明けた物語である。して、私は殆ど僧の口から聞いた通りに書いた。

「私は眠れなかつた。花の異香と、潑剌たる想像力を有つた人が新奇な土地に於て感ずる詩的興奮の情と、見馴れぬ星宿に照らされた新しい天空と、それから、私に取つてエデンの樂園だと思はれた新しい世界の光景――すべてこれ等のものが合して、落ち附かぬ氣分を生み、熱病のやうに私の心を焦がした。私は起きて星の下へ出て行つた。兵士達の重い寢息が聽こえた。彼等の鋼鐵の胸甲は、凄い光の中にきらきらしてゐた。また折々馬の噴鼻や、僚友の眠りを守る番卒の規則正しい歩調の音も聽こえた。かなたの深林の中へ一人で彷徨つてみようといふ何とも名狀し難い願望が、私を襲つてきた。それは丁度故郷のセヴキルで、髯を貯へた兵士が、夏の夜語りに、新世界の魅惑を話した時、私を捉へたや

うな憧憬であつた。私は夢にも危險を思はなかつた。何故なら、その當時私は、神も惡魔も惧れなかつたし、また隊長はその向う見ずの連中の中でも、私を最もひどい亂暴者と考へてゐたからである。私は戰線を越えて濶歩して出た――白髮交りの番卒は、私が彼の挨拶を無愛相な沈默で應じた時、荒ら荒らしく呶鳴つた――私は彼に罵倒を浴びせたまま、通つて行つた。

……………………

「あの驚くべき南方の夜の深い青玉は、淡い紫水晶に薄らいだ。それから、眼界は棕櫚の樹の頂冠の後方で黃色に輝いてきた。して、遂に南方十字星座の金剛石の火も消えた。遙かに私の背後に當つて、西班牙兵の喇叭が、その熱帶の朝の芳ばしい空氣の中で點呼の聲をひびかせた。それが遠くから美はしく顫動して、他界から洩れる音樂の如く微かに聞こえた。それでも私は引返さうといふ氣にはなれなかつた。始めと同じ奇異な衝動の下に、夢の中のやうに私はぶらぶら進んで行つた。すると、喇叭の音がまた響き渡つたが、以前よりは更に微かであつた。珍花の異香のためか、香料を產する樹木の薰りのためか、熱帶の空氣の蕩かすやうな暖かさのためか、それとも、魔術のためであつたか知らないが、一種の新しい感じが私に起こつてきた。私はどうかして泣いて見たいやうな氣分になつた。

私は從來の獰猛な心が、すつかり消えてしまつたのを感じた——野鳩が樹から飛び下りて、私の兩方の肩の上に止まつた。して、私が彼等を愛撫してゐるのを見出して、自分ながら可笑しく思つた——血で眞赤な手と、罪で黑い心を有つた私であつたから。

……………………

『すると、日がはつきりして、空は綠玉と黃金の天國になつて輝いた。蜂ほどの大きさであるが、妙な金屬性の火光を帶びた鳥が私の周圍で唸つた——鸚鵡は樹間で囀つた——猿は枝から枝へと、怪しいほど敏活に廻轉した——數限りなき、何とも譬へやうのない美しい花が、絹のやうな蕾を太陽に向けてゐた——して、夢のやうな森の、眠氣を催させる芳香は、ますます人を醉はせるやうになつた。これは西班牙にゐるムーア人が噂してゐた、日の出の處に近い魔法の國ではないかと思はれた。して、私はポンテー・デー・レーオンが求めた黃金泉のことを夢想した。

……………………

『それから、樹木が一層高くなつたやうに思はれた。棕櫚はノアの洪水時代よりも更に古いもののやうに見えた。して、その羽冠は蒼空を摩するかと思はれた。すると、忽然私は廣い空地に入つてゐたことを知つた。非常に高い原始的樹木に圍繞され、圈內は悉く

緑蔭を浴びせられてゐた。土地は苔や繁つた芳草香花に敷きつめられて、その彈力に富める葉や花瓣の上を踏んでも、跫音は響かなかつた。して、園内は中央へ向つて、次第に傾斜して、閃くやうな水を湛へた大きな池となつて、池心には私がグラナダのムーア式庭園て目撃したやうな一大噴水が高く跳つてゐた。水は深く、淸く澄んで、始めて戀を知る頃の女の眼のやうであつた。私は遙かの下方に、金粉を撒いたやうな砂を見た。また噴水の雨が謎を成す處には、虹の立つのを見た。噴水は毫も人間の手て作つたものから迸つてゐないのか、不思議に思はれた。恰も偉大なる底流が、池の水平面以上にそれを噴出させてゐるやうてあつた。私は武裝を解き、着物を脫いて、勇ましく池へ飛び込んだ。私が思つたよりは遙かに深かつた。水晶の如き澄明さが私を欺いてゐたのてあつた——底へは潜つて行くことができなかつた。私は噴水まて泳いて渡つた。して、驚いたことには、池の水は山の泉の如く冷たいのに、中央て跳り上がつてゐる、生きた水晶の柱は、血の如く暖かてあつた！

……………………

『私は游浴のため、不思議に爽快を感じた。私は水の中て子供の如く跳ね廻はつた。森や鳥に向つて高く絕叫した。すると、鸚鵡は棕櫚の梢頭から、叫んて應答した。して、池

から上がつた後、私は毫も疲勞や飢餓を感じなかつた。しかし私が寢ころんでからは、深い、鉛のやうな睡眠が私を襲つた――子供がすやすやと母の腕に抱かれて眠る如く。

『私が目を醒ますと、女が私の上に屈んでゐた。彼女は全然裸であつた。して、その完全な美、その熱帶的な肌の色は、琥珀で刻んだ像を想はしめた。長く垂れた黒い髮には、白い花が織り込んであつた。眼は非常に大きく、黒く、深くて、絹の如き睫毛を帶びてゐた。私が見た印度人の娘のやうな黄金の裝飾を、彼女は着けてゐなかつた――ただ頭髮に白い花を飾つただけであつた。私は天使を眺めるやうに不思議がつて彼女を眺めた。また、實際その丈の高い、すらりとした優美さは、この世界のものとは思はれなかつた。私のこれまでの暗い生涯の中で、始めて私は女の面前で恐怖を感じた。しかし、その恐怖の中には、幾らか快感が混じてゐないことはなかつた。私は西班牙語で彼女に話しかけた。しかし、彼女はただその黑い眼を、もつと廣く開いて、微笑むばかりであつた。私は手眞似をした。彼女は果實と瓢簞に入れた淸水を持つてきた。して、彼女が再び私の上へ屈んだ時、私は彼女を接吻した。

…………………………

『敎父樣、何故私共の戀のことを、私は貴僧に語るのだらう？――その際が私の生涯の

中で最も幸福な時代であつたといふ事だけ述べたいから。地と天が、その不思議な場處ではな抱き合つてゐるやうに見えた。それはエデンの樂園であつた。決して倦怠を感じない戀、永遠の若々しさ！何人も私の如き幸福を經驗した者はないだらう。しかし何人も私の如く苦しい損失を味はつた者もないだらう。私共は果物を喰べ、泉の水を飲んで生活した――私共の寢床は苔と草花であつた。鳩は私共の遊び友達であつた――星が私共の燈火であつた。暴風も雲もなく、雨も暑さもなく、ただ心地よい香が睡氣を催させるやうな、生温い夏がつづいて、鳥が唄つたり、水の流れは淙々たる音を立てたり、寶玉で胸を飾つたやうな森林の伶人なる棕櫚は、風に揺れて夜もすがら私共のために唄つてくれたりした。して、私共は決して小さな谷を去らなかつた。私の甲冑や精鋭な短劍は銹びた。私の着物はやがて破れてしまつた。しかし、衣服の必要はなかつた。いつも暖かさ、明かるさと安息であつたから。『ここでは私共は決して老ひることはないでせう』と、彼女は囁いた。しかし、これが實際『青春の泉』だらうかと、私が彼女に訊ねると、彼女はただ微笑んだまま、唇頭に指を當てて、沈默の合圖をした。それからまた、私は彼女の名を聞くこともできなかつた。私は彼女の言葉を學ぶことはできなかつたが、彼女は私の言葉を驚くばかり敏速に習得した。私共は一回も爭つたことはなかつた――私は彼女に不興の顏さへ見せる氣にな

れなかつた。彼女は優しさと遊戯氣分と愛らしさに溢れてゐた——しかし、貴僧はこんなことを聞きたくはないのだらう。

…………………………

『私共の幸福は完全至上であつたと、私はいつただらうか？否、さうとは云へなかつた。一つ妙な心配の種が、いつも私を惱ました。毎夜、彼女の腕に抱かれて寢てゐる時、さながら幽冥界から響くやうに、遠く、微かな、亡靈の如き、西班牙人の喇叭の音が私の耳に聞こえた。それは悲しげな聲が私を呼んでゐるやうに思はれた。その音が私共にひびいてくる毎に、私は彼女が身顫ひをして、一層しつかりと彼女の腕を私に捲きつけるのを感じた。して、私が彼女の涙を接吻によつて拭ひ去るまでは滂流を止めなかつた。かやうに私はその數年間、始終、喇叭の音を耳にした。私は數年間といつたが、否、數世紀間であつた！何故なら、その土地では、人は決して老ひないから。私の仲間達が悉く死んでしまつた後、猶ほ私は數世紀間、絶えずその音を聽きつづけた——』

僧侶は燈下で十字の形を切つて、祈りの文句を呟いた。彼は遂に云つた。『物語を續けて、悉皆殘らず私に話すがよい』

『私は腹立ちまぎれに、さうしたのであつた。私の生活を苛める音が、何處からくるのか自身で檢べて見たかつた。またその夜は何故に彼女があのやうに熟睡したかわからない。私が彼女を接吻しようとして、彼女の上に身を屈めると、彼女は夢の中で呻つた。して、私は彼女の眼の黑い縁に、水晶の如き涙の雫が輝くのを見た――すると、またあの忌まはしい喇叭の音が――』

老人の聲は霎時消えた。彼は弱い咳をして、血を吐いて、また語りつづけた――

『叔父樣、もはや貴僧に語る時間が多くはない。私はたうとう谷へ歸る道がわからなくなつた。私は永久に彼女を見失つた。私が人間の社會へ彷徨つて出てみると、彼等は私が話し得ない別の言葉を話してゐた。また、世の中が變つてゐた。私が遂に西班牙人にめぐり逢つた時、彼等は私が青年時代に聞いたのに似ない言葉を話した。私は敢て私の身の上を話さうとはしなかつた。彼等は私を狂人扱ひにして、禁錮しようとした。私が話してゐるのは、別な時代の西班牙語なのだ。だから、同國人も私の奇異な古風さを嘲弄してゐる。もし私が貴僧達のこの新世界に暮らしたなら、私は狂人と見做されたであらう。何故なら、

私の思想と習慣は現代のものでないからである。しかし、私は蟒蛇や鰐魚のゐる熱帶地方の沼澤や、人跡未到の森林の中や、名もない川の濱邊や、昔の印度人の都市の廢墟で生活を送つてゐる內に、やがて私の力も盡き、頭髮も白くなつてしまつた――彼女を搜してゐるうちに』

老僧は叫んだ。『そんな惡念を棄てるがよい。私は君の物語を聞いた。僧侶以外の人なら、誰れでも君を狂人と思ふだらう。私は君が語つたことを悉く信ずる――敎會の傳說にも同樣に奇異なことが澤山含まれてゐる。君は若い時に非常な罪人であつた。て、神は君の罪を利用して、君を罰し給ふたのだ。しかし、神は君が懺悔するために、數世紀の間、君を永らへしめ給ふたではないか？今猶ほ女人の形に現はれて、君を誘惑する惡魔のことは、一切君の念頭から追ひ拂ふがよい。私が君に對する、神の赦罪を告げうるやう、懺悔して、君の靈魂を神に委ねなさい』

『懺悔！』と、臨終の人はいつた。僧侶の面に注がれた彼の太く黑い眼は、青年時代の猛烈な炎を帶びたやうに、再び燃え上がつた。『懺悔せよといふのですか、敎父？私は悔いない！私は彼女を愛する！――私は彼女を愛する！もし死後にも別の生涯があるなら、

私は永遠無窮、彼女を愛するだらう——私の靈魂よりも以上に、私は彼女を愛する！——天國の希望にも勝さつて——死と地獄の恐怖心にもまさつて！』

僧は跪いて、顔を掩ひ乍ら、熱心に祈つた。彼が再び眼を上げて見ると、罪の赦しを待たないで、靈魂は旣に去つてゐた。しかし、死人の面上には、微笑が浮かんでゐた。僧は驚異に衝たれて、『神よ我等を憫れみ給へ』の祈りを口誦んでゐたことを忘れ、『たうとう彼女を見出したのだ』と、覺えず呟いた。やがて東は明かるくなつた。旭日の魔力が觸れると、東雲の靄は、黃金の噴泉と化した。

死んだ戀人

彼は毫も心の平安を得なかつた。何故なら、すべて彼の夢みる夢には、彼女が現はれ、また彼が愛を求める時には、死人が生きた人と人の間に現はれてきたやうに、彼女が現はれたからである。それがため、人生に疲れはてて、彼は夏の盛りに熱帶の都會で死んでし

まつた。彼女の名を口にしながら氣息を引取つたのであつた。して、彼の顏はもはや棕櫚の樹が蔭をさした街路に見られなくなつた。しかし、太陽は以前と同じく昇つては沈んだ。すると、肉體が腐敗する墓の中で、折々生きてゐたり、考へたりする漠然たる幻の生命は、人々が信仰深き希望を以て、彼を葬つた狹い大理石の寢床の中で、躊躇低徊しながら考へた。

しかし、彼は餘りに生涯に疲れ果ててゐたので、死んでから後も、安靜を得ることができなかつた。して、肉體は灰燼に歸し乍らも、幻の人は暗中に毫も平安を見出し得なかつた。して、『私は倦怠の餘り、休むことができない！』と、彼は獨語した。

墓の壁に罅隙があつた。して、その罅隙を通じ、また蜘蛛がその間に織つた網の目を通じて、死人は外を眺めた。すると、紫玉の如く燃えた夏の空、海から吹く嵐に搖れてゐる棕櫚、墓の蔭に咲いた草花、乳光色にかがやける眼界、唄つてゐる鳥、それから、高い棕櫚と巨大な葉を附けた植物の間を流れて、溶々と南米の東南岸へ注ぎ行く川が見えた。女の聲や、銀のやうな笑聲や、跫音や、音樂の響もまた墓壁の隙間から洩れてきた——時としては駿馬の跫音もひびいた。また遠く都會の活動のどよめきも聽こえた。死人は再び生きてきたいと思つた。墓の中に安靜がないのだから。

して、黄金となつて生まれた日々の太陽は、黄金の火となつて死んだ――また、月は毎夜地球の顔を白く照らした。して、夏の匂ひは、薫香の一と氣息の如く消えた――しかし、墓中の死人は、全く死んでしまうことができなかつた。

人間の聲が、彼の休息の場處へ入つてきた。世界の呟きが、暗黑の中で彼に話しかけた。海の風が墓の隙間から彼を音づれた。だから、どうしても彼は休むことを得なかつた。しかも、死人には涕を灑ぐといふ慰藉がないのだ！

星は靜かに空を巡り乍ら、墓の隙間を通じて見おろしては、過ぎて行つた。鳥は彼の上の方て唄つて、他郷へ飛び去つた。蟋蟀は彼の石の寢床の上を、音を立てずに走つて、また音を立てずに去つた。蜘蛛はたうとうその魔法的な絹の綱を張り更へることを止めた。光陰は年々歳々新陳代謝しても、死人にはいつも安靜がなかつた。

すると、幾たびか熱帶の月が缺けたり盈ちたりした後のこと、夏になつて、綺麗な女の姿の幽靈が現はれて、その邊の眠さうな空氣は匂つた。彼女の名は、死の蔭が彼の上に落ちた時、彼の唇頭に上つたものであつた。彼女はこの棕櫚の都會へ來て、墓地へ來て、しかも、この無名の墓へ來たのであつた。

して、彼は彼女の衣裳の囁きを知つた。すると、死人の心臓から、一本の花が生え出て、墓の壁の隙間を通つて、彼女の前て咲き、熱烈なる芳香に花の精靈を吐いた。
しかし、彼女はそれを知らずに通り過ぎた。して、彼女の跫音は永久に消えた！

墓地にて

『僕と一緒に來たまへ』と、彼はいつた。『死人の階級にさへ、貧富貴賤の區別があるのを君に見せるから――成るほど、「石にも有難い說法が現はれてゐる」とは、よく云つたものだ』

して、私は彼と共に埃及式の門を通りぬけ、塔門の下をくぐつて、絲杉の並んだ小徑へ出てた。すると、彼は永遠の眠りの町に於ける富豪の住宅――彫刻せる大理石の太い墓、悲める天使の白い石像、青白い甕の象徵、金文字で花崗石の額に誌した名――を私に見せた。しかし私は彼にいつた。『こんなものは私に何の興味もない――これ等の墓は富の因襲的形式に過ぎない。嘗ては富を有つてゐたものも、今ではその富が一文の役にも立たな

い處に居るのだ。塵土に歸しては、一切衆生無差別の境涯に安息してゐるよ』

そこで、私の友は獨り微笑を洩らし、私の手を牽いて、蔭の暗い場處へ私をつれて行つた。そこでは樹木が灰色の苔を帶びて重げに垂下し、墓地を繞れる納骨堂の壁に影法師を搖曳させてゐた。堂内では、死人は一々番號を附せられ、丁度、誰れも破棄しないけれども、讀まうとするものもない文書――墓地の記錄――の如く、大理石の棚の上に堆く載せてあつた。それから、彼は殆ど私共が踏んでゐる芝草と同平面にある、最も低い棚の上の小さな仕切りの一小孔を塞げる、大理石の板を指示した。

そこには碑銘も、名も、花輪も、花瓶もなかつた。しかし、或る人の手によつて板の前面に、些かな花壇が作られてあつた――幅も深さも殆ど十二吋ほどの小さな花園――して、その周圍に石竹花の貝殼で緣をつけ、また白砂を以て黑土の上を蔽つてあつた。砂の中からは幼い植物の綠葉や芽が發生してゐた。

『愛でなければ、これはできなかつたであらう』と、優しい面持ちを漂はせながら、私の友はいつた。『しかも、この砂は遠方の濱邊から持つて來たものだ』

それから私は一介の生物もなく、一枚の草葉もなく、滿目悉く不毛と死滅で、砂の波が乾いて、さらさらする音を立てて、移動してゐる砂濱を想ひ出した。して、ここには砂

の眞中に花が咲いてゐた――沙漠に花が匂つてゐた！――死の裡に愛が生きてゐた！すると、私は子供の手の痕跡を見た――この可哀さうな小花園を作り、草花の根元へ砂を庇つてやつた細い指の跡を見た。

『この墓には名が刻んでない。しかし是非、刻んでなくてはならぬ譯もない』と、私の側に立つてゐた友の聲がいつた。

私も『さうだ』と、答へた。何故に世間はその子供のうるはしい祕密を知らねばならぬことがあるだらうか？何故に同情なき人々の眼が、その悲哀の物語を讀まねばならないだらうか？死んだ人を愛してゐた人々が、彼の休息の場處を知り、彼が夢も見ないで眠つてゐる間、彼に囁くため、ここへ來るだけで十分ではないか？

私は彼といつた、何故なら、その小花園の光景は、私の心中に死人に關して奇異なる空想を起こさしめたからである。その貝殼や砂は、普通墓地で用ひられてゐるのと同一ではなかつた。それは非常な遠方から――風吼え波怒る墨西哥灣の濱邊から齎されたものであつた。

そこで、幻の海の光景が私の前に起こつた。それから、亡靈のやうな波の上に、煩悶動搖してゐる神祕な船――野草の茂つてゐる難破船の骸骨が、敵だつた砂濱の中に埋もれて

ゐる荒磯の夢が浮かんだ。

して、私は考へた――『多分彼は船員であつたらう。また、ここにある、彼の休息の場處を折々訪ねてくる愛情の深い人々は、たうとう歸つて來なかつた船を待つて、見守つて、泣いてゐたことだらう』

しかし、海はその死人の遺骸を引渡してくれた。人々はそれを彼の故郷の町へ運んで、この賤しげな墓へ納めた。して、波が接吻した砂や、石竹色の耳を有し、太洋の呻吟が永遠に螺旋形の孔中に殘つてゐる貝殼をここへ持つてきた。

して、折々彼の子供がここへ來て、果敢ない草花を植ゑ、彼女のささやかな指尖で砂を均らしながら、優しく話しかける――恐らくはただ彼女自身に向つて――恐らくは夢に現はれてくる彼女の亡くなつた父に向つて。

アイーダ

天まで高く築き上げた壁を回らし、一百の門を備へたる大都のシービーズへ、南方から

戰爭の注進があつた。黒いエシオピヤ人が埃及に叛旗を飜したのである。エシオピヤのアモナスロ王の女なる美しきアイーダが、埃及王の女なる魅惑的なアムネリスの奴隷として、捕虜の身となつてゐるのを取り返さうとして、『翼の影暗き』國人は、埃及王の領土へ侵入したのである。埃及の雄將ラダミーズは王女アムネリスに戀さるゝ身でありながら、王女の奴隷なるアイーダの美に眼を注いで、祕かにその思ひを乙女に洩らしてゐた。

ラダミーズ將軍は埃及王の廣い宮殿の間を逍遙しながら、アイーダのことを空想したり、また權力を夢みたりしてゐる。榮華の幻は、殿堂の境内に於けるオサイリスの巨像の如く彼の前に聳立する。希望と恐怖は、或は沙漠から、或は海から吹きくる風のまにまに、ツームの樹の梢冠が東西南北へ交互に曲折する如く、彼の精神を攪亂する。彼は王の右手に坐つて、名譽の衣冠を帶び、權力の指輪を着けて、國王の次位にゐる光景を心に描く。彼はアイーダを妻の身分に引上げ、彼女をして夫の榮譽に與からしめる。彼は彼女の額に黄金の帶を纒はせ、彼女を故國に還らせる。こんな空想をしてゐる際、深い聲の僧侶ラムフキスが近寄つてきて、エシオピヤの河の彼岸にある『翼の影暗き』國から轟く戰闘の雷の消息を告げた。僧侶は『面帕を蔽へる女神』——誰れ人もその恐ろしい顏を一たび見るが

最後、もはや生きながらへることのできないアイシスの神――に宣託を求めた。して、女神は埃及の大軍を率ゐて敵に向ふべき大將を選擇したのであつた。『何といふ幸福だらう！――私がその選に當たつてゐたら』と、ラダミーズ將軍は叫んだ。しかし、僧侶はその名を明かさない。して、大きな柱廊を下つて、外へ出て行つた。

埃及の王女アムネリスは、ラダミーズ將軍に戀の言葉を語つた。彼は口では返事をしても、その心は冷かである。すると、この埃及の乙女の敏慧纖細な心は、致命的祕密を臆測する。彼女はその奴隷を嫉むだらうか？

僧侶は埃及の人民を召集した。女神の意志は、國王の口から親しく告げられた。それはラダミーズ將軍がエシオピヤの黑人軍へ向つて、埃及の大軍を率ゐて行くべき命令であつた。喝采歡呼は天に響いた。アイーダは恐れて泣く――彼女の戀人が父アモナスロに向つて、ナイル河畔の兵士を指揮するのであつたからである。ラダミーズ將軍はフターの殿堂の神祕な室へ召された――聖火に照らされた、果てしなき柱廊を通つて、彼は最奧の聖殿へ導かれた。麻の外衣を纏へる僧侶は、古式の象徵的舞踊を演ずる。武士輩は神聖なる甲

冑を着け、ラダミーズ將軍は神聖なる劍を腰に帶びてゐる。して、廣大なる殿堂の中には、その深奥なる暗黑の隅々に至るまで、悉ゝく『永遠の火の精』に對する恐ろしい讃歌が響き渡る。

儀式は滯りなく了はつた。

國王は大戰爭の宣言を發した。シービーズの都は、一百の眞鍮の門を開いて、雲霞の如き大軍を吐き出した。戰車の震動につれて、大地は震るつた――青銅の槍は、麥の穗の如く數限りがない――埃及の顎は、その敵を呑噬せんがために開いたのであつた。

アイーダは煩悶の裡に彼女の戀を告白した。王女アムネリスは伴つて、彼女の戀人が戰死したと告げた。埃及の王女は、剛情で嫉妬心が深い。

白い月が地球を回る如く、星が埃及の無雨の空を循環する如くに、踊り女達は國王の前て演舞旋轉してゐる。彼等は薄紗を纏つたり、或はただ寶玉を嵌めた帶を着けたのみてある。彼等の四肢は、蛇遣ひによつて魅せられた蛇の如くしなやかで、奇異な竪琴を奏する伶人の音樂につれて曲線を描く。大地が再び震るへる。恰も大きな潮が陸に寄せてくる時、

遠雷の轟くが如くてある。埃及の大軍が凱旋したのだ。戰車がシービーズの一百の門を通つて響き渡る。數へ切れぬほどの兵士が、王宮の花崗岩の壇前に縱列をなして進む。ラダミーズ將軍は戰勝の光榮を浴びながら近づいてくる。國王は玉座を下つて、彼を抱擁する。

『ラダミーズよ、汝の求めんと欲するものを求めよ。假令朕が王國の半ばなりとも』

して、ラダミーズ將軍は捕虜の兵士達の生命乞ひをした。アモナスロもその中に交じつてゐる。して、アイーダは父を見て、非常に危懼してゐる。しかし、彼女の外には、誰れもアモナスロを知つてゐるものはない――何故なら、彼は兵士の服裝をしてゐるからてある。彼女と、ラダミーズ將軍の外には誰れも彼を知らない。僧侶は血を求めようと絕叫する。しかし、國王は誓言を破る譯に行かぬ。捕虜達は解放された。して、ラダミーズ將軍は、國王の獨り娘なる丈高く、美しきアムネリスを娶らねばならない。

埃及の空に夜の帷が下りた。今宵は王女アムネリスの結婚式が擧げられる前夜てある。丈高きアムネリスは、深い聲の僧侶ラムフキスの許へ行かねばならない。彼女は戀の神祕的な母、『面帕を蔽へる女神』に祈禱を捧げて、彼女の嬉しき結婚に對して祝福を受けねばならぬ。殿堂の內部には、神聖な燈明が燃えてゐる。眞鍮の三脚臺の中には、香煙が燻

つてゐる。莊嚴な讃歌は巨柱のそそり立つ聖所の內に反響する。戶外では、星空の下に、アイーダは彼女の戀人に逢はんがため、暗影の如く忍びやかに走つて行く。

現はれてきたのは戀人でなく、彼女の父であつた！アモナスロの底力ある、しかも優しい聲が呟いた。『アイーダよ、埃及の王女は御身の掌中にあるのだ――ラダミーズ將軍が御身を戀してゐるから！御身若し再び生まれた故郷の地を見、その森林の芳香を嗅ぎ、その谿谷を眺め、黃金の殿堂を仰いで、祖先の神々に祈らうと欲するなら、埃及の軍隊が何れの道を取つて進まうとしてゐるかを知りさへすれば足りるのだ。エシオピヤ人民は再び蜂起してゐる。將軍は御身を戀してゐるから、御身に一切のことを洩らすだらう！何を御身は躊躇するのだ？この計略に應じないといふなら、御身を捕虜の境遇から取り戾すために生命を擲つた人々は、御身を呪咀せんがために黑い深淵から立ち上がつてくるだらう！これを容れないといふなら、御身の亡き母の靈は、御身を呪咀せんがために墓から歸つてくるだらう！これを拒むといふなら、御身の父なる私は、最早、御身を子と認めないで、御身を永遠に呪ふだらう！』

ラダミーズが現はれた。アモナスロは棕櫚の影に潜んで、一切のことを洩れ聞いた。ラダミーズは國の祕密をアイーダに打明けたのだ。『貴郎の身を救ひなさい！私と共に逃れなさい！』と、彼女は戀人に囁いた。『貴郎の神々を捨てなさい。私共はエシオピヤ國の殿堂で禮拜を倶にしませう。沙漠を私共の新婚の床にしませう——沈默せる星を私共の戀の證人に立てませう。私の黑髪は貴郎を天幕の如く蔽ひ、私の眼は貴郎を支持し、私の接吻は貴郎を慰めるでせう』して、彼女が彼の身體に捲きつき、絡み附いて、彼が彼女の双脣の香を吸ひこみ、彼女の心臟の鼓動を感じてくると、ラダミーズは國も名譽も信仰も人望も打忘れてしまう。して、致命的な言葉を吐いてしまう。アモナスロは棕櫚の樹の蔭から、『占めた！』と、勝利の叫びを發する。忽然劍戟衝突の音が起つた。ラダミーズは僧侶と兵士に捕へられ、アモナスロと彼の娘は、暗に紛れて失せ去つた。

丈の高い王女アムネリスが、深い聲の僧侶に仲裁を試みても駄目であつた。ラムフキスは死刑の宣告を發した。僧侶達はラダミーズに辯解を迫つても、彼の口は沈默を守るのみであつた。彼は叛逆者として扱はれることになつた。彼は花崗岩に刻める神々の足許へ、殿堂の礎石の下へ生きながら埋められる宣告を受けた。

神々の足許に――花崗岩の山に斫り開いた穴の中に――ラダミーズの墓は作られた。岩の上には、玄武岩の髯を備へた異様な顏の神々が、數千年來坐つてゐる。彼等の石の眼は、星の徑路の變遷を目擊し、幾十代の人々は、花崗岩の足許で禮拜したのである。彼等が始めて山の玉座に就いて、その巨大な兩手を膝の上へ置いてから、河はその流れを轉じ、幾多の王朝は亡んで行つた。しかも彼等は古代埃及の技術によつて花崗岩の山から切り出されたまゝ、山と同樣に何等の變化を見せないで、依然として埃及の國土を瞰視し、遙かに殿堂の柱の間を通じて、棕櫚の影に鬱された彼方の谷を眺めてゐる。彼等の意志は、彼等の像が刻まれてゐる岩の如くに堅牢頑固である。彼等の顏には慈悲が見えない。それは神神の顏だから！

僧侶は墓の穴を塞いだ。彼等は怖ろしい聖歌を唱へた。ラダミーズは彼の側にアイーダを見出した。彼女は彼の腕に抱かれたまゝ死せんがため、暗中に忍び込んでゐたのであつた。

僧侶の跫音、聖歌の聲は消えた。墓の上の暗い處、沈默せる神々の足許には、一人の女

の泣き聲が聞こえる。それは王女アムネリスである。下では、永遠の暗黑裡に、戀人同志が戀と死に結び合つてゐる。して、永遠に冷靜なるオサイリスの神は、涙の浮かばない石の眼で、無窮の夜に眺め入つてゐる。

佛國製嗅煙草盒の一挿話

クリーオールの老紳士が、嗅煙草盒を忘れて、置いて行つた。それは彼が三十年間絕えず携帶してゐたもので、昔ルイジアナ州の植民者が、黃金の足跡を印し、熱帶の夕照のやうに富を浴びせかけ乍ら歐洲を漫遊した時代に、彼が巴里で購つたのであつた。それが私の卓上に殘してあつた。たしかに老紳士の記憶力は、衰へつつあつたのだ！

嗅煙草盒の象牙の蓋には、牧歌詩人セオクリタスの夢――眠つてゐる森の女神と多情の牧神――が刻まれてゐた。非常に巧妙な腕に成つたこの作品は、不注意に使用された三十有餘年を經た後でも、毫も損傷を蒙つてゐない。

女神は戀と酒に倦いたバッカス祭の女の如く、半ば身を橫に、一方の腕を枕として、臥

ころんでゐた。彼女の寢床は、苔の生えた小丘で、その前面は藝術的魔力によつて、ルネッサンス式渦卷浮彫となつて、貝殼細工であつた。彼女の裸身は、小丘の曲線の上に、古風な優美さを以て、象牙で彫つてあつた。

彼女の上方に、牧神が蹲んでゐた。美しく、惡戲好きの牧神は、女神がその身體の上に投げかけてゐる衣を、夏の微風の如く輕やかにもたげて、彼女の美しさに惚れ惚れと眺め入つた。しかし、彼女の滑かに磨かれた股の回りには、彼女の睡眠の守護者なる蛇が纏はつてゐた。して、蛇はその寶石の如き頭を上げて、そのきらきらする黃玉の眼を牧神に注いだ。

そこで彫刻の物語は、その象牙の章を了はつてゐる。女神のしなやかな四肢と、蛇の股輪と、伸ばせる手に堅く衣を握れる、不幸にも多情な牧神とは、忌ま忌ましくも永遠不動の姿を呈してゐる。

私はその未だ完結してゐない田園的挿話を腦裡に浮かべながら、いつとはなく眠りに陷つた。暗夜の中に、囁きの聲や夢が漲つた。それから、輝いた雲の中に、牧神と臥てゐる女神と、彼女の股に絡める黃玉の眼を有つた蛇が、また見えた。

それから、光景は鮮かに、大きくなつて熱を帶び、影像は活躍してきた。それは桃金孃の影が差してゐる、夏の風の匂へるアーケーディアの谷であつた。小川は遠く淙々の音を立て、鳥は颯々たる月桂樹の中に囀つた。樹葉の網からは、太陽の溶けた黄金が洩れ、草花はその纖弱な香爐を搖り動かして、あたりの空氣を薫らせた。私は牧神の滑かな胸が、その激しい喘ぎにつれて伸縮するのを見た。私は彼の心臓の搏動が、目に見えるやうに想像した。それから、蛇は黄玉の眼を有てる寶石の如き頭を振りたてた。

やがて牧神は脣を動かし、音をひびかせた。夏になつて鳴く鳩の鳴き聲のやうであつた。すると、それに答へる鳴き聲が、桃金孃の樹間に洩れた。して、雪の切片の如くふんわりと、輝けるやさしい眼と白い胸を有てる鳩が、牧神の側へ降りた。それから、再三鳴き聲を發して、段々遠く離れて、また鳴き聲を揚げた。

すると、蛇は戀愛の神に仕へてゐる貴い鳩に眼を注いだ。して、蛇は恰も苦熱と疲勞のため、掌に水を汲んで飲む獵夫の指間を洩れる水の如くに、するすると休止の場所から滑つて行つた。して、鳩は次第に退いて、守護の蛇を引き摺つて行つた。

すると、夏の微風に滿身を弄められ乍ら、女神は目を醒ました。して、彼女の次第に開いて行く眼は、牧神の熱心な眼に眺め入つた。彼女は驚きもせず、恐れてもゐない。して、

假睡の後の快爽な心地て、身體を伸ばし乍ら、彼女の圓くした兩腕を後へ投げ、牧神の頸を抱きしめた。それから、彼等は互に接吻した。して、鳩は樹間て鳴いた。

やがて慰撫するやうな鳩の鳴き聲よりも更にうるはしい音が、遠くからひびいた――優しい旋律の長い漣波が、戀を喚る軟風の吐息の如く起伏して、悲しげ乍らも、戀の悲みの如く心地よい音てあつた――それは森の神が笙を吹いてゐるのてあつた！

忽然、私の室の戸を敲く音が聞こえた――

『御免なさい、若い友！私は嗅煙草盒を忘れました。あゝ、ここにありましたよ。有りがたう！』――

殘念！夢は破れた。光景は復び歸らなかつた。挿話は斷片のままになつてしまつた。私は鳩と黄玉の眼の蛇は、どうなつたか知らない。

怪異な一接吻

頬と咽喉の曲線、それから解けた髪の影――黒い睫毛の絹の下に、黒く閃く眼――夏の

夢の如く輕き、ちらつと見えた夢のやうな風情――芳紀十七の優しい姿の、甘美な誘惑―女の一生では、花の蕾が綻ぶ春の時代――彈力に富んで殆ど地に觸れない足の音――四肢の上を蔽つて柔らかな輪廓を作り、しかも露はせる部分は多大で、其の他は暗示の深さ、輕くゆるやかな衣――葡萄の影差せる窓の、薄い光りの中を通り過ぎた瞬間に見えた幻、約言せば電光の一閃にちらつと見えた幻ともいふべきものではあるが、しかも、かやうな刹那こそ人生を見成る天使が、記錄に留めて置くべきものである。

＊　＊　＊

『君はそれを信じますか?』と、突然食卓の向う側から、金屬性のよく通る聲が訊ねた。

『失敬!何の話でしたかね?』と、客は俄に眼が醒めたやうな語調で問ふた。彼は夢想に耽つてゐたのを攪き亂されて心中は不平乍らも、深い興味を裝つて見せた。彼等は日本のことを話してゐたのであつた――して、客は忽ち會話の筋を取り戾して、橫濱の風呂屋のことや、そこで見た珍異な事どもを語つた。やがて彼が先刻見た幻影の思ひ出は、氣まぐれにも日本の風呂屋の追想と混じつて、彼は更に他の空想に陷つた。彼は自身の前に置かれた一椀の黑珈琲を半分啜つただけで、その消え行く風味が、卷煙草の香と交じはるま

まにして置いた。

＊　　＊　　＊

何故と云へば、幽靈の世界から音づれてきたと思はれるよりも、更に一層深く感動を與へる生きた幻影があるからである――それは瞬間、呼吸を麻痺させ、血液を巨大な重さの如く心臟の邊に集中させ、聲音を鎭めて、呟きに低下させ、咽喉に名狀し難き壓迫を感ぜしめる――結局遂に太い溜息を吐いて、苦痛を洩らすこととなり、肺に新空氣が滿たされ、暫時血管に漲る激熱も冷却してくるのである。その幻影は――日光の下で目擊されたり、或は都市の事務多忙な中心へ日常の往復に、古風な門戸から見えたりして――ただ一刹那存續するに過ぎないことがある。しかし、その刹那こそ私共の血液の流れを轉換させ、意志の手綱を緩めさせ、霎時私共を現實世界に對して聾となり、啞となり、盲とならしめる力を有つてゐる。私共の全身全心、彼女に觸れ、彼女に接吻し、彼女を嚙まうといふ漠然たる無聲無言の欲望に奪はれ、捉へられるのである。

＊　　＊　　＊

西の方の檸檬色に燃えた光りは褪めた。青は紫となつた。して、紫の中へ、星の偉大なる拱門が輝いて、女の乳の如く白い色の火の花が、數限りなく咲き出した。一人の西班牙の士官は、會話の途切れた間、ギターを奏て、退屈を紛らした。すると、すべての人々の目は彼に注がれ、彼は忽然その樂器から神經的な、熱烈て、半ば野蠻的な西班牙舞踊の旋律を絞り出した。暫くの間、一座の人々は全然凝乎として動かずに、扇子を使ふことをも止め、息を抑へて傾聽した。やがて、二人の姿が、葡萄の蔓の絡める戶口から、滑つて入つて、座に就いた。その一人は數時間前の幻影であつた。彼女はその黑い肌に南方の若々しい光澤を帶び、半熱帶的優美の型を呈してゐた。他の一人は、その客が長い經歷に於て見た中では、最も醜い小さな墨西哥婦人だといふ印象を直に彼に與へた。

　彼女は支那人製作の佛陀の像の如く異樣て、身の丈は十歲の少女にも及ばないが、頗る幅の廣い骨骼を有つてゐた。皮膚は新しい銅の赭色を帶び、額は大きく、不快に高く聳え、鼻は扁平て、顴骨は頗る廣く、また突起してゐた。眼は小さく、深く窪んで、眞珠の如く灰色を呈し、ただ彼女の口だけは小さく、情熱的て、尖つて、やや厚い脣を有し、彼女の顏の平凡粗硬を繕つてゐた。彼女はがつしりした體格てはあるが、圓々と肥つてゐるとか、或は肉附きがよいといふ趣きがなく、滿身悉く神經と腱てある墨西哥の小さな牝駒の姿

を有つてゐた。二人の女は、白衣を着てゐた。して、小さな墨西哥女の服は、非常に短くて、綺麗な足と恰好のよい踝を露はしてゐた。

*

*

*

その夜の集ひに於けるかの佳人の姿からは、假令どんな女が現はれても、客の眼を他に轉ぜしめる事は不可能であつたらう。しかし、この小さな墨西哥女があまりに醜く、且つあまりに可笑しげなので、彼はその異樣な細い顏から、眼を放すことができなかつた。彼は彼女の微笑が、美しくなくても、心地よいといふこと、齒は磁器の如く白いといふこと、また彼女の顏には力強く、性質の好い獨創性のあること、彼女の無骨さは、彼女がこの一座の中で最も巧みな踊り手であることから見ても、ただ皮相に過ぎないといふことを、看破せざるを得なかつた。かの佳人の動作も、この女の動作と比べては重げにさへ見受けられた。やがて彼の驚いたことは、この異樣な女が、美麗と優雅を有たなくても人を魅惑し、技巧を有たずに婀娜者の役を演じ得ることであつた。また彼女の聲には可愛らしい鳥のやうな調子のあること、それから、西班牙の士官が彼女に對して非常な興味を有つてゐて、その夜、成るべく彼女を獨占しようと決心してゐることを彼は發見した。して、その事に

ついて、客は奇異にも心惱ましく感じた。彼はこれまで見た中で、彼女は最も醜い異樣な女であると考へて、自ら慰安を求めようとした。しかし、不思議にもその慰安は得られなかつた。『明日はホンドユラスへ歸つて行くのだ。彼地へ行つたなら、女のことは餘り氣にかかるまい』と彼は思つた。

＊　＊　＊

『その接吻には、私は反對を唱へます』と、いたづら好きな主人が大聲で叫んだ。それは今しも、向うの方の窓の側で起こつた事を明らかに指したのであつた。『獨占は嚴禁です。私達一同の權利と感情は、正當なる考慮の中に入れられねばなりません』。熱狂的な拍手喝采が起こつた。一座の人々は悉く世界の放浪者なのだ——今日は此處、明日は彼處！——明晩の月が昇らぬうちに、西と東に散つてゐるだらう——女達は一座のすべての人々に對して、無差別に接吻を施すべき筈だ。

かくて別れの接吻は、葡萄の卷鬚が、纏に解けた女の毛髮の如くに、垂れかかつてゐる大きな門の下で行はれた。

かの佳人の唇は、客の壓迫から畏縮した――それは一種の幻のやうな空しき接吻に了はつた。小さな墨西哥女は、趾頭で立ち乍ら、叫んで客に呼びかけ、彼の頸の周圍に兩腕を投げた。抱擁を受けた者の外、一同が笑つた。彼は電氣に打たれたやうな激情の衝動を蒙つた。聲も言葉も出なくなつた。して、心臓の鼓搏が停まつたやうに思はれた。

その洋紅色の唇頭は、一種獨得の生命を有するやうに見えた。若い血管よりも、もつと熔岩的濕熱のものによつて、赤く染められてゐるやうであつた。それは不可抗的に、しかも、優しく嚙み附き、且つ血を吸ひとるやうな動作――恰も熱帶の森林で眠つてる旅人の生命を吸ひとる大蝙蝠の動作――を以て、彼の口に迫つた。幾ら確かり握りしめても、骨のない肉の力で手の中をするすると滑つて逃げる美しい蛇のやうな粘着的接觸の中には、得も云はれぬ一種の濕ひと冷たさとしなやかさがあつた。進んでそれに接吻を施すことはできなかつた。何故なら、それに提供せる口は、催眠術の支配を蒙るからである。その接觸は瞬間血液を痲痺させた。しかし忽然、その停滯せる血流に、熱帶の火山の火の如くに熄えざる火を滿たせた。だから、心臓は目を醒まして、それを歡迎するため、寢床から起

※　　※　　※

き上がり、その人の全生命は咽喉まで上つて、喉頭を脱出しようと努力して、却つて窒息に陷つてしまう。實際、これは貧弱な敍述てあるが、かかる接吻はどうして寫すことがてきよう？

※　　※　　※

六箇月の後、客はホンドユラスから戻つてきた。して、昔の宿の主人に小さくはあるが、目方の重い嚢を預けた、それから、彼はその老主人を私かに呼び、長い間、熱心に、情を籠めて、さながら僧侶に懺悔をするやうに物語つた。

主人はわつと人の好い笑ひを發した。『あの不埒な女――あの醜い小さな不埒な女め！あの女は貴君をも、狂氣にしたのですね。貴君一人てはありませんよ。それにしても、ただ一回の接吻に惹かれて、ここへ戻つてくるといふのは！しかも其の上に、結局時期が遲かつたといふのは、何といふお氣の毒なこと！あの女は去つて行きましたよ。何處へ行つたのか、知つてゐるものはありません。あんな女は渡り鳥なのです。何處を探しても見當たらない內に、また案外な場合て出逢ふこともあります。だが、貴君は遲かつたのです。あの女はギターの彈奏者と結婚しましたよ』

鳥と少女

突然木蓮の樹間から、玲瓏たる音が洩れてきた。夜鶯(ナイチンゲール)よりも烈しい情熱を籠めて、夜の空氣の甘美さよりも猶ほ更に人を恍惚たらしめるやうな旋律であつた――それは伴侶を呼ぶ物眞似鳥の聲であつた。

『何といふ優美な聲でせう！』と、芳ばしい庭の戸口に立ち、子供のやうに無邪氣な信頼を以て、接吻を受けるため口を差出し乍ら、少女は呟いた。

『私に取つては、君の聲ほどに美しくはないよ』と、彼はその脣を彼女の脣に近づけ、その眼は、彼女の絹の如き黒い睫毛の中から噴射する光りを覗き乍ら呟いた。

小さなクリーオールの女は、嬉しさうに優しく笑つた。『西部地方にも、こんな鳥はゐる？』と、少女は訊ねた。

『籠に飼つたのはゐるよ』と、彼は云つた。『しかし、非常に稀だ。立派に唄ふのは、五百弗もするのがある。君が小さな物眞似鳥であつたならよいのだが！』

『何故？』
『明日私が君を籠に入れて携帶して行くことができるから』
『さうして、私を五百弗に賣る――？』（接吻が此冗談な問ひの文句を消してしまつた）
『そんな莫迦なこと！』
『可哀相な籠の鳥が、唄ふのをあなたが聽いたなら、今夜が思ひ出されるでせうね』
『しかし、私がこれから行く處にはゐないよ。彼地は全然未開の野で、粗末な木造の家や、亂暴な人間だけだ――飼鳥などはないのだ――猫さへゐない』
『では、そんな場處で小鳥をどうするんです？みんなが笑つてよ』
『さうぢやないと思ふ。亂暴な連中は小さな可愛い鳥を愛するよ』
『小さな可愛い鳥てすつて！』
『さうだよ、君のやうなのを――愛し過ぎるよ』
『愛し過ぎる？』
『さういふ積りてはなかつた』
『でも、あなたはさう仰しやつたわ』
『私が君の眼に覗き込んでゐる時は、何をいつてゐるか知らないよ』

『冗談仰しやること！』

その夕の數時間の音樂と匂ひが、長い旅の間、始終斷片の夢となつて彼に現はれた――河を渡つたり、軌道の上を迅速に馳せたりする時、途切れ勝ちな假睡の中に現はれた。松の黃色の薪火がちらちらする處で、荷物を積むがちやがちやの轟音――歡迎や警戒を表する汽笛の聲――運轉士や水夫の聲――停車驛の怒號――油臭い汗をかく機關車の重い空氣の中で、小荷物のごろごろする音――車掌の調べる聲――停車場を報ずる聲――こんなものに彼は夢を破られて、最後に凸凹多き路上をがたがたする驛馬車に搖られ、微紅色を帶びた土地に、巨大な黃色の野花が咲いてゐる處へ着いた。

さうする内に、月日が經つた。して、一本筋の、白砂のきらきらする西部の村道は、夏の太陽の下に燃えてゐた。折々、長靴を穿き、拍車を着け、武裝した郵便配達人が、馬に乘つてやつて來た。いつも一個の小さな繻子のやうな光澤ある封筒を齎した。それはニュー・オーリアンズ市の消印を帶びて、木蓮の花のやうな香が微かに匂つてゐた。

『女のやうな匂ひがする――これは』と、日に燒けた唐金色の騎者が、鷹の如き大きな眼に、非常に愉快な輝きを見せて、纖麗な郵便物を渡し乍ら、唸ることもあつた。彼の眼

は亞米利加印度の塚の奇異な輪廓や、危險を報ずる遠方の恐ろしい火が螺旋狀に揚がるのや、死骸の存在を證する禿鷹の舞ひ昇るのを注視する結果、猛烈に鋭くなつたのである。

或る配達の日のこと、彼は技師に對する手紙を齎さなかつた。『今週、彼女は貴君へ手紙を送ることを忘れたのですよ』と、彼は訊問するやうな眼付の顔に向つて答へた。して、そのまま彼は馬を回らし、樹脂の多い森を通つて、迂餘曲折せる徑路を辿つて、野牛の骸骨が日光に曝されてゐる原野へ出た。かやうに、西部の空が夕陽に茜さす頃、幾たびも彼は去來しただけで、待ち受けてゐる顔に對して何等の微笑をも持つて來なかつた。

『今週もまた忘れてゐますよ、技師さん』

すると、或る生温い夜（一八――年八月二十四日）、香ばしい森の蔭から、奇妙にも異國的な調子で、『可愛い、可愛い、可愛い！』と歌ふ鳥の音がひびいた――それから、銀のやうな旋律が瀑の如く流れた――それから、長い、澄んだ、熱烈な叫び聲！――つぎには、深い愛撫するやうな豊富な音が漣波を打つて、さながら戀愛の倦怠と憂鬱を笑ひに紛らさうとするやうであつた。人々は起きて、月下へ出てて耳を傾けた。この聲音は、何となく恐ろしく、また優しくも、幽靈に因縁があるやうに思はれた。

『これは何だらう？』と、白い道路の遙かに上の方で、音調が顫へた時、坑夫が囁いた。

『あれは物眞似鳥だよ』と、バルメットー樹や棕櫚の生える土地に棲んでゐた一人の坑夫が答へた。

して、技師が耳を澄ましてゐると、南方のもつと光線の明かるい土地の花の香が、浮かんでくるやうに思はれた――西部地方の山々は、雲が空から消える如くに消え失せた。して、彼の眼前に、今一度遠い都會の立派な町が展開して、墨西哥銀の如き南方の月光が輝いた――再び彼は蜘蛛の巣の如くに、星の空を掠めてゐる帆檣の索具や、川の三日月形の彎曲に沿つて、列を成して眠つてゐる白い船舶や、葡萄の花環を戴き、或は芭蕉に蔽はれてゐる小舍や、西班牙苔に包まれて、夢みてゐるやうな森などを見た。

『今度は貴君へ持つてきましたよ』と、數週の後、郵便配達人が來ていつた。彼の唐金色の顏は、夕燒の色を浴びて凄く見えた。彼はこの日『技師さん』とも云はなかつた。また微笑をも洩らさなかつた。封筒はいつもより大きく、宛名の筆蹟は男のものであつた。その中には、ただつぎの文句が認めてあつた――

親愛なる――君。

オルタンスが死んだ。二十四日の夜、突然であつた。すぐ歸つて來給へ。

エス――

或る扇子の物語

どうもひどい暑さだ。實際的な、眞面目なことは、書くに堪へない――夢想に耽ることにしよう。

この間のこと、市の電車の中で、私は一本の小さな扇子を拾つた――それは日本製のもので、扇面には、上に蒼空が懸かつて、下方の白紙には、怪異な簇葉が鮮かに浮き出てゐた。それから、戀愛の神の如くに紅い、不思議な雲や、滅亡してしまつた鳥類をキューヴィエー（譯注）の技術で復活させたと思はれるやうな、見馴れぬ鳥が描いてあつた。日本人は彼等の色彩と色合の對照に關する優れた趣味を、何處から獲たのだらうか？――彼等の天空は、かくまで神々しくも青いだらうか？――彼等の夕照の光景は、かくまで處女の如く紅

いだらうか？——彼等の乙女の胸と、彼等の山岳の嶝々たる峰は、かくまでに乳白なのだらうか？

　しかしその神仙界の如き色彩よりも、一層强い暗示力を有つてゐるのは、觸れ難く、見ることのできない、何とも名狀し得られないもので、しかも妖精の如く扇子に纏はつてゐて、逸樂的な氣分に人を魅惑する、優しい微かな匂ひであつた——いたづらな芳香——揉るやうな、擽るやうな芳香——神託を語る僧を醉はせる、神聖な樹膠の薫香の如くに靈感的な香氣であつた。讀者は嘗て女の髮のしなやかな生ける絹で蔽はれた枕の上に、手を載せたことがあるだらうか？實際、髮の毛の人を心醉せしめる香氣には、忘れ難き趣きがある。私共が極樂界の神々しい香を想像しようと試みるなら、このなよやかで、柔靭で、それから圓味のある柔らかさ、快爽な冷かさ、鳩の如き優雅、面白い伸縮自在性を有てる——ヴエニスの葡萄酒杯の如く、すらりとした優美と鵠の頸の如きたをやかさを偲ばせる——青春の香を除いては、譬ふべきものはない。

　その微かな香は、自然に空想を挑發した。その扇子を眺めると、殆ど手と腕の樣子、幻の齒、指輪の光り、袖口の飾り紐の閃きを喚起することができた。しかし、それ以上は馱

目てあつた。それでも、香を分析することができるやうに思はれた。また、將來に於ては、私共が見たことのない人々を、それぞれ獨得の香によつて描寫し得られるやうにも思はれた。恰も『亞剌比亞夜話』に、或る男が、見たことのない不具な駱駝と、その積み荷を詳しく語つてゐるやうに。

香に薄い色と濃い色の兩型がある。白薔薇は美しいが、紅いのが更に美しい。青ざめた花の匂ひは强烈である。恰も月下香（チウバローズ）の强い匂ひが、快感に飽かせるやうなものである。しかし深い色の花は情熱的で、飽滿嫌厭を生ぜしめない。慾望を抑へて、却つてますますそれを燃え立たせる。

紅い色の中に宿れる、いかなる薔薇の心にも勝さる甘美な人間の花がある。濃い色の香には、鋭い、辛辣な、激劇的な、熱帶的の美しさがある。薄い色の匂ひは、支那の黃薔薇の如く、微弱に過ぎないことがある。或はまた白色の素馨花の如く猛烈に人を恍惚たらしめる――暫時は非常に魅惑力が旺盛であるが、終夜寢室に置くに堪へない。睡眠者を失神させるから。

さて、この扇子の香は、薄い色の香ではなかつた――それは新しく刈つた秋の乾草の如

くに鋭く、甘美で、波の泡の上を吹き渡る新鮮な嵐の如く快爽であつた。これと比べたら、乳香や甘松香や桂皮や貿易商が齎す一切の香料は何でもなかつた。若いシュラミテスの衣裳か、シェイーバの女王の囁く衣の香を除いては、それと比べ得るものがあるだらうか？して、この二人は、色の濃い型の女であつた。

生きた香の强さは、香を發する生活力の比較的深刻さを證する。甘美な烈しい匂ひは、花の生氣旺盛を語る。色の濃い型の女の生活力の深刻さは、大抵神經の緻捷とほつそりした優美に發露してゐる――それは若くて、すらりとした、品のよい女で、黑眼黑髮、肌の色は多分、西班牙の橄欖のやうだらう。こんなやうな女が、水曜日の朝、睡氣を催すやうな暑さに際して、市の電車の第――號の中で、小さな日本製の扇子を紛失したのであらうか？

譯者註　キユーヴイエー（一七六九――一八三二年）は、佛國の博物學の大家。殊に解剖學と古生物學に造詣が深かつた。

ジプシイの話

夏の日はシャールメーン大王の壯麗を偲ばせるやうな、紫と黄金色の派手やかな光りの中に葬られてゐた。黒い夜の空には、星の寶石を列ねた帶が輝いた。若い月はまだ東方に、その回敎國[譯者註一]の旗の鎌角を擡げてゐなかつた。私達は眠つてゐる人の胸の如く、輕く浮沈する、生溫い浪の上に船を駛せてゐた。南から吹く風が、檸檬の色の睡さうな香を送つてきた。して、私達が長いうねりの上に搖られてゐる時、枸櫞の樹間に隱見する黄色の燈火は、ジョセフが夢みた頷首[譯者註二]する星のやうであつた。それよりも遙かの彼方に、巨　の燈明臺が、その血走つた、サイクロープス[譯者註三]の如き隻眼を以て私達を睥睨して、水先案内人の顏を石榴の如くに紅い光りで染めた。折々海は戀ひしさうに船の滑かな脇腹を嘗めて、鋭い音を立てた。して、亡靈のやうな火が私達の舳首の邊で戯れた。ギターを彈く男が、綱を卷いた上に坐つて、西班牙アンダルーシャ地方のジプシーがソレアリヤスと名づけてゐる、單調で面白い小唄の曲を奏で乍ら、卽興の歌をうたつた。彼が獨りて唄つた豊富な聲調は、今

猶ほ私の記憶の中で顫動する。殆どかの星光闌干たる夏の空を仰ぎ乍ら、匂へる海に船を浮かべた時と同じやうに。

何故彼は身の上噺を私にしたのか、私にはわからない。私はただ私達の心が、互に理解し合つたことを知つてゐるだけである。

『私の母のことは』と、彼はいつた。『私の幼い時には、あまり知らなかつた。私は彼女をただぼんやり夢の如く覺えてゐる。また恐らくは、夢の中に於てのみ覺えてゐるのだらう。何故といふに、私達の幼年時代の歳月は、非常に夢と混淆してゐるから、記憶を通じて陰影と本體の分別をすることはできないからである。しかし、その當時、後年に及んでやつと私にわかつた言葉を語る聲が、始終私の耳元につき纏つてゐた。また私が接吻したことの覺えもない顔が、いつも私の眼前に浮かんで見えた。

『晴れやかな、色の黑い、意志がしつかりして、敏感らしい顔に、くつきりした三日月形の眉と、特別大きな、黑い液體のやうな眼を有つた丈高い女が、眠つてゐる私の上に屈んで、覗いてゐた。太い、輝ける眼の、優しさの中にも、何となく猛々しい樣子があつた

——それは獵夫が雲の上の猛禽の巣へ攀ぢ登る時、たけり狂ふ鳥の眼に見出す眼付であつた。して、この黑い夢の如き容貌は、奇異な愛と恐怖を私の心に滿たせた。黑玉石の長い漣を打つて、彼女の顳顬からうしろへ流れてゐる髮は、新月の如く彎曲して、輝ける、幅の廣い銀の櫛で留めてあつた。

『して、遂に夢の姿が現はれてきて、半ば猛々しい、慈愛ある眼が、夜間私を覗き込む時、私は眼が醒め、星の下へ出て、啜り泣きをするのであつた。

『私は非常な不安に捉へられ、脈管は新たに熱血の鼓動を傳へた。して、絶えずわからぬ言葉を語る奇異な聲の、笛の如き調子を耳にした。しかし、それは遙かの遠方から聞こえて、途切れた言葉が、行衛定まらぬ風に運ばれるやうであつた。

『太洋の嵐は、私の耳に浪の歌——いかなる音樂家も學び得ないやうな、深遠な讃頌を誦する波の歌——誰れ人の耳も詞章を識別し得ないやうな神祕な讃歌——この世界よりも古く、月よりも更に凄い魔法的な讃歌——をうたつて聽かせた。

『森林の嵐は、芳ばしい樹膠の涙の香や、流水の哀哭よりも美はしい鳥の聲や、搖れる影の囁きや、松籟が奏でる豪壯な竪琴の歌や、花の空幻な靈や、榊の木を戀愛を以て絞め殺す夢婬女精（インキュバス）の蔓草の祕事を、私に運んできた。

「また、刺すやうな冷たい嵐が、絶壁の深淵から私の方へ吹いてきた。開闢以來鳥の足がその雪白の處女地を踏んだこともない峰からも吹いてきた。して、その嵐は、電光が嵐の羽搏きと交錯する山岳の自由をうたつて、古代北歐人風の短音曲を唄つた。それから、この嵐と共に、私が夢に見た眼の如く、猛々しく且つ美しい眼を有し、高く私の上方に遊弋してゐる鳥の影も現はれてきた。

「そこで、私は嵐や、浪や、絶えず世界の回轉と共に廻つてゐる鳥を、非常に羨望する心になつた。夜ごと夜ごと、半ば猛々しく、半ば優しい、大きな眼が、私の睡眠の中にちらちらした。幻の風が私に呼びかけた、それから、影のやうな海が、泡の斑紋を帯びた唇から、オーディンの歌の如くに奇異な歌をうたつた。

「して、私は駱駝が都會を嫌惡するやうに、都會を嫌つた。遠く沙漠の黄色の縁端に、回々教の天國の圓天井を指せる髑髏の如く白い高尖塔を望見する時、駱駝が鳴喇し呻吟するやうに。

「また、私は交通の雜遝と黄金に對する競爭の喧囂、熱鬧の街路に影さす宮殿、醒覺奔

走する足の音、聳立せる煙突の黑い吐息、それから、永久に眞鍮の筋肉を以て働き、蒸氣と鋼鐵の心臟を以て喘ぐ巨大な機關を嫌つた。

『ただ私は夜の眼の星と、私の心に絶えず浮かんでくる女の眼、起伏せる原野の靜けさ、人跡未だ到らざる森林の囁き、飛ぶ鳥と、走る雲の影、上がつたり下がつたりする綠玉石の如き浪、小流が銀のやうな聲に咽ぶ音、太洋が永遠に星に向つて唄はねばならぬ六歩句の偉大なる讃頌の雷轟を愛した。

『一度、して、唯だ一度だけ、私は霧深き眠りの浪の上に浮かんできた暗い美しい夢について、私の父に話したことがある。一度、して、唯だ一度だけであつた。その時、私は父の顏が、骸骨の面よりも白くなるのを見た。

『富と愉快に圍まれながらも、私は黃金の鳥籠の中の飼鳥の如く感じた。私は書物が好きであつた。それは天と海の祕密、太陽の錬金術、四季の魔法、私共が絶えず航海して行からと憧憬し乍ら、決して見ることのできない異域の驚異を、書物が私に敎へたからばかりであつた。しかし、私は夜間、奔放な乘馬の遠征を試みたり、月によつて銀の接吻を受

けてゐる波浪と長く鬪つたり、また、野鳩が伴侶を戀ひして唄ひ乍ら、樹影から樹影へと徘徊して行く森林が吐く、麝香の如き氣息を吸つたりすることを愛した。それから、いつも私の目に浮かんでゐる鷹の如き顏の奇異な美しさが、私共の家へ訪ねてくる、丈高い、象牙と黃金の像の如く美しい金髮の乙女達に對して、私の心を冷かならしめた。

『屢〻東天が紅くなると、逸早く私は落ち附かぬ眠りから起き上がつて、鏡に向つた。それは私の夢に見た顏の眼と、私自身の眼との間に、或る祕密な緣故と類似を見出さうと焦慮したからであつた。それから、屢〻私は父と同一でない、他の人種の血液が、私の脈管の中を流れてゐるやうに感じた。

『私は鳥が芳ばしい南方へ飛んで行くのを見た。私は海鷗が、一層濕かな海岸を求めて去るのを注視した。私は鷹が自由なのを呪つた。私は文明の束縛に對する代價である富を呪つた。私の本來の民族でない人々の間に、私が孤立の生活を送つてゐる報酬としての娛樂を私は呪つた。

『「私が雲であつたら」と、私は叫んだ。「空虛な雲と共にいつまでも漂つて行くだらう！私が浪であつたら、太洋から太洋へと移つて、幾千の荒礒の上に、泡沫と碎けて私の自由を唄はうものを！私は鷹にでもなつて見たい。永遠の太陽の顏を覗き込むことができ

るだらうから！」

『やがて私の生涯の夏がきて、自由に對する、熱狂的な渴望を齎した――嵐や浪や鳥の如き自由を羨む心と、私の脈管に熱を湧かせた奔放な血を有てる、未知の人種に對する漠然たる愛慕の念は、遂に星の見えない或る夕、永久に私をして家から脫奔せしめた。

『私はたうとう森の中で假睡した。目を醒ますと、上の方で、綠玉石の如き木立の中に鳥が囀つてゐた。棕櫚の如くしなやかな、埃及人の如く黑い、丈高い娘が、私を凝視してゐた。私の心臟は殆ど鼓動が止まつた。私は彼女の黑い顏の野生的な美しさの中に、始終私に目につき纏つてゐた顏の面影を認めた。それから、彼女の眼の中には、私の夢に現はれる眼を認めた。薄く展べた黃金の環が、彼女の兩耳に着いてゐた。彼女の裼色の腕と足は露はれてゐた。彼女は微笑を洩らさないで、彼女の太い熱烈な眼を私の上に注ぎ乍ら、奇異な言葉で私に挨拶した。遠い印度の如く不思議であつた――しかし、全然不思議ではなかつた。何故なら、その野蠻的な音を聽くと共に、永く訪問されなかつた記憶の暗い室が、戶を開いて、忘れられてゐた事を顯はしたからである。その言葉は、ずつと、多年の間、夢の中で私に語られてゐた言葉なのであつた。すると、彼女は私が言葉には出さな

いが、理解したことを見て取つて、遙か森の向うに見える天幕と、徐々と旋回して立ち騰る煙を指した。

「何處へでも、私達の行く處へ、隨いて行くのですよ」と、彼女は呟いた。「あなたは私達の同族なのです。あなたの脈管を通つてゐる血は、また私の血です。私達は久しい間、毎年私達に非常な愛慕の心が起こる夏の頃　あなたを待つて、見戍つてゐました。何故と云へば、あなたの母は、私達と同一の人種であつたから、その乳を吸つたあなたは、將來白人の人達と一緒に暮らして行きにくいからです。天が私達の天幕です。鳥は南へ北へと、私達の足を案内し、星は西へ東へと、私達を導きます。私達は、東方の國々を流浪してゐた際にも、あなたの噂を探してゐました。私達の血緣は酒よりも強く、黄金よりも貴いのです。あなたの平安のために、富や娯樂や名譽や都會生活を捨てなさい。あなたの妹になつてあげますから」

『して、私は彼女に接吻して、彼女の民族——東方に於ける最古の世界的漂泊者——の天幕へと、彼女に隨いて行つた』

譯者註一　土耳古の國旗には新月が描いてある。

譯者註二　『ヨセフ又一つの夢をみてこれを兄弟に述べていひけるは、我また夢をみたるに、日と月と十

譯者註三　希臘神話にある片目の巨人。

唯だ一個の丸藥函

ネブカドネッツザーの熔爐の如く、太陽は七倍の暑さを以て燃えてゐるやうに思はれた。空は鋼鐵が火のために脹れる際の如く輝いた。坩堝の上の光りの如き黃色の靄が、街頭を鍍金してゐた。大きな樹木も庭園にうな垂れ、弱つた草花は、乾ける粘土の上に頭を載せてゐた。風は死んでゐた。黃熱病が死亡者の發散する臭氣を以て市中を滿たした。墓地のやうな靜けさが、土地の上に蔽ひ塞がつた。商賣は睡眠狀態に陷り、富の機關の、鐵の筋肉や眞鍮の骨は弛んで、鋼鐵の肺は喘ぎを止めた。船舶は白帆を擴げて去つてしまつた。埠頭場は荒凉に歸し、紡績機械はその偉力ある咀嚼を中止して、最早巨人の如き溜息を發しなかつた。

※　※　＊

英國人なる製材所長は、流石に民族特有の頑固な勇氣を發揮して、最後まで彼の地位に踏み留まつてゐたが、彼もまた遂に熱病の襲ふ處となつた。彼の耳には激流の突進するやうな音がひびき、彼の眼の前は眞暗であつた。看護婦の囁き、醫師の指圖する言葉、コップや匙の音、藥を注ぐときに泡立つ音、そつと戸を開閉する音、趾頭で出入する人の物音――そんなものは最早彼の耳にも聞こえもせず、記憶にも殘らなかつた。彼の目に留まつた最後の物は、寢臺の側の小さな卓子の上に載せられた、一個の小さな白と赤で表裝された丸藥入れの函であつた。

半意識的苦痛の暗い間合毎に、過去がぼんやりした光景となつて彼に現はれた――股や腰の邊の苦痛は、多年の昔、彼が毀はれた足場から、危い墜落をした折、感じたやうな激烈さであつた。耳の中の急流の音は、次第に一層鋭い音になつた――機械の唸る音の如く、見えないほど迅速な齒を以て、芳ばしい匂ひの木材を嚙じりつつ回轉する鋸の音のやうであつた。糸杉や松や胡桃や樫などの材木の香が、彼の鼻孔へ漂つてくるやうに思はれた、――鉋で平らに削つたり、斜に切つたり、槌で打つたり、磨いたりする音、職工の低い笑

聲、高声の命令、急ぐ跫音、就中、飢ゑたる木挽き機械の鋭い、顫動を帯びた、ごろごろと響く音や、數百個の手を有する機關の動搖する轟音に伴なつて。

＊　＊　＊

彼は再び、樹脂に富める木材の匂ひの鮮かな、小さい事務所で、高い卓子に向つて坐つてゐた。卓子の細い脚は、機關の心臟の鼓動につれて震るへた。非常に澤山の事務が堆積してゐるやうに思はれた――紛糾せる契約を解決したり――莫大の見積りを算出したり――ひどい誤算を訂正したり――甚だしい失策を救濟したり――すばらしい努力を發揮して、心配さうな、もどかしげな顔で待つてゐる世間の人々に、直面せねばならぬやうに考へられた。數字や作圖――建物の正面の圖案――階段に關する數學上の計算――屋根のむつかしい角度――廊下の迷惑極まる設計――が、彼の眼前で目が舞ふやうに囘轉した。作圖が奇怪な憎惡心を以て形狀を更へるやうに見えた――正方形は並行四邊形に伸びた。それから扭れて長菱形となつた――圓形は愚弄的にも零の記號となつた――三角形は二つ相重なつて、恰も魔法遣ひの六つの尖頭を有する星の如くになつた。それから、數字は作圖と混じた。蛇の如き彈力性を以て勝手氣儘に延長して行つて、どうしても總計を算出すること

ができないやうな不思議な數字が、桁また桁と相連續、、加減乘除の混亂せる符號が、狂氣的な行列をなして、彼の前で躍つた。して、心配さうな顔の人々が、益〻もどかしげに見戍つてゐた。

※　　　※　　　※

一切のものが、眞暗になつた。股と腰の容赦なき苦痛が、熱病の鋭い意識と共に戻つてきた。堪へ難き暑さ、頭蓋骨を割くやうな頭痛、毛布の重さ、痛ましい虚脱がまた感ぜられた。して、卓上にある極めて小さな丸薬入れの函の記憶がまた現はれた。すると、まだ他の丸薬函があるやうに思はれた――三個！九個！二十七個！八十一個！百六十二個！

※　　　※　　　※

彼は燃える如き日光の下、白く塗つた墓碑の目を眩ますやうな閃光を浴び乍ら、墓地の中を逍遙してゐるやうに思はれた。墓碑の漆喰が落ちて、煉瓦の骨組みは處々癩病の如き斑紋を呈して露はれてゐた。逍遙しながら彼は、深い壁へ達した。その壁には、礎から頂きまで、層列を成して、幾千の死者のため、塚窖が作つてあつた。して、その中に一つ空

虛な窖——眞暗な空處——があつた。奇異にも彼自身と同一の名が、そこに刻まれてゐた。やがて、非常な疲勞と衰弱が彼を襲つた。すると、また疼痛が始まつて、彼の心を再び病室の暑熱と暗黑に立返らせた。

＊　＊　＊

これは死といふものではあるまいと、彼は思つた——餘りに疲れてゐて、死ぬることとさへできないのだ！しかし人々は、彼を壁間の空處へ納めるだらう！——それでもよろしい。抵抗は試みない。怖はい感じはせぬ。彼は百年間でも、安心してそこに休むことができるだらう。彼は何處かに錐を有つてゐた！人々はそれを携へて行くことを許すだらう、——彼は壁に細い穴を穿つことができるだらう。さうすれば、一筋の日光が毎日彼の休息所へ射し込むだらう。また周圍の世界の聲が聞こえるだらう。それでも多分、彼はその暗い濕つぽい場處を去ることは決してできないだらう。これほど疲勞してゐるのだから、どうもさうだらう。すると、先づ整理して置かねばならぬことが、非常に澤山あつた。見積りや設計や請負契約があつた。して、誰れもそれらの事務を判別することは出來ないだらう。その結果、萬事非常な混亂の裡に放置されるだらう！それから、暫く彼は思考することは

出來ないかも知れない。これまで蓄積し來たつた一切の知識が、無に歸するかも知れない。誰れも葬られてからは、餘り物を考へたり、語つたりすることは不可能となるだらう。それから、彼はまた丸藥函――百六十二個の極めて小さな丸藥函――のことを考へた。否、正しく三百六十六個あつた！多分それは閏年であつたからだらう。

※　　※　　※

早速萬事を處理せねばならぬ！早速！丸藥函でもよろしい。彼はその中へ彼の考――見積りの記憶、設計の修正、階段の建築者への指圖、請負師との契約、材木商への注文、テキサス及びミシシッピー地方の代理店への命令、社長への傳言、某々商會への辯解――を吹き込んで、緊かり閉めて置かう。やがて、一個づつの小さな函は、それぞれ記憶の寄託物を納めてから、炎の如く輕くなり、泡の如く浮いて、床と天井の中間まで、立ち騰るやうに思はれた。突然彼は非常な心配を感じた――窓は悉く開かれてゐた。して、もし戸が開いたら、氣流が起こつて、すべてこれ等の小さな考へが浮かんで逃げるだらう！しかも彼は立つて、戸を鎖ざすことができない！函はすべて、彼の頭上で舞つてゐて、恰も太陽の光線の中に浮遊する塵のやうであつた。今では數へ切れないほど澤山であつた。看護

婦が外から入つて來なければよいが！……すると、一切また暗黒に歸した――堅實な黒檀のやうな、重く、壓し潰すやうな、黒い、空漠たる、普遍的な暗黒……

萬事窮す！殘酷にも戸が開かれて、また亂暴に、大きな音を立てて閉められた……　黄色の電光が彼の眼の前を旋轉した……數多き丸薬函は無くなつた！しかし、その心配さうな、親切な顏は、醫者の顏ではないだらうか？燃えるやうな暑い日は暮れてゐた。病人は開かれた窓の方へ眼を向けて、夜の窮まりなき紫色と、星の乳白色の花を見た。して、彼は言葉を發しようと努めたが、駄目であつた。卓子を照らせる、暈かしたランプの光りは、晝間は血の如く赤く、鬱金色の照明の下では洋紅色を呈せる、一個の小さな物を照らした。そこには唯だ一個の丸薬函があつた。

赤猫

その赤猫は恰も小さな赤い獅子のやうに見えたてあらうが、ただその耳が非常に巨大なので、中世紀の彫刻にある、翼の生えた惡魔のやうな頭を有つてゐた。それはビーフステ

ーキと蛬蟀(こほろぎ)、毛蟲と魚肉、雞肉と蝶、蜻蛉と燒羊肉、細切(こまぎ)れ肉と蜣螂(せんちこがね)、甲蟲と豚の足、蟹と蜘蛛、蛾と落し卵料理、牡蠣と蚯蚓、ハムと鼷鼠、鼠とライス・プディングなど、何でも食べた——たうとうその腹はノアの方舟(はこぶね)の如くであつた。こんな榮養のため、體力が加はつたので、クリーオール人の古い屋敷の内に棲む古老の猫共を征服し、且つ自分と同じい雌の、綺麗な赤樺色の小猫の保護をも引受けるに至つた。この小猫は極めて弱々しくて、自衞の力もなく、姉猫が、この屋敷の暗い庭園に改革を勵行するまでは、毎夜殘酷な目に逢つてゐた。赤猫はさほど大きくはなかつたが、嚴疊で、また猿よりも敏速であつた。その爛々たる緑色の眼は、いつも見張つてゐて、その巨大な耳は、いつも油斷なく物音を警戒してゐた。だから、大膽にも惡意を包藏して、その弱い妹猫へ近寄らうとする猫こそ災難であつた。二匹の猫はいつも一緒に寢た——小さな斑點を帶びた猫は、その保護者の身體に頭を載せて。それから、赤坊を洗つてやる母のやうに、毎日赤猫はその伴侶を甜めた。何處でも赤猫の行く處へ、斑點のある猫は隨いて行つた。彼等は伴れ合つて歩いて、あらゆる爬蟲類を漁つた。また共同して竊盜をさへ行つた。或る日、彼等は無理に引離された。赤猫がR夫人の皿から調味材料を塡め込んだ蟹を盜まうとする無禮な決心を示したから、食事の間、惡戲をさせないため、階下の押入れへ締め込んで置かれたのであつた。かやう

に暫時、その案内者、哲學者、朋友を奪はれた斑の猫は、不幸にも重い身體の紳士が、新聞を讀み乍ら激しく動かしてゐる搖り椅子の下へ迷ひ込んだ。して、鋭い苦痛の微かな叫聲を揚げたまま死んだ。誰れも皆食事を中止した。一座に憤激と悲哀の勃發があつた。身體の重い紳士は、非常に面を赧らめて、そんな積りではなかつたといつた……一時間の後、赤猫は滿身緊張、耳を立て、目を閃かしつつ、その斑の伴侶を尋ね廻はつたが無効であつた。奇異な小さな叫聲を揚げて見ても、いつもの答へは來なかつた。それから後は、階上、階下、廊下、植ゑ込みの中、家の隅々、到る處隈なく探し始めた。その無邪氣な心は、小さな斑の死體が、遙かに遠方で塵芥殘骸の堆丘に橫たはつてゐるとは想像しなかつた。やがてそれは非常に沈默になつた。食物を薦められると、喉を鳴らすだけで、何も喰べなかつた……最後に、不意な考へが浮かんだらしかつた。まだそれは、この屋敷の古い庭の門外で、ごろごろと響いてゐる廣い世界を見たことがなかつた。そこへ彼女を探しに行つて見ようと、赤猫は考へて、そこへ彷徨ひ出たかも知れなかつた。多分小さな妹猫は、そこへ彷徨ひ出たかも知れなかつた。して、今まで見たことのない廣大な世界——幾哩も續いた家屋、數限りなき人々、轟々とひびいて通る大きな綿の荷車、小猫を噛み殺す大きな猛犬——を見た、しかし赤猫は家屋に寄り添ひ、狹い一筋の影を辿つて、こそこそと進んだ。大きな

荷物車が通る時には、ぶるぶる震へたり、犬を見ると、露地へ隠れたりし乍らも、依然勇敢に迷ひ猫を探して行つた……廣い大通へ來た。クリーオール人の古い屋敷の前の狹い通りよりは五倍も廣かつた。して、日光は非常に暑かつた。哀れな猫は餘程疲れて、また飢ゑを感じた。多分道を敎へてくれるものがあるだらうと思つたが、誰れもこの可笑しげな耳と、大きな光つた眼を有つてる赤猫に目を留めるやうに見えなかつた。小さな石竹色の口を開いて叫んだが、足を停める人もなかつた。どうもそれが腑に落ちなかつた。いつも家でそんな風に叫ぶ時には、誰れかやつて來て愛撫してくれたのであつた。忽然消防機關車が唸り聲を立て乍ら、街頭を突進してきた。して、群集がその後に隨いて駈けつて行つた。すると、猫は喫驚狼狽、逃げ出さうとしたが、小さな頭腦は攪亂されて、しかも周圍は騷擾喧囂を極めてゐた……翌朝、二個の小さな死體が、クリーオール人の古い屋敷から數哩も離れた處の、塵芥の上に相並んでゐた。赤猫は、その斑の妹猫を發見したのであつた。

クリーオール小品

譯者註

ニユー・オールリアンズの魔力

異國の人達が恐怖の念を抱かずに我々を訪ねて、北亞米利加での一番美しい一番畫趣に富んだ古い都市の最初の微妙な印象を、純眞の愉快を以て經驗し得る季節が到頭遣つて來た。といふのは、もつとも愛想の良くない氣候の地から此處へ惹き附けて、魔力ある月光の其の夜と、夢のやうな倦怠と薫香の其の晝とで魅惑する人達に對して、ニユー・オールリアンズの魔力は此の季節が一番に强烈であるからである。初めて此の都市を訪ねて愉悦を覺え得ない者は鮮い。そしてそれを去る際殘り惜しく思ひ得ない者は鮮い。そして一たびその力を身に感ずるとその奇異な妙趣を忘れ得る者は一人もない。もつと物淋しい北國に生まれた人には――若しその人が自然界の美しい物に對して少しでも詩的感念を有つて居り、山水の輝かしい翠綠と繁茂とを少しでも愛する心を有つて居るならば――此の都市へ川に依つて近づくことが、それだけで早、言語に絕して愉快なものに相違ない。青と綠との――上に青、下に青、そしてその靈的な藍青を破るものは唯だ長い一條の低い綠色の

土地のみなる——見馴れない一世界を滑り行く白色の汽船。浪と起き伏す甘蔗。嘗て氣味のわるい森の常綠な緣飾り。生ぬるい微風と金色の日光。何れもこの都市が近づくに連れてその魅力を增し行くのであるが、その航海をば、恰もほの明かるい遙かに遠きエデン指して、天國(パラダイス)の花園その物の中へ、航走しつつあるが如くに、美はしいものに思はせる。そしてそれから、赫々たる陽光の下に眠れるこの古いクリーオール都市の、——その古めかしい珍らしい家々、——その影濃い街路、——百年の古昔(むかし)を偲ばせるその品々、——氣持ちの宜い色彩のその對照、——幾多の國民の言葉の聲音を反響するその街路、——うつとりとして滿足して居るやうなその全體の姿、——その青々とした古色、——その神々しい記念像や記念碑、——その奇異な建築、——その熱帶的な庭園、——その畫趣に富んだ奇異な事物、——多分蜜柑の花の匂ひて睡氣を催すのらしい、そして物眞似鳥(モキングバード)の奇妙な音樂に震るへて居る、その暖かい大氣、——これ等の第一印象は全然忘れてしまふことは決して出來得ない。百年ともつとの間、ニユー・オールリアンズはさすらひの人々をこの世界のあらゆる隅々から此處へ引き寄せ來たつて居る。印度のまた日本の土人がその石敷道の上を步み來たつて居る。支那人とマニラの色黑の土人。西印度のまた南亞米利加の子供等。サルタンの臣民とイオニア海の水夫。いづれも家鄕を此處に求め來たつて居る。あらゆる

文明國民が此處へさすらひの子を送り來たつて居る。北と東と西とのあらゆる都市が、その魔力如何にも神祕に、如何にも微妙に、如何にも普遍なこの遙かに遠き南の都市へ、心の安らかならぬ人達を讓つて呉れた。そしてその驚き怪しめるうろつきさ迷へる者共に、この眠氣な、美しい、奇妙な、古い都市は呟く。『私の處でお休みなさい。私は年を取つてゐます、があなたは私よりも年が若くてもつと美しい者にお遭ひになつた事はありはしません。私は常夏に住まつてゐます。私は永久の日光に夢見て居ります。私は魔力のある月光に眠ります。私の街路は奇異なきつかりした影で斑點が出來て居ります。そして時折また死の影がその上に落ちます。けれどもあなたが恐はがりにならなければ、あなたは大丈夫であります。私の魅力は多額の黄金と多大の財寶との魅力ではありません。が、あなたがこれまでお感じにならなかつた程の希望と滿足とを私にお感じになれませう。私はあなたに常夏を、それから神々しいほどの蒼い空を、提供致します。それから微妙な微風と微妙な匂ひと、輝かしい果實と、虹よりも美しい花とを。私の處でお休みなさい。若し私の處をお去りになれば、いつまでも私を懷ひ出して後悔なさるに違ひありませんから』ところが實際その通りで、此の都市からさ迷ひ出る者共は、その夢に此の都市を――昔ながらに變はりな、美しい、日の光あまねき此の都市を――いつまでも見ることであらう、

そして長い年月を間に置いてその最初の魅力が――南の國での一番美しい都市のその最初の絶妙な魅惑が――還つて來るのを感ずることであらう。

譯者註　『アイテム』紙、一八七八年十一月二十六日

稅[譯者註]關

カルナックの如く古く見え、そしてそれを完成しようといふ愚かな希望を以て王侯の財貨を徒にそれに費やした、カナル街のあの巨大な灰色の建築物は、解剖しかねる或る不思議な感銘で長い間、自分の心を煩はして居る。重いそして古いといふ觀念がそれを眺め見る人の心を壓迫する。キングレーキの『堅牢な巨大』の夢魔は、これを注意して研究すれば合點が行くかも知れぬ。そしてその一番高い處は廢墟が――中世遺跡の畫趣のある廢墟では無くて、巨大な、そして暗い、そして埃だらけの埃及ののやうな廢墟が――與へる藝術的な感銘を與へる。それは合衆國の大藏省にとつて、ダナウスの息女達に對する篩のや

うな物てある。黄金をば川とそれへ注ぎ込んだのである。それでも依然として舊の如くてある。その大理石の大廣間は、ケオップスの花崗岩記念碑の心にあるファラオの埋葬室のやうに見える。そしてその門は、極めて乾燥してゐて燃えるがやうな天氣の時にも、祖先來の納骨窖の鐵の扉を開く時、哀悼者の顏を打つが如き、濕つた冷い呼吸を吐く。それは如何にも不氣味に死と過去とを仄めかすやう思はれるもので、その廻廊がどうして地下窖てないのか、その室々がどうして木乃伊に充ちてゐないのか、誰れしも怪まずには居れない程てある。外側は、實際、その恰好すら不吉てある。それには窓があり、入口がありながら、それには壁柱があり、龕がありながら、花崗岩製の一個の巨大な石棺である。その形は埋葬を思はせるものがある。そしてその外部が物凄いほど巨大な爲めに、その嚴めしい壁に着いて居る明き口が、何か古い石棺の上に刻んである彫刻としか見えない。

それは、眞實、嘗ては偉大ではあつたが寛大ではなかつたものの、――嘗ては富んではゐたが、正直てはなかつたものの、――嘗ては自分を永遠なもの不可傷害なものと信じてゐたが、しかし己が産んだ腐敗の爲めへロドの如く死んだものの、木乃伊になつた遺骸が休んて居る一個の大石棺なのてある。その廻廊は實際、過激なファラオの木乃伊に充たされて居る地下窖なのてある。そしてその大理石の大廣間は、大ピラミッドの石の核心なる

それの如くに空虚てはあるが、しかし今や世に殘つてゐてそれを悼み悲む者のないあの統治の亡魂が憑いてゐる、一個の埋葬室なのてある。

が、しかしあの四角な正面（ファサード）の荒れた大きな表面に見られるあの空虚な龕はどうしたことか！噫々、あの龕は！あの龕は！何が故にそれは空虚といふ呪ひを受けて居るのか。何が故に空（かい）にして忌まはしくされて居るのか。それを充たす爲めに創製された石像は四分の一世紀前（ぜん）に彫られたのてあつた。しかし日の光をまだ一度も見て居らぬ。その石の眼はカナル街の壯觀を一度も觀て居らぬ。その大理石の耳は政客の雜談を一度も聽いて居らぬ。その嚴めしい姿は、それを搬入する爲めに初めに詰め込んだ木造の棺の圍ひを一度も出て居らぬ。それ等はこの灰色の建物全部のうちての一番陰氣な部屋の怖ろしい靜寂と暗黑の中に眠つて居る。それ等は眠つて居り、埃がその顏の上に厚く積もつて居る。そして時折、夜のもの凄まじい眞中に寂しげに語り合ふ。その石像には、昔の統治の下ては崇められはしなかつた多くの信仰が——無くなつてしまつた多くの希望が——輕蔑されたてあらう所の多くの性質が——表現されて居るのてある。去つてしまつたか、或は淋しい處へ身を隱してしまつて居る多くの德が——その當時は尊敬を受け得なかつた聖（せい）者の如き人物が——そして、その大理石の顏が嘗ては在つたが決して再びは在らぬてあらうものを見得たなら、

紅らんで埃及花崗岩になつたであらうやうな大政治家が――表現されて居るのである。だから過激主義は――その石像の感情を考慮してではなく、己が感情を考慮して――それ等を隠したのである。といふのは、過激主義は、大理石のその眼の無言の非難に堪へ得なかつたであらう、或は、大理石のその耳の聴こえるところで策略を講ずることを敢てし得なかつたであらうから。だからして信仰や徳は、それが居ても誰れの氣も損じない處へ、狡猾にも仕舞ひ隠されたのである。そこで今彼等は訊ねる。『いつ私共は暗黒と沈黙と忘却とから救はれるのですか？いつ喇叭が、私共の復活日を告げて鳴り響くのですか？いつ私共は、南國の太陽の偉大な光輝とカナル街の華麗とを見るのですか？缺け鼻で臺座の上に立つて居る方が宜いぐらゐです、私共のカラ手足を幾つも失くしても、その方が宜いぐらゐです、これよりか』だがその沈默と、その暗黒と、その冷濕は依然として舊の如くである。そして木精は何とも返事をしない。

註　稅關の彫像の或る物の表徴的性質に關して、或は吾輩は思ひ誤つて居るかも知れない。といふのは、それが來た日を、或はそれに伴なうた記錄を、思ひ出す程に丈夫な記憶を有つて居る人は、今の代の生きて居る人の中に一人もゐないから。

譯者註　『アイテム』紙、一八七八年十二月二日。

夢の都

近頃人が言ふのに、若しニュー・オールリアンズに他の都市と區別の出來る特別な狂癖が何かあるなら、それは『自分と自分に物を言ふ』といふ狂癖であると。自分の生まれ故郷の街路を、ただ自分だけと話し合うて步き廻はるといふ、ニュー・オールリアンズの人達の癖のやうに廣く世に認められて居る事實を、否定するのは無益であらう。そして我々を訪ねて來る異國人は能く言ふ、『ニュー・オールリアンズの人達は氣ちがひになる傾向がある。絕えず己が身と話して居る。あれは正氣でない標(しるし)である』と。此處の人達は、愚鈍な法律と商賣の損失と無法な課稅との爲めに氣ちがひになりつつあるのであらうか？それは神樣だけ御存じの事である。が、實際此處の人達は、己が身に向つてか、或は眼に見えぬ物に向つてか、或は陽(ひ)の照つて居る日に街路へぎざぎざな暗黑處を投ずる陰氣な影に向つてか、話しをするのである。

割合に數が多い、この獨りて考へ込むことを好む者は。そして、それはいつも一番人氣(ひとけ)の無い街路の――東洋の祕密警察がそれへ死んで居る街路といふ不吉な名を與へて居る街

路の――静けさを求める。恐らくは死者の街路といつた方が宜いかも知れぬ。一時我々はそんな獨語をいうてうろつき廻はる者共を注意して見て、或る特別な興味を抱いたことがある。年齢は種々様々である。が、大抵は年をとつて居る。年の若い男や女の動作は普通早くて神經質である。年とつた方のは、遲くて沈み込んで居る。前者は身に受けた何か不法を思ひ込んでても居るやう、怒つた物の言ひ方をすることが多い。後者は怒つて居るといふよりも寧ろ悲んで居る口のきき方である。どちらも自分と自分の身に物を言ふ人達には頗る當然であり且つまた期待し得らるゝことである。

彼等は何の事を話すのか？

これは見出すのに常に必らずしも容易な事ではない。步道を行く活潑な足どりの堅い反響が、否、木の葉の影の突然のはためきさへもが、屢ゝその默想を破るに足るやうである。物を言うて居る者は夢から覺めた人のやうにあたりを見廻はし　恰も立ち聽きされたことを恐れてても居るやう、横を通る人達を半ば隱した猜疑の眼を以て見つめる。そして前よりも早い歩容であゆみ去る。これ等の人達の性質を完全に研究するには、護謨靴を穿いてゐなければならぬ。

そんな目的の爲めに護謨靴を穿くといふことは殘酷であらう。それにまた卑劣なことて

あらう。だからして

彼等は何の事を話して居るのか？

この質問に十分に答へることは出來ない。

だが時たまどんなに無邪氣な通行人でも——或る時は妙に意味の充實して居る、或る時は意味の無い——一言二言耳にせずには居られない。我々はそんな言葉を聞いたことがある。時たま巨大な金額を——幾萬億とか、幾兆億とか！いふ額を——口にした。それを口にした男は財政上赤裸の身になつて、女神フォーテュナから恩寵を蒙る希望が殆ど全く無い、といふ確實な標てある。時々變な呪咀を——自分と自分を呪うて居る者や、名の無い場處や名の無い人を呪ひ、知られてゐない記憶や知られてゐない不幸を、呪うて居る者を——我々は耳にした。時々彼等は元氣好く物を言つて、自分と自分に靜かに笑つた。——が、それは稀て、頗る、頗る稀であつた。

疫病前には、何も無い空なものと交はして居るそんな會話の大部分は金錢の問題だ、と我々は想つてゐた。實際、我々の耳に達する斷片的なつぶやきの多くは、富の——途徹もない、漠然とした、そして妄想的な——夢に、——總ての物を失つて、そして何物をも得る希望を有つてゐないが、不可能なものの夢の華麗さに慰藉を求めて居る者共が夢むやう

なそんな夢に、――鬪して居るやうであつた。

すると燃ゆる夏がその燃ゆる熱病の災禍と共に遣つて來た。その生な、無慈悲な、人を眩ます日光の下に、無情なほど澄みきつた無際限な暖かい青空を上にして、かの獨語を言ふ者共は相變はらず、亞剌比亞人が黄砂の世界にオアシスを求むるが如くに、日蔭の地を求めつつ、無言の街路をさまよひ歩いた。――そして彼等は、自分と自分に、そしてその日蔭に、上なる絶大な空虚に、そして甚大な暑熱にうなだるゝ囁く木々に、向つて、それまでよりも多く話しをするのであつた。

斯くして幾月かが乾燥にまた猛烈に經つて行つた。陽は忿怒の熱の同じ赫奕を以て日毎昇つた。そして空は溶けた黄銅の眩光を以て夜毎輝いた。すると彼の話しをする者共の數が少くなつた。が、彼等はそれまでよりかも遙かに多く物言ふやうに思はれた。彼等は、布片に包まれて音を消されて居る鈴の柄に不氣味にひらめいて居る黒い吊旗に向つて、――小屋の門戸に吊るしてある靈のやうに白い物に向つて、――墓所指して氣味わるくもどよめく長い行列に向つて――物言ふのであつた。

時々啜り泣きの聲が――壓し止められて居る啜り泣きの聲が――聽こえるやうに思はれた。恰も人が、痛烈な決心を以てして痛烈な悲哀を呑み込んでしまはうとしてでも居るや

う――だがそれは恐らくは想像の音であつたらう。といふのは、その不思議な夏には、誰れしも己が耳を十分に信頼が出來ぬほど、不思議な音が澤山にあつたからである。

夏は衰へた。だがしまひには、眼に見えぬ物に向つて物言ふ者共が前よりも多くなつた、やうに思はれた。實際數に於てより多くなつたのであつた。初めての寒風が、北洋の或る妖術者の手を突然に脫れたかの如く、騷々しく荒ら荒らしく、遠き北國から遣つて來るまで、それが依然としてその儘て居ることには一點の疑ひもなかつた。そしてその不可思議な者共の數は段々と增すのであつた。

それから間を置いて時々彼等の言葉が我々の耳に落ちた。するとその言葉の性質が變化を蒙つてゐて――最早、富の考へを現はしてゐるのではない、やうに思はれた。彼等は我我のきこえる處て金錢のことを口にしなくなつたのであつた。彼等は死者のことを口にした――そして自分の舌てない舌が發した記憶に殘つて居る言葉を呟いた――そして、神だけがそれに就いて何かを知つて居る人達に就いて、打震ふ物影と白い壁とに消息を訊ねるのであつた。

恐らくは、最後の或る會談の唯一の目擊者は、該の白い壁と該の打震ふ物影である、ことを彼等は憶ひ出したのてあらう。そしてその物影は依然として其處に在るのてあつた、

丁度同じ角度を爲して——いや、或は、その角度は少しくより鋭くなつて——そしてその物影はその當時と丁度同樣に夢見るが如く打震るうて居るのであつた。そしてこれまであつた總ての物影が、それに訊ねる總ての質問に答へて呉れるに相違ない時期が、或は今後來るかも圖られない。

そんな事柄を見たり聞いたりして、いつの間にか我々は、ニュー・オールリアンズに住んで居る人達が不思議な物の言ひ方をして、自分と自分の思ひに、人耳にきこえる會話をする、といふ事を驚かなくなつた。それは、我々も亦、物影の裡に夢を見て、自分と自分の情に聲高に物を言つて、返事を受けぬ言葉の反響の爲めに眼を覺ましたからである。

譯者註　『アイテム』紙、一八七九年三月九日。

クリーオールの眞型（譯註）

古昔のクリーオール要素が、そのまはりに行はれつつある諸〻の變化の眞唯だ中に在つ

て、その古來の風俗習慣を、どうして保存して居るのか少々不思議である。九時半か十時には亞米利加町は全く生きてゐて――瓦斯の火焔と快樂の旋風がある。舊佛蘭西町は眠つて居る。街路は人氣が無く、歩行者の影が、ただ長い間を置いて、月光を背に動く黑點を人道に造る。クリーオール團は出來るだけ緩やかにまた用心深く眼ざめる。そして太陽が街路を暖め終はる迄はその日の仕事に十分には入り込まない。亞米利加市民でもその比較的に新しい時代の人達は、このより古い住民と接觸すると、性格の相違を理解する事が全然出來ないので、それとの商賣上の取引は出來るだけ避けることにする――それをまたクリーオールは頗る滿足に思つて居る。彼等は自分等を理解して居る者共は大目に見、理解してゐない者共は憎惡し、そして――子女を貰つたり遣つたり――、兄弟同樣に深切に互に助け合ひ、他とは交際をしないやうにして――出來るだけ長く善良な古昔の風を守つて暮らして行かうと欲して居る、やうである。彼等が目に立つ程有つて居る美德が一つあるならば、それは自分の事は自分で世話をするといふ美德である――これは、噫々！ニユー・オールリアンズに住んでゐる他の總ての人達にはいつもさうだとは言ひ兼ねる事である。

恐らくは、行儀作法の堅苦しい外國人が典型的なクリーオールと、殊に後者が婦人の場合、掛合ごとをしようとする時に外目に表はれる性格の對照ほど可笑しなものは何もあり

得まい。一例として、家を一軒外國人に――偶然に或は好奇心に誘はれてこの都市の古風な方面に住所を求めようとする誰れかに――貸すといふ小事件を想像して見よう。その外國人は少々鈍重である。その婦人は同じ人間でこれほど反對になれるものかと思ふほどに眞反對で――少し色は黑い、熱帶的に色は黑いが、磁石のやうな眼を有ち、電氣のやうな香を有ち、女家主をお愛想よく振舞はうといふ氣にならせる一般普通の感情には全然無頓着なので、餘程人の心を惹き附ける女である。――女王の如くに尊大て、そしてその外國人が自分の個性を隱さうとするに力めるのと丁度同じ程度に斷じて自分の個性を示さうとする女である。その女は小綺麗な小さな家を持つて居る。そしてその外國人はそれを借りたいと思つて居る。女の方もまたこれを貸したいと思つて居る。がしかし自分が本來心に抱いて居る條件に從ふならば貸さうといふのであつて、その女はこの問題に對して自分の胸の奧底の感情を隱さうとは考へもしないのである。どんな人にも瞞されまいと決心して居り、そしてその事實を早速頗る有力に説明しようとする、その外國人は人の善ささうな人間らしく思へるのであるが、外見といふものは、この邪まな世界に在つては、如何にも人を誑瞞するもの！てある。

女――「え、さうて御座います。綺麗な家を一軒持つて居ります。私の居間へおはいり

になれるやう、別な方の扉を明けますから、それまで一寸待つて戴きます』

男、――『がお家賃はいくらで？』

女（最も甘い蜂蜜よりも甘い聲で）――『一寸です！――どうかこちらへ――さあ、お入り下さい。さどうか、お坐り下さい』

男、――『がお家賃はいくらで？』

女（扉を閉ぢ、生きて居る唐金の像の如くその前へ身を置き、そのやさしい聲を底深いそして異常に震へるアルトに突然變へて）――『それでは早速お互に了解し合ふことに致しませう。私は綺麗な家を一軒持つて居ります。よろしい、あなたは綺麗な家が一軒借りたいと仰しやる。よろしい！お互に了解致しませう。先づ第一に、私は私の家を誰れにでも貸しは致しません。貸すものですか、決して、決して、決して！』（漸次強音）

男、――『がお家賃はいくらで？』

女（その黒い眼をぴかと閃かせて怯えて無言にならせ、命令的に）――『話しの腰を折らんで下さい。三事私に借家人に要求致します。その第一は何だか、御存じですか？知らない？――それではお話し致しませう。現金、現金、現金です（漸次強音）――直ぐ此處で私の手へ――前金で――ええ、さうです、いつも前金でです』

男（非常に隠して）――『は、確に――分かりました――固よりであります！――さう期待して居りました。――お家（や）――』

女（激烈に震動して居る竪琴（ハープ）の最低音のやうな聲で）――『ま、お待ちなさい、借家人に要求します第二の事は、長く住まふといふ保證であります。え、さうです！私は一週間や、一月（ひとつき）や、六箇月家貸しするやうな人間ではありません、そんなことは致しません、決して。私は長く居る、長く居る、長く居る（極めて和らかに）人を有たなければなりません。そしてその人は長い、長い間居ついてゐなければなりません。あなたは私の處へ來てはいけませんよ、若しか家を借――』

男（最後の必死の、偶々稍々成功した、努力を以てして）――『それやあなた、お借りすれば、その家に幾年も居たいと思ひます。ですが、それを拜見するまではお借りすることは出來ません』

女――『お見せ致します、えゝ、お見せ致します（挿句的に）。所で私が借家人に要求する第三の事は、絶對の清潔です、絶對の、絶對の――壁へ唾を吐いてはいけません、戸口に埃があつてはいけません、板張りを油で汚してはいけません、庭に不潔な物を置いてはいけません。御了解になりましたね？さう！――家をお見せ致しませう。これが鍵です』

男、……『が、お家賃はいくらで？』

女、（デブシーのやうな或る突然な身振りをして、恐ろしさに身を不動ならしめて）――「あ、しかしこの鍵はお預けは出來ません、いけません、私の下女を御一緒に行かせます。私の家の戸口をみんな明けつ放しにして置く事は出來ません。さうですとも、私、經驗して懲りて居ります。下女を一緒に行かせませう。鍵は下女に持つて歸らせます。マリー！此處へおいで！さ、それでは家を見にいらして下さいまし！」

男、（諦めて）――「有難う。がお尋ねしてもよう御座いませうか、そのお家――」

女、（悄氣させる嫌厭の素ばらしい身振りと、恐ろしい決心の素ばらしい身振りとで）――『御存じではありますまいが、下賤者にその家を貸すよりか、世界の最後の日まで、それを閉めて置きます。あゝ！下賤者！あゝ！下賤者！下賤者！」

（その顔に言ふに言へぬ嫌惡の情を表はして述べるこの最後の言葉は、その外國人が笑ふことを悪はく思はぬなら、笑はせるほどのものである）

男、……「それでお家賃は――」

女、（薔薇を食として居る夜啼鳥のやうに美はしい聲音で）――『身分のある相手の方には二十五弗」

その外國人はその時までに全く催眠術にかかつて居る。說教を聽聞してゐたのであり、演說を聽いてゐたのであり、譴責を受けてゐたのであり、美しい女が演ずる非常に不思議な自然の所作事を視てゐたのであり、バヤデール〔印度の舞妓〕のやうに優美なその身振りがその身のまはりに一種の磁石の魔力を織り成してゐるやう思はれる此の驚嘆すべき女の、優越な生活力と意志力との爲め、自分の意志と目的とが完全に破碎されて居るのを覺ゆるのであつた。彼はその家を見る。忠實に前金で拂ふ。至當な身元吹聽をする。そしてその家主婦人がその言葉を赤熱の鐵で、その頭腦へ燒き附けたかの如くに力强く彼に敎へた、あの三つの必須條件を決して忘れずに居る。

譯者註　『アイテム』紙、一八七九年五月六日。

ニユー・オールリアンズ訪問

シカゴはその冬の住居を眞夜中に去つて、昨日の朝早くニユー・オールリアンズへ惡魔

が到着した。シカゴの町には抵當を有つてゐて、今のところそれは抵當流れにさせないやうにする目當が少しもないのだから、此の夏の間シカゴに就いては大して氣にする要は殆どあるまいと彼は思つたのである。

樂園の樹蔭に身を潜めて、麗はしのイヴがその雪白の手足がゲォホンの水晶と清き水に映つて居るのを惚れ惚れと眺めて居るのを見たあの太古の朝からして夙に有名な特徴なのであるが、惡魔は自然の美に感じが鋭いから、日の出の最初の黄な光りにその破風が唐金色になつた此の町の昔風な街路に沿うて、遠くへ屆く眼を遣つた時、彼は後悔の嘆聲を禁じ得なかつた。かう叫んだ、『噫々！これが實際、古昔のケザールの宮殿の如くに、魔力の籠もつた日光の中に眠つて、豪奢の香を吐くやう嘗ては思はれた美しの都市、亞米利加のシバリス〔マグナ・グレシアの古都〕、快樂の大都、なのか？如何にもその街路は草で綠色になつて居り、その宮殿は徹て灰色になつて居り、その榮華は失せて居る。だから或はその古昔の立派な罪惡も亦その榮華と共に失せて居らう。といふのは富は係蹄であり、黄金は誘惑であるから』そこで惡魔は心配氣に眉を顰め、その奥深い眼は恰もくすぶれる炭が夜の蔭に光るが如くに、その眉の下で光つた。

この惡魔はその再建の時代——我が讀者は記憶して居られるかも知れぬが、ニュー・オ

ールリアンズは『惡魔の手に落ちつつ』ある〔破滅するとの意〕と汎く唱へられてゐた時代――このかたニュー・オールリアンズに居たことは無かつたのであつた。惡魔自らの意見でも自分の手に落つるものと思つてゐたらしい。その時分には、この都の事物の狀態はといふと、その巨大な懐中手帳に、人間の魂から得た抵當全部を書き込む餘地が見出せない程であつた。それで過激主義の氣遣ひじみた行路から考へて、全市が數年のうちに自分の手に渡されるに違ひ無いと信じて、何か仕事は無いかと他の處へ去つたのであつた。『ルイジアナ州には己の用は無いのだ』と惡魔は言つた。

ところが、惡魔が『シカゴ・タイムズ』で讀んだ、過激主義の沒落の歷史は彼を全く仰天させた。當時シカゴでは巨大な仕事を掌中に有つてゐて、この文では詳しく語る要の無いいろんな理由があつて、丁度その折イリノイスを去ることが出來なかつた。だがルイジアナで政治の革新がある、公正な政府が出來る、といふ噂は大いに彼には面白くなかつた。そこで早くかの新月の都〔ニュー・オールリアンズのこと〕を訪ねたいと非常にあせつた。ところが、折あしく木曜日が死んで金曜日が生まれる眞夜中までは立去ることが出來なかつた。おまけに惡魔には、金曜日に旅することを否むべき私的な理由があつた。

セント・チャールズ街を歩み下る時、その溝の香が彼を不快ならしめたので、橙黄色の

地へ緑の肋骨と赤いキユーピッドとが結み合はせになつた縞模樣の着いたハンケチでその鼻を塞いだ。[illegible]るさながら『貧乏と不潔とは時に效能のあるものだ』と言つた。次の町角へ行くと、前日の新聞總てを買ひ求めた。ピカユーンはそのピストル隱しへ入れた。『ニユー・オールリアンズ・ビー』と『シティー・アイテム』とは呪つて、その二つともその内容を一寸檢べた後で賣店の店臺の上へ投げかへして、他の新聞を、後で讀む爲めに一包みに括つた。『新聞に餘りに多く德義がありはせぬかと氣遣ふ。己に向く新聞は「ピカユーン」だけだ』と惡魔は言つた。

警察署を次に訪ねた。そして惡魔に物凄く微笑んだ。『警察には非の打ちどころが無い。それて憶ひ出すが、下界での己の警察力は紊亂して居る。ニユー・オールリアンズで對手を募集しなければなるまい』と言つた。

會計檢査院の記錄を檢べて見たら、惡魔は可笑しくて堪らなくなつて、到頭底知れぬ笑聲を——妙に『ファウスト』のメフィストフエレスのあの有名な笑聲に似た、ベースの音の連續した笑聲を　どつと發した。『やあ、この仕組みは過激主義に劣らず中々結構だ。一會計檢査院を維持して行くのに四萬五千弗！』と言つた。

次に有色人が參詣する教會へ市長が發した命令を讀んで、氣に入つたらしくその頭を點

かせて、かう言つた。『中々旨く遣つて居る』—

十二時までに彼は公署は總て訪ねたのであつた。——衛生會は非道く彼を不快ならしめた。が健康局は彼を莫迦に上機嫌にした。かう言つた、——一體此處へ遣つて來るなんて己は莫迦だつた。健康局は己のする仕事を、己がすることが出來るよりも、もつと上手にすることが出來る。そして此處の人達は彼等にそれをやらせる程に、隨分と莫迦者のやうに思はれる。正直な貧乏は無くて、不善な貧乏がある。改革は無くて、紊亂がある。法律は無くて、法律家が居る。正義は無くて、壓制がある。どんなカーニヴル・キングがこれほど自分に十分に支度をして呉れてゐる都市を見たことがあらうか？直ぐと此處を立退かう。己にはルイジアナではまだする仕事が一つも無いから」

だが去る前に、州會議事堂の頂きへ降りて會議の模樣を見ようといふ心を起こした。自分でも大いに驚いたことには、その議事を幾時間も傾聽した。て、自分で氣が附いた時は、三時に近かつた。

惡魔はつぶやいた、『金曜の二時半だ。ところで己は三時十五分前に惡魔の大廳（パンデモーニアム）に居なければならぬ。己はあの古い廳舍での事態は十分には善いとは思はぬ。が、あそこの形勢は實際己の出席を要して居るか知ら。あの會議へは屬官を一人遣らう。惡魔の利害が十分

に代表されては居らぬから。だが己は此處へは二年間歸つて來まい。丁度己が行かうとして居る處へ行かうとして居る都市に、何て己が滯在して居る必要があらう。その上に、何か重大な事が出來すれば、己の代表の者が知らして吳れよう。此處の人達は、改革に停止を命じて居る、とやうに己には思はれる――丁度、商賣にもさうのやうに。要するところ、一八七九年のニユー・オールリアンズは、一八六六年のニユー・オールリアンズよりも、さう大してより神聖でも無い。さあ、出掛けることにしようか」

さういつて、その新しい地獄字典（ティクショネールア ファルナル）の中へ『急變主義』といふ語を書き寫してから、彼は出掛けて行つた。

譯者註。『アイテム』紙、一八七九年五月十日。

二十五

クリーオール下宿主人の愚痴

こん畜生！畜生！これからはいつも前金で拂はせます。

最初に置いたのは、自分は大尉だ、と言ふんです。大尉だつたかどうか判かりません。が、貧乏してゐました。家て六週間食つて泊つて、拂ひをしないもんですから、私は言ひました、『旦那さん、お金をお貰ひしなければなりません』

その人は言ひました。『おかみさん、お前さん私を盗人だと思ふのですか』

私言ひました、『旦那さん、お金をお拂ひになるのは當然てあります。私は隨分長い間待つてゐます』

するとその人は言ひました、『そんな無禮な口の利きかたをお前さんがすることが判かつた。それでは、私が拂はうと思ふまでは拂ひません。少しも急ぎはしない』

『私の家から出て行つて下さい！』と私は言ひました。

『おかみさん、出て行く氣になつたら、お前さんのこの汚い家から出て行くよ』――とまあさう言ひましたよ。そして私はその部屋から家具をみんな取つてしまふまでは出て行かすことが出來ませんでした。貸しは七十弗にはなりませんでした。

……それから、佛蘭西人を一人置きました、餘つ程高ぶつた男たと思ひました――いやな奴てありました。その手提げ鞄を重いと思はせようと思つて、床板へ釘て留めて置きました。そして或る晩逃げてしまひました――四十九弗の金を拂はずに！その鞄には洗滌器

が一つあるきりで何もありませんでした。

……それから、夫婦者を置きました。二人はちやんちやんと拂ひましたが、そのうちに奥さんが他の男と逃げました。夫の方は私に八十弗借りになるまで居殘つてゐました。それから、それも亦出て行つて、こんな手紙をよこしました。——

『おかみさん、私はお前さんを騙して八十弗ひつかけた。が、八十弗でなく八千弗ひつかければよかつたと思つて居る。私の家内が逃げたのはお前さんの所爲だつた』

後で、その女はそのおかみさんでは無かつたことが判かりました。

……それから、私は病人を置きました。私の家の前の歩道で倒れましたから、看病してやらうと思つて家へ入れたのでした。よくなつてから、自分は語學の教師だと言ふんです。此の家で四箇月食つたり泊つたりしました。そして初めのうちは少し拂ひました。やかましいといつてよく苦情を言ひました。あなた方が神經質と仰しやる性質の人でした——だから、私の娘を、靴無しで、裸足で歩かせなければなりませんでした。そして、うるさがらせないやうに、唖と聾の言葉で私共は話しをしました。その男は床の中で煙草を吸つて、掛け布團を焦がしました。それからまた瓶を壞はし揺り椅子を壞し、それから窓を壞し押入れを壞し、そして——それからあなた方がパンドユール〔振時計〕と仰しやる物を、あれを

壊はしました。――絨毯へインキを滾し、壁へ煙草を吐き、床の中で嘔吐しました。ですが私は何も言ひませんでした、その人は手荷物を有つてゐませんでしたから。――だから、私に四十弗借金した時、もつと後で金を貰はうと思つて、その人を追ひ出したくはありませんでした。しまひに私が出て行つて呉れと言ひますと、小切手を受け取つたから、月曜日に拂ふ、と私に申しました。所が其の後一度もその男に會ひません。百六十七弗私に借りてゐたのです――その上に、薬を買ふからと言ふので貸してやつた金が七十錢あります。

……それから、私は女を、駱駝のやうな（エスペース・ドユ。シャモー）のを、一人と、その女の亭主の醫者（何處から何處まで厭な）と、置きました。その女は自分では――あなた方はさう仰しやるのでせう――あの、サージュ・ファンム〔助産婦〕だと、言つて居りました。ところがその男の方は、私の飼つて居る猫ほども醫者のことは知つて居りませんでした。だのに、私の療治に二百五十弗取りましたが、私にはそれで何の利益にもなりませんでした、鐚一文ほども。

……それから三人の家族を置きました――みんな亂暴な厭な人間でありました。一月も私は家賃を貰ひませんでした。だから私はそれに出て行つて呉れと通告しました。ところが其の人達は、家賃は決して拂はぬ、裁判所へ訴へるまでは出て行かぬ、とから申すので

ありますゝどうで御座いませう、家賃は五十弗より余計ではありませんでしたが、訴訟の費用は多分百弗よりもつとでらゐのものでしたらう。ですから、私はその家を出て、其奴等の勝手にするやうに其の家へ置いておきました。ところが私が出て行かないうちに、其奴等は、バケツ二つ、暖爐一つ、鉢一つ、時計一つ、鏡一つ、珈琲碎器(カフイーミル)一つ、牝鶏一羽、私が秘藏してゐた小猫一匹、大皿一枚、私のもので無い女用のシャツ一枚、盗みました。

譯者註　『アイテム』紙、一八七九年九月二十七日。

下宿人の返事

エス　ク　ブー　ブー　フイシエ　ドウ　モア？クレ　ノム！お前さん己のことで腹立てることがあるものか、箆棒な！己は前金で部屋代を拂ふことはもうしない、一生オールアンズで仕事をしようといふのでは無いから。

己は初めて來た時、ブルゴアヌ街で一部屋借りた。そこの家(うち)の者は一階に熊一匹、鸚鵡

一羽、狐猿二匹、それからモルタの猫を幾匹も飼つて居た。それて己が家賃を拂ひに入ると、そいつ等がみんな中を歩き廻はつてゐた。其處のおかみさんは有色人で――君等の所謂ムラットだつた。そして己は前金で拂つたのだ――動物のやうに！

その家に六週間住まつた後に、己はおかみさんに一文も借りないのに、おかみさんが己に、己が前金でいつも拂ふ家賃より十ピアストル餘計なほどの物を借りてゐた。――四分の一ピアストルとか半弗とか二弗とか、殆ど毎日のやうにおかみさんが借りに來る。そしてにこにこしていろんな可笑しな莫迦な眞似をして見せるもんだから、己はどうしても斷わられなかつた。それからその家に二箇月居た後で、おかみさんは己が前金で拂つてやつたよりも、部屋代二箇月分ほど餘計に己に借金してゐた。

少し經つと、あの小さな動物が居なくなつた――金をこさへに、狐猿と燕とをおかみさん賣つたのだ。それから鸚鵡が居なくなつたので己は大いに滿足に思つた。――人を落ち着かせない本當に厄介な奴だつたから。

或る晩のこと、己は十二時過ぎてから歸ると、何の物音もしない。己の部屋へ入つて見ると、中には何も無い――床も無い、椅子も無い、押入れも無い――己の汚いシャツが一枚と、古い紺ヅボンがあるだけだ。家中がらんとして居る。どの部屋もむきだしになつて

居る——その中の人も。おかみさんはその家賃を拂はなかつたのだ——そこで家主がその家具を取つてしまつて、家を綺麗さつぱりにしたのだ——だから己は堅くて灰だらけの床の上に寢なければならぬ始末になつた。己に二十弗近く借金してゐたその有色の女には、己はその後一度も會はぬ。

……ところが己はその家に居殘つて居ると、朝になつて別な有色の女が入つて來た。その女は澤山に家具を有つて居た。己は己の身の上を說明してきかすと、その女がクリーオールでから己に言ふ——『トゥー スレ レステ ゴック ムウエ、モ ト ドンネ べル シャンブ ガルニ アステウール、プー メム プリ』〔私と一緒においでなさい、家具附きのいい部屋をあげます、同じ値段で〕そこで己はその家に納まつた。前金で呉れと賴む。己は斷わるのは好かぬ、それに他で部屋を探す時間が無い。それは正當なことだ、と己は心に思つた。

時々己の部屋を綺麗に掃除する。時々少しも掃除をしない。時々見知らぬ有色の男を己の部屋へはいらせる。そして散歩に出て居ない留守に、そいつ等に己の床で寢させる。己は不滿だつた。が何とも出來なかつた、前金で拂つてゐたもんだから。

或る日の事、おかみさん鏡を買ひたいと思つて、自分は金が無いもんだから、己に拂つて呉れと賴んだ。言ふには、土曜日が今度來たら、亭主が己に拂ふからと。莫迦々々しい

が己は拂つた。ところが土曜日にならぬうちに、或る執達吏が家の中にある物みんな取り上げて行つた。そしておかみさんが借りてゐた物を、己はどうしても取る事が出來なかつた。その上に、後(あと)で判かつたが、そのおかみさんには亭主なんか一人もありはしなかつた。

……己は厭になつてしまつた。そこで或る白人婦人の家で部屋を借りたが、それも前金で拂へと言つた。後(あと)になつて、そのおかみさんは己を善くは待遇しない。己の部屋から揃り椅子一脚といろいろ家具を取り上げた。言ふには、それは借りに部屋に置いてあつたんだつて。子供が多勢居てそれが己の書物を破るし、部屋借りの一人が己のヅボンを盗むし、今一人のは煙草を盗み、今一人のは石鹸を盗んだ。石鹸は少しも有つて居ることが出來なかつた。二週間ももつともの間にタオルは一つだつた。

それからは月の初日に金を拂つた。二日目に己は家へ歸ると、——君方が贈物(アント・ア・ランファン)といふもの、それを遣つて居るではないか。そして或る女が這つて來て己の書物を——五十冊ばかりのものを——取つて行つた。それを取返す金は己には到頭出來なかつたし、また己の書物を持つて行つたその女は何處に住んで居るか見つけることも出來なかつた。

……もう一度己は前金で拂つた。そのおかみさんは佛蘭西の者で、美しい顔をしてゐて、善い心の人だつた。非常にいい待遇をした。到頭その家で落ちつくことが出來た。ところ

が長くは落ちつけなかつた。己はいつも月の十五日に部屋代を拂つた。四月の十五日に拂つた。十六日に、そのおかみさん、君方が頓死といふ、あれで急に死んでしまつた。何處の國にだつて己はこんなやうなことは見たことが無い。前金で拂ふなんて、そんな莫迦なことはもう決して己はしない。

譯者註　『アイテム』紙、一八七九年九月二十八日。

譯者註 どうして蟹を生き茹でにするのか

どうして蟹を買はないのです？生き茹でにしなければならぬからなんですか？まるで莫迦です、そんな事を言ふのは。茹でないで、どうして殺せます？頭を切ることは出來はしません、蟹には頭は無いから。背を破ることは出來はしません、まるで背だらけではありませんか。死ぬまで血を出さすことは出來はしません、血は無いから。腦味噌を突き刺すことは出來はしません、あなたと同じで――腦味噌は無いから。

クリーオール日記

自分は諸君に――クリーオールの日常を――自分の日記帳から抜いて讀まう。

正月一日。旦那さん、僅十弗です、貸して下さい、一日に拂ひます、うんと利を附けて。ああ、あなたは善い友です。私は金は有つて居るのですが、今のところ出す方の金が多いので。

二月一日。我が友よ、實にお氣の毒ですが今日は拂へません。が直ぐと大變な利を附けて拂ひます。十弗ぐらゐのことで決して立腹なさることは無いことです。

三月一日。我がお人よしよ、私は拂へないのだよ、金があつても。君は餘りに辛抱が無さすぎる。君に金を頼んだのは實に殘念だ。

四月一日。君、僅十弗ぐらゐの端金（はしたがね）をば僕との友情よりも君が重んずるとは僕は想つてゐなかつた。もう君には頼まぬ。君がそんな事を言ふのは僕好（す）かぬ。

五月一日。何て己に金を貸したんだえ間抜け者のやうに。十弗じや無くて千弗借りてた方がよかつた――己はその方がもつと立派だ。汚らはしい十弗ばかり借りたので己は踏みつけにされる。いつか拂つてやるよ。

六月一日。君は實に無禮者だ！けち臭い一弗でも君に借りて居ると思つたりして！始終己に金を吳れ、吳れと君は言ふが、君は乞食で、ひもじいのかえ？君は己を間抜け者だと思つて居る。拂へる時に拂ふと言つたでは無いか。僅一弗のことで侮辱されることは己は辛抱が出來ん。

七月一日。明日己は拂へる。親切ついでに、も一つ一寸した親切をして吳れ給へ――君のあの友人に、貯金係とか秘書とかいつた地位を僕に與へるやうに、賴んで吳れ給へ。

八月一日。僕は地位を得ることが出來るまでは金は拂はぬ。

九月一日。砂糖が市場へ入つて來るまでは己は拂はぬ。

十二月一日。決して己は拂はぬ。己は君に何も借りては居らぬ。いつまでも、いつまでも金を吳れ、吳れと言はれることは容赦がならぬ。君にはもう口を利かぬことにする。而ははり倒さぬ、あの十弗はあばだ。

譯者註　『アイテム』紙、一八七九年十月五日。

落ち着かぬ下宿人

その人は月の朔日に私んとこへ來て、言ふんてす、『おかみさん。別な部屋に入らなければいかん。あの子供達がする素敵な騒ぎて、あの部屋では暮らされぬ』そこで私は返事しました、『あなたの一番お好きな部屋を選んで下さい』

すると三階の或る一と部屋を支度して呉れと言ひました。その朝私は部屋を始末しました。晩方になるとかう言ふんてす、『おかみさん、あの部屋は借りられぬ。元の部屋にする』そこで私は品物を移しました。

次の週にその人は言ふんてす、『おかみさん、別な部屋にしなきやいかん、子供達がする騒ぎは、とても堪へられぬ』そこで私は四階に部屋の支度をしました。晩方になるとその人は、心が變つた――あの部屋の方がましだ――と言ひました。そこで私はまたいろんな品物を動かさなければなりませんてした。

のち、三十日の日にその人は私んとこへ來て、言ふんてす、『おかみさん、この家は出

たくないから、別な部屋にして呉れ。あのいやな子供達がする素敵滅法な騒ぎにはもうとても堪へられぬ」そこで私は言ひました、『どんな部屋でも、あなたのお望みの部屋に入つて下さい。そして、どうか私を騒がさないで下さい』

その人はそれから家の正面の或る部屋へ入りました。ところが眞夜中に、そつと階段を降りて來て、品物をみんなひつくらかへして、元の部屋へ入りました。それから朝になつて、私の召使に手傳つて呉れと頼んで、五時間ももつともの間、手提げ鞄だの、トランクだの、古股引だの、洗面器だの、枕だの、それから籠だの、持つて階段を上がつたり降りたりするんです。いやになつてしまひました。

しまひに突然また別な部屋へ入ることにして、其處にちやんと納まつてゐます――それには私は大いに驚きました。が、私の家から出て行つて、その手提げ鞄をネグロに運ばせるのを見た時、私は驚きもしませんでした。却つて荷物を運び出すのを見て滿足に思ひました。

が、その滿足は長續きはしませんでした。

その明けの朝、また私の家へ入つて來る行列が見えました――そのネグロと、手提げ鞄と、その男と、それから煙草壺と長靴とを持たせて居る男の兒一人と、そして階段を上が

つて行つて、また元の部屋へ入り込みました。何處の國にだつて私はこんな事を見たことがありません。

それから私んとこへ來て、かう言ふんです、『おかみさん、誰れか私を訪ねて來たら、私は狂人だと言つて下さい』私は言ひました、『よう御座います、屹度言ひませう、それや本當なんだから』が、實際どういふ積りなのか、それから一時間經つてやつと判かりました。それは、やがての事、或る人が來て、これこれの人は居ませんかと訊ねたのでした。

『ああ、さうです。此處に居られますが、その人は氣が狂つてゐます』と私は言ひました。

その人の答へに『さうだらうと私は思ひました。といふのは、私の處へ來て前金で一箇月分拂つて、そしてゐて私の處へ歸つて來られませんでした。だから、この金を返して下さいませんか』

そこで私は、あの人が氣が狂つて居ると言つたことを後悔しました。一寸も氣が狂つて居るのでは無いからでした。――その惡意の償ひはしないでみんなを苦しめようとする惡魔なんです。そこで私は、その金をその人に渡しましたが、出て下さいといふ通知は受取らうとはしません。どうしたら、この人を厄介拂ひが出來るか、私にはまだ、見當がつき

ません。

譯者註　『アイテム』紙、一八七九年十月二十七日。

家具附きの部屋

あんな家具附きの部屋に、あんな高い値を請求する人があるのが、自分には判からぬ——あんな人達は自分は怪しいと思ふ。——あれはみんな心の邪まな人だらうと自分は思ふ。先づ第一に、自分の——街(まち)に、「家具附き(ルーム)部屋あり(ガルニーシュ)」といふ看板があるので、自分は部屋の値を訊ねに行つた。三階にある立派な家具附きの一部屋を自分に見せた。修道院の部屋よりも大きな部屋だ。で、自分はその値段を訊ねた。値は一週間が三十弗だと言つた。だから自分は驚いて、別な部屋を見せて呉れと頼んだ。すると二階にある別な部屋を見せた。自分はその値を訊ねると——すると一週間四十三弗だと言つた。それは裏側の部屋だつた。そこで自分は物好(ものず)きに表側の部屋を見たいと請求した。すると、その表側の部屋は、

自分へなら五十弗だが、他の人へなら一週間六十弗だと言つた。そこで自分は其處の人達は氣ちがひだと思つた。すると二階の部屋を見たくはないかと自分に訊ねた。そこで自分は『いや――眞つ平だ！何の爲めに百弗もする尊い部屋を己は見るものか？――芥子を百弗買ふ方がましだ』と言ふと、『百弗はしません。七十五弗より上てはありません』と言つた。

それから自分がその家を出ると、みんな白痴のやうに笑つた。七十五弗だ！と七十五の千倍の悪魔だ！

それから自分はもつと家を見に行つて、驚いた。自分が見た好い借場の或る部屋は一週間十六弗だつた。――それは所謂家根裏部屋(アッティーク)といふのだつたが。他(ほか)の部屋でも、一箇月で――尤もいつも前金で拂ふのだが――七十弗、八十弗、百弗より上てはなかつた。一番自分に合點の行かなかつた事は、その家のどれにも、一部屋も人が借りて居るものが――たつた一部屋も――無かつた事であつた。いつまで經つても――『一家具附きの部屋あり』と看板は出してゐても――借りるものは無いだらうと自分は思つた。そして、其處の人達はみんな心の邪まな者だらうと思つた――といふのは、正直でない人間でなければ、部屋を明けて置いてゐて、どうして家賃を拂つて行けよう？だから自分はさうだと思ふのだ。だ

からまた自分は思ふに、警察の人はそんな事を——が、警察の人！警察の人！——警察の人の事を自分が更や角言つたところで！

譯者註　『アイテム』紙、一八七九年十一月二日。

譯者註

墨其西哥貨幣

『掛け給へ、日に焦げた放浪の君、掛け給へ！——て、君は何處から來たんだい？』

『墨其西哥から來た』と、その男は眞面目くさつたむつつりした顔して答へた。

それからテーブルの上へ、縞毛布と、摩り切れた手提げ鞄と、黒檀のテーブルを打つた時その中の物が——墨其西哥金貨が——カスタネットのやうにちやらちやらいつた重い革嚢とを置いた。

『まあ、僕等は、君は死んだんだと思つてゐた——この幾年も、それに一言の音信も無いし』

『死んだんだと』と、その男は同じ言葉を繰返した、『さうだ、僕は死んだのだ、僕が生まれた世紀には、それから近代の文明には、死んだのだ――一八七〇年から一八七九年まで死んだのだ。眼が覺めて見たら新時代に居るのだつた、といふ七人の睡眠者の一人のやうな氣がする。僕は今まで十七世紀に暮らしてゐて、突然十九世紀に自分の身を見出して居るのだ』

『墨其西哥市に居たの』と、僕等は訊ねた。

『いゝや、墨其西哥市に居れば少くとも外界からの反響が少しは聞こえる――いゝや、マタモラスとソノラとに居た。墨其西哥市は或る點では現世紀のものだ、田舎での生活はさうではない。田舎では時間が二三百年間、あるかずに、じつとしてゐたやうに思はれる。印刷物は確に十六世紀のものだ。製造業で中世紀のものさへ澤山にある。そして農業はノアの洪水前のものだ。僕の知つて居る墨其西哥人で、鋼の鋤を輸入しようといふ、莫迦な眞似をしたのがあつた――固より、近代の機械のことなんか、よう口にし得なかつたらうが』

『それでその人は――』

『直ぐと嫌疑を受け、憎み嫌はれた。その筈で、土地の人達は結構な木製の鋤が、モン

テツマ時代に、またそれより前に、使はれてゐた鋤が、あるではないか。――だから、どうして呪はしいグリンゴに、鋼の鋤を持つて來さすことを許さう?』

『それから金は?』

その男は合財袋から黄色な貨幣を一つ取り出してそれを示した。片側には墨其西哥の鷲がその犠牲の蛇を抑へつけて居つた。他の側には、赤裸々な手が、その上にレーといふ綴字が書いてある或る書物の開いた頁の前で、自由の帽子を支へて居つた。

『貨幣といふものは或る程度までその國の社會狀態を示すものだ、と人は云ふ』と彼は言ふのであつた、『この鑄造が、亜米利加の貨幣と比べて、どんなに粗雑か見てみ給へ。これには野蠻人を思はせるものがある。が、僕はこの鷲の方が好きだ。その姿勢には獰猛な美がある。あの理想化した亜米利加の鳥は、これと比べると、固くるしくて不細工だ――僕はこの、蛇を寸斷して居る、この野蠻な鷲に感心する。――だがこれは徽號としては虚僞だ。墨其西哥人には、鷲のやうな性質は少しも無くて、蛇のやうな處は多分にある。圖案全體が虚僞だ。これには自由の帽子が附いて居る。しかし墨其西哥には思想にも言論にも眞の自由はありはしない。――「法律」といふ語はある。ところが法律はありはしない。其處の人達には所謂信仰も無く法律も無く王も無しだ。その貨幣は墨其西哥人同様大

風呂敷だ。眞に自由な國民は、法律や自由を大して自慢はしないものだ』
『それから博覽會は？』
『なあんだ、莫迦な！博覽會だと！陳列するどんな物があるか？小刀と連發銃と木製の錨？』
『ほかには何も無いの？』
『うん、ある――たつた一つある。競爭者があれば來い、と墨其西哥が大威張りで居るものが一つある。僕の肩掛（セラープ）に見本を少し持つて歸つて來て居る――素晴らしい見本だ――それに匹敵するものはありはしない』
ところが、この男が言ひ歇んだ時、その耳へ何の返事も來なかつたので、再三身を廻らして見たが、誰れも居ないで其處に、その男はただ自分一人居るのであつた。

譯者註　『アイテム』紙、一八七九年十一月三日。

快活ならぬルイジアナ人

その巴里人はかう言つた、「氣候は絶好なのに、ルイジアナの人は僕がこれまで見た一番眞面目な顔した人のうちに位するやうに僕には考へられる。この素敵な天空の下に、眞の快活といふものが少しもない。此處では人は滅多に笑はぬ。笑ふ時は、その笑ひにはともすれば皮肉になる。職人が仕事しながら歌をうたふといふことをしない。男の兒が街路を歩く時、口笛を吹くことは滅多にない。南の方へ行けば行くほどさうのやうだ。尤もネグロは歌をうたひはする。が、その節は僕がこれまで聽いたうちで一番哀れつぽい、一番氣味のわるいものだ。見給へ、巴里では工場は鳥の巣のやうに陽氣だ――朝から晩まで一と續きの絶え間無しの囀りだ。そして歐羅巴の國々では、勞働者と百姓との歌うたひは音に名高いものだ。歌はその生存の一部分のやうに思はれる。熱帶近くての生活の激しさそのものに、何か悲哀な點があるに相違ないと僕は想ふ」

その英國人はかう言つた、「或る點に於ては君に同意する。しかし、その差異はその國

の性質に基づくと僕は思ふ。低い平たい國では人は歌をうたひはせぬ、また大して向う見ずな陽氣騒ぎをしはせぬ。山では人は歌をうたひ、丘の中では人は笑ふ。山の多い國は音樂的な國だ。人間は棲むのが星に近ければ近いほど幸福なやうに思はれる。ナイルとか恒河とかミシシッピとかいふ大河が流れて居る低い國では、元氣快活は求めても見つからぬ。だが歐羅巴や亞米利加の山の多い地方では――

譯者註　『アイテム』紙、一八七九年十一月四日。

クリーオール の中庭

その古い家、元は富裕な栽培者のものであつたその家は、平穏と静かな幸福との大氣が包んで居るやうであつた。多くのクリーオール家屋同様、その正面は平凡な人目を惹かぬ外觀を呈して居つた。弓形の入口の大きな綠色の扉は閉ざされてゐた。張出しのある窓の綠色の鎧扉は半ば締められてゐて、下の賑やかな街路を、或は上の濃い青の空をゆるやか

にゆるやかに漂ひ行く輕い雲の綿のやうな切を、懶げにじつと見て居る眠さうな眼のやうであつた。が、しかし、その門を越した中には一小樂園があるのであつた。奥行の深いまた横幅の廣いその大きな中庭は、熱帶の綠に縁取られて居つた。蔓物が廊緣の白い柱を包み、匍匐植物が、その燃えるやうな深紅の花眼で、上の窓へ覗き込まうと、色を塗つた壁を這ひ昇つて居つた。バナナの木がその庭園のずつと遠くの端で、そのエメラルドグリンの羽毛を眠氣にうなづかせ、蔓草が食堂の窓を蔽ひかぶせて、そのお愛想の好い扉のあたりに涼しい綠の四阿を造つて居り。年たけた無花果の木が一本、その瘤だらけな腕を蜜と甘い實の重さに震るはせて、中央に天然の絨毯をつくつて居る輝かしい四角な芝生を蔭らせ。そして間を置いて、歩道に沿うて、陶器の大きな瓶に、――恰も哨舍に居る野蠻な哨兵の如くに――奇妙なそして刺のある葉を有ち、蜂鳥のやうな燦爛たる花を有つた、華麗な濶葉の物が配置されて居るのであつた。噴水が一つ、西側の廊緣の入口に近く微かにつぶやいて居り、彼の無花果の蔭から戀知る鳩の甘いそして悲しげな啼き聲がきこえるのであつた。外部では、木綿を運搬する車が轟く事もあり、街道馬車がその鈴を下品にぢやらぢやら鳴らす事もある。しかしそれは内部の――其處には古昔の言葉を口にし、此の物質的な時代には忘れられて居る幾多の古雅な武士的な禮儀を守つて居る古風な善良な人達が、古

風な椅子に坐つて居るその內部の――絶妙な閑靜さを亂すことはしない苛酷な外界の反響たるに過ぎぬのであつた。外部では、鐵の時代が、亞米利加の交通の狂瀾が、あつた。內部には、きこゆるものとては、ただ、不精な噴水のつぶやきと、巴里やマドリッドの言葉で對話して居る非常に音樂的な聲のひびきと、うるはしい、そして母音の多いクリーオールで片ことばなしをして居る子供等のふざけたお喋りと、そしてそれ等總てを通して、鳩の軟らかな愛撫するやうな啼き聲とがあるだけであつた。外部では、一八七九年であつた。內部では、西班牙統治の時代であつた。ギターが一挺その噴水近くの粗末な腰掛けに、乾度置き忘れたのであらう、置いてあり、そしてその横に絹團扇が一本置いてあつた。また優美なエッチングのある或る歐羅巴の雜誌が、戶の際の搖り椅子の背に懸かつて居て、その戶の內側をと窺ふと、芳醉なボルドーの罎が幾つか載つて居る雪と白い食卓が瞥見せられ、西印度の濃い煙草の匂ひが嗅がれるのであつた。だのに、カナル街を橫ぎらうとは決して思はぬ人があることを不思議に思うて居る人がある。

譯者註　『アイテム』紙、一八七九年十一月十一日。

譯者註

クリーオールの性格

町角の食料品店のあたりへ木造の日覆ひを樹てることは困難な仕事では無かつた――屈強な愛蘭土人だつたなら二人で二十四時にそれをやり了へたことであらう。ところが、その町角の食料品店の主人はクリーオールであつたから、クリーオールの大工を四人傭つた。だからそれを造るのに四週間かかつたが、まだ出來上がつて居らぬ。賣女の洗禮では無い急ぐにや及ばぬ、といふ諺がある。だから一所懸命に仕事しようとは思はぬのだつた。人生は餘りに短いのであつた。自分等はその職人達を見に町角を廻はつて見た。板は如何にも見事に挽き切り、釘は極めて優美に槌打つのであつた――眞實まがひ無しの矯飾家（ヴレーボージュール）なのであつた、彼等は。それから彼等は額を拭つて、嘆息をついて、そして紙巻煙草を造つて、そして火を借りにその食料品店へ入つた。入ると其處にアリスティッドとジュールとアルベールとセルセーとアルシビアッドとが居たので、みんなで一パイやつて、途方も無い冗談口を一緒にきいた。それからその大工はまた外へ出て來て、半分出來上がつたその日覆

ひの上へ上がつて、前を通る、上品な態度をした、そして唐金の像のやうな顏色の、年の若い淺黑い女に齒をむき出して笑つた。それからその四人はお互に笑ひ合つた。すると雨が降り出したので、四人は降りて、晝食時になるまで、幾本か紙卷煙草をふかした。晝食後、ゆつくりと、落ち着いて、美術的に、十分間働いたが、氣ちがひ犬が一匹、その街路(とほり)を走り下るのを見て、驚く許りの根氣と嘆賞すべき決心とを以て半哩もそれを追跡した。それからみんな歸つて來ると、その食料品店に居た感心して居る群集に向つて、そして町角を廻はつた向うの洗濯屋のおかみさんに向つて、そして道の向う側の伊太利人の果實賣(くだものう)りに向つて、そして向う側の商賣敵の食料品店の細君に向つて、そして巡回中の大儀さうな巡査二人に向つて、そして近處の下宿屋の料理番(クック)に向つて、そして東南の角の菓子屋の主人に向つて、そして西北の角の靴屋の亭主に向つて、そして西南の角の牛屋の男に向つて、そして東北の角を一寸廻はつた處の石炭運びの女に向つて、その勇壯な行爲を長々と話すのであつた。それから仕事の支度をした。そして

「マダム　カバ、

　テイヨン　ブー　トンブ。

マダム　カバ、
　テイヨン　ブー　トンブ。
アー、ラ　レーヌ、
　ビエ　ラ　ス　モア。
マダム　カバ
　ピエ　ラ　ス　モア。
マダム　カバ
　シヤンデル　テ　テイニユ』

といふ歌に合はせて、槌をトントンと打ち始めた。
　それから暗くなつた。するとみんな一バイ飲んで、そして歸つて行つた。その翌日もその通り、その翌日も、それから二十三日間さうであつた。そしてその日覆ひは今なほ依然として未完成の亂暴な狀態で居る。

譯者註　『アイテム』紙、一八七九年十一月十三日。

ケンタキー大佐の部屋借り

『あのう、もう一と事――旦那さんのお名前は？』

『陸軍大佐ザカリアー・マルト――』

『それならば、それならば、旦那さん私に前金でお拂ひなさらなければいけません』

『それじや何て初めに已に言はなかつたのだ？』

『あゝ、それは旦那さんが、自分は大佐だと私に仰せにならなかつたからであります。旦那さん、私は軍人の方は信用致しません　或る大尉の方は私の金を六十弗騙られましたし、或る少佐は私の金を五十弗騙られましたし、或る軍醫は三十九弗、或る大佐は百十一弗騙られました。それから或る少將は此の間私に――』

『うん分かつた、おかみさん。しかし、それは通用しないよ、ケンタキーの――』

『ま、待つて下さい、旦那さん、私が物を言ひ終はるまで。その少將の仰しやるには、自分は前金では決して拂はぬが、三月毎には拂ふ。そこで私は、私には出來ませんと言ひ

ました。その方は行かれましたが、後で聞くと、その方には借金が三百九十七弗――』

『が、く――！ぢや前金で一箇月分悉く皆拂はう！』

『一月ですつて！それぢや、旦那さん、私には本當には出來ません、あなたが大佐さんだことを！』

『なんだつて！己は神もつて――……！』

『ポーリースよ！二階に居るのかえ？降りて、この事を取りきめてお呉れ、私やまるでむしやくしやして!!!』

譯者註　『アイテム』紙、一八七九年十一月十五日。

謝肉祭の明け方

時間といふことに我々が少しも心を留めない所の、そして大抵はローマンスを印刷した頁へ移し、歡樂を舞臺へ追ひ拂ふ實際的な時代に我々は住んで居るのだといふことを我々

が忘れる所の、夜が遣つて來る。がしかし假面舞踏の夜ほど——如何なる世紀のものでも無いやうに思はれ、しかもあらゆる世紀のものでも無いやうに思はれる所の、光りと音樂と異樣な歡樂との餘りに短い數時間ほど——浪漫的な夜があらうか？どうしたものか、そんな夜は浮かれ騷いで非常にやかましいにも拘らず、マルディ・グラ・ボールの眺めは、物凄い、そして實體の無い光景だといふ印象を時々起こす。他の時代に屬する姿の出現、假面假裝のヱニス風な不可思議、半ば面紗に包まれた美容の魅力、誰れとも合點の行かぬ謎のやうな姿の者からの人をじらす挨拶、その發音はいかにも奇妙なほど耳馴れたものであるのに、誰れの聲とも認めることの出來ぬ或る赤い唇から諸君の耳へ囁かれる面白い冷かしの言葉、移動して止まぬ群集の上に、スフィンクスの如くに闇く冷かな王その者、それからその陽氣な群集がオーケストラの音樂的な氣息の下に色彩を百色眼鏡のやうに變化させまた閃かすこと——これ等は殆ど現實なものとは思はれず、この世紀の散文的生活にはどんなことがあつても屬するものとは殆ど考へられないものである。面をかぶらずに動かずにぢつとして居る少數の冷靜な見物人すらも、それと如何にも奇妙な對照を成して居るので、一年にたつた一度、正しく夜の十二時から三時までの間に、大廣間で催される影のやうな宴會を無言で見つめて居る幽靈御殿の見張り人でもあるやうに思はれるのである。

一方、非常に美しい種類の衣裳は、それが實際過去のものであるので、それで幽靈のやうに見えるのであるが、もつと奇怪な異様な衣裳は、不思議にも化物の饗宴を思はせるやうてある。そして就中、彼の假面假裝の魔力は！女が、少しの晴れやかな天鵞絨と微光を震るはす絹とて、身をあんなに仙女と變じ得るといふは、實に魔法遣ひのやうでは無いか？ところがその素晴らしの夜が——星の寶石を附け、奇異な服をまとうた、この風變りな舊時の夜が、——近づきつつある。そして、光りと音樂とをば、王宮の生ぬるい、かぐはしい空氣をば、そして打震るふ星の蠟燭と、その大舞踏會の光りとを、青い日が一度に消すまで、謝肉祭の踊りを踊る陽氣な幽靈と剽輕な化物と麗はしの仙女との雜多な群集をば、疑ひも無く夢に見て居る外來人を滿載した白塗りの船を、幾十艘と無く彼の青い川は今、我々へ運びつつあるのである。

譯者註　『「アイテム」』紙、一八八〇年二月二日。

一　或る墨其西哥人の感謝

一　番註

或る美はしい小話がアルジニーから自分の手へ達した。〔アルジニーはニュー・オールリアンズの郊外〕

數年前、春の季節であつたが、ヱラ　クルッからの船が、色黒の墨其西哥の船員を乘せてこの港へ着いた。暑い太陽に照らされて仕事して居るうちに、その中の一人が大病に罹つた。で、その船が將に出帆しようとする時、その男を其處へ殘して置かなければならぬことになつた。正確な事情は我々に判かつて居らぬが、炎の空の下にあつてすら寒さに人を震るへさせる彼の不思議な熱病の一種の犧牲となつて、積んだ材木の蔭に横になつて居るのを、或る若い娘が朝早く發見した。といふ事實だけは知られて居る。その男は變則英語で水を下さいと頼んだので、その娘は、其處からさう遠く無い自分の家から持つて來てやつた。憐憫の念が他の一切の顧慮に打勝つた。そこでその外國人は直ぐと氣持ちの宜い寢床に置かれ、醫藥の立派な世話を受けることになつた。その娘と、その母とは、その男が再び丈夫になるまで病床に侍して看護した。その男は、全く一文無しの、貧乏な水夫で

あつたから、返報をしませうと申し出す事すら出來なかつた。そして、外國の港で外國人が覺えるほどの數語を除いては英語の話せぬ男てあつたから、口て感謝の意を表することすら出來なかつた。その男は、まだ十分にその健康を恢復しきらぬうちに、その老婦の諫めにも拘らずその家を去つて、感謝のあらゆる表示を以てして、その手に接吻して出て行つた。その後その姿を見たことが無かつたから、西班牙の或る船に乘ることが出來たのだらうと想はれて居つた。

……その後長く經つてからのこと、偶々、或る不思議な機會て、上に述べたそのアルジエーの若い娘がモンテヅマ市に居ることになつた。結婚して、その夫に連れられて行つたのてある。或る朝、二人が廣場(プラザ)から或る横丁へ曲がらうとする時、耳に金環を附け、背に大きな籠を負うて居た、色の淺黑い、小さな男が二人へ近寄つて來て、その若い貴婦人の顏を一寸の間眼を据ゑて眺めて、そして『マドレ　デ　ディオス！　エス　ラ　セニョリタ！〔おやまあ、あなたお孃さんで〕』とだけ叫んて、汚い街路へ跪いて、その貴婦人の兩手を捉へて、その唐金のやうな顏へ感謝の淚をたらたら流しながら、接吻に次ぐに接吻を以てした。その夫は玖馬の人て、彼(か)の水夫の話を幾度も聞いて居たから、當然それを理解して、その事態を承認した。その間その小男の墨其西哥人は、その若い細君を守護の天使に、聖者に、聖

母にたぐへ、又、それを本氣で口にするのを聞くと聽者の心を悦ばす彼の不思議にも美しい西班牙の讃辭を遣つて、その精神を吐露した。そしてその荷籠の紐を解いて、その甘さうな果物と美々しい花との何とも言はれぬ荷を見せて、それを贈物として、その女の住所まで自分に持つて行かせて呉れと、跪いて、懇願した。

　通辯になつて呉れた夫に向つて女はかう言つた、『その贈物は受ける譯には行かぬこと、危急の際、その男を助けることが出來たといふ愉快は、その救助に對する報償として餘りあるものであるといふこと、をその人に話して下さい』

　がしかし、餘りに切に願ふので、その女は麗はしい花束を一つ受取らざるを得なかつた。そしてその男は、その女に祝福を與へ給ふやうにと、天界のあらゆる聖者に哀願して、その荷籠を背負うて悄然として、其處を去つた。

　ところが、その男は、その女が歸宅する後をそつと人知れず追うて行つたらしい。その後、その女が墨其西哥に滯在中、毎朝、丁度山の巓きが黎明の薔薇色に赤らみそめる頃、召使が表通の戸を敲く音に眼ざまされて、それを開けると、その贈與者の感謝の念同様に溢るゝ許り濃い香氣を吐く、美しい果物と熱帶の花とが入つて居る籠を、其處に見出すだけてあつた。

譯者註　『アイテム』紙、一八八〇年四月十二日。

注意、アジム氏！（譯者註）

シテイ　アイテム編輯長足下――貴欄に、數日前、オクラ　フレイも上等な香料も入つてゐないゴンボの製法をお載せになつて居りました。我が新月都市の食道樂には如何にも大事な、そして他では何處でも完全には製されない美味な合成物は少しも略さずに、純眞なクリーオール料理人からの製法を何卒一つ載せて下さい。

アジム

我々は恰も『純眞なクリーオール料理人』て、しかも當市に於ける最善な一人に會ひに行つて來たのですが、その人は次に揭げる製法を知らせて呉れました。

ゴンボ　フエギ

全(まる)の雛鷄——雛鷄が得られなければ、その代りに精肉でも宜し。小さなハム。需用者の嗜好次第て、蟹又は小海老、或は兩方とも。要せられるスープの量次第てオクラ。玉葱、にんにく、和蘭芹、唐辛子、等。多量の米て濃くする。ゴンボ　フエギは切り刻んだ青い新しいゴンボ或はオクラて出來る。上記の成分を如何なる比例を以て使用すべきかに就いて規則を作らうとするは無用てあらう。恐らくは、正しく同じ製法に從ふクリーオールの料理人は二人とあるまいから。萬事は嗜好と經驗とに依る。

ゴンボ　フイレ

これは正しく前者と同じやうにして作るのだが、新しい青いオックラを使はずに粉にしたオクラを使ひ、また要せられるスープの量に應じて、牡蠣もまた使用する。アジム氏にして更に進んで知らんと思はるゝならば、お知らせあらば、第一流のクリーオール料理人を一人お宅へ伺はせますから、それとゆつくり御會談を願ひます。

古昔の立派なクリーオール傳說が、啻に料理法に關してだけでは無く、その上天然醫藥に關しても、迅速に失くならうとしつつありはせぬかと我々は氣遣ふ。古昔のクリーオール看病婦の藥草醫藥は無比なものであつた。て絕望的な病人の場合のほか、昔時は、クリーオールの家庭へ醫者を招くといふ事は滅多に無かつたものである。その起原はサンドミンゴに在るとかマルテニイークに在るとか自慢して居り、多くの善良な黑人老婦は、亞米利加奴隸制度の初年に亞非利加から來たものだと主張して居る、煎劑と罨法と下劑との家傳の祕法が——老齡の魔法師がその奴隸子女へ遺し傳へる唯一の家寶が——ある。これ等の祕傳には稍々宗敎的敬畏の念を以て保持せられて居るのが多い。戀も金も威嚇も、これをその所有者から强奪することが出來ぬ。子供が無いと、その祕法は十中八九その所有者と共に死んでしまふ。子供があると、その子供が大抵はこの神祕な力を承け繼ぐが、今の時代では、その父母達が博したほどの成功は餘り博さぬらしい。クリーオールの料理法及び藥草醫藥に關して殘存して居る知識は、これを得ることが可能なかぎり、總てこれを蒐めて公表したならば宜からうと我々は屢々提言し來たつて居る。そんな出版物は啻に文學的珍品たるのみならず、稀有な實際的價値を有つた著作であらうし、そんな著作の編著者は投資しても損にはならぬものと我々は眞實信じて居る。これまで屢々述べた種々な理由

の爲めに、こんな種類の著作の完全なるものを企てることは見込みが無からうけれども我々が手にすることの出來るもので、そして大なる價値のあるものがまだ澤山に殘つて居る。時間と閑とさへあれば、こんな珍品を蒐集し、排列することよりも善い、また愉快な事業は望めまいと思ふ。

譯者註　『アイテム』紙、一八八〇年七月八日。

譯者註 掘割り越しの談話

（外國人が或る古めかしいクリーオールの家へ近寄つて、ベルを鳴らして、其の家の女主人に會ふ。女主人は何か言ふ。外國人は驚いて喋舌る）

『あれは死んだの？』

『えゝ、さうです、旦那さん。彼の人は死にました。誰れ一人悲しいと思ふ者は居りません。あの人は非常に厄介な人でした。生きて居る間は始終、彼の人に會ひに來る人のこ

とて私はうるさい思ひをしました。誰れもあの人を、莫迦な事に金を使はうとする、氣の狂つた人だと知つてゐましたから。彼の人の子息が死んでから、誰れ一人彼の人の世話をしてやる者は居ませんでした。だから人が來て彼に石版畫を賣りつけました、大家が描いた油繪だと思はせて。すると五十錢もしない石版畫に彼の人は百弗、二百弗、三百弗と拂ひました。お買ひなさるなと私が言ふと、お前は無學者で、美術の鑑賞の出來ぬ低能だと私に言ふのでした。後で、油繪では無いことが判かると、賣りつけた男を、呪はれた駱駝だ——瘤の二つある駱駝だ、泥棒の寄り合ひ(タ　ドウ　ヲリユール)だ、獸の屍骸だ、と言ひ、地獄の五萬の炎にみんな滅亡すれば宜い、と呪ひました。そして他の事は少しも話さずに——泥棒のこと、虛言者のこと、暗殺者のこと、ばかり話して居りました。

もう芝居の番附を大家の油繪だといつて賣りつけることが出來なくなると、今度は描い繪を立派な水彩畫だと言つて賣りつけました。一枚三錢もしない物に、彼の人は七十弗拂ひました。額緣が多分六弗はしたでせう！しまひにみんなが騙つたことが判かりますと、彼の人は泥棒のことを、殺人者のことを、瘤の二つある駱駝のことを話しました。それからこの國は世にも最も呪はれた國だと言ひ——惡黨と下劣ものと獸の屍骸だらけだと言ひました。

『それからもう繪を賣りつけることが出來なくなると、今度はあなた方がセラミークと仰しやるものを、十錢の價値もしない古いコップや皿や椀を賣りつけて、支那から來たものだと言ふのでした。中々見つかりにくいものだと言ふものですから、彼の人は三十弗拂ひました。ところが或る日のこと、コップの底に、バーミンガム製といつたやうな言葉を見つけて、私は耳へ指を突込まなければならぬほど、非道い呪ひをするのでした。それからは彼の人は、もう泥棒だとか虚言者だとか、それから暗殺者だとか人非人とか、惡魔の子だとか、地獄の子供だとか言はんて——地獄が口を開けて、此の國のこんな呪はれた獸の屍骸を呑んで呉れれば宜いと言ひました。そして私には能くあなたにお話しの出來ないやうな事をもつと言ひました。

『それから又彼の人に、踵が紙で出來て居る靴と、膠でくつつけてある上衣を賣りつけましたが、上衣に五十弗、靴に十弗拂ふのを私はどうしても止める事が出來ませんでした。六十弗ですよ！そしてその靴がずたずたになり、その上衣がぼろぼろになると、三丁先きでも、その聲がきこえる程の呪ひをしても飽きることはありませんでした。その晩は夜どほし呪つて、誰れも寢つかれぬ程でした。あまり恐ろしいことを言ふので、私は兩耳へ綿を詰めたほどでした。が、彼の人は朝日が昇るまで呪つて居る聲が聽こえて居りました。

『その後に、今度は家具を、押入れ、テーブル、床、椅子を賣りつけました。黒檀だと言ふのでしたが、それは何かで上貼りをした松でした。彼の人は三百弗拂つたのですよ！テーブルは膠でくつつけてありました。だから或る日、彼の人が肱を突いたら毀はれてしまひました。そして床もただ膠でくつつけたものでした。彼の人は訴へましたが、先方は餘程金を有つて居るので、彼の人は辯護士に五百弗の金をつかつて、そして直ぐと訴訟もいやになつてしまつたのでした。

『その後に、今度は葡萄酒では無い葡萄酒、ヰスキーでは無いヰスキー、を賣りつけられて、金は大して有つても居ないのに、千萬長者のやうにどんどん拂ひました。買はないやうに騙されないやうにと、私はどうしてもしてやることが出來ませんでした』

『死ぬ前に何か言ひはしませんでしたか？』

『言つたと思ひます！彼の人は病氣では無かつたのです——決して病氣では無かつたのです。運動椅子に坐つたまま死にました。大變年がよつて、大變に大變に、年がよつてゐましたから。誰れかが何かを賣りつけに來たのでした。彼の人は立たうとしたのですが、立てませんでした。私が手傳はうとしても、それをさせませんでした。だから私は手傳はずに居ました。すると彼の人はかう言ふのでした、——「我が善なる神よ、慈悲を垂れ給

へ！――あゝ、畜生の寄り合ひ！己の爲めに祈れ！あゝ、呪はれた泥棒！エホバよ、私を憐れみ給へ！――此の國の獸の屍骸！――私は善なる物の天を信じます！あゝ呪はれた恥ぢ知らず奴！――神聖なる天使よ、私を扶け上げ給へ！――あゝ、瘤の二ある駱駝！――あゝ、我が神よ、我を憐れみ給へ！――この國は本當に殺人者と、泥棒との穢らはしい國だ！」かう祈つたり呪つたりしました。そして「腐つた國」と言ひながら、死にました。それから私達は、彼の人が一と財產傾けた繪を賣りましたが、それが三弗と十三錢にしかなりませんでした。ですが彼の人の死んだ時は、もう百にも近かつたのです。死んで然るべきだつたと私は思ひます』

譯者註　『アイテム』紙、一八八〇年七月十三日。

クリーオールの歌

次に記すのは、或る貴婦人が我が社へ持參されたものである。該貴婦人はクリーオール

て、これは現世紀の初にルイジアナで流行つた歌だと我々に語られた。

モアン　パ　コンネ　クイ　クイショーズ
　クイ　アッペ　トウルマント　モアン　ラ。
モアン　パ　コンネ　クイ　ラ　コーズ、
　キユール　ア　モアン　ブルレ　コンム　サ。
アー　デイ・クイ　トウルマン、クイ　ペーヌ、
　デイピ　ロンタン　クインベ　モア。
セ　トウルマン　ラ　パッセ　シエーヌ、
　プルトー　モアン　ムーリ　ヨンネ　フオア。

トア　コンネ　クイ　ベル　リゴール
　クイ　クーレ　ダン　バナニエー。
ウー　トア　テ　セ　フエ　ラ　フオル
　ラ　フオア　クイ　トア　テ　ベーニエ。

ヅロー　ラ　パ　クーレ　アンコール――
デ　フオア　イル　レテ　トウー　クール――
リ　サンブル　ルグレット　アンコール
リ　パ　ペーニエ　トア　トウージユール。

自由譯を次にしるす。

こんなに私を苦しめるのはそれは何だか判からない。
こんなに心臓(むね)を打たせるものはそれは何だか言はれない。
何たる苛責！何たる苦痛にこんなに長く惱むのか！
械(かせ)のくるしみそれよりも尚ほ、今にも死んだがこれよりよかろ。
バナナの中行く可愛の小川、あれをあなたは覺えてか――
身そそぎする時あなたがいつも遊び戯れたあの小川？
とまりましたよ　あの川水が。――
あの時このかた俄にそれが――
殘り惜しさに死んだのでせう

いつまで經つてもその漣はあなたを抱くこと出來ぬとて

此の飜譯は、既に述へたやうに、極めて自由に試みたのであるが、その小さな歌の精神は保つて居る。我が讀者のどなたでも、こんな珍品をもう少々持つて來ていただけば、我我は非常に有難く思ふことでありませう。

グランデツシーム（譯者註）

南部米國でこれまで創作された小説のうちで確に最も非凡な著作たる、この奇異な、無氣味な、力强い、そして悲壯な物語が、到頭書物の形になつて出て來た。

この書物がどんなものであるかは、豊富な拔萃をしないでは、如何なる概念をも與へることが困難である。それは全く夢では無い夢であり、ただ半分だけが物語の物語であり、或る意味に於ては一印象作家の筆に依つて創作されたものではあるが、恐ろしい現實に、恐ろしく類似して居る繪畫の連鎖である。死んだ者の顏が、その生きてゐた原物が有つて

ゐたのよりももつと強調された特徴を以て再現する彼の惡夢のやうに想像力に影響を與へる章が數々ある。

ケーブル氏の魔杖の下に出て來る所の、此の不思議なニュー・オールリアンズは、我々が居る此のニュー。オールリアンズであらうか?さうだ。だがその上に尙ほ或る物が在る。遙かの北國の冬の氷の如き風と雪に包まれた風景を目ざして海洋の彼方の岸邊を後にした放浪者が夜その夢に見るやうなそんな都市である。――その街路は夏の太陽の黄金もて鋪かれて居り、葉の落ちることの無い蔭深い木があり、死に絶えることの無い花があり、その街道はより古い大陸の拉甸都市の如くに古雅に建築されて居り、其處では歐羅巴の國語の鋭いアクセントさへその堅實性を失ひ、古い言語が新しい軟らか味とうるはし味と弱々しさとを得る半熱帶國の雜多な喧騷がきかれる、南國の或る首府なのである。そしてその能く知られて居て、しかも能く知られてゐない『グランデッシーム』のニュー・オールリアンズには、この言ふに言はれぬ魅力が悉くあるのである、否、以上にあるのである。

景色がさうであるならば、人物も亦さうなのである。我々はそんな人物を眼にし來たつて居るのであるが、同時にまた眼に能く見て居ないのである。或は、我々自らの印象を猶ほ一層正確に述べるならば、我々はそんな人物を何處かで見たことがあるのだが、しかも、

――その貌は見知らぬ顔では無いけれど、その人の名は忘れて居る或る外國人に挨拶された人の如くに――十分に確とは知つて居ないのだ、とさう我々は信ずる。

　だからして、此の著作には一種の朦朧さがある。しかしそれは、輪廓を和らげ、その觸るる總ての物を美しくする印度の夏の黄金色の靄の如くに、藝術的な朦朧さである。その古い街路は夏霧に曇つて居るやうに思はれ、いろいろな國語で物言うて居る人々の聲が、讀者の耳へは非常な遠方から來るのであつた。がしかし、どうしてさうで無い譯があらう。彼は遠く振返り見て、クレーボルンが初めてルイジアナに來た時の、今とは別な時代の、物言うて居る影法師に耳を傾けて居るのでは無いか。

　でもその朦朧さは決して朦朧過ぎては居らぬ。時にその景色は曇つて居る。しかしそれは、それを喚起するのが、この藝術家の勝利たる所以の彼の水分の爲めに、讀者の眼が曇つて居る時である。がしかし、時にその景色は、ブラークーペの死、或はクレマンスの悲慘な最期の時の如く、恐ろしく鮮明になつて居る。そんなやうな力强い繪には夢幻的な所は少しも無い。彼の藥劑師がパミールへ手紙を讀む彼の心苦しい出來事の場合にもそんな所は全く無い。あの場面は、クレマンスの死刑執行の場面すらも除かずに言つて、書中で一番眞に迫つて鮮明なもののやうに自分には考へられる。他の場面よりか、悲慘な度は少

い、はらはらさせる度は少い、恐ろしさは少い。が、模倣を許さぬ眞實味に富んだジャンル研究である。

ケーブル氏の文體に殊に目立つ特徴が一つあるとするならば、それは集中せられた描寫のその力强さであると我々は信ずる。古風なクリーオール・スタイルの家具が備へてある或る室内の次記の描寫に優して、もつと要を得て力のある、もつと簡潔で包括する處の廣い、もつと痛切に印象的なものがあり得ようか。尤も、この數行の文の力强さを鑑賞せんには、そんな室內を見たことがなければならぬのである。

その部屋部屋は如何にも豪奢な家具を有つてゐた。動かすことの出來ぬ大きさと重さ、高さの高い嚴肅さ、細工見事な唐金の嵌め込みの豐富さ、裝飾品の不動の美々しさ、懸垂せる水晶の無言の閃き、なごやかな半朦朧——といふのがその特色であつた。

或は次のやうな文、——

……その耕作地は病身者の宿舍になつた。ヴードウー〔土人の魔術者〕の言葉が到る處に成就されてゐた。鋤鍬はその姿を見せることはなかつた。牛の群は生垣の破目を抜けて野から野へとさまようて、骨を際立たせ、腹の皮を皺よらせて歸つて來るのであつた。雜草と刺草との——ラグキード、スマートキード、スニーズキード、バインドキード、アイアンキードの——狂暴な亂民は、立つだけの餘

地を得んものをと、互に掴み合うて、到頭眞夏の燃ゆるが如き大空が、その生長を阻止して、その刈り込まぬ頂きを飾るに、繁りに茂つた薄黒い花を以てするに至るのであつた。

この書は、その絶妙な美點あるに拘らず、このクリーオール都市の住者の好かれ者となるであらうかどうか、我々はこれを疑ふ。――その精神は當代の或る一人によつて激烈に批評されて居る。――その描ける繪は土地の人の眼には必らずしも喜ばしいものでは無い。――死んだ記憶のその喚起は愉快なものとは思はれぬであらう。とは言ふものゝ、そのローマンスの長處美點が、ケーブル氏自らの特殊な見解の爲めに、全く損ねられて居るとは我々は認めることが出來ぬ。それで、若し我々にして、この書に對して何か不利な批評を下さうといふ氣があるのなら、我々はただオノレ・グランデッシームの實在如何を問はうとするであらう。あんな時代に暮らしてゐて、社會問題に對してあんな思想を抱き得た、クリーオールのクリーオールがあつたものであらうか。

この書中には魔法（ヴードーイズム）に關して頗る珍らしい章がいくつかある。そして我々は、それは『不合理な迷信』だといふ、多數者の意見を有つことが出來ないのである。我々は、それは眞面目な、そして怖ろしい現實であると、或は少くとも嘗てはあつたと、信じて居る。そして佛蘭西語を話す住民のうちの頗る物の解つた家族て、我々と同意見を有つて居るものが

あることを我々は知つて居る。この題目に實際に眞面目な注意を拂つて居る者共は、ルイジアナ及び其の他の地方での魔法の歴史は、トフア液や中世紀の祕密な毒殺者の歴史と少くとも同様に、信用を贏ち得べきものである、ことを確に發見して居るのである。

我々は、この著作到る處に、音樂と一緒に公表されて居る、クリーオールの歌と覆唱句とに殊に我が讀者の注意を乞はなければならぬ。それは頗る珍奇であり、特殊の言語學的價値を有つて居る。特に或るもの、甘蔗を伐り倒す時ネグロが唄ふ亞非利加風の歌は、特別の注意に値する。

がしかし、我々はケーブル氏の著書をこれ以上に批評しようとすることは出來ぬ。この書は鑑賞せんとして讀まなければならぬものである。我々は此の書がどんなものであるかを世間の公衆に語らうと力めさへもして居らぬ。我々は此の書が藝術品として讀者に起こす所の特殊な印象を數言にして言ひ現はさうと試みただけである。

譯者註　『アイナム』紙、一八八〇年九月二十七日。

或るクリーオールの祕密（原註）

二人は一緒にハヴナから來た、その女主人もその召使も。その女主人には不思議なそして蛇に見るやうな美しさがあつた。一擧一動に蛇のしなやかさがあつた。――くちなはの（オフィディアン）魅惑があつた。――そしてその眼は太くて、黑オパールのやうに燃えてゐた。その女に會ふといふと、葛（かづら）や蔦の抱擁も、絡み附く――そして永久に絡み附く――力がこの女の抱擁よりも强くは無い、と誰れしも感ずるのであつた。その聲は際立つて愛らしかつたが、それには妙に深い音色があつた。――そしてその笑ひは一種不快な驚異の感じを起こした。眼鼻立を少しも變じないで口に發する、人を莫迦にするやうな、氣味の惡るい、底深い笑ひであつた。ほほゑみといふものは少しも無く、顏面の筋肉を少しも動かすといふことが無かつた。其處に居る人の顏へ、その大きな、輝かしい、愚弄の陰險な眼を眼瞼も動かさず見据えて、その脣をただ大きく開いて、その笑ひ聲が、その白い喉から鳴り響いて出て來るのであつた。が、笑ふことは滅多に無かつた。

誰れもその女の素性を知つて居るものは無かつた。その地區の佛蘭西人には不可解物てあつた。その家の部屋部屋は贅澤な家具が備へてあつて、青い繻子が吊るしてあつた。間(あいま)長く置いて外國人が――それには光澤無しの青い光りがある熱帶的に黑い髮をした、オリーヴ色の顏色をした男共が――その女を訪ねて來た。彼等は西班牙語だけて話しをし、その會見は夜遲くまて續いた。時には陽氣なやうてあつた。おしやべりな人は、シャンペンの栓を拔く音がきこえると言つたり、ハヴナ葉卷の匂ひが窓から漂ひ出て、緣側(ヴェランダ)を覆ひ包む灌木のあたりに懸かつて居ると言つたりした。がしかし、時には怒りに高められた男子の聲のやうな忌まはしい聲音がし、間々(あひだあひだ)にその不可解な女の、長い、そして高い、そしてはつきりした、そして愚弄に震るへて居る、奥深い笑ひ聲がした。

召使は、唐金製の女像柱(カリヤテイツド)のやうに丈の高い、出來(でき)の巖疊な、ムラットてあつた。その女主人に劣らず不可解物てあつた。佛蘭西語と西班牙語とを同樣流暢に話したが、それはただ稀な場合に於てであつた。一般には、サルタンの後宮(セラーリヨ)に居る啞だつて、これほど無言て、或はこれほど無神經てはあり得なかつたらう。一度も微笑したことが無かつた。一度も無駄口をきいたことが無かつた。物がきこえたり見えたりするやうには決して思はれなかつたが、それてゐて一切のことを見て居り聞いて居つた。ただ見知らぬ人の顏だけがそ

の女の注意を――それも一寸の間――惹き得るのであつて、その一寸の間、その觸れるものを燒くほどに猛烈に思はれる、言ふに言へない　をしてぢつと見つめて居るのであつた。その生きて居る物體をして、自分の顏がその女の頭腦の中で寫眞に撮られて居るのだ、五十年經つた後もあの頭の中には今と同じにはつきり殘つて居るだらう、と感ぜしめるやうな顏付であつた。遣つて來る外國人は、その女に、無言で、そして吟味されずに、受け容れられた。その顏は乾度能く知つて居る顏だつたのだ。その男のうちで、その女に物を言ひかける者は一人も無かつた。その女は精靈（ドッペルゲンゲル）以上のもののやうで、同時に五つも六つもの部屋に姿を現はすやうに思はれた。どんな物もこの女の眼に認められずに消え失せることは出來なかつた。決してどんな物をも視て居るやうには思へなかつたけれども。その發音は決してきこえなかつた。家の中をば、幽靈のやうに音を立てずに扉を開けたり閉ぢたりして、幻の如くに歩き廻はつた。少しも期待してゐない折に、いつも突然にその姿を見せた。探す時は、いつも何處にも居なかつた。その女主人はその女を呼んだことは無かつた。用のある時は、聲無しの希望が呼び立てたといふ『亞剌比亞夜話』のあの魔のやうに、突然床（ゆか）から出現するやうに思はれるのであつた。子供と遊んだことは無かつた。子供は、それが無言で傍を滑り過ると、その聲を鎮めるのであつた。見たところその女に獨得な微妙

な知慧で、十分に問ひを問はない前(さき)にその問ひに返事した。決して眠るやうには思へなかつた。その家を訪ねる人達は、その入口で、日の出る三時間前に、どんな他の時刻にもさらのやう、乾度出會ふに決まつて居つた。どんな物にも驚くといふ樣子が見えず、一切の事を豫期して居るやうに思はれた。さういふことが有り得るならば、その女主人よりかも一層不可解なぐらゐであつた。

　やがてその色黑の外國人が前よりも頻繁に訪ねて來るやうになり、その會見は前よりも猛烈になつた。時々その會話はカタロニヤ語でやつて居る、そしてカタロニヤ語を使つて居る時は言葉がいつもよりも餘計に怒りを帶びた言葉で、笑ひ聲がいつもよりも餘計に惡意の籠もつた笑ひ聲である、といふ噂があつた。ところが或る晩、その會見は實に物凄いもので、その地區の古風な佛蘭西人はみんな窓から頭を出して聽き耳を立てたほどであつた。硝子の毀はれる音、黑檀の机(テーブル)を猛烈に打(たた)きつける音がした。するとその不思議な笑ひ聲がしなくなつた。

　翌朝郵便配達が書留の書狀を一通配達すると、その家の部屋部屋に誰れも居ないことを知つた。その幽靈のやうな召使はゐないのであつた。その氣味の惡るい女主人もゐないのであつた。家具は總てその儘にあつた。前夜の祕密の唯一の記錄は、上等な絨毯(カーペット)の上の、

コップの毀はれたのが二つと葡萄酒の汚點(しみ)とてあつた。寢床は整然として居るのであつた。掛け時計はその大理石の臺座の上でやはりチクタクと打つて居つた。風がその青い絹の掛け物を動かして居つた。睡氣をさそふやうな女の匂ひが、香のやうに部屋部屋にたゆたうて居つた。箪笥の中には見事な絹物やレース物が猶ほ入つて居つた。ピアノは開けた儘てあつた。小さなアンゴラ猫が机(テーブル)の下で絹の糸卷を弄んで居つた。破れた扇が一本、贅澤な詰物(つめもの)をした搖り椅子の上に載つてゐて、椿の花束が一つ爐棚(マンテルピース)の上に凋れて載つて居つた。

その手紙は終に渡すことが出來なかつた。その部屋部屋は、黴と埃とがその立派な室内裝飾を害ねに來るまで、古昔のまゝになつて居つた。その外國人は二度と歸つて來なかつたし、それがどうしたのか噂に聞いた者も無かつた。その祕密は說明されぬ儘に殘つて居る。その手紙は配達不能郵便物取扱所に今なほ置いてある。が自分はそれを開いて、何が中に書いてあるか、見たいものと思ふ。讀者諸君もさうは思ひ給はぬか。

譯者註　『アイテム』紙、一八八〇年十月六日。

エリウシス（讀者註）

レースの帳（とばり）に遮られて居る涼しい和やかな光り。古めかしい高雅な室內裝飾。大まかに幅が廣く高さが高く、薔薇色の組み合はせ文字が刺繡してある、レース縁の枕を二つ並べた、四つ柱のクリーオール式の寢臺。輕い色取りで格子縞が出來て居る莚。その愛豹に騎つて居るアリアドネの裸體像を有つて居る唐金の掛け時計。肱掛椅子（フォーテューイ）と寢椅子（ソーファ）との上へ無頓着に投げ掛けてある繻子の薄光。女の不可思議な香（にほひ）。或る者が此處に居ないのだといふ感じ、そして筆者の方では邪（よこしま）にも闖入して居るのだといふ意識――それはその佛蘭西風の掛け時計が容赦も無くチクタクと音を立ててゐるので一層增して居る感じてある。――これがエリウシスであつた！

それでその祕密は？

嗚呼！その面白い祕密はかうてある。そのみやびやかな、和やかな、弱々しい、脆い、女性的な祕密はかうなのである！仙女のものとも覺しき絽と胡蝶の如き繻子、それから蛾

の如き天鵞絨と泡かと擬ふレースと霜に似たる絹、それから、そつと撫でさすつて見たいといふ氣を手に起こさせる、その名は女だけが知つて居る――神祕な、不可思議な――あの白い錦繻（サーマイト）。――そしてその總てを蔽ふ彷徨（さまよ）へるかをり――青春のかをり、美はしくまた女性的なもの總ての匂ひ、愛らしきものにまつはり、その衣服にからむ芳香（アンブローヤ）――シュラミの婦（をんな）〔雅歌六ノ十三參照〕の乳香（フランキンセンス）！

それは人間の胡蝶が夜毎その蒼白い蛹から拔け出る支度をする蔭深い隱れ場であつた。その綺麗な魔女（ホツチ）が、その魔力ある黃金の網を紡ぐ部屋なのであつた。

『我が糸は細し、我が糸は薄し。
　されど汝（なれ）よりは
　いと強からん、
この我が糸をば、斷ち得るその人は』

すると恐らくは、讀者は、それだけでは事が少しもまだ判からぬ、とつぶやく。
見給へ！我々が諸君にそれを知らさうと欲して居る祕密は、讀者よ、バヤデール〔舞妓〕の祕密で、――『ただ綿雲の薄きヹールを着くる』踊り子の祕密で、――望まん物總てを、

その王國の半ばなりとも、その女に與ふべしとの大なる誓ひを國王にさせたヘロディアスの娘のあの祕密て、ある。

燭光が弓と曲つた線の前へ踊りに出て來る踊り子を諸君が見る時、――壯麗な螢の如くに泡のやうなレースとクリームのやうな繻子に微かな光りを放つて、空に身を懸けて浮いて居るその姿を諸君が見る時、半ばては無い、まこと諸君の王國の全部を與へんとする――ヘロッドになりたいとすら願ふほどに、その足の魅力に諸君の眼が眩む時、――その衣物の不可思議に――婀娜者らしくただ欺かんとして人の心を惹く――埃及の踊り子が着てゐたやうなあんな、コーイー・ヹスタかヹンドウス・テキスティリスのやうに見た處は輕くはあるが、しかも忠實にその祕密を護つて見せない、――蜻蛉の翅ほどに薄くはあるが、しかもパ・ドユ・セドユクション〔誘惑の足〕の長い間のつつぱりに堪へるほど微妙な――その衣物の不可思議に諸君は屢〻驚きはしないか。それては、理想のローマンスを捨てて、說明の平板な散文へ降(くだ)つて行くことにしよう。

舞踊(バレー)に出るやう着附(きつけ)するには、その美しい踊り子は、湯あみする時のやうに、全部その

衣物を脱がなければならぬ。最初に着るのは、薄いそして非常に短い肌衣(シユミーズ)である。それは特別な恰好のもので、裾は低く切り裁つてあつて、兩肩からそれを支へる片(きれ)がある。それから普通の胴じめ(コルセツト)を着ける。それから緊衣(タイツ)を着ける。

緊衣(タイツ)は肉色の絹のもので、一枚片(ぎれ)である。それは長靴足袋と股引との役を勤めるもので、臀の處まで引上げて、腰の上て、コルセツトの上で、軟らかいが強い紐(テープ)で括る。胸の處まで全身それをきつちりと嵌め込むのである。上手に扱うて、そして餘りにしげしげ著(き)なければ、それはその有つ彈力の爲めに皺が寄ることが無い。

その緊衣(タイツ)の上へ、男の子の沐浴用ヅボン下(した)のやうに狹くて短い、モスリンの股引を著ける。それは陽炎の如くに輕いものであるが、非常に白いものである。それは道徳上の理由があつて穿つのてある。

その股引の上へ、想ひも及ばぬほどの、絹網(チユール)かターラタン紗の極めて薄い下袴(ペチイコート)を六つ著ける。それはみんな腰紐て緊めてあるから、ただの一著(ちやく)の形になる。それは輕くはあるけれども、數が多いのと糊が利(き)いて居るとの爲め、舞踊(バレー)の踊り子をば美しい白い蝿のやうに見えさす、あの優美な恰好をいつも保つて居ることが出來るやうにする。

その六枚の下袴の上へ、大抵は同じやうに輕い、がしかしもつと輝かしい材料て出來て

居るのを今一枚着ける、時にはそれは花で飾つてある。時にはそれはレースの縁飾りが附いて居る。時にはそれは白い。時にはそれは、その戯曲の性質に依つて、櫻色であつたり、深紅であつたり、他の色であつたりする。西班牙や伊太利の踊りではそれは頗る輝かしい。

次に緊衣(タイツ)と下胴(したコルセット)じめとの上へ、軟らかい白繻子の胴じめを着ける。その上へ、その時の踊りの性質に依つて、レースか、絹か、天鵞絨か、或は他の材料の、胸衣(ボーイス)を着ける。普通のバレー舞踊では、しかし、一切が白い、上靴(スリツパ)さへ白い。

嗚呼、その美しい小さな上靴(スリツパ)と言つたら！踵が無く、そして想像も及ばぬ許りに輕い樣みのものである。白か櫻色かの繻子のものである。上部は、足裏のあたり一面に木綿絲で厚く刺繍がしてあつて、足の壓力が革と水平にそれを平らにする邊の繻子を傷めぬやうにしてある。それへ壓力が主として加はる指の處は、その刺繍が非常に厚く且つ重く出來てゐて、當(あて)のやうになつて居る程である。この上靴はしかと踵を緊めて居るし、その上丈夫な紐で括つてある。

それでからやつて踊り子の身支度は出來上がるのである。髮を結ふことはこれは別事(べつこと)で、場合に應じていろいろ異(ちが)ふ。

だが、嗚呼！その小さな上靴は一度か、或は餘計で二度か、しか使ふことが出來ぬ。緊(タイ)

衣は屢々新しくしなければならぬ。絹網の下袴は絶えず替へなければならぬ。この脆い仄かな衣裳は殆ど總て絶えず修復を要する。レースと上の裝飾用の衣裳とだけが永く保つ。だから踊り子は一人殘らず、可也の靴の貯蓄を携へてあるかなければならぬ。オペラの一度の季節に、幾ダースもの靴が磨り切れてしまつて、それは練習の時のほか、役に立たぬからである。

そこで我々はこのエリウシスを十分に説明してしまつたから、この題目に就いてはもう何も言はないで、讀者をして――何でもその好むがままに――夢想するに任せる、とかう提言することにする。

譯者註　『アイテム』紙、一八八〇年十一月十二日。

拉句（譯者註）とアングロサクソン

加奈陀の佛語新聞は近時その讀者に警告して、加奈陀住佛蘭西人が徐々とてはあるが確

實にアングロサクソン要素に吸收されつつあると述べ、オッタワの谷へ突き進んで行つて其處に新開地を建設するが宜いと勸告し來たつて居る。この事は或は出來得ることかも知れぬ。しかしその結果は疑ひも無く同一なものであらう。にも拘らず、加奈陀住佛蘭西人は、世界中で最も節約的な、精力旺盛な、そして進取的な開拓者に屬するものである。確に、その血管に拉甸の血を有つて居る他の人間で、それまでかの有名な森林先驅者や川獵の獵師に優さる忍耐と勇敢とを示したものは無い。若し佛系加奈陀人がアングロサクソン要素に吸收せられるものならば、移住の洪水が鐵道の前進する線路と共に南方へと溢れそむる時、ルイジアナの佛蘭西人要素が吸收に反抗するどんな機會を有ち得るものか、と我我は自問を禁じ得ない。

　我々の意見では、——絶え間無く住民を輸入して以て佛蘭西人要素を維持して行かなければ——加奈陀住佛蘭西人の方が、我々のクリーオールよりかも、長く反抗して行ける機會が寧ろ多いと見て居る。古い風俗や習慣や方言や家族は、我々の國のごとき半熱帶國に於てよりも、酷烈な北國の氣候に於てより長く持續するものである。熱帶に近づくに從つて衰頽は——啻に物體の物質的衰頽のみならず、それと同樣に社會の狀態並びに制度の衰頽も——一層迅速となる：がしかし、我々の佛蘭西人要素は、加奈陀の佛蘭西人ほどそれ

ほどきつい物から出來て居るのでは無い。此處ではその要素は半ば熱帶化されて居る――永久に溫和な氣候が有つ魅力を感じて居り、加奈陀の佛蘭西人を鍛へ元氣づけた事情とは頗る類を異にした事情の下(もと)に數代の久しき暮らし來たつて居る。その上また、佛系加奈陀人は世にも最も吸收力の强い勢力に――その純潔と力とを一ぱいに有つて居る英吉利蘇格土及び愛蘭土要素といふ勢力に――これまで反抗せざるを得なかつた、といふことを記憶しなければならぬ。ルイジアナの地理的位置、その氣候、新鐵道線路の爲めにやつと近年害はれたその比較的孤立、これ等が手傳つてルイジアナのクリーオールをして、その個性を維持し、またその愉快な昔風な生活樣式を維持することを得さしたのである。

我々は、アングロサクソン人種がその植民する處すべてに於て疑ふを許さぬ優越を持する原因は何か、それを解剖しようと屢々試みた。多くの原因が擧げられて居るが、我々に滿足に思はれる原因は一つも無い。拉甸人種は、肉體の力には劣つて居るけれども、艱難に堪へる點に於て辛抱强い點に於て劣つてゐはしない。克己には劣つて居るけれども、聰明といふ點に於て劣つてゐはしない。一處不住(コスモポリタン)といふ點は餘計にあるけれども、愛國の念に於て劣つてゐはしない。アングロサクソンやチウトンやスカンディナヸアの特性には全然存してゐない幾多の眞正な特性を所持して居る。我々の意見では、北國人種の優越の眞

の祕訣は、羅馬の軍隊が野蠻人の侵入を退けるのに可也疲れ切つてしまつてから、ゴート人が西羅馬帝國を征服したことを幾分說明し得る原因と同じ原因に存する、と思ふのである。北國人種は拉甸人種よりも子を產むことが遙かに多い。例へば、今日の獨逸人は移住人て亞米利加を充たしつつある。どんな拉甸人種があんなに多勢の移住民を送り出すことが出來るか。多分拉甸人種總て擧つてもあんなに多く送り出すことは出來まい。この事實は恐らくは歐羅巴の北方の人種には好ましいこととてはあるまい。といふのは、より低級な機制の物があらゆる自然界に於て一番早く繁殖すると云はれて居るからである。がしかし、或る一國民の眞の力は勇氣や忍耐だけに存するものでは無くて、その自己增殖の能力に存するといふ事實を歷史は確證してゐる。またこの事は、我々が支那を眺めて見ると、考へて見て慰藉にもならぬ事である。思想が力よりも强いのはただ一時のことである。力が竟には、その前の一切のものを持つて行つてしまふてあらう。

譯者註　『アイテム』紙、一八八〇年十一月二十四日。

或る客

『フーアン　ゲレロ　イー　マルクエズ、と申すものでございます』――

それが朗々と響くので人の耳を驚かす聲があるものである。今自分を紹介して斯く口をきいた男の聲は、我々をして眼をその顏へ上げしめた。――それは和らかな雷音であり、筆者の耳にこれまで響いたうちで一番豊かな一番深い管樂器音であつた。この言葉を口にした人を見ないでその聲を聞いたならば、それは素敵に深い胸から、巨人の胴體から、出たものと必らずや想はしめたことであらう。ところが、さうでは無いのである。かう言うた男は、年は若いが、どつちかといへば細そりした男で、骨組みはしつかりして居るが、その體格の眼に見えての力よりも優雅である。丈は高すぎはしないが、その西班牙名前同様、振舞ひが尊大である。上品なマドリッド語調で口をきき、そしてその言葉は、大きな竪琴の一番長い絃を強い巧みな指で觸はつた時のやうな、音樂的な深みを以て、その唇から出るのであつた。その顏は特徴を有つて居つた――その横顏には羅馬の鷲の强い鋭さが

あつて、本當の拉甸顏てあつた。眼は大きく且つ輝いて鷹（フオークン）の眼のやう　眉は髭ほどに濃くて、顳顬（こめかみ）の方へ上がつて、微かに險を帶びて高まつて居る。口髭は顴骨の方へ捲き上がつて居る。そしてヹラスケッツの肖像に見るが如き尖つた黑い短い髯を有つて居る。この美しい不敵な顏を有つ頭は美しい恰好のもので、考へも及ばぬばかりの眞黑な縮れ毛に蔽はれて居つた——全く、圓柱なす頸の上に載つて居る古代羅馬軍人の頭てあつた。その皮膚は綺麗な唐金色て、拉甸人種の最も純良なもののこれ以上際立つたものを畫工が求めても求め得られなかつたことであらう。

この男は、第一流の西班牙藝術家（アルテイスタ・エスパニヨル・デ・ロス・プリメロス）で、西班牙の或るオペラ一座と一緒に西印度を旅して、ハヴナの御孃さん達（セニヨーリタス）をその驚くべき聲の魔力を以てして迷はしつつあつたのてある。今その男は、遠き南亞米利加共和國の一つに居る遠縁の人達を——自分の西班牙の家族のもので、自分と同じ名を有つては居るが、南天の十字星の下（もと）で生まれた人達を——訪ねようと思つたのである。その人達に會つたことはこれまで無かつたのてある。が、不思議にも、西班牙に居るその祖先來の家族は、一百年の久しい間その熱帶の子供達と關係を維持し來たつてゐたのである。

「で實際、ニュー・オールリアンズにはその共和國の領事が居られるのでせうね」と我

我は當惑して訊ねた。といふのは、噫ゝ！我々は一度もその人のことを耳にしたことが無かつたからである。

「シーエルタメンテ、セニョル！居ますとも」

そこで我々はその領事を探しに出て行つた。先づ第一、それは何といふ名か、それは何處に住んで居るか、それを見出す必要があつた。住所姓名簿（ディレクトリー）は所要の消息を與へることを拒んだ。それから我々は順次に、西班牙人の煙草屋、西班牙人の葡萄酒屋、西班牙人の醫者、西班牙人の藥屋、西班牙人の新聞記者（これは家にゐなかつた）、それから昔の或る西班牙人知事の名を有つた街路に住んで居る或る西班牙貴女、に會ひに行つた、

ところが、領事は何處に住んで居るかといふ事よりも、何といふ名の人かといふ事を見出すのが、たやすかつた。一時（いつとき）は、その人間は幻であり面影である、と我々は想ひ始めた。前には其處に住んで居たが、最早住んでは居ないといふ處を七箇處も我々は訪れた、――だから、徒に狐火の後を追ふ旅人のやうな氣持ちにさへなつた程だつた。

すると、その腕に籠を提げて、豹のやうにたをやかな若い女が横を通つた。その眼は非常に大きくて黑かつた。その皮膚は黄金色であつた。その姿にはあの言ふに言はれぬ曲線が――英語にはそれを言ひ現はす言葉の無いあのカンブルール・ドゥ・タイユ〔胴體の彎曲〕が

――あつた。

『ケー　エス　ボニタ！何て美しい女だらう』と、その聲樂家はその深い聲に愛撫の節をつけて叫んだ。その女にそのお世辭がきこえなかつたにしても、少くともその西班牙言葉はきこえたのである。といふのは、その女は突然振向いて、唐金の像のやうな無上に優雅な姿勢に立ち止まつて、その藝術家に向つて、銀鈴のやうな朗らかな聲で『どなたをお探して御座います？』と訊づねたからである。そして二人の黑い眼が出會つた。それは熱帶的な眼付であつた。男はその女の蛇のやうな優美さに迷はされ、女は己が前に立つその美しい青年に對する感嘆を隱さうとはしなかつた。さうだつた、その女は領事が――セニヨル　ドン　アレァアンドロが――何處に住んで居るか知つてゐた。ついその町の角(かど)であつた。『ミル　グラーシア、セニヨリタ！どうも有難う御座いました、お孃さん！』が、西班牙生れの娘ではなかつたのだ、――メキシコの中心にあるアヅテクの名の附いた或る奇異な町から出て來た女なのであつた。『ヨー　エスタバ　アラー！さうだ、あの家だ！』と、喜ばしげに、その藝術家は叫んだ、『能う憶ひ出せる――あの廣場(プラザ)や、あの古い家を――あの町角の。私はメキシコを旅して居た時、愉快な幾日かをあそこで送つた』それから古昔の記憶を呼び返して、二人は暫しの間、遙かに遠き南米の共和國のことも、その幻

の領事のことも、打忘れた。アディオス――左樣なら――と、二人のオリーヴ色の手が握り合ふ。それから古風な優しい、神への推擧の語を以てして二人は別かれた、永久に再び會ふこと無く――恰も、海を越えて向うの海岸へと飛び行く海鳥が、一寸の間互の眼を眺め見て、そして去つて行くが如くに。

『私は此處のオペラへ行つて見ました』とその男は言つた、『私はあれが好きです。しかし佛蘭西の人でも伊太利の人でも、西班牙の劇場はどんなものか、知つては居りません。ただ單に音樂と戲曲（ドラマ）とではありません。劇場は學校です。國民敎育の媒體です。感情と、表現と、行儀と、衣裳と、禮儀と、趣味と、美しい物の鑑賞と、それを共處で敎へるのです。西班牙の聽衆を悅ばせにくいのはその爲めなんです』

『あなたがお唄ひになるのを聽きたいものです』と我々は言つた。

『ロ　メ　ゲスタリア　ムーチョ、そりや大變嬉しい』と彼は返事した、『しかし、私は今夜此處を去ります。劇場でお聽きにならなきや、私にどんなことが出來るか、皆さんに判斷が出來ますまい。煙草をお吸ひになりますか』と、さういつて本當の『ブーロ』葉卷を我々に吳れた。

突然、隅のオルガンが『ファウスト』の一斷片を――軍人共のグローリア合唱を――奏

した。『嗚呼！私はあれは好きだ』と彼はつぶやいた。そして突然、その勇ましの歌が、豊かなそして深い調子で、しかし偉大なオルガンの聲の如くに金と朗らかに、その唇から流れ出た。それはほんの一瞬間であつた。がその一瞬間、子供等はその踊りを止め、古風な街路を通つて行く人達は足を停め、振向き、そして、その不思議な聲の魅力に驚いた。

『アディオス、セニョル。左様なら！』そして我々は永久に別かれた。

譯者註　『アイテム』紙、一八八〇年十一月二十六日。

クリーオールの下女（譯者註）

有色のクリーオール下女は餘程特色がある。大抵は聰明で、活潑で、拔け目が無くて、有爲有能である。概してその從事することはどんな事でも能く爲し遂げる。その結果は多分かうだらうと知つて居て、不正直なことをするには餘りに聰明である。顏付を、表情を、それを命令同樣に理解する。言ひ現はさないうちに、こつちの思ふ事を爲し了へる。一切

の物事を目にして、そして一切の物事を耳にして、そして何も言はぬ。完全な女優であり、還眞をも欺くことが出來るものである。謙遜を眞似し、愛情を見せかけ、無智を粧ひ、眞實の方よりも眞似の方が眞實うまくて、そして同一の目的を果たすほどに悲みを佯る、ことが出來る。想像も及ばぬばかりの美はしいしとやかさを以てして虚言を言ふことが出來、また、虚言かと思はれる風にして本當のことを言ふことが出來る。性質を驚くほど早く讀んで、一度その傭主の氣質を知ると、その氣持ちをいつも豫想して、そのどんなに一寸した願ひにも應ずる。これまで世に存在してゐたうちで一番感心な給仕機械である。絶對に澁滯が無く、傭主又はその子供等に一點の愛情も眞實の敬意も有たずにゐて、しかも、どんな缺點もとても見つけ出すことが出來ない程上手に愛情と敬意とを粧はふ。一度一家内の家風を覺えるといふと、それに命令を與へる必要は滅多に無い。要求せらるることは悉悉く知つてゐて、悉〻くそれを果たす。規則正しく給金を貰ひ能く待遇されると、一家に一代も居つづく。實地仕事に使はれてゐない時は餘程の自由を要求する。そして勞働時間後自分の思ふままに出たり入つたりすることが全然自由で無いと、一家に居續いてはゐない。日常の事悉〻くを知つて居り、しかも知る用の無いことまで隨分と知つて居る。自分達の傭主を、用心深い人だと考へると、訊ねもしないのに、不思議極まる秘密な消息をき

かせて呉れる。無限の害を與へ得る一家の由緒を有つて居るが、相互間のほか、それを使用することは滅多に無い。緣故の無い人には絶對に聾であり盲目であつて――彼等の知つてゐない人に訊ねられた場合、賄賂も約束も强ひて彼等から物事を聞き知ることが出來ない。彼等は感情を害しないやうにして人を近づけずに置くことが出來、また、自分を不快なものと思はれないやうにしてどんな程度までも人に馴染むことも出來る。無上に邪惡であつてゐて。――しかも至極有德な風に見せることが出來る。その上危險な敵となることも出來る――そして彼等の敵意は怖るべきものであるといふ事實は否定が出來ない。幾つもの國語で話し、そして氣味の惡るい歌をうたふ。金錢の爲めにどんな想像力でも考へ得るどんな事でもする。そして實際その金が續く間だけは頗る親切である。實際に非常に淸潔好きで、迷信的で、そして頗る勤勉である。仕事をして居る風は見せないで非常に辛く仕事をして居る、そして死ぬ程一生懸命に仕事をして居る風を見せてゐながら殆ど仕事をしてゐない或は全く仕事をしてゐない、といふ癖がある。その美德は單に生まれながらの非常な拔け目無さの結果で、その拔け目無さといふは、佛蘭西語を話すクラトルーンやムラットの血管に鼓動して居る拉甸の血と共に、古昔から傳はり來たつたもののやうに察せられる。物を盜むことはしない。が、道德違犯が公然の不名譽や法律上の處罰を齎さぬ時

は、道徳上の躊躇を少しも持たぬ。亜米利加人と英語を話す人とは好まぬ。そして多分、クリーオールで無い者は誰れも彼等の取扱ひ方を知つてゐないであらう　この標型の人間は迅速に失くならうとしつゝある。が、それは人間の本性についての考へられ得る限りの最も異常な研究の一つを確に提供して呉れる物である。

譯者註　『アイテム』紙、一八八〇年十二月二十日。

家庭（譯者註）

ニユー・オールリアンズの特色に就いて妙な事を人が言ふのを我々は誰れも耳にして居る。太陽が西から昇り、水が下（した）から坂を上へ流れる町だと耳にして居る。糞堆の上に建つて居ると言はれて居るのを耳にして居り、西印度の船長共が屢々口にするもので、それを原語ですら引用することを我々は能うしない、もつと不敬な、誰れも知つて居る西班牙の言葉がそれに就いてある。が、昨日、我々は三十年續いて暮らして居る老住民の訪問を受

けたが、その人は對談中、ニユー・オールリアンズに就いてのその意見をかういふ文句で演說した、「ニユー・オールリアンズは結婚しないでは自分の家庭を造ることの不可能な町です。私は此處で家庭を造らうと三十年間力めましたが、失敗に終はりました」そこでこの言葉が、それは實際この町の何かの特色に基づくものであるのか、それとも、生が次第に經つて行つて、次から次の冬が、その鬢に霜を加へるにつれて、總ての獨身者が感ずる所の、一家の平穩な慰藉を求むる漠たる憧憬に基づくものであるか、それを我々に默想せしむるに至つた。後者の爲め、と我々は信ずる。といふのは、ニユー・オールリアンズについて我々は善く考へたいからである。

一つ確實な事がある。人生の慰安は何かといふ事を諒解して居る分限者は、結婚をしないで、到る處に自分の家庭(ホーム)を造ることが出來ることである。が、分限者なるものは人生を支配する一般の法則には除外例になるものであるから、我々は此の事をば、富裕では無い者共、職人としてのその才能或は自由職業者(プロフェショナルマン)としてのその技術がどんなに獨立たらしめ得ても、なほ且つその一生の大部分他人の爲めに働くことを期待せざるを得ない者共、の見地からして考察せざるを得ぬのである。その氣質が感じ易い氣質であればあるほど、その思想が藝術的であればあるほど、結婚してゐようが結婚してゐまいが、その欲求に應ずる

家庭を得る事は、言ふまでも無く、一層困難であるに相違無い。結婚しないで居ると、どんな町にゐても、其處に數年生活しなければならぬとなると、辛い目に逢ふものと期待して宜いであらう。そんな人に幸福なことには、そんな人は多くは放浪的氣質の人である。或る町に直ぐと飽く。好い提供を斷わつたり或は其處に居ついて居れば全然獨立な身になれる一等好い機會を無視したりして、荷物を括げて他の處へ出かけて行く。轉がる石だから、それには金色の苔が附かぬ。そして風景と氣候との變化、新しい場處と新しい顏、新しい友人と珍らしい經驗、これが彼等には殆ど人生の必須物となる。かういつた人間が世界のボヘミアンである。彼等は他と離れて一社會を爲して居る。彼等はまた、規則正しい習慣の一般の平穩な人達には判からない特殊な風に人生を味はふ。ところが世には、引續き獨身でゐたいと希ひ、そして運命がその居場所を定めた處に住むか、又は一切の物を失うて再び世界との奮鬪を始めるといふ危險を冒すかしなければならぬことになつてゐて、永久に家庭といふ幻を追求して、そしてありとあらゆる手段を試み、ありとあらゆる種々な失望に惱んでしまふまでは、何が故に自分の家庭が造れないのか分からない、といふ人間が多い。固より、そんな人間には、家庭といふ觀念に、その青年時代の憶ひ出が——居心地の好い部屋、平穩、上等な食物、親切な注意、行つたり考へたりの自由、それを棄て去る

のは還憾て、晩方にそれへ還つて來るのが樂しい或る物、愉快な挨拶、悦んで吠えつく犬、爐邊の氣持ちのいい椅子、毛氈の上で咽喉を鳴らして居る猫、さういつたものの憶ひ出が……結ばれて居るのである。ところが女の助力なくしてどうしてこんな物を得ることが出來るか、誰れも今まで說明しようとした者が無い。女は家庭の精神である。そして女無くしては、家具と煉瓦の壁とのほか、他に殆ど何も無いのである　女は一切の事物を變形しまた美化するのである。諸君は鼻でフーンとあしらつて莫迦な！と言ふかも知れぬ——しかし諸君に、家庭なるものの——その言葉を幼年時代に說明してきかされた意味での家庭の——愉快といふものが、女無くしてどうして得られるものか、說明は出來はせぬ、女が居なければ、あの人はかうかういふ處に住んで居るとは言へよう。しかし『あの人はあそこに家庭を有つて居る』と言ふことは、全くの虛僞である。その人は家庭は有つてゐないのである！

従つて、ただ家庭を有たんが爲めに實際結婚する者が多い——これは、社會狀態の自然の結果ではあるけれども、隨分と愚かな話してある。我々は此の町での實例を一つ記憶して居る。それは數年間絶えずその住所を變へてゐたが、どの一軒でも休息或は慰安を見出すことが出來なかつた或る若年の佛蘭西人であつた。初めには餘程澤山の動産を有つて居

つた。がそいつがその遊牧的生活に重大な邪魔物となるので、段々と賣つて行つて、到頭その荷物は新聞包み一つとマッチ箱一つになつてしまつたのであつた。その男の結婚は、最後には、頗る不幸なものとなつた。その男は我々の此の大なる人生の富籤に不仕合はせな數を引き當てたのである。が、我々が考察して居る點へ話しを戻すと、我々が話した人達のやうな事情の下にある人間にはどんな家庭があるのか。下宿屋は如何なる家庭をも提供して呉れはしない。下宿屋といふものは善良なまた必要な制度である――が、それには家庭的生活といつたものは一寸も無い。家庭的慰安を熱望する人は、或る一定の期間を越えては、どんな下宿屋でも一軒の下宿屋に暮らして行くことは出來ないもので、また旅館にも暮らして行くことは出來ないものである。私かに住むといふことが出來ない。他と隔離して暮らすといふことが出來ない。いつも自分が知ることを欲しない人達と接觸せしめられ、胃の腑へ收めたくない品物に辛抱しなければならぬ。家族の中で暮らすことは下宿生活よりも善い。しかし、固よりのこと、私的一家族の寄食者は、自分はその一家族の一人では無いといふことをいつも感ぜしめられる。そしてその人にさうと感ぜしめる遣り方は、世にも最も愉快なものでは無い　家具附きの部屋を借りて、そしてレストランで飲食すること、卽ち所謂「ボーディング・アラウンド」は、徒ら事であり精神の困惑であつて、

ホテルに居るよりも自由で無くてゐて却つてホテルの飲食と同じほどの費用がかかる。家具附きの部屋！——家具附きの部屋！——いやな、いやな題目で——その詳しい話しがしたくないほどいやな題目である！またそんな暮らし方には少しも安定といふことが無い。丁度自分の氣に入る處を見出しても、どのぐらゐそれが續くものか一向判からぬ。が、一事はいつも確信してゐなければならぬ——それは、その家が善い家だと思はれれば思はれるほど、恐ろしい、そして意外の事件が何か層一層早く出來したさうだ、といふ事である。

それでそれから？

　さうだ、下宿屋とレストランと家具附き部屋に飽いてしまふと、自分の家一軒借りるか買ふかして、そしてそれへ家具を備へつけようと諸君は試みるかも知れぬ。ところが人間といふものは、その家のあたりに、ただ犬一匹でも構はぬ、侶となつて與れるものを何か有つて居なければならぬものである。そして、その上にその部屋部屋の世話をして與れる人を誰れか有たなければならぬ。若し家政婦を傭ふならば、世間の悪評を避ける爲めに、自分の見出し得る限りの一番年とつた一番醜い女を傭はなければならぬ。それから召使と他の者とがその獨身者を非道く瞞着する。その上に、そんな男の近處に住んで居る者は悉く、その男を狂者か變り者かと考へて、その樣な取扱ひをするであらう。自分の家にゐ

て獨身で暮らさうとする男には――その男が非常に金持ちで無い限り――社會の手が揚げられる。時には、佛蘭西人居留地でやつて居るのを我々が知つて居るやうに、五六人の獨身者が一緒になつて一軒の家に家具を備へ附け、家政婦を一人傭ひ入れ、自分等だけで倶樂部的生活をやる。ところがその人達が仲違ひすると、その全設備が家具附き部屋と下宿屋とに共通な難儀の結合よりかもつと不愉快なものとなるであらう。

氣安めになることは一向無い。家庭を有つ爲めには、金持ちになるか或は結婚するかしなければならぬ。そしてその場合にだつてそれが有てるほどに仕合はせで無いことがあるかも知れぬ。

譯者註　『アイテム』紙、一八八一年一月八日。

多分ニユー・オールリアンズには、合衆國内の他の同人口のどんな町にあると同じほど

の立派な住宅があらう。そしてその住宅を取り巻く地面と庭園との殆ど熱帶的な美しさが、北亞米利加の他の多くの町では見られない一種の妙趣をそれに與へて居る。さういふ立派な住宅は大抵は、ニユー・オールリアンズ家屋の一般普通の建築とは全く異つた設計に基づいて建つて居る。そして小さな家屋でも新式な建築がこの町の方々で流行つて來つつあるのを觀るのは快適である。我々のうちで御殿屋敷（パレース）に住むに堪へ得るものは少い。ところで全く御殿屋敷的な住宅を除くといふと、比較的に言うて、この新月の町には氣持ちの好い住宅は頗る乏しい。繪のやうな美しさは多分にある。が、繪のやうな美しさといふことは安樂といふことでは無い。古風な場處には、古雅な部屋には、思ひ切つた張出し縁（バルコニー）には、中世風な屋根窓には、尖つた屋根には、レモンエローに薔薇色に或はほの綠に塗つた小屋（メーゾネット）には、外部の美趣は多分にある。が、それ等總ては家の居心地好さを與へて呉れはしない。半世紀前のニユー・オールリアンズは、今日のニユー・オールリアンズの要求に合つてゐないのである。人口が増加した。此處には富裕な人が以前よりは無限に少い。一平方哩に對する住民がずつと増して來て居るので、嘗ては富裕な栽培者や他の人達の冬期住宅となつてゐた大きな家屋が、その所有者の利益になるやう、今は幾多の家族に割貸しにするか、または、下宿屋に變形しなければならぬのである。住宅の古風な建て方を變更することが

次々に來る年毎に、層一層強制的となりつつあるのである。

古風な建て方をする原因は、一代(だい)前にはまだ在つた全然異つた社會狀態に歸すべきもので、そんな建て方を現在殘して置かなければならぬ理由は實際少しも無いのである。にも拘らず、日今建築中の新しい家屋て、永久に廢止さるべき丁度その古風な不都合な設計で、造られて居るのを、我々は屢々眼にする。ニユー・オールリアンズの家屋の外觀については、いけないと言ふ點は少しも無い。全體の感じは頗る氣持ちが好い。――藝術眼を具へて居る人なら、美しい屋根窓が附いて居る尖つた屋根の雁木形の輪廓、――みやびやかな張出し緣(バルコニー)の鐵の唐草模樣――如何にも輝かしい綠色の、堅牢な扉と盜賊の入れぬ錯戶――を愛せずには居られない。古風な家は決して醜くは無い。だがその內部の設備は全く非難に値するものであつて、それを近代的家庭には殆ど不適當なものとならしめて居る。例を擧げれば、ニユー・オールリアンズには幾千と無くあるところの、尋常普通の對のコテーヂを見てみ給へ その部屋部屋の總てが、大きな開き戶か、滑り戶か、或は尋常な戶かて、互に相通じて居る計りでは無い、各々の家の各々の部屋が、向ひ側にあるその間(あひ)の子家(こいへ)の一々の部屋に通じて居ることが毎度ある。だからどの部屋にも、窓の他に、二つ乃至三つの戶があるので、濕氣の多いニユー・オールリアンズの冬に、どの部屋をも暖めることを

困難ならしめる。祕密を保つことは不可能である。他人との隔離は無駄骨折りである。二軒の家の屋根裏部屋でさへ互に相通じて居る。誰れか家一軒探して居つて、こんな設計に不滿足を表明するとして見給へ、その持主は驚いて絶叫するであらう、「なあにあなた！戸は一つありますがね、その戸はしまつてゐます！」薄い一枚の戸が他との隔離を、或は靜けさすら、確に與へるといふことは無い。物音が一つ一つ兩方の家ではつきりときこえる。——夜間の子供の泣き聲、家族のいさかひ、家內での仕事の音、全く人に聞かれてはならぬ他のいろんな事、それがきこえる。そしてその戸が二重でさへ無いのである。十中九までは、日の光がそれを透して射し込む。この事が此の町で居心地の好い家具附き部屋を得ることを非常に困難ならしめる。どの部屋も或 他の部屋に通じて居る。隣りに居る男なり女なりの一擧一動がはつきりときこえる。こんな事は廊下を造れば避けることが出來よう。ところが此の町には、廊下といふものが如何にも少いのは、確に餘地が無いとか餘地が貴いとかの爲めでは無い。天井の高い、風通しのよい、——しかし寒くて、居心地の惡るい——廣大な部屋がいくつもあつて——それが他の廣大な部屋部屋へ通じてゐて——みんな他の家に通じてゐて、際限無しである。

ところで、家の居心地よさといふことに、他のどんな事にも優して主要なことが一つあ

るならば、それは他との隔離である。英國人はこの事を米國人よりも餘計なぐらゐ理解して居るから、そのコテーヂは模範的家庭である。人は自分の家へ入る時、自分の好きな時に、世界の他の者と離れて引籠もりたい、自分の家族とだけでゐたい或は自分の思想だけを侶としてゐたい、その日の心配事の後でもう騒いだり頭を惱ましたりしないで休息したい、とから願ふ。しかし、自分と、自分の家族では無くて實際同じ床の上にそして殆ど同じ部屋の中に住んで居る他人と、の間に小說本の表紙ほど薄い仕切りしか無いのを見る時、どうしてそれが出來ようぞ。自分の他人を容れぬ書齋で一時間樂しみたいと思ふ時、その間始終、次の部屋での、それが自分の召使が立てるにしろ自分の子供が立てるにしろ、物音に耳を傾けなければならぬとあつては愉快では無い。一家の人達は、時には、その一家の他の者共と離れて居ることを必要とすることがある。——業務上の事を話さなければならぬ折がある。子供や召使の耳に入れてはならぬ計畫がある。一家の長たる者が一　ゐて考へたいと思ふ無數の物事がある。それから冬そんな家を暖めるには、同じ床の上にある部屋はどの部屋も火を置かなければならぬ。さうしなければ、折り戸はあつても無駄であり、滑り戸は心を惱ます厄介物であることを知るであらう。對のコテーヂは實に嫌惡すべきものである。そして一軒建てのコテーヂでも、廊下が無ければ、厄介ものである。寢る

のに、誰れか他の人の部屋を通つて行くか、又は誰れか他の人に自分の部屋を通つて行かせるか、しなければ寢に行かれないといふことは氣持ちの好いことであらうか。それは文明的生活法とさへ言へない。ところが確にニュー・オールリアンズの大多數の家は、普通の合宜（ディセンシー）といふことに餘り注意しないで建てられたもののやうに外國人には見えることであらう。本當にいへば、二十五年前の此處の人達は、今生活して行くこととの出來るのとは非常に異つた生活をして居つた、といふだけのことである。一切の事物がより大きなより鷹揚な規模であつた。そして恐らく、その住宅はその當時は、その住者の必要に立派に適つてゐたのである。今日は萬事が變つて居る。繪のやうに美しい、そして居心地の悪るいニュー・オールリアンズは、或は外觀はそれほどに人の心を惹かないが、それほど當てはづれをさせないて、そしてそれよりもつと實質的なものに取つて代はつて貰ひに失（な）くなつてしまはなければならぬのである。その結果は確に肺病が少くなり、僂麻質斯が少くなるといふことであらう。

譯者註　『アイテム』紙、一八八一年一月十二日。

積極的な意見

バルザックの「ポー ドウ シャグラン」の珍らしい繪入版に、諸君のうちにそれを見たことを憶ひ出される方があるかも知れない、奇異なそして恐ろしい顏がある。それはその不可思議な羊皮紙文書を賣つた骨董屋の顏である。額は素敵に廣く、鼻はレッチの粗畫のメフイストのそれの如くて、口は薄くて眞直ぐて冷靜て、眼は大きくて險があり、眉は鼻の上に蝮のやうに纏れて額顳向けて意地惡るげに上がつてゐて――要するに、非常に陰險で、非常に物凄くはあるが、その上また一種惡魔的蠱惑を以て人を蠱惑する顏である。ところで、そんな顏が年が若いといふことと女であるといふことの爲めに變形され和らげられてゐて、脅迫的惡意のその力は失はずにゐて美しくされて居り、その鼻はいかつさが少し尠く、その眼は少し大きく、その眉は少し輕やかだ、といふ顏を諸君は想像することが出來るか。出來れば諸君にこの踊り子の顏が眼の前に浮かんで居ることになる。

自分とその女とは無花果の樹の下に坐つて話しをした。少くともその女は話しをした。

自分はその女の蜥蜴眼にじつと見つめられながら聽いてゐた。その女は近代語總てを流暢に使ふやうに思はれた。それはそのしなしなした優しさと手足を曲げる此の上無しの巧みさとで、歐羅巴全首府の半分へはやつて行つて其處の觀客の狂熱を高めた女であつた。その女はハヷナ、ブエノスアイレス、ヷルパライソ、ヹラクルツ、メキシコ町のことを語つた。その女獨得の嘲弄的な言ひ方で西班牙舞踊の話をした。いつもその聲は何か蘆で造つた樂器のより低い音のやうな深い麗はしい聲であつた。が、その聲の深さと麗はしさとが、聽く人には不愉快な感じを與へた——丁度、危險へ誘惑する、妖術者の音樂が與へるやうに、あんな感じを。

伊太利風な猛烈さを以て、嫌惡の筆に述べがたい身振りをして、かうその女は言つた。

「私は男は嫌ひです。あゝ、どんなにか私は憎むことですか。私は踊つて居る時に、手を觸れたくて殆ど氣違ひのやうになつてゐてそれに手が屆かない、屆いても觸れることを能うしない、物を見て居るやうに、私の身をあの幾千の眼がじつと見て居るのだ、と思ふと面白くなります。愉快になります。そして私が舞臺でにこつと笑ふことがありますが、その微笑(ほゝゑみ)は機械的で無いことが多いのです。抑へられぬほどに強い、面白いなといふ念に誘はれてするのです。幾百人もの若い歡迎者が、それに滿足を與へることの出來ない或る願

ひに一心になつて、劇場を出て行くことを知つて居ります。あゝ！私は男は嫌ひです。

一圖よりあなたは、そいつ等が私達を惱まし苦しめることは、私が知つて居ると同樣能く御存知です。山と貰ひます、手紙を、進物を――やくざ物を！戀ですつて！フン、莫迦な。私の生活のやうな生活では、戀が何の價値があるか、誰れも直ぐに分かつて來ます。元は貰つた手紙を讀んだものでした。今では初めの一行以上讀むことは滅多にありません。進物？さうです、欲しいのはそれだけ。

『そんな莫迦者をどう私が取扱ふかお話しませう。進物が添はつてゐなければ手紙には決して返事をしません――それもその進物が何か價値のあるものでなければなりません。花！――私は花は嫌ひです！花が私に何の役に立ちます？私の足下へ投げてから二十四時間經つて花に何の價値があります？あんなものを悅んで貰ふなら、灰の入つた瓶か、砂の入つた壺を悅んで貰ふてせうよ。あんな無價値な花を私が拾ひ上げるとあなたは想ひますか？決して！私はそれを拾はないやうにする方法をいつも見出すことが出來ます。

『それから私は字に書いて返事することは決してしません――決して！莫迦でない女だつたらどんな女でもそんな事はしません。誰れか他の人に私の口上を傳へさせます――私に會ふことを許されるのは世にも莫大な特權だとその莫迦者が想ふやうな言葉をいつも使

つてです。その男が私に會へば、その男の、その爲めにの費用は大したものです、若しかその男が少しでも身代を持つて居れば。――身代を持つてゐなければ――そのことは、私には直ぐ判かりますが――その男は二度と私に會ひはしません――舞臺の上で無くては。それから、その男を私はどんなに苦しめることが出來るか、それが判かるのが面白う御座います。

『私は思慕する者に決して愉快な言葉は言ひません。なぜつて、若しか言へば、その莫迦者は、自分は非常な感銘を與へてやつた、と眞實思ふでせう、私には、私獨得の取扱ひ方がありますす。固より、いつも進物を持つて來ます。私は決して御禮は言ひません！決して！私はそれを見ます。それに難癖をつけます。それを笑ひます。その男を冷かします。そしてしまひに、その男がどうしていいか分からぬと、私はその進物を横へ置いてやります。それは貰つてやるといふことを意味します。次に來る時はもつと好い進物を買つて來ます。何かを私に買つてくれる度毎に私は前よりか段々惡るい待遇をしてやります。段々と惡るく！私は男が泣くまで――えゝ、泣きます、泣くまで――苦しめてやりました。可笑しな莫迦者達ですね』

『いゝえ、男は非道く取扱へば取扱ふほど、一層好いて來るものです！そりや御承知て

せうが、それは全く熱狂です――風と泡と煙です――氣まぐれ――男にそれが出來ればまた勇氣があれば、その爲めに私の生命と幸福とを犠牲にしようと思ふ、血の一時の鼓動てす！しかし私には男といふものが判かつて居ります、魚を釣る人が魚を弄ぶやうに、私には男を弄ぶことが出來ます。時折私に接吻をさせてやります、若しか男が餘りに汚くなければ――それからまた、私の腕や肩に觸はらせ、私を撫で下ろさせもします――御存知てせう、丁度女が猫ててもあるやうに、男は女を撫でたがることを！てすが私には自分を尊敬する念があります！私は自分といふもの――さうです、それに私の母もてす――それを除いて何も信じません　ところで、男が私をその傀儡に、その人形に、その小猫に、搾つて棄てられるそのレモンに、するに任して置くとあなたはお想ひになりますか？フン！私には火蛇（サラマンダー）のすることがされますよ。火をいぢつても指を燒かない手品師です。瀝青（ピチ）に觸はつてそれでよごれることがありません。どんな男もそんなことは無いと廣言はつけません。舞臺に立つ者についていろん事を言ふ虚言者（うそつき）がゐます。しかし私は何とも思ふものですか。私の事を何だ彼んだと言つた奴には、今迄みんな非道い目に遭はしてやりました。

『恐はくないかつて？莫迦な！何が恐はいのてす？向う見ずな奴はその顔を見ると判かります。私は今迄ただて生活したり旅行したりした事はありません。そして私は私の時間

をきちんと計算します。或る町に私の滯在中どんな事が私には爲し遂げられるかちやんと判かります。それから、あなたには判かりますまいが、誰れ一人私の顏を罵詈することを敢てしたものはありません。いふのは、下品な言葉で惡しざまにです。みんなが私を恐れてゐます。人生に成功する祕訣は、人に自分を恐はがらせることです。莫迦者だけがいつまでも守勢でゐます。私はいつも攻勢に出ます。侮辱ですつて！——男の眼に侮辱の色を少しでも見たら、其奴を短刀で突き殺します。法律ですつて！法律を何とも思ふものですか？私が私への法律です。さうでせう、女といふものはそんな場合にはいつも有利な地に居ります。「あの男が或る口實を設けて私に會ひに來ました。附け込んで來ようとしました。私は身を護ることを知つてゐます。——それで其奴を殺したのです！」と私が言ふとして御覽なさい　誰れが私の言つたことに反對しませう

「戀人ですつて！莫迦な！それや多分私が舞臺を去る時にでせう！が私は女主人でゐませう。男に、ああせい、かうせい、と私に向つて言はせて、へえへえいふ私とあなたは思ひますか。」

「あなたにお話しようとしてゐたことを忘れてゐました——私が男に接吻を許してやると、男は得意になり始めます。自分の前途は坦々だと考へます。自信のある顏になり始め

ます。うきうきします。するとその翌日、私はその男に口をきくことを拒むか、又は全然會ひません！その男は電光に打たれたやうに感じます。いろんなことを想像します――自分は中傷されたんだとか何だとか。釋明することを求めます。可哀相なほど雄辯になります。氣違ひじみた手紙を書いてよこします。私はその男に何の注意も拂ひません。その男は熱して來、狂暴になり、狂亂的になり、向う見ずになります。私にただ一言いふことが出來るならその魂を賣りもするでせう。――ただの一言が、その男には、一滴の水が呪はれた者の舌に於けるが如きものでありませう。ところがその男には物を言ふ機會が得られません。その男は誰れかを殺さうと考へます。その時が、出て行つて、訊ねて、そして受け容れる時期であります。しまひに私を嫌ふやうになります。それが丁度こつちの望むところで、私が男と縁を切るのはさうしてであります。莫迦な奴共ですね！」

譯者註　『アイテム』紙、一八八一年四月二十七日。

明け方(あけがた)の聲

その耳には常に懼怖しき音きこえ——『約百記』第十五章二一

此の節ほどいろんな果物行商人と食物行商人との數の多いことは——繁榮と金錢の活潑な流通との徵(しるし)で賴もしい譯であるが——今まで嘗て無かつたことである

日の光が初めて輝くと共に街路はその叫び聲で鳴り響く。そして、實際に、あの有名な『倫敦の物賣りの呼び聲』の本でも、そんな音聲での廣告——伊太利人、ネグロ、佛蘭西人、それから西班牙人が唄ふ音樂的な觸れ聲——の或る物に優(ま)して奇妙なものは何一つ載せてゐない。雞を商ふ男は『チック、ケン、マダマ、チック、ケン！』といふ叫び聲と共に、開(あ)いて居る窓はどの窓へもその頭を突込み、『レモン——上等のレモン！』を賣る者がその足跡を辿る。『アプ・プル！』の、『ストロー。ベァ。リー！』の、それから『ブラク・ブリー！』の行商人——いづれも朗々たる肉聲を有つて居る。稍ゝ兇暴な黑い唄を

した男振りの好い伊太利人が一人居るが、それは種々な珍妙な品物を賣る男で、その鬨の聲には『ランヤップ』〔景品〕といふ語を——それを伊太利風に『ラグニヤッパ』と發音して——採用して居る。

開いて居る窓や戸口へ音立てずに進んで來て、そのぎらぎら光る黒い眼を内部に投じて、そして雷のはためきに似た深いベースの音で『ラグニヤッパ・マダ・マ！——ラグニヤップ・パ！』とだしぬけに訊ねる。それからまたカンテロプ賣りが居る。その叫び聲の

『カンテル・ロープ・アー！
あたらしい、みごとな、
蔓から取り立て、
たつた十錢！』

これは子供がみんな眞似をしてゐる。

それからまた二人の行商人が居る。その叫び聲の正確な意味は我々はまだ決定し得ないで居るものである。一人は『ア・ア・ア・ア・アー・シー　ゴット』〔嗚呼、あの女は買つたといふ意になる〕と叫ぶ、或は叫ぶやうに思はれる。何を『シー　ゴット』〔彼の女が買つた〕のやら、我々はまだ決定することが出來ないで居る。が、しかく叫ぶ男の競爭者が、いつも『アイ・アイ・ア

イ！――アイ　ヲント　ナスイング！』〔私しや、私しや、私しや、私しや何も要らぬよ！〕と、そのアイ〔私し〕を恐ろしく語勢を強めて、叫ぶから、乾度不愉快に相違無いと我々は想ふ。今一人の男で、上品な耳へはその聲を入れるのが正しく妥當ては無い事を叫ぶやうに思へるのが居る。しかしその男は實際はただ、上等な馬鈴薯を賣ります、と披露して居るだけてある。それからクローズポール〔衣裳竿〕を賣る男が居る。その『クロ・ホ・ホ・ホ・ホ・ホ・ホ・ホ・ズ・ボール』といふ音樂的な震るへた叫び聲は幾哩もの遠くて聞こえる。震るへたテノル聲としては全く以て驚くべきてある。丈の低い元氣なガスコニー人て『コーリ・コーリ』を賣る男は、これは聲樂家として餘りに能く知られて居るから、何の批評をも要しない。が、その男は殆ど遍在てある。それから又無花果賣りが居るが、これはその『フレッシュ　フイッグス』〔新らしい無花果〕が『アイス　クラッグス』〔氷の岩山〕だと思はれるやうな言ひ方をして叫ぶ。それから團扇賣りが居るが、それは『チープ　ファンズ！』〔廉い團扇〕と呼ぶ積りて居るのだが、實際は『チャプ・アンズ』〔日本〕『チャップト　ハンズ！〔龜裂のいつた手〕と唸つて居るやうに思はれる。それから『タオル』を賣る男が居り、『オーカ・エー』を賣る男が居る。これは、我々の耳に達するその虚僞な音を敢て信ずるならば、たつた一つの上等な繪具を商うて居るやうに察しられる。また我々は『トム・エト・トーズ！』〔トマトとも意味し、ト

ムが足の指を食ったとも意味する」の行商人を忘れてはならぬ。誰れの足の指だらう？知りたいものである。

以上が新しい叫び聲である、恐らくは三つの例外はあるが。――この目錄に加ふるに――『カラス』と『プレージール』と他のクリーオール呼び聲との――古い叫び聲を以てすれば、我々は紙面今一段へ『ぶちまける』ことが出來よう。誰れでも閑が少しあり且つまた慰まうといふ氣が少しあれば、日の出の最初の流れ込む黄金と共に、その部屋へ入つて來るところの、物賣りの聲に耳を傾けて居る間に、確に餘程の慰みを得ることが出來るのである。

譯者註　『アイテム』紙、一八八一年七月二十二日。

神戸クロニクル社說（拔萃）

俥屋問題

一八九四年十月十一日木曜日

一般の旅客をば、その旅客が時折それに案内を願ひ或はそれに助力を乞ひ或はそれに低廉な乘り物を賴まなければならぬ人達に瞞着されないやう、どう保護すべきか、これは極めて古い問題であつて、そして西洋のどの國でも未だ完全に解決されてゐないものである。例へば、倫敦でのまた巴里での辻馬車（キャブ）に關する規定は事件を非常に改善したかも知れない。しかしそれは決して外來人に、種々樣々な瞞着にかからぬ保證を與へては居らぬ。法定賃金は一哩につきいくらといふことを知つて居ることは、その都市の地形を知つて居る者にだけ價値のあり得るもので、稍〻正確に近く距離を見積もることが出來る。ところで一時間いくらといふ値段の制定は、自分は正しい方向指して乘つて居るのかどうか判からない人達には、殆ど何の利益にもなり得ない。外來人は今なほ、或る部類の圖々しい公僕の爲

すが儘になつて居る、そして恐らくはこれから千年間も爲すが儘になるであらう。そして旅客の利益の爲めにどんなに巧妙に法律を作つても、そんな法律を遁れるやうに、同じ巧妙な手段がいつも工夫せられるであらう。實際、我々の文明が複雜を增し發達を來たすに連れて、今述べて居る或る種の惡行が、正比例より遙か多くの割合で增加しつつあるやうに思はれる。ホテルやレストランでの心附け制度の發展は、あり得る幾多の實例の一つに過ぎぬ。巴里の給仕人は、啻に給金無しで喜んで勤めようとするだけではなく、その地位に對して金を拂はうとさへする、といふことを耳にすれば、個人の努力も團體の努力もそれを阻止することが出來ないやうに思はれる一惡弊の恐るべき傾向が、少しは判かるのである。しかし一市の住民全體がそれを堪へ得ると思ふ惡弊は、道德的に言つて、外來人が——彼等がそれに就いて不平を言ふことが法律違背のものであり、理論的には處罰すべきものであるといふ事實に拘らず——矯正されないでゐて、それを忍ばなければならぬといふ惡弊ほどにさう大して疾呼すべき緊急事ではない。

俥屋問題が今、神戸にとつて重大なものとなつて居る。これは長い間他の處で——殊に東京で、橫濱で、また長崎で——不快な問題であつた。恐らくはその最も醜い事相は今なほ新橋停車場で見られる。あそこでは、日本人通譯或は古くからの居住者が仲をしてゐな

い外國の新參者は、殆ど乾度瞞着される。しかし新橋ですら、近來神戸で犯されて居るやうなあんな恥づべき行爲は、多分今まで無かつたことである。外來人はただだまされるだけである——侮辱されたり或はその（男の又は女の）蝙蝠傘で打たれたりしはしない。神戸の俥屋は——その新しい傾向はどう適當に矯正すべきかはまだ解決されてはゐないけれども——或る特殊な嚴酷な訓戒を要することは明白である。日本の警官があらゆる場合に滿足に俥屋を處置し得ることは、これは頗る疑はしい事に思はれる。俥屋は、告訴するほどに長く居留地に居止まつては居れない旅客のうちからして、その被害者をずるくも選ぶし、法律を遁れる數多くの狡猾な策略を有つて居るからである。

例へば、神戸へ上陸したばかりの外國人は、すぐと自分が擇んだ俥屋の世話になる。その俥に乘つて恐らくはクラブ。ホテルへ連れて行けとか、オリエンタルへとか、命ずる。俥屋は了解し、うなづき、全速力で走り出す——が、クラブ。ホテルへではなく、倶樂部へである（序にいふが、この策略は橫濱でも規則正しく實行されて居る）違つて居ると言はれると、俥屋は微笑し、言ひ譯をし、走つてその乘客を兵庫ホテルへ連れ込む。その時分までに旅客は腹が立つて來て居る、がその上に不安になつて來て居る、——で、其處を通つて居る或る居住者に、俥屋へ日本語で話して吳れと賴む。かうやるといふと、その騙

された人はもう難儀なことは出來すまいと豫想する。ところが或る丘の上の或るホテルへ連れられたり、或は行きたくもない或る他のずつと遠方の場所へ連れられたりする。これは全く時間を費やさうが爲めにするのである。到頭本當の行先きに着くと、俥屋は約定の金額の四倍或は五倍を要求する、——同情さるべき者は、乘せたその客ではなくて、自分であると思はれるやうに力める、——そしてその場合の困難に應じてその計略を變へる。獨りぽつちの外來人でも日中は何の勞無しに親切な助力を見出し得るからして、これは日中には屢〻出來しはすまい。しかし、夜遲く、その町が眠つて居る時は、實際その疾走者の爲すが儘になるので、夜が明けるまで色んな處へ町中引張り廻はされるかも知れぬ。故意の不正手段だと責められると、その俥屋はその外國人の言葉が判からなかつたと返事する。そしてこの主張は殆ど難攻不落である。

時には客は、色々と出つたり捩ぢれたりして、自分が行かうと思ふ場處のまはりを八回も十回も連れ廻はされる——これは古くから亞米利加の貸馬者馭者や英吉利の辻馬車馭者も亦行うて居る奸策である。これは、固よりのこと、過大の賃金を見たところ尤もだと思はせる爲めにするので、こんな場合のその詐僞者はその金の爲めに働くのだといへる。が、他の場合には、その外國人の言葉が判からぬといふ口實の方が都合が宜い——といふのは

幾度も失望を重ねると、しまひにその被害者に何處にても宿を求めようといふ氣にならせるかも知れず——そしてその爲め、連れて來る客毎に口錢を俥屋に拂ふ何處かの宿屋へ連れ行き得るからである。或る宿屋はそんな取定め（とりきめ）を私かに多勢の俥屋と遣つて居る。そして或る汽船の其の土地生まれの傭人は、利益を山分けにする了解を以てして、特別な俥屋へ船客をいつも決まつて渡す。『おまへこの外國人に二十五錢拂はせるのだぞ』と、こなひだ或る大阪汽船の船室附きボーイが、この文の筆者の耳にきこえるところで、或る俥屋に向つて言つた。至當の賃金は五錢よりも少いもので、その距離は約一丁であつた。だがその外國人は、屹度、二十五錢拂ふのは尤もだと思はせられたことであらう。

どんな風に俥屋がみんな協同して仕事するか、——どんな風に旅客は、長距離の約定をした際、幾度も一人の曳き子から他の曳き子へと（三十哩の距離に十度も）賣られるか、そしてその旅客は、その旅路の端（はて）に達するまでは一錢も拂つてはならぬと警められてゐても、病氣だと佯つたり或は辛抱しきれない程わざと手間取つたりして、どんな風に騙されるか——どんな風に俥屋共は自分等だけの祕密な暗號を造つて居り、日本語を非常に完全に知つてゐても判からぬ或る土語を發明して居るか——これは何れも珍らしい興味深い題目て、少しく研究するに、殊に兵庫市會が次の集會に於て研究するに、十分値して居るも

のである。が、我々がそれへ到達したいと欲する問題はかうである、即ち、外國人が騙されるやうに騙されることを、日本人自らはどうして避けて居るのか。客と俥曳きとの言葉が同じだといふただそれだけの事實はこの事件を說明しはせぬであらう。此處に我々は恐らくは日本人からして學ぶべき或る物があるであらう。日本人旅客は、日本內地の特殊な宿屋制度の爲めに、或る種の詭計には殆ど全くかからぬやうにされて居るのである。初めての土地へ、其處の宿屋の名前と宿賃とを豫め知つてゐないで、行くことは稀である、――そして大抵は、どの宿屋へ行くかをずつと前に決める。その町へ着くと、客引きに出してある、晝は徽章を附けて居り、夜はそれに宿屋の名が書いてある提燈を提げて居る、いろんな宿屋の召使に會ふ。鐵道沿線では、そんな客引きは、時にその客を迎へに、客の目的地より二十哩も前の處までも出て來る。約定をする、さすればその客はそれからは何の心配もしない。その泊まる宿屋がその乘る俥屋を見つけて吳れ、――その荷物は全く引受けて吳れ、――頼めば買ひ物をして吳れ、案內者が欲しければ案內者を供給して吳れ、――其處を去る前に切符を買つてさへ吳れ、――汽船或は鐵道停車場へその宿屋の船或は俥て運んで吳れる。それだけではない。その宿屋の召使が汽車なり船なりへ來て客の安樂の面倒を見て吳れる。て、客は、その勘定書の支拂ひをするだけで、初めからしまひまで、

どんな事にも氣をつかふ勞をはぶかれる。固よりその客は或る程度迄は、實地その宿屋の權力内に身を置く。しかし、土地の宿屋は、その營業は、出來る限りのいろんな方法で客の心を樂しからしめる能力如何に、殆ど頼つて居るからして、その機會を妄用することは實際殆ど全く無いのである。競爭が如何にも激しいから、過大の請求をするといふ――尤も、その過大な請求を受けるものが、その者から儲けることが或はその者を恐がることが、もう何も無いといふ、一外國人であり、ただの『渡り鳥』である場合は除いて――そんなたまたまの贅澤を遣ることとの出來る宿屋は尠いのである。或は言ふものがあらう、亞米利加や他の處で、或るホテルは殆どそれと同じやうにして、その客の世話をして居ると。如何にも或る外國の遣り方は日本の宿屋の遣り方と類似はして居る、が唯だ頗る部分的な類似である。世界中何處でも、宿屋の客で、日本でのやう完全に世話され保護される客は一人もありはせぬ。その遣り方の委細のうちで、我々西洋のホテル經營者の研究に値するものが少からずある。

　これに關聯してそんな委細に就いて語るは我々の目的ではない。我々はただ、この一般的事實に注意を呼んで、神戸へ來る外人旅客が、外國ホテルの方で何か努力をして、狡猾な人力曳きや他のぺてん師の手にかからぬやう大丈夫護られることが出來ぬものか、その

問題を出さうと思ふだけである。今の事態は確にそんな努力を要するやうに思はれる。神戶、横濱、或は長崎へ上陸するどんな歐羅巴人或は亞米利加人も、それが眞夜中であらうが、外國汽船で來ようが日本汽船で來ようが或は他の道をとつて來ようが、日本語を少しも知らずに居て、何處へ行くべきか何を爲すべきかを直ぐと知ることが出來なければならぬ譯である。が現在の狀態では、外來人は、自分一人きりだといふと、何事をも知ることも學ぶことも出來はせぬ。全くぺてん師の勝手になる。確に我々のホテルは、信用の置ける英語の話せる召使を波戶場や鐵道停車場へ送つて――荷物やその荷物の運搬についての一切の心配を客にさせないやうにし――詐僞のあらゆる企てにかからぬやう客を保護する――ことを自分共の利益だと思つて宜からう。

干涉政策

一八九四年十月十二日金曜日

本月八日ロイテル電報は、日淸事件に對して大英國と他の西洋諸國との間に聯合して干涉を加へる協議が行はれて居る、ことを再び報道した。そして本月九日に再びその報道は否認された。戰爭行爲開始後さういふ事のあつたのはこれて五度目か六度目てある。一體戰時には、最も信ずるに足る新聞種蒐集家といへども、虛僞の風說に誤られがちてある。しかし虛僞な風說にすら價値がある。こんな電報はそれを「はやまつて居る」と呼ぶのは全く正當てあるけれども、「眞紙が無い」といふのは十分に正しくはない。そんな電報は國民的並びに國際的感情を――政府の政策を表はしてはゐないけれども、政府の政策は結局はそれを利するやうに形造られる、幾百萬人の望みなり願ひなりを――反映して居るのてある。或る一つの特別な題目に就いての長い間の引續いて幾度もの誤報が電報で訂正された後、初めは想像てあつたものが事實となつて居ることを知つて、我々は驚くに當たらぬことてある。願望が思考の父となるが、思考が結局は行爲の父となるものてある。それて、大英國は今の處ては日本に公平な勝負をさせようと十分決心して居ることはありさうなことどころては無いやうに思へるが、その好意的干涉が必要てあり且つ歡迎される時期が來るに相違ない事は、これ亦ありさうなことてある。

この戰爭問題は、極めて不幸にも、この二大極東國間の爭ひの單純な結果だけて解決さ

るべきものではない。露西亞の御用新聞紙は囂々言ひ立てて居るが、これは意味の無いものではない。そして朝鮮が極東の土耳古となるに殆ど決まつて居る。その性質頗る重大な國際的紛糾が幾つも含まれて居る。そして日本は有力な援助が無けねば、支那の勝利者となつてもならいても、露西亞及び支那といふやうなそんな二敵國の結合しての願望に逆らつて、その朝鮮改革の政策を實行することは殆ど出來まい 實際、今のこの戰爭がどういふことになつて行くものか——一歐洲戰爭になるか——支那帝國の分裂になるか——印度及びその他に於ける英國の利害の危險になるものか——その爲めに起こる貿易の混亂は申さずものことて——言へることとては無いのである。可能な事々は數多くあり且つ不吉である。が、日本がその事業に全然敗れるといふことは、丁度今のところ、そんな事々のうちて一番可能性の乏しいもののやうに考へられる。國際的嫉妬がどうであらうと、——西洋諸國の内閣で熟して居る政策がどうであらうと、——東洋の一國が、段違ひに優越な巨大國に對して、異常な成功を以てして科學的な戰爭を遣つて居る、この全く新しい光景を、西洋の世界は熱烈な興味を以て注視して居る。その光景だけにさへ、この戰爭の活動といふことだけでもが鋭犀な軍事的觀察に値する事である 日本が採用した手段方法のうちて、初めて眞面目に使用せられつつある物が、少くない。——照準の正確な銃砲に於ける大な

る進歩があり、從つて又戰術にも變化が、歐洲の最後の大戰以來爲された事であるから。
今干渉することは、幾多有能な思想家共の意見では、策の得たものでも無く正當でも無からう。嚴肅に局外中立の約束を與へた後で、强制的干渉を爲す西洋の權利の、その道德的問題はまづ措いて、そんな途を執るのは賢明かどうか、大いに疑ひを容るべきものであらう。日本は今、科學的知識によつて、文明國民の間に名譽ある地位を得べきその權利を世界に示して居るだけではない。――日本は、日本の友情なるものは極めて望ましいものだ、といふことの判かるいろんな力を誇示して居るのである。實際、日本は露西亞の侵略に對しての或は結ばるべき同盟に於けるその價値を大英國にすら得心させた、といふ事は公然告白されて居る。最初日本の力量を疑つた者共は、日本の歷史と日本人の性格とについてのより大なる知識がその後永く彼等に教へた事をば、――卽ち日本人は、美術家機織工及び詩人の國民たるのみならず、本質的に好戰的な――少くともグールカズ人或はシークズ人と同じほど好戰的な――人種たることを――今や認めて居る。日本は實際大强國の數に入るべきものであることを見せて居る。今その努力に對して干渉を試みる事は、結局はその干渉が不賢明以上のものであつたことが判かるやうな、非常な遺恨を買ふことであらう。國民的遺恨といふものは――殊に東洋では――非常に早くは無くならぬ。くすぶつ

てゐて、燃え立つその折をば幾世紀も待つ。その折といふのが、『その愛好せる印度を保持せんと努むる英人が』東洋の援助を求めて、求め得られぬ時かも知れない。

『金羊毛』號の賣却

一八九四年十月十三日土曜日

『難破船（レカー）』の愛讀者一萬人のうち、スティヴンスン氏のその驚く可き物語の委曲は大いに氏の想像に頼つて居る、と思つた人は確に少からずあるに相違ない。眞實は少くとも作り話と同じほどに面白いものであるといふ事、また藝術的想像の價値を示す最上の證據はその夢想の實現であるといふ事は、純然たる作り話の出版に直ぐ續いて起こつた實際の事件で、近年、屢々例證されて居る。我々は、或る物語が或る人を驅つてその主人公の眞似をさせる場合を（例を擧ぐれば、ロルフ・ボルドルウッド氏が書いた『武裝せる盗賊（ロバリー・アンダー・アームズ）』を擧げて、墺太利の或る警察署で、犯罪者が言ひ譯をした場合のやうな、あんな場合をこ）言

うて居るのでは無くて、ただ藝術的構想が絶對的に偶然に實現せられることを言うて居るのである。ところがそんな實例が、一八九二年の初め頃にサンフランシスコで始まつて、一八九四年横濱で此の間終はつた、スクーナー型帆船『金羊毛』號の驚くべき物語によつて提供されて居るやうに思はれる。この物語には血に赤い悲劇は一つも無い――だからステイヴンスン氏の叙事は全部絶對的に自然なものと證明されてはゐないが、ノラ・クレイナ號やフライイング・スカッド號の船歴に見るのと十分同じほどの氣分が、それにはあるのである。

『金羊毛』號は、ライト・ブラウン會社といふ、その來歷が不思議にも『難破船』のピンカトン會社の來歷に似て居る、サンフランシスコの或る會社の持ち船であつた。ルードン・ドッドのモデルであつたかと思ふほどの、エドマンヅといふ名の、『巴里から還つて來た不思議な醫者』と――そしてステイヴンスンの小説の今一人の人物を思はせる、キリアム・スミスとかスタッフォード・スミスとかいふ名の『冒險者』と――の傭船になつた。二人はロバート・クイントンといふ船長を得た。この船長はネアズには少しも似てゐないが、或る點に於てはキックスと比較が出來る。一同、浮浪者、風來者を船員として、南大平洋で――どういふ風にといふことは正確に分からぬが――一と身代こしらへようと出か

けて行つた。
これまで發表になつて居るだけの乏しい證憑に據ると、『金羊毛』號は初めカロライン群島へ行き、それから香港へ行つた。其處で船長クイントンは自分が支拂ひを受けべき金を引出して、その邊を少々見物しに上陸した。ところがその時刻からして、船長は『二度と姿も見せず噂にもきかれなく』なつて、『金羊毛』號はスミスの指揮の下に、その船長を乘せずに出帆しなければならなかつた。するとその『金羊毛』號が又、二年の間、姿を消して、世人に知れなくなつてしまつた。すると今度はサンフランシスコのライト・ブラウン會社といふ會社がまた——絶望の破産と稱するあの絶滅に遭うて、そして世界中に電報打つて『金羊毛』號の消息を求めて徒勞した澤山の債權者の悲歎するに任せて——或る特別な期間ではなく、永久に、消えてしまつた。ピンカトン會社の破産は、我が讀者は記憶して居らるゝであらうが、ただ斷續的なやさしい種類のものであつた。——これが『ノラ・クレーナ』號の作り話と『金羊毛』號の實際の話との、相違の一點である。

その物語は、實際ではあるけれども、歯がゆいほど不完全な狀態で我々の手に達する。我々は、この『金羊毛』號が、眞の船長も眞の持主も有たずに、ただ時折ちらと姿を見せるだけて、何處とも知れぬ處からその向の裏側へ漂うて居るのを見る。その絶え絶えの記

錄は、紫色の島々とレモン色の日沒とへ雲の面紗と帶とをその藝術家が伸べ擴げる彼の古風な日本の繪本を、人に思はせる。あり得る如何なる示現よりか、恐らくはその暗示的な方が一層效果がある。我々がその物語からして得られるたまさかの啓示の助けを藉りて推測し得ることは、ルウドン・ドッドが『次の日も次の日も、キスキー号の寒暖計は八十四度だつた。次の日も次の日も、空氣は前と少しも變はらぬ言ふに言へない勢ひよさと美しさとがあり、軟和でそよそよしてゐて、健康な頰の如く冷やかだつた。次の日も次の日も、太陽は炎と燃えてゐた。次の夜も次の夜も、月は篝と輝き、星はその皎々たる群隊を練り歩かせた。自分は精神の變化に、或は、恐らくは、分子の再構に、氣づいた。自分の骨々が自分に前よりも麗はしくなつた。……自分は、誤つて溫帶と呼ばれて居る、彼の濕つぽい冷やかな帶を顧て憐憫の情を催した』と、その魅力を記述して居る緯度の處で、『金羊毛』號はその二年間、さまよひ廻はつて居た、といふことだけてある。

『金羊毛』號の乘組員のうち、少くとも一人は、ルードン・ドッドが抱いた感情を、餘程多く享有したやうである。といふのは、ペルルー群島で、船を預かつてゐたスミス氏は、横濱の亞米利加領事の前で述べた簡潔な證言に據ると、『上陸して、家を建て、一家庭を造り、其處に居殘つた』からである。そこで二等運轉士のローリーが航海長に任命されて、

『金羊毛』號は、種々な島で椰子の實と木材とで船艙を充たして、漂浪しつづけた。しかし常夏の中をかうやつて帆走することは永遠に續くことは出來なかつた。そして乘組員のうちに、莫迦らしくも文明へ歸りたいと思ふ者がゐたし、誰れもが金が欲しかつた。船長クィントンがその五百弗を引出して香港で姿を消してからといふもの、一人も金を貰はなかつたのであるし、乘つてゐた支那人にすら驚く許り巨額の負債があつたのである。金が無くてはロートス島でさへ殆ど望ましいものではなかつた――家一軒建てて一家庭を造つて其處に居殘るには、是非ともいくらかの出費を要することとてあつたからである。その上にまた、糧食は悉く食ひつくされてあつた。サンフランシスコへ歸らうといふが一般の希望であつた。ところが長い間の漂浪の爲めに、帆が――エンシエント・マリナーの船の帆の如くに――『薄くまた萎れ』てしまつてゐて、毎日修復しなければならなかつた。到達し得らるゝ滿足な一番近い港は横濱だと考へられた。そこで『金羊毛』號は、その乘組員は椰子の實で露命をつないで、横濱へ船首を向けて進んだ。六十一日の間みんな椰子の實を食つた。そして積み荷に大穴をあけて到頭波戸場の前で投錨した。

　この『金羊毛』號が直ぐとマーシャル・ハーバートに差押へられた事、またその乘組員がその給料の額を訴へた事、これは詳細に本月二日の『ジャパン・メール』紙に載つて居

る。その請願は聞き届けられた。乘組員の給料は總計五千六百四弗三十仙であつた。『金羊毛』號の價値は五千五百弗であつた。官省の速記者は文句外に作り話を拵へる質のものでは無いから、『メール』紙に載つて居る物語はこれで終はつて居る。でも、シッドモア氏がどんなことを知つてゐるだらうか、誰れしも知りたいであらう、——といふのは、ペルルー群島で文明を放棄したスミスは、『宣教師風な氣分の』人であつたか、との問に答へて、彼は『ええ、さうとも云へません！』と答へたから。その記錄の拔けた個處總てを、ロバート・ルイス・スティヴンスンがどんなに華麗に充たし得たらう、想つて見るが好い！

一八九四年十月十五日月曜日

戰爭が齎さん可能な結果

今の場合、今次の戰爭の結果に就いて何等積極的な豫言を敢てし得るものは誰れ一人無いけれども、考慮に値するやうに注意せざるを得ざらしめる或る種の可能な事柄が、それ

には含まれて居る。その可能な事柄の一つは、日本の勝利が支那の社會的發達に及ぼす究極の結果である。

支那の威信は既に餘程損じた。戰前には、支那は軍事學に於て大なる進歩を爲して居ると一般に信ぜられて居つた。支那の小銃及び支那の大砲の優秀なことに就いて――外國て教育を受けた支那の陸海軍士官の堪能なことに就いて――近代の最善な武器を製造する複雜な機械の輸入に就いて――必要の場合召集さるべき百二十萬の陸軍に就いて――十年前東京(トンキ)國境で佛蘭西軍隊を支那軍隊が撃退したことの恐るべき意義に就いて――我々は耳にした。英吉利は、人の言ふ處に據ると、支那が北印度の保護の爲め露西亞に對して自國と結合するであらうと信じて居り、祕密同盟が結ばれて居るといふ噂さ聲があつた。が、そんな威信は全く消え失せた。日本の陸海軍人が支那の精選された軍隊を容易に打破つた事は、支那は科學的戰爭に全然殆ど何等の進歩も爲してゐない事を、全世界に殆ど確信せしめた。その軍艦が最近の海戰に於て立派に戰つたといふ事を認めても、その軍艦の操縱は外國人の手に依つた事を思ひ出さずには居れない。其の他に於ては、支那は今次の戰爭に於て何等の戰鬪的能力を示してゐない。その途方も無い大軍隊は形體を具へてはゐないのてあり、その偉大な將軍は主として紙面の上に存在して居つたやうである。そして此の戰

爭に日本の方では全く意外の能力を示しつつあると同時に、支那の全くの弱さを一層多く現はしつつある。その巨大な嵩、その資源、その大なる忍耐は、その本來の敵達に何等反省すべき事を與へなくなつてしまつた。露西亞の新聞は、中國を西洋諸强國で分割してはと、冷やかに提議して居る。

　しかし、支那が日本の爲めに申し分無く辱しめられた後、西洋諸國がこの大帝國の解體に助力もしなければ、それを許容しもしないと決心すると假定して。支那はその時目覺めて己が地位の危險を知る事を拒むであらうか。絶大な改革を企圖してそれを實行するであらうか。或は、改革は不可能である程、そして外國の保護の必要が終には明白となる程、それほどその政府組織が絶對的に腐敗して居るかどうか。

　これ等の諸問は答へるのが容易では無い。だが、支那ほど非常に保守的な國民は、あらゆる保守的人種の特徴を爲す一つの性質を――自己保存の强烈な國民的本能を――高度に保持して居るに相違なからう、と言ひ出しても、その提言は是認されるかも知れない。若し支那がこれを有つて居るならば、そして若し一たび十分に覺醒するならば、内部の腐敗はどんなものも、それを遮る力は有たぬことであらう。若し支那の歴史が信ずるに足るものであるならば、この帝國の過去に於て、改革の時代と交互して、腐敗の時代が幾多あつ

たのである。改革に對する支那の現在の能力は、懸かつて國民的感情の復活にあることであらう。若し何か或る物を目撃して、それてそんな感情の復活が出來るならば、それは確に北京が日本軍隊に占領せられ、日本の一公使が支那皇帝に條約を命令するのを目撃することであらう。西洋が長い間徒に提供してゐた彼の科學的戰術を徹底的に研究してそれに熟達することに、どんな保守的な或は迷信的な嫌惡を支那がこれまで有つてゐたにしろ、或は今なほ有つて居るにしろ、日本がそれを使用してその自尊心を破れば、支那はそれが無上の緊要である事を疑ふことはもう出來はすまい。そんな屈辱の後、支那が直にその潛在して居るそして今は役に立たぬ一切の力を發展せしめ膨脹せしめることを、——鐵道を建設し——眞に實力ある軍隊を養成し——その諸官衙を純化し——全て備ひ得る限りの最善な外國人教師を傭うて權力を委ねる事を——遣り始める事は、それは不可能な事ではない。支那はそんな力と傾向とを示さなければ、その究極の解體は殆ど確實だからである。

そして、さうなれば、世界の他の國々に對して、偉大なる新陸軍强力として支那は由々しい脅威となることであらう。そんな場合、ピアスン博士の豫言は大かた實現せられるであらう。そして西洋は牛耳を執られる危險に面と向かふことであらう。

これに反して、解體された支那すらも、思想と傾向との人種的保全は維持せずには殆ど

居れまい。外國の藝術と科學とを、實用的に大なる範圍に、採用するやう外國の支配の爲めに强ひられて、無理やり多少文明に進むと、この人種のその無理やりの文明は、それがどんな日にその羈絆を脱し得ようとも、前よりか一層恐るべきものとなる準備を與へるに過ぎないことであらう。或る人は言うて居る、歐羅巴の支配を受けて居る東洋人民は、科學的文明を眞に採用することも、或る外國の統治に反抗して結合することも、爲し得ない證明を印度が提供して居ると。しかし、印度は百以上の國語を使用して居る國であり、——いろんな人種、いろんな言語、いろんな宗教の一大混淆である。支那は比較的に一樣てある。支那は一てある。だからその未來を推測することは無上の困難てある。

一八九四年十月十六日火曜日

悲むべき變化

日本の開港場に於ける夜の生活は、西洋の港の、或はどんな大きな西洋の都市すらもの、

夜の生活に對して非常に有利な對照を呈して居る、と旅人が正當に公言し得た時があつた事を、外國人居留者のうちで憶ひ出し得る者は少數ではない。惡德の巢窟は孤立して居つたもので、その位置は——恐らくはその存在すらも——あらゆる文明國に見る生活の暗黒面をそれへは隱すのが望ましい者共に、認められないで居たかも知れなかつたものである。當時は、辻君は日本には無い、とグリフィスは眞實に述べ得たのであつた。そして社會的惡行を取扱ふ日本の制度が見たところ成功して居るのを正直に賞讃し得た人は他にも少からずあつた。或る宣教師記者は、基督教を教へる必要があるといふ證據に道德的暗黒の存在を指摘しようと確に熱心になつて、賢明なる政府はそれを隱さうと努めるものに注意を惹くやう殊に骨を折つた。が、一般に云つて、より犀利なる觀察者は、そして歐羅巴諸都市の道德的狀態に最も能く通じて居る人達は、長の幾世紀もの立法經驗が、それを我々には根絶出來ないと證明して居るものを管理する上に於て、日本人の方が西洋人よりも遙かに能く成功して居るやうに思へる、といふ事を明からさまに主張するに一致して居つた。その後にあの有名なお茶屋の時代が來た。そしてなほ後になつて、眞實であつたことが最早眞實でない事が、そして日本の新聞が開港地を惡るく言ふのが全然誤りで無い事が、可也明白になつて來た。ところが今日は、暮れてから山手の道路をさまよふ憫れな影が——

倫敦や紐育の夜を出沒するあの絶望的な幽靈の、哀れな日本の模製物が――數多いが爲めに、過去のその賞讃は虛言(うそ)だと、遺憾なくしてではないが、誰れしも認めざるを得ないのである。

我々は『哀れな』と言ふ、――といふのは、日本の不幸な人達のうちの最下等なものにも、なほ一種生得の羞恥が――憐憫の念を殆ど起こさずには居らぬ、公然の恥辱をいやがる一種本來の畏縮心が――殘つて居る。そして我々の間でのこの新しい悲慘事相は、日本人種の性格とは全く背馳した或る物を――內地に存在してゐるよりももつと酷しい困窮狀態が、また內地では提供しない誘惑が、多分生んだ或る物を――露はして居るのである。グリフィスがその『ミカドの帝國』を書いた時に首府並びに他の處で眞實であつた事が、地方の國々では今なほ幸にも眞實である。惡德は田舍では大抵は依然として隔離されてゐて、それを見ようと欲しない者には眼につかぬ。局限されて居る。無言であつて出しやばらない。內地の都會では、數年其處に住まつてゐて、そして不道德なもの何一つ見ずに居ることが出來る。デョラウヤといふ家があることは知つて居るが、探索をしなければそれが何處に在るのか多分知ることは出來まい。例外はあるかも知れぬ。我々はただ一般の事實を言うて居るのである。

神戸では、日本の警官は、日に增加するこの惡弊を阻止するのに、その爲し得るだけの手段を講じて居るやうである。折々、街路を掃ひ淸めて、そんな不幸な女共を引捕へ、その破廉恥な傭主にその罰金を拂はしめる。そして四五日は、或はそれより少し長い間は、この哀れむべき影は消え失せる。するとまた其奴等は姿を現はす、――そして見たところ、度毎にその數を增す。この問題への法律に特殊な變更を加へないでは、この惡弊は募つて行くだけ、でありさうにさへ思はれる。內地では警察法違犯に對して科する罰金が有效であるやう思はれる。しかし、開港地では、違法な店を所有して居る者は、法律が科し得るどんな罰金を出しても、なほ且つその商賣を利益あるものたらしめ得るやうに思はれる。て、その法律を勵行するのに、もつと苛刻な處置が必要であるかも知れぬ。日本の新聞のうちで、敵意を有つて居る或る一部分のものは、外國人を開港地のあらゆる惡德の開祖だと、非難することに躊躇しない。そしてこの事總てを、西洋の道德には決して好ましいものとは言へない遣り方で、述べて居る。そんな批評家は、その批評を正當と認むべき、目に見えての或る理由を有つて居る事は、それは疑ひもなく眞實である。地方の國々と開港地との狀態に見る對照は、偶〻遣つて來た外國の觀察者の心すら打たずには置かぬほどの、甚だしいものであるからである。しかし十中八九、その主要な原因は單に――富の增加と

一見切り離すことの出來ない——あらゆる商業的中心の發達に附帶する——困窮の增加てあらう。金がつくられつつある處ては、儲ける能力が高い處ては、生活の標準が絕えず高まりつつある處ては、競爭が必然的に無慈悲てある處ては、精神的にまた道德的に弱い者は、他の處に於けるよりも、一層恐ろしい極端へ追ひやられるものてある。日本の今後の工業的發展と共に、必らずや弱者に對して苦痛の增加が、從つてまた惡弊並びに罪惡の增加が、來るといふ事は心配しなければならぬ事てある。道德的にまた知的に能力優れた者には、無限により高い機會があるてあらうが、弱い者に、價値なき者に、或は不幸なものすらに、その蒙る困窮は一層深いものがあるてあらう。

日本の敎育政策

一八九四年十月十七日水曜日

新任日本文部大臣西園寺侯は、その前任者井上氏の政策に從ふといふその意圖を公言さ

れたと發表されて居る。その政策はいろいろと批評を受けて居た。不合理なほど保守的だと呼ばれて居た。排外的だと呼ばれて居た。極端である、强烈な反動を惹起するもの、と呼ばれて居た。そして、その反動は井上氏の後繼者で始まると期待したばかりではない、條約改正の青木キンバレー案がそんな反動を餘儀なくするであらうし、外國語研究に絶大な新刺戟を與へるであらうと想像した、ものがあつた。が、西園寺侯の目的のこの發表は、そんな期待は根柢の無いものであつたことを證して居る。

我々は、井上氏の政策は、あらゆる批評にも拘らず、全體としてこの國民の一般感情と一致して居つた、といふのが眞相であらうと信ずる。日本は、森子爵の意見をば、また東洋の思索の仕方は西洋の仕方と同化が出來ると想うてゐた總ての人々の意見をば、出來る限りの極度まで實驗したのであつた。その實驗は、全體から見て、爲す價値のあるものであつた。が、その實驗は事實の誤解に基づいて居るものであつた。東洋人は、どんな教育制度によつても、――十代經つても十世紀經つても――西洋人のやうに感じ又考へるやうに教へることは出來ないのである。日本人が、この眞理を明白に彼等の前へ置くに堪へるほどの有爲な教育上の忠言者を一人も有つてゐなかつた、とは我々は殆ど信ずることが出來ない。科學的心理學の彼等の無知が、そんな忠言を無用としたのであらう、といふこと

のが一層ありさうなことに思はれる。その實驗は大規模で、非常な費用で、着手され實行された。謂はゞ、全國民が英語の勉强に從事した。そしてその結果は滿足なものとはどうあつても言へないものであつた。大英帝國の中等學校全體に、漢文の研究を强制的とする結果を想つて見よ。それを頭に浮かべただけでも微笑を促す、——ところが、日本の青年に課した仕事は、我々が敢て想つて見ようとする事が困難なのに、殆ど劣らぬ困難なものであつた。その障害の偉大なることを——その企ての全く不可能なことを——思ふと、奇蹟が成し遂げられたのであつた。が、その奇蹟は總て、政府の希望と目的とに遙かに達しないものであつた。英語は決して日本の國語には出來ないといふ事、そして日本の思想に代ふるに外國の思想を以てしようといふ此の全企圖をなほ進んで固執すればその結果はただ重大なる損害あるのみだといふ事が、自認されはしないにしても、一般に感ぜられる日が遣つて來た。既に重大な損害が爲されたのであつた。某々の信仰並びに觀念を弱めるか若しくは滅ぼすことは困難とは見られなかつたが、それに取つて代はることは不可能と思はれたのであつた。そしてその信仰並びに觀念の社會的價値とその倫理的意義とが、それが引續き消え行くにつれて、層一層明白となつて來た。或る一人種の社會的並びに道德的經驗なるものは、突然にも或は漸次にも、他の人種のそれで取つて代はつて、假令實際

取つて代はることが出來るとしても（それは頗る疑はしいが）、幸福な結果を齎すことは、有り得ない事である。他の種の損害がその上に世人の注意を惹き始めつつある。この邦の未來は懸かつて其の能力如何にある青年が、非常に過度の仕事をさせられてゐたのである。非常に利發で非常に眞摯な青年で、過勞の爲めに死んだものが幾人もあつた。國内のより大なる中等學校の大多數は、その最も前途有望な學生を幾人か失つたのであつた。頭腦の疾病が稀では無かつた（今でも稀ではない）そして青年の身體狀態は決して滿足なものではなかつた。幾千幾萬の青年が、――それを長い間また親しく觀察する機會をこれまで有たぬ者にはどんな者にも想像の出來ない――苦情を言はない忍耐を以てして、その教育指導者に無限の信頼を以てして、勇敢なる從順を以てして、その健康を害ね、その未來を壞はしつつあつた。何の目的にてあつたか？このあらゆる殉難の結果として、政府設立の學校は、十箇處の誤謬無しに十行の英語が書ける十人の日本國人教師を、得ることが出來るかも知れぬ。この所謂、教師（プロフエツソル）の身に、心理學のほんの初學者にも明白な理由の爲めに日本人學生には、その眞の意味を傳へることが決して出來ないところの、バイロン、バーク、カーライル、フイリツプ、ギルバート、ハマトン、其の他、古典的並びに非古典的な、他の種々な著作者を教へるといふ仕事が委任されることになつた。眞に英語に熟達した者は

外國で勉强することの出來た者だけである事、また、そんな人達は政府がそれに提供し得る所の或は恐らくは提供せんと欲する所の地位よりも、好い地位を大抵は得ることが出來る事は、あからさまに述べ得られることである。

前文部大臣は、初めてこれ等の事實を認めた人で無いにしても、少くとも初めてこれ等の事實を主張する勇氣のある人であつた。前には、外國語研究の最初の、そして熱心し過ぎた衝動が、幾分か自然と弛緩してゐたのであつた。初めには義務的であつた教科が隨意科となつたのであつた。そして財政的な且つまた合理的な理由があつて、幾多の學校は外國人教師を無して濟ますことが出來るやうになつたのであつた。が、無理勉强はやはり甚大なものであつた。高等程度の學校では、英語と漢學との上に、佛蘭西語若しくは獨逸語の勉强は、尋常普通の生徒には過重であつた。二十二歲にならぬうちに大學に達する希望を有てるものは少かつた。實際、卒業生の大多數はもつと年とつてゐた　三十歲になるものさへあつた。井上氏は、學生は出來るだけ、そんな外國語勉强の重荷を除かるべきであると希望した。氏は英語佛語或は獨語が、それに通じ得る者に、有用であるかも知れぬ事は否定はしなかつた。氏は特殊な才能を助長する明白な必要を疑ひはしなかつた。氏はただ、そんな勉强を隨意とせずして强制として居る制度に反對しただけであつて――そん

な勉强は任意なものとすべきであると考へた。現狀の敎育制度で英語を任意なものとすることは、大學での或る種の研究はただ英語だけを用ひて——チエンバレン敎授が旨く述べて居るやうに、學生の課業を『英國の靑年が拉甸語を用ひて授業せられるよりも、無限に難儀』ならしめる英語だけを用ひて——行はれて居るからして、それは困難である。が、井上氏はこれをいつもいつも必要たらしむべき理由を認めなかつた。て、若し我々の見る處にして誤りが無いならば、英語そのものも出來るだけ早く隨意科とすべきであるといふのが氏の願ひであつた。この改正は、至當に實行されたならば、著しく合理でありまた恐らくは好結果を齎すであらう。分科大學の學生全體に、無組織な外國語研究といふ千篇一律の課程を、無暗に必修せしめないで、そんな研究を爲し得る特殊の機會を、非常に天賦の才能の優れた學生の少數の志望者だけに、提供すればよいのである。語學習得の生來の能力を有つて居る者だけに、英語にしろ、それを學ぶことを奬勵すれば好いので、さうしたならば、自分が敎へて居る國語を書くことの出來ない敎師の下で、今行はれて居る散漫な不規則な方法で、或は學び得んよりも、立派な敎師の下で、比較にならぬほどよりよりよく學び得ることとであらう。

我々は、前文部大臣は十二分に正當であつた、と眞實信じて居る。工業の發達、商業の

膨脹、この國の或は見るべき開放、これ等は總て、日本に於ける外國語の知識の價値が、十年毎に減ずるよりも寧ろ增して行くことを、示して居ると云つて――また、時期もいろいろとあらうが、今の時期はそんな勉强を阻むに最も惡るい時期であると云つて――反對するものがあつた。その言ふ處はいかにも尤もである。が、勉强を阻むといふ問題ではなくて、有害無用な方法を阻むといふ問題なのである。英語佛語若しくは獨語に敵意を有つといふ問題ではなくて、何等實用上の目的を達し得るほどに十分にそれが學び得られない幾千の人に、その勉强を强ひるといふ有害な行爲に對して敵意を有つといふ問題なのである。その上に、商業の發達と繁榮とに連れて、外國語の知識がこれまで見たことが無いほど日本に普通なものとならう、といふ事は極めて明白である。商人や、またその費用に堪へ得る人は總て、外國語を修めさせに、その子供を外國へ送らうとするであらう。如何なる國語でもそれを完全に覺えるには、その國語がその母語になつて居る國で覺えなければならぬのである。英吉利人は、自分の子息が佛蘭西語或は獨逸語の完全な知識を、英吉利の學校で得るものとは期待しはしない。それを覺えさせに佛蘭西へ或は獨逸へ送る。日本て、外國語の知識の最も必要な部類の人は、商人階級の人である――即ち丁度、その子供達を外國で教育を受けさすことの一番能く出來る部類の人である。

井上氏が用ひた議論で、我々が薄弱だと思ふ議論が、唯だ一つあつた。過度の勉強に基づく日本學生の體格の退化について述べて、氏は數字を示して、日本學生と比較しての獨逸學生の平均體重に注意を求めた。氏が我々の注意を求めた結論は明白であるが、それは頗る不公平な結論であらうと思ふ。獨逸人種は日本人種よりも遙かに重い人種である。よい、り有利な、從つてよいり有效な、比較は、佛蘭西或は西班牙學生と日本學生との間にされるのがよかつたのである。

一八九四年十月十七日水曜日

寛宏の要

議會が、廣島での今度の會期中、如何なる議事妨害政略をも遂行することは殆ど無ささうだ。どんな黨派問題よりも無限に重大な事柄が、その卽時の考慮を要求して居る。世界の國民間に於ける日本の地位、その國家的名譽、そして恐らくは日本國民の——工業上の、

商業上の、また政治上の——全將來すら、すべて今次の戰爭の、直接でないなら、間接の結果に依るかも知れぬ。國民は、個人同樣に、戰ひを宣言する時は、その生命を賭して居るものである。日本がそれをと望んでゐたもの總て——日本がその爲めに働いてゐたもの總て——明治の初年このかた日本がその爲めにあんなに多大の犧牲を拂つてゐたもの總て——その陸軍の勝利で天晴れ見事に日本の爲めに實現せられるかも知れぬ。日本は、その目標とする處に達するのみならず、そのずつと先きへ行くことが出來るかも知れぬ、——文明强國の一大家族にあつてその身を明白なる一對等者として置くのみならず、彼等の中にあつて、日本自らすら可能とは嘗て思はなかつたほどのより高い位を執ることが出來るかも知れぬ。議會が現在の危機に於て極力政府を維持するに努力するであらう事は殆ど疑ひを容れぬことである。誠忠の一般的熱心、この事にあらゆる犧牲を拂はうとの一般的願望、は如何なる激しい黨派心も、それを等閑に附することを敢てしない、幾多の期待と決心とを示して居る。

がしかし、議會が、この戰爭に直接關係してゐない事柄には、それほどに讓歩はしないかも知れぬ、といふことは全くありさうに思はれる。費用節減の舊政策が　費用節減で旣に殆ど不具になつて居る某々省に對して、或はなほ遂行されるかも知れない。我々は、鄭

便電信を司どる省には、もつと寛宏に支給するの要があることに殊に言及してよからう。日本の商業の發展と共に、この省の必要とする物が非常に増加し來たつて居る。そして、何か異常な大きさの國家的變災が出來(しゆつたい)するので無ければ、その必要物は――徐々では無く、年毎に層一層迅速に――續いて増加して行くに相違ない事は、極めて確實である。工業的發展が一たび立派にスタートを切れば、算術級數で進んで行くものだからである。然るにその省は、目下使用し得るその限られた資金では、その職務を實行することが殆ど出來ない。――その雇人は不十分な支拂ひを受け或は過分な仕事をさせられて居る。そしてその最も經驗のある有能な官吏で、他のもつと報酬の多い職業を求むることを餘儀なくされたものが多い。繁忙な商業中心――其處では生活費が高い――にゐても其處の郵便局員は――中には家族を支へて行かなければならぬものも居るのに――一箇月僅十圓の給料で働いて居る。一箇月十圓は十年前には文官として年の若い新參者には一かどの給料であつたかも知れないが、今日では生活して行ける給料ではない。そんな給料の地位で、被傭者の方では、完全な日本教育のその上に外國語の幾分の知識があつて、そして尋常ならぬ才能を必要とするものが、幾つもある。多くの俥曳きよりか少い賃金を與へてゐて政府勤務に教育のある人間を置かうなんていふ事は、道徳上と共に政治上の考へ違ひである。

手當てや給料を出來るだけ少い額に切り下げようとする政策は、我々は思ふに必らず惡結果を産むに極まつて居る政策である。手當ての事に吝な事は、啻に國家機關の一部分たるのみならず、その國の商業的生命の一部分たる官省の、作業能率を直接に損ずるものである。そしてそれに次いで起こる給料の吝といふ事は、結局は、役員の中からそこに居る殆どあらゆる優秀な人間を除き去つて、その地位を充たすに無能者を――恐らくは無能者よりも惡るい人間を――以てする結果を來たすに相違ない。今のところは、文官としての被傭人の能力なり性格なりに就いて、訴ふべき重大な不平は少い――が、それは、丁度この過渡の時代に於て、この國はその職業を得損なつた、或は人生に於けるその初めてのスタートを切るどんな機會でも喜んで捉へる、教育ある青年に充ちて居るが爲めである。が、事態がこのまま長く續くかどうかは疑はしい。假令續いても、政府として低廉給料政策は、あらゆる國の實務經驗がそれ自らの目的を破るものらしいとして、これまで非難し來たつて居る政策である。英國の文官に見るに、最も高價な人間が實は最も低廉な人間である。ところが日本の政策の結果は二三早既に見えて居る。學校へ劣等な教師を送つて居る――稅關へ劣等な役人を送つて居る――他の官省へ、四五年前のその前任者と比べては甚だしく面白くない新しい人を多勢送つて居る。優秀な傭人に代ふるに劣等な者を以てすると、

丁寧が引込んで無愛想が出て來、冷淡と怠惰とが熱心と活潑とに取つて代はるものである。少くとも外國人は、一八九四年の稅關官吏と一八八四年の稅關官吏との價値の相違の證言が出來る。

どんな見地から考へても、政府の方でその使用人に不寛宏であることは風紀を紊すものに相違ない。政府たるものは、最善な人士を——あらゆる點に於て政府に有利に勤務することが一番能く出來る人士を——任用して、それを長く勤務せしめることが出來なければならぬ。が、前議會に於て政府が執つた政策では、政府はとてもそれが出來さうにはない。費用節減は早、危險な程度にまで種々の官省を弱めて居る。そして漸次蔓延する恐れのある害惡を生じて居る。大なる寛宏政策が必要である。て、議會が、寛宏な政策を執るならば、國家の强味に少からず貢献するところあるは確實である。元は二三の手きびしい改革が疑ひもなく必要であつたのである。官職と官職に就いて居る人とが餘りに多かつた。閑職があつた。その勤務に釣合はない高給があつた。そこで改正を遣つたのであるが、それが餘り過ぎたのである。そして出費節減が、實際その當時大なる增額を必要として居る官省にも、行はれた。斯くして一つの極端が他の極端を惹起したのである がしかし、文官を嚇して居る危險が、至當に認められ且つ早速避けられるやう、今や希望しても宜いてあ

らう。

日本人の體格

一八九四年十月十九日金曜日

日本人の體重及び身長に就いての種々な科學的測定はいづれも多少不信用なもののやうにこれまで屢〻我々に思はれて居る。我々がさう思ふのは、この人種の體格の變異が西洋諸國人種のそれよりも大であるから、また、その爲めに我々の平均數の方法を適用することが一層困難なからである。啻に平均身長及び體重が地方に依つて大いに異るやうに思はれるだけではない、日本國内の同じ國(プロヰンス)でも、そんな變異は西洋では比較的に稀なほどの極端に達して居る。西洋には大男が少い。西洋には矮人が少い。處が、日本では殆どどんな地方でも、非常に丈の高い成人と非常に丈の短い成人とを多數に見ることが出來る。この點に於ける相違は西洋で見るよりも遙かに著しいものがある。西洋の人混みの光景を長く

見馴れてゐる人で、祭日の集りでの日本人の澤山の群集を眺め見る人は、殆どこの事に氣がつかずには居れぬ。西洋諸國では、身長の平均數は可也容易に推察が出來る。それを日本では眼だけで推察することは極めて困難であらう。陸軍で遣つた測定は、男子の身長並びに體重の國民的平均數に幾分か近いものを我々に提供すべき筈のものと思はれる。が、日本の場合では、それがさうかどうか、我々は頗る怪む。身長と胸圍との或る一定の標準があらゆる新募兵に必然的に要求されて居る。そして國防軍はその標準に達するか又はそれに越ゆる者だけで出來て居る。我々には、それに達しないので排ねられた人達の割合を知る、手段がまだ無い。が、それに越ゆるものは非常に多數眼にして居る。日本の歩兵聯隊の兵卒には體格の異常な差異がある。そして帝國海軍の兵卒には――それには歐羅巴のどんな海兵とも十分比較の出來る者が居るが――尙ほ一層異常な差異がある。がしかし、海軍は海岸地方人民のうちの最も巖疊なものから――殊に九州の漁民から――頗る注意して募集される。九州は日本で一番立派な人間を供給するといふことである。――確にそれは見事な海員を供給する。

　間違ひのない平均數を算出することを如何にも困難ならしめる、そのより大なる體格の差異の原因は、多分複雜なものであらう。一部分は人種的なものかも知れぬ。現在の日本

人は、その元の住所が今なほ評論中な、幾多の人種の混淆の結果であることは疑ふことが不可能だからである。が、それよりももつと有りさうな事は、滋養になる食物の缺乏、過度な困苦の諸結果、及び早婚の習慣が、この人民の大部分の身長を尋常の水平より遙か低く下げたのかも知れぬ、といふ事である。日本の最上の陸軍兵卒及び海兵のあの立派な巖疊な體格を觀れば觀るほど、外界の事情が全體としてのこの人種を妨げて、その自然の十分な發達を遂げしめないやうに、これまでしてゐたのではなからうかと怪みたくなる。

西洋では文明の進步と共に、歐羅巴諸人種の平均身長體重並びに腦力が、中世の末このかた異常に增し來たつて居る、ことは能く知られて居る。その上また、西洋の近代軍制の巨大なる費用の差引き勘定として、それよりももつと近時になつて體格の著しい改善が見られて居る、ことも能く知られて居る。軍事訓練といふことは、今では、精神的發達と共に身體的發達を意味して居る。で、獨逸、墺太利、佛蘭西、伊太利の如き諸國の强壯な青年は全部、その訓練を受けることになつてゐて、好結果を奏して居る。今日の獨逸兵の平均胸圍と平均身長とは、報告が眞なら、陸軍服役が義務的となつた時このかた、非常に增加した。

日本人種の平均身長と體力とが――現在の進步的傾向が續かないものといつも假定して

――次の半世紀内に非常に著しい改善を示すてあらうことは、可也確實である。より善い階級に在つては、新教育制度は、前に兩親がその子息若しくは息女に妻若しくは夫を見つけるのが習慣であつた年頃よりも、幾年も結婚を後らせることにするてあらう。そしてさういふ結婚からして出來る子供は、子供夫婦が產むのよりか確に立派な子供であらう。後には、規則正しい徵兵の爲めと同時に、新境遇に伴なひ起こるに相違ない生活困難の避く可からざる增加の爲めに、多分より貧しい階級の人の間に在つても結婚が後れることにならう。この國の强壯な青年總てが、兵役の爲めに身體的に改善され、肉食に馴れ、丈夫な子供の父親たるに一層適せしめる壯健狀態に維持されることとてあらう。そんな身體的變化に伴なうて、性質の隨分の變化が期待されるかも知れぬ。二十世紀の日本人は、多分、今日の日本人よりも眞面目てあらう。がしかし、その外的並びに內的人間を形成するてあらうところの變化の性質如何を考へると、その祖先の特徵を爲してゐた幾多の美はしい特質を多く失つてしまひはせぬか、疑はしいことてある。

亞米利加の人種問題

亞米利加の南部諸州に長く居住して、其處に存在して居る變則的社會狀態を親しく見て熟知して居るので無い人には、人種問題に就いて公平な判斷を抱くことは困難である。北部諸州に於てすら、――開化した新英州の雰圍氣にあつてすら、――南部に於ての實際の論爭點について、非常な誤解が今猶ほ行はれて居る。そして、東部人士中思慮ある少數者は、南部の事件に對する合衆國政府の干涉は無量の禍害を生ずるに過ぎないことを今や公然認めてゐるけれども、大衆としての北部人民は、黑人地帶のネグロに政治的並びに社會的權利悉くを與へるといふ彼の不合理な法律の强制を喧々囂々する彼の好戰政治家に、猶ほ多少は支配されて居る。さういふ觀念は文明世界總てに反響されつつある。そして斯くそれに反對して主張されて居る事態は實に非道いものであることを認めなければならぬ。亞米利加の新聞を披いて、ネグロの私刑や殺害を讀まずに居ることは稀である。そして時時、それよりももつと惡るい事が――或るネグロの罪人が殘忍な拷問に掛けられながら燒

き殺された、昨年の、テキサス州パリの彼の恐ろしい事件の如きが――報道されて居る。南部の或る部分に於ける狀態は文明狀態では無いといふ、――それはこの語のあらゆる意味に於て殘虐無比(アトローシャス)であるといふ、――そして事態を改善する爲めあらゆる合理的手段を用ひなければならぬといふ――屢〻繰返された主張を反駁することは不可能である。が、どんな合理的手段が用ひられるか、これは非常に重大な問題である。英國の新聞は――英國の經驗を反映して、且つあらゆる人種のうちで最も紀律正しい組織的なこの人種には當然な衝動を傳へて――武力の使用を提言して居る。ところで武力の使用は、また一つ內亂を起こさぬとも限らぬといふいやなことが含まれて居り、また非常に厄介な憲法上の疑義を惹起こすことになりさうなので、非常に不必要ではあるが巧妙な外國の助言がこの問題に對して提出されて居る。事態について眞に能く消息に通じて居る少數の批評家だけが、亞米利加國民はその生命を危くせずしては根絕することは不可能な腫物の爲めに、辛抱强く苦しまなければならぬ狀態に居るのかも知れぬ、といふ事を念頭に浮かべて居るのである。

事實を極簡單にいへば、事態は略〻次の如くである。――亞非利加人種の特性を知ってゐた者共は、解放後その爲めに作られた不合理な立法には――家畜同樣無學文盲な幾百萬

の人間に普通選擧權を與へることに、市民たるものの有するあらゆる特權を有する資格ありと布告する憲法上の修正に、かかる特權を受くるその權利を承認することを拒むのを罰する特別法には——何等干與する處が無かつた。ネグロ人種について知らなかつた、或は知ることを欲しなかつた者共で、その公言して居る目的は人道を重んずであるが、その實際の目的は共和黨(レパブリカン)の勢力の維持であつた者共が、そんな法律を作つたのである。ネグロは、その元の主人を信用するなと教へられ、共和黨に忠誠を抽んでて初めてその最も恐るべき困厄を逸れることが出來ると教へられて、政治を熱狂的宗教にして、己が身を無法不埓な忠誠者の——利口な混血兒と狡猾な白人冒險者との——掌中に全く委ねてしまつた。ネグロの投票はそんな奴共の爲めに州を破滅せしめて以て己が身を富まさんとする爲めに使用された。そしてその人達を議會(コングレス)へ送る爲めに、黑人共がその人達に衣物を買つてやらなければならぬ程に貧乏な人達が、三四年して百萬長者になつた。ルイジアナのワーモスは、十二箇月在職した後(あと)で、その父に百萬弗の贈物をしたと言はれて居る。南カロライナのモゼスは懲治監で死んだ。南部諸州は、一般の破滅が避け得られぬと思はれるまでに、搾り取られた。が、そんな事態は、ただ合衆國の銃劍の力によつて維持し得られたのである。白人聯盟の死者狂ひの叛亂の後、その壓迫が一たび取除かれると、奴隸を使用してゐた前

の諸州の白人全體が、堅固に團結して共和黨の政策に反對した。その政策の武器はネグロの投票であつたのである。そこでネグロの投票は抑制を加へなければならぬと決定された。それを抑制する方法はたつた一つしかなかつた——即ち、恐怖であつた。そこで南部のネグロは脅迫され制御された。それからクー・クルックス〔ネグロ虐殺の秘密結社〕の時代が來た。後、合衆國委員が得たそれについての報告は、ブルガリアての震駭事の物語と恐らくは競ふほどの、暗殺と殘虐とを行つた。そしてクー・クルックス・クランが存在しなくなつたずつと後までも、この恐怖の遣り方は繼續した。その手段は嫌惡すべきものであつた。しかしその目的は成就された。黑人は制御されたのである。南部は政治的に一單位となつた。そして、如何なる動機からでも地方的民主主義(デモクラシー)に敢て反對したらん者は、必然的に社會上のまた政治上の敵と見做さるることになつた。が、この新事態の下に、南部諸州は戰爭の結果から恢復をしはじめた。現今は、今まで嘗て見なかつたほど、富裕であり、勤勉であり、繁榮てある。

にも拘らず、人種問題は依然として未解決である。奴隷制度が奴隷人種に對して有つ生理的意義が、その制度が元存在してゐたあらゆる國に於て、解放の結果に依つて、顯はれて來た。初め英領西印度に於て、後、佛領西印度に於て、英領佛領及び蘭領ギアナに於て、

黒人は、その自由を獲ると直ぐ、異常な迅速さを以て增加し始めた。上記の領地が結局白人の手から離れなければならぬことは早旣に免れ難いやうに思はれ、白人クリオールは年每に減少しつつある。ところが黒人の增殖は一向減少の徵候を見せぬ。そしてジアメイカとバルバドースは、年々地峽地方に或は中部又は南部亞米利加に、仕事を求めに、その人口の過剩を送り出して居る。

ところが今や、同じ人種危險が南部合衆國を威嚇して居る。黒人は、戰後は僅五百萬乃至六百萬と見積もられてゐたが、增加して八百萬になつて居るといふこととて、その增殖は絕えずその率を增して行く。彼等總てをリベリア亞非利加海岸の他の或る部分へ移すといふ元の計畫は、實行出來なくなつたので、それを語るものは最早居らぬ。雜婚がこの問題を決するであらう――この人種は『漂白されて行つて存在しなく』ならう――といふ昔の豫言は、今日はそれを敢て口にするものは無からう。極僅の黒人要素は、さうやつて、白色人種に吸收されるかも知れぬ。が、今日の合衆國の莫大な黒人は、そんな自然的過程のどんなものによつても、眼に見えて減るといふことさへなからう。その上に、人種嫌惡が、これ迄に見ぬ程度に、發達し來たつた。黒人は、政治的に堅實な南部といふより大なる人種的單位の內に――人種的に且つ政治的に――段々と一單位とならんとしつつある。初め

それへ押し附けた政治に對するその尊敬心――纏まつて投票するその傾向――共和黨ならばどんな首領にも捧げるその迷信的信仰――が少しも減じはしなかつた。それは常に增しつつ、增しつつ、――今なほそれを支配して居る白人よりも、駭くほどより大なる割合で殖えつつある。最早それを制御することが出來なくなる日が――大問題は人種主權の問題では無くして人種生存の問題たらん日が――終には來るに相違無いといふ、本能的感情が今や南部には在るやうに思はれる。そしてそんな感情の猛烈な嫌惡は、南部の暴民が――南部白人のより下等な階級の者が――行ふ幾多の殘虐な行爲となつて顯はれつつある。共和黨立法者の昔の愚行に直接基づくところのそんな罪惡のほかに、非常に重大な性質の或る間接の道德的罪惡が、南部で發達し來たつて居る。攻撃の必要が、攻撃を習慣的ならしめ、人間の情を野蠻的に堅くならしめ、如何なる文明國にも存在してゐない非常に恐ろしい標型の人間を發達せしめた。さういふ事情は悉く性格に反作用をする。これからの二十五年がどんな罪惡を南部へ齎すものか、今それを豫言するのは不可能である。が、奴隷制度の究極の最も惡るい結果はまだこれから來るのだ、といふ事、また、その制度の甚大な考へ違ひが、解くべき無數のスフィンクス謎を、まだ生まれてゐない立法者共に供給するであらうといふ事、これは傷ましくも明白である。

宗教的不寛容（拔萃）

一八九四年十月二十二日月曜日

今月十八日の『ジャパン・メール』に、狂信に對しての頗る思慮深い非難が載つて居る。察するところ、或る宣教師が、神戸から『ニューヨーク・インデペンデント』紙へ向けて、日本に於ける基督教信者の迫害に就いて、亞米利加の宗教新聞に餘りに多く發表されて居る　そして、そんな手紙を書く者共の動機をでは無くとも、その判斷力を大いに考へさせる、あんな法外な手紙をまた一通送つたものらしい。そんな手紙が同じだといふ事は、目的が同じだといふ――日本に居る基督教宣教師は苦しい目に遇つて居るといふ考へを、亞米利加の教會の人達の心に起こさせようといふ――明白な證據だと思うてよからう。

そんな手紙は總てみな、不寛容に就いて――基督教信者が公立の學校から解雇される事に就いて――基督教を信じて居る學生が基督教禮拜式に出席する事を許されない事に就い

て——學生或は教師が天皇陛下の寫眞に敬禮する事を拒んだが爲めに放逐される事に就いて——基督教を非とする公の演說に就いて——同じ狂信的吠え聲を含んで居る。その總てが、赤熱的迫害を想像せしめるやうな風に述べてはあるけれども、その根據は事實の誤解に過ぎない。あんな手紙は宣教師が、その爲め働いて居る大義を辱しめるものである。そしてあんな手紙に對しての唯一の辯解は、その筆者の想像力が歪んでゐたといふ事である。

條約改正の一問題（拔萃）

一八九四年十月二十三日火曜日

『今一つ考慮すべき重要事件は、外國人は實際に地所を所有し得ざることが社會的關係に對して有つ影響である。外國人と結婚し、その爲めその男の國籍となる日本の女は、その所有して居る實際の地所を悉〻く處分しなければならず、また遺產として地所は得ることが出來ぬ。——地劵はその女のものにも、その子供のものにもならぬ。その女はそれを

賣らなければならぬ。そして賣らなければならぬといふ事が知れると、政府はそれを賣れよと强ひは出來るが、どんな人にもそれを十分な價で買へと强ひは出來ぬから、その女はどんな直段でも承諾しなければならぬことにならう。だから、完全に適法な行爲が罰金のお見舞ひを受ける　といふ矛盾が生ずる』

これは、不幸にも、全く眞實である。條約改正の途に横たはつてゐたあんな非常な困難に打勝つた見事な政治的術策は、更にまた、この稍〻殘酷な謎を、道徳的に平等に解決する策を工夫することが出來よう、と我々は考へざるを得ぬ。外國人に嫁した日本人の妻が、斯くしてその女の本國で邸宅を有つ權利を否認されるといふ事は、確に公明正大な立法者の考慮に値する事件である。

一八九四年十月二十四日木曜日

新定旅券法の一結果（拔萃）

新定旅券法と共に、日本についてこれまで人が書いたどんな物とも異つた文學を多分作

るであらうやうな、一類の專門的文學者に對して、大なる仕事場が開かれることであらう。そんな訪客は非常に長い間一國に留まり得ることは滅多に無いものであるが、彼等は訓練された觀察者であり思想家であるから、新しい印象からして輕率な結論を抽き出すことはしさうに無い。彼等は西洋世界に取つて、日本をに全く新規に美はしいものたらしめることであらうし、彼等の藝術の達し得る限り、また彼等の機會の許す限り、日本に對してあらゆる公平な評價を下すことであらう。彼等は多くは、材料を探しに每年旅する、習慣的な旅行者である。で、これまで日本へ來た者が如何にも少いならば、それは主として前の旅券法の爲めであつたのである。

※ ※ ※

が、日本は、陸軍力は國家の自衞に必要だからといふただその理由て以て徹頭徹尾結構なものだとは信じてゐない人達に對し、また、サー・エドキン・アーノルドのやうに、日本の無上の妙味をば、その幾世紀の平和を美しからしめた、あの禮儀と優美と藝術とに見出した人達に對し、日本はもつと親切な感情を抱くやうにと、最後に希望を述べなければならぬ。

タイロア博士の古代亞米利加に於ける日本の影響

一八九四年十月二十五日木曜日

『北支那日日新聞』（ノース・チャイナ・デーリー・ニュース）の近刊の或る號に次のやうな記事が載つて居る。――

コロンブス時代前の亞米利加文化は亞細亞起原のものであつたといふ說は次第に廣く傳播しつつある。オクスフォードで開かれた英國協會（ブリティシュ・アッソシエーション）の八月の集合て、バーネット・タイロア博士は、神話的信仰の分布に就いて一文を讀んだ。死者の橋の神話のやうなあんな神話が世界中に廣く分布して居る事が分かれば、この事實で、世界の大宗教間に存する連鎖を我々は證明が出來る。靈的天秤で魂の重さを量ることも、こんな風に廣く撒布して居る神話の一つである。古代メキシコの宗教では、魂が靈の國へ旅して行く四つの大きな場面が、ヷチカン・コーデックスとして知られて居るものの、アズテク繪文字に、描かれて居る。第一、死の河を渡る光景。第二、互に撞き合ふ二つの大山の間を魂が通る光景。第三、銳

利な黑曜石の刄が立つて居る山を魂が登る光景。第四、そんな刄を風が齎すよりして生ずる種々なる危險の光景。この繪と、日本の寺院の繪卷物に描かれて居る佛教の淨罪界の或る場面との間に、密接な類似がある。日本のでは、初めに死の河を徒涉して居る魂が見られ、第二に、鬼が撞き合はせる二つの鐵の山の間を通る魂が見られ、第三に、その鋭い刄がその手足を切る劍の山を登る魂が見られ、第四に、空中を飛んで居る劍の刄が見られる。タイロア博士はまた、メキシコと亞細亞との曆と神話的變災とからしてのフンボルトの議論に言ひ及び、兩地方に於ける靑銅細工と遊戲との一致を說き、人類學者が古代の亞米利加文化は大部分亞細亞の感化に負うて居ると考へるのを至當とする證據が十分にある、といふ意見を述べた。

タイロア博士の人類學に對する奉仕は科學界の感謝に値すること、また物の起原についてのその學說は何れも少くとも尊敬的考慮を受くべきであること、は否定は出來ない。しかしタイロア博士は、大いに異つて居る諸人種の原始神話學に存する種々な明白な類似がそれだけで以て滿足に說明の出來るところの、社會に對しての進化說の適用といふことを、十分に承認してゐない。そしてあらゆる形式の非亞細亞文明を辿つて、それを亞細亞起原のものとする古い傾向に、科學界の意見は一致して今や强烈に反對して居る。この古い傾

向は、聖書の傳說を長い間承認してゐたが爲めに出來た考へ方の復活てある。そしてそれは、時には人類學者をと同樣に古文字學者を拔き差しならぬ泥濘へ足を踏みこませはしたが、最近までは役に立つものであつた。しかし、それは今は役に立たなくなつてゐて、我我はその傾向に一致してゐる新學說は悉く嫌疑の眼を以て見ざるを得ぬやう殆ど餘儀なくされて居る。事實を最も簡單に最も明白に言へば、事物の起原は遍く亞細亞に存するといふ學說は原始的信仰及び習俗の類似を說明することが每度出來ないで居たのに、進化論哲學は一切のものを說明することが出來、正(まさ)しく同一性質の信仰及び習俗が、全然何等の相互交通を有たなかつた二人種間に、自發的に出來上がつたのかも知れぬといふことを示すことが出來ることを見せた。今、中央亞米利加の文明は、その起原亞細亞に在りとするタイロア博士の學說の場合に於て、所謂さういふ文明の性質に就いての最近の著述に——殊に、昨年出版された、『亞米利加の發見』と題する、フイスクのあの顯著な著作に——何等注意を拂つてゐない事は、全く明白である。世界全體が、四五年前までは、古代メキシコ及びペルウの社會狀態に就いて欺かれてゐたのてあつた、——亞米利加征服西班牙人(コンクイスタドーレス)共の書いた書物の爲めに欺かれて——旅行者や科學者の報告の爲めに欺かれて——實際、眞實とは反して居る莫大な異常な證明の爲めに欺かれてゐたのであつた。あの奇怪なアズ

テク聯邦ほど不思議にも文明に類してゐて、しかも、實は文明を去ること甚だ遠きものは、未だ嘗て此の世界に無かつたのである。ペルウの社會すら、科學的に文明と呼び得るものとは全く距たつたもので——近代のダホメー或はアシャンテと殆ど同じほど文明とは距たつたもので——あつた。しかし外觀は、學者社會を迷はして、アズテク人並びにペルウ人は實際純粹の文明に達してゐると信ぜしめる、性質のものであつた。恐らくは我々は、昔のアズテク人並びにペルウ人が生活してゐたと殆ど同じ生活をして居る近代の印度人種族を——所謂プエブロ印度人とズニ印度人とを——比較的最近に發見することが無かつたならば、今なほそれを信じて居ることとであらう。この二種族が提供して居る社會狀態の完全な研究が、古代亞米利加に就いての無數の祕密を知る手掛かりを與へて呉れた。西班牙人が精密に記述して居る壯麗な宮殿は、近代のズニ印度人が建造して居るのと同じ種類の巨大な團體的建造物に——住邸と云はんよりは、寧ろ大きな人間の蜂の巣、或は、人間の蟻塚に——過ぎなかつた、といふことが分かつて居る。北亞米利加に居るこれと同血緣の印度人種が建てたもつと無限に單簡な建物からしてこんな建物が發達したことは、十分に源に遡つて研究されて居る。そして古代メキシコの『文明』はスーやコーマンチーの文明よりも高いものでは無かつた、といふことを今我々の前にある證據が壓倒的に證明して居る。

文を書く——書くといふ語の我々の意味での——術は全く知らず、鐵の使用は全く知らず、人肉嗜食を行つて居り、武器としては極北の漂浪的遊獵印度人が使用してゐたと同じ石の削片を用ひて居り、そして共同生活に必要な單純な工業に於てはそんな漂浪人よりも巧みとは殆ど言へないで、獰猛に於て血に渴けることに於て遙かそれに優さつてゐたのだから、——アズテク人は、そんな新しい發見の光りに照らして見れば、そんな赤色野蠻人の普通の水準へ下がつて來なければならぬ。我々はアズテクの『文明』はどんなものであつたかといふことを今理解して居る。そして古代亞米利加人は、彼等をしてその石造の地方自治體を建てしめ、その羽毛を編ましめ、その燧石を削がしめるのに、亞細亞から敎へを受くる要は無かつたといふことを我々は理解して居る。エルナンドー・コルテース〔メキシコを征服した西班牙人一四八五—一五四七〕時代に日本はメキシコ或はペルウよりも進歩せること少くとも二萬年であつたのである。

愛國心と教育

一八九四年十月二十六日金曜日

戰後に於て——その結果が日本に有利であると假定して——政府のその現在の恐ろしい企圖をあんなにも強く支持し來たつて居るあの大なる愛國の精神が、引續きもつと持久的なそして劣らず重要な方面に、現はれる事は望ましいことである。近代の文明社會に於ては、戰爭の力と工業の力とは、製産といふ同じ資源に涵養せられて居つて、平和の時には、一國の餘力は新しい源泉を造り、新しい企業を起こして、その國を強固にすることに使用されて居る。我々は、今次の戰爭が成功した場合の一結果として、工業上並びに商業上の絕大な發展を日本に向つて豫言することを、既に敢てした。しかし、日本の今後の發展が、生産と商業とだけに限られない事を大いに希望する。この二つは日本の生存そのものに肝要ではあるが、日本の日に日に進み行く文明をば種々な西洋國民が到達したのと同程度の

完成に展開し得る間接の手段に過ぎない。最高の進歩は國民的修養に依つて初めて成し遂げ得るものである。そして國民的修養は、まだ日本に存在してゐない幾多の條件の下に初めて實著に維持して行かれるものである。然るにその條件は、目下自ら進んで陸軍の給養と甲鐵艦の建造とに貢獻して居る所の、そしてそれを勵まして遠からず、永遠の基礎の上に、幾多の大學の創立と幾多の教育機關の設立とに貢獻させることが出來る所の、彼の愛國的精神に依つて取扱はれ得るのである。

日本の教育制度全體が間接或は直接に政府の扶助に頼つて支持されて居る事は、また、大きな中學校のうちに自營してゐないものが、或はさうなる見込みすら無いものが、幾つかあるといふ事は、日本に取つて不幸である。多くの理由で不幸である。一つは、全教育制度が畫一にされ機械的にされて居る事、大なる經驗なり優秀なる才能なりを利用する機會が教育者に、餘り或は全く、與へられてゐない事、個性が――外國では教師の最高な能力と認められて居る個性が――全く抑制されて居る事、そしてあらゆる事業に於て絶えざる進歩に必要缺く可からざる健全な競爭が不可能とされて居る事である。今一つの理由は、政治を學校外に置いて置くやうあらん限りの豫防あるに拘らず、學校の組織が官のものである間は、學校は政治家の支配する所となるであらうといふ事である。生徒の反抗の如き、

多くは、歇むことなき陰謀の、直接或は間接の結果である。今一つの理由は、そんな事態の下に在つては、完全な薫陶は勵行出來ない事、そして多數の場合、生徒の方が自分が教育して欲しいと思ふ教育方法に就いて指圖することが出來るといふ事である。如上の事は總てこれまでは避け難いことであつた。そして生徒に對して與へた教育の結果は、缺點を有つた事情にしては、頗る著しいものであつた。ところで現今の事態には急速に自然的に改善が出來さうに無い。中學校が自營になるやうな見込みは今後幾年間も無い。ところがそれが自營で無い間だけ、丁度、その間だけ公教育は依然として不完全なままでゐるであらう。

これに似た缺點が外國の種々な公立學校制度に存して居る。が、そんな缺點は、無數の自營的中學校、專門學校が非常に優秀なるが爲めに――巨大な寄附資金を享けて居る大學の爲めに――國民への贈與として提出された科學的教育機關の爲めに――そしてそんな學校及び教育機關間の、最善の教授を招聘しよう、最善最新の方法を採用しよう、出來る限りの最良の機械を使用しようとの素晴らしい競爭の爲めに――償はれて餘りある物がある。

これが日本の必要とする所のものである。日本は富裕な愛國的な市民からの寄附資金を必要としてゐる、――自己の收入だけて經營して行かれる、そして同種類のどんな西洋の

教育機關とも競爭するに堪へる、大學、專門學校、中學校の贈與を必要として居る。日本は私立の工業學校を必要として居る。まだ多くを必要とはしてゐないが、それを必要とする時代は遠くは無い。支那の高慢の鼻をへし折る事業に於ける日本のこれ迄の成功は、專門的教育に――その士官の軍事的訓練の優秀と、その海軍諸校の優越とに――負うて居ることは確實である。がしかし、眞に繁榮な國民がその政府へそれを投げかけざるを得ぬものは陸軍並びに海軍の教育といふ負擔だけてある。私人的義俠心と富裕な公衆の好意とが、終には政府に代はつて、教育制度全部を支へて行くといふ大任を引受けなければならぬものであり、より重要な學校をば少くとも自營的根柢の上に置かなければならぬものである。

一八九四年十月二十七日土曜日

地震と國民性

近年の廣大な變災――明日がその三週年の岐阜の地震、比較的に近時の鳥取と岡山との

洪水、つい此の間の山形の災禍――は實に國民的不幸の性質をもつたものであつた。直接にはただ局限された一地域にだけ影響を與へてゐるけれども、そんな災難の間接の結果は全帝國が感じて居るので、國庫の救助によつて初めて救ひ得るものである。だが、週期的苦難の度毎に示すこの國民の驚く可き回復力に一層感服していいものか、又は受苦その際に於けるその感心な耐忍に一層感服していいものか、我々には判からぬ。兩方とも、實際、比類無してある。そして、幾千年の間日本は正しく同じ樣な受苦を爲し來たつて居ること を思ふ時、そんな異常な事件が國民性に何等の效果も有たずに居る、と信じないで居れぬほどである。

日本の物質的存在の特色のうち、日本の非常に丹念な文明がその下に在つて進化し來たつた大異變に一部は基づくかと察せられる格段な特色を何か擧げようと敢てし得るならば、我々は言ふ、それは不安定であると。（この言葉を用ふるに當つて、我々は物質的生活だけを指して言ふので、精神的生活を指して言うて居るのでは無い。そんな境遇が來たす心理的影響は別な考慮を要する）日本は、その有史時代だけの比較的短い時代の間に、首府を六十以上これまで有つて居たといふ著しい事實については詳論せずとも、不安定といふこの特徴は、殆どあらゆる日本建造物の一時的性質に、最も能く實證されて居る。日本の

都會はいづれも——少數の巨大な城砦と、中には鎌倉の二三の古い建築物の如くに支那建築師が建てたのもあるが少數の有名な寺院と、を除いて——一代のうちにすつかり建てなほされると、無遠慮に述べることが出來よう。戰爭、火事、洪水、地震がこの斷え間無しの再建築の唯一の原因では無い。その極めて單純な原因は、家屋が永く續くやうに建てられることは稀だといふことである。日本の都市の大部分は四五日ですつかり建ち上がる建築物で成つて居る。この國の人は、その語の我々の意味での、先祖傳來の家を有つたことは無いのである。極東の人の魂に最も貴重な場所は、生誕の地では無くして、埋葬の地である。——一家のハカバ——祖先の墳墓である。實際この土地には、死者の永眠處のほかには、永久なものは他に殆ど無い。最も神聖な方の宮——伊勢の宮——すら、傳統的習慣に依つて、二十年毎に壞はして建てなほしされなければならぬ。

要するに、この人種はその環境の苛刻猛烈な事態に、自然的不安定に對するに人爲的不安定を以てして、應じて居るやうに思はれる。山がその姿を更め、海岸がその形を變へ、河がその途を轉ずる土地に在つて、大理石の寺院や花崗岩の記念碑を建てるのは無駄な事であつたらう。そんな境遇の下に發達した最も目ざましい建築——昔の城の巨大な壁——は環境への適應の感心な見本を提供して居る。他のどんな石造物も、巨城の多くが揺られ

來たつて居る衝擊に、とても堪へ得なかつたであらう。ところがその巨大な壁のセメント無しの石は、地震振動の度毎に、互に一層密接するやうに動くだけて、層一層堅固な正面を造るのである。

がしかし、日本に於ける自然の狀態が、我々が述べた、物の形のあの變易性と物の場所のあの變化とを十分に說明する、といふことは決して間違ひの無いものではない。經濟上の理由がそれに貢献したのかも知れない。人種的諸傾向が——日本人が實際に漂浪的祖先を有つてゐたと假定して——建築の樣式と材料の選擇に影響を與へたのかも知れぬ。その原因は多分複雜なものであつたらう。その結果は無比なものであつた。

そんな不安定の別な結果として、持久、忍耐及び環境への自己適應といふ尋常ならぬ國民的能力の發展を我々は期待し得るかも知れぬ。ところで我々が實際日本人に見出すのは正しくこの能力である。そして自然的影響に加ふるに永遠に滅亡の教理を有つて居る佛教の甚深な影響を以てすれば、この人種の肉體的生活並びに精神的生活に最も顯著なものの多くは、日本だけに——亞細亞の平原に於てでなく——發達し來たつたもの、と信じてよからう。日本人社會がいつも依然として多少流動的であつて、今なほ支那をあらゆる外部の勢力と隔たらしめる彼の固定した保守主義には決して結晶しなかつたのは、多分影響が

局部的であつたのに因るのであらう。複雜な二つの文明を吸收し得させた、此の人種のあの驚くべき同化力は、一部は少くとも、岐阜や山形の災害と同じ駭くべき性質のものを無數に經驗して發達し來たつたものかも知れぬ。

西洋文明の採用は、より大なる安定の狀態への傾向を產むものと期待することが出來よう。そしてその傾向は存して居るのである。しかしそんな安定が比較的なもの以上のものにいつか成れるかどうか、疑はしいどころでは無い。將來の日本に於て、『英吉利の素敵な秩序正しさ』とか、西洋の大國民の徐々に固定をした力や調整された堅固さに比べられるやうな物は、殆ど發達することは出來まい。といつてまたその反對のことは餘りに多く希望してはならぬものである。日本が、信じられない程の短い時期に、西洋がそれに提供し得た總てを受納し、咀嚼し、利用し得たのは、その社會の流動性そのものに依つてである。そしてそれを利用して、その邦土を週期的に荒廢せしめるあんな恐ろしい突然の襲來物に惱まぬやう、もつと有效に自己を護る手段を日本は終に發見するかも知れぬ。

亞米利加の政治に就いての日本人の觀念

一八九四年十月二十九日月曜日

日本の新聞が幾つも、日本に對する合衆國の態度に論評を加へて、亞米利加の政治に對しての妙な誤解を示して居る。支那人及び日本人の移住の問題は——亞米利加では大多數者の意志が政府を造るのであり、その大多數者は支那人及び日本人の移住に反對して居る勞働者から成つて居るから——これに關する亞米利加の政策を支配して居る、と重々しく主張して居る。

太平洋沿岸では支那人移住に對する敵愾が或る時代には議會（コングレス）で强固な民衆代表を得てゐたことは全く眞實ではあるが、この事についての議會のその後の行動が該（そ）の代表の所爲てある、と想像するのは全く誤解てある。それは主として非常に異つた代表の所爲てあつて、太平洋沿岸を騷がせた動機よりももつと大きな性質の動機に依つて決定されたのてある。

過去の並びに或はあらん虐殺に含まれて居る國際問題、カリフォルニアに於ける無政府が貿易と商業とに及ぼす究極の結果、彼の共和國の道德的威信、及び他の多くの考慮が――支那人問題に對する議會の決定に、勞働者の直接の意思よりも遙かに多く關係を有つてゐたのである。

日本人の移住については、亞米利加にとつてまだ國家的緊要の問題とはなつてゐない。そしてそれがこれまで惹起して居る二三の動搖は、支那人移住についての前の大聳動の殆ど反映に過ぎなかつた。全體として、亞米利加の勞働者は日本人に就いて極めて少ししか知つてゐないし、重大な競爭をしたことはこれまで無いのである。紛議は小さいもので且つ局部のものであつた。そして國家的意義に於て日本人移住問題なるものはまだ無いのである。

今の日本人が爲して居る誤解は、亞米利加の政治は實地が理論と同一だといふ想像に、全然基づくものである。この問題に對して一般的な聲明が可能ならば、事實はその逆である。尤も、理論の上では政府は人民の政府であつて、多數者の意志を――勞働者部類の意思を――代表しなければならぬ譯てある。が、事實としては、政府は銀行鐵道信託(トラスト)事賣の意志を――富裕な中流階級の意志を――代表して居る。そして黨派の爭ひは主義の爭ひて

は無くして利害の爭ひてある。社會といふものは、平等の特權と權利とを得さす目的てどんなに組織されても、少數者が——初めには優越な智慧に由つて、後には智慧と金とに、卽ち力に由つて——それを支配する手段を見出すものである。恐らくは勞働階級は、尋常普通な年には、亞米利加では、それが英吉利で或は獨逸帝國てすら代表されて居るよりも、少く代表されて居る。それで今の日本人は亞米利加の勞働者の意志は條約　正問題には全然何等の關與する所を有たぬ、と十分安んじて可也てある。亞米利加が、大英國が承諾した條件に同意することを拒むならば、その決定は、日本に居住して居るその商人への或る利害と、その東洋貿易の量への可能的結果とに據つて爲さるることてあらう。

がしかし、以上述べ來たつたことからして、大多數者の意志が亞米利加で決して代表されない、ものと今の日本人が推斷するやうさるることは我々は願はない。全體として亞米利加の憲法は感心なほど立派に運用されて居る。あらゆる惡弊と腐敗とあるに拘らず、少數者が、或は幾多の少數者が、その力を賢明に使用して居る。彼等の利害は大抵は國民の——それ自體が產業的民衆たる國民の——利害と符合して居るから、彼等は尋常の事態に在つては、一般の安寧を確保する任に最も能く堪へ得るのである。また、異つた利害の競爭が、權力の大亂用を可能ならしめぬやう遮り止める。がしかし、異常な事態の場合には、

——國家的危險或は國家的不幸の時期には、——その時には全體としての國民の意志が、一國としての人民の意志が現はれて、實地その時局を支配する。どんな人民も、亞米利加人ほど、危險の境遇に在つて、國家的本能の價値を知つて居るものは無い。物事が餘りに惡るくなり過ぎると、國民の思慮がそれを正し得るのだと、それへ信頼が置かれるものである、といふことは誰れしも口にする言葉である。

國民的個性

一八九四年十月三十日火曜日

恐らくは我々のうちの多數の者は、學校時代に、その市街を防禦してゐた射手に弓絃を供給しようとその毛髮を斷ち切つたあの古代の婦女の物語を聽いて起こした感銘を、憶ひ出すことが出來よう。そんな事實はその當時は我々に全く浪漫的に思はれたが、我々は、居留外國人として、もつともつと異常な愛國心の表示の裡に、今生きて居るのである。歴

史上如何なる時と雖も、昔の希臘人或は羅馬人、或はカルタゴ人或はヘブライ人が、今日日本人が示して居る以上の忠義と愛國とを示しはしなかつた。だのに我々はそれにほんの少ししか注意を拂つてゐない。何が故であるか。我々が歐羅巴の學校で、勇壯として、自己放棄として、愛國心として龜鑑だと思へと敎へられてあつたことの多くが、日本人には單に義務と——普通の義務と——考へられて居る、ことをみんな知つて居るからである。我々はこんな事についての東洋の感情と行爲とに餘りに馴れて來て居るので、如何に著しい光景を我々は看る特權を今有つて居るか、それを殆ど忘れて居る。日本人の國民性の道德的實證として永遠に記錄する價値ある新實例が、日毎に提供されつつあるのである。

恐らくは我が讀者の多くは、宣戰後この帝國到る處に行はれて居ることに、まだ考へを向けさへもしないで居るであらう。がしかし、非常に珍らしい事柄がこれまで行はれてゐたのであり、今猶ほ行はれて居るのである。この國の者悉くが、戰爭資金に、或は外征兵士の妻子の衣食に、或は朝鮮に居るその軍隊の肉體的慰安に、或る物を貢獻し來たつて居る。我々は、悉くがと、この語の最も廣い意味で、言ふ。金ては何も寄與する事の出來ない——米或は粟の一握すら節約の出來ない——貧困極る百姓は藁を出す。幾千幾萬といふ藁のサンダル（わらぢ）が大都會の貧乏人によつて寄附されつつある。多くの草鞋を

提供する出費にすら堪へ得ない者共は爪楊枝の小さな束を出す。マッチを出す者もある少し工面のいい者共は糧食、煙草、煙管、果實、千差萬別の小贅澤品を提供する。各個の場合の量は至つて些細なものかも知れぬ。しかし、その合計は非常に大きなもので、それを戰場へ輸送するのに餘程の困難を覺えて居る程である。商人は酒樽、衣類――多量の貴重高價な糧食――を出す。普通の市民――商家の傭人、教師、その他――は小額の寄附金をして補助する。日本國中の學校全體がいくらか獻金し來たつて居る。子供はそのお小遣ひを捧げる。そしてその悲壯な僅な贈與は、これを拒めば不必要な心痛を起こすに極まつて居る。そして種々な兵營所在都會の町内町内悉くが、召集された豫備兵の家族の扶助の爲め、他の特別な寄附金を絶えず徴集して居る。そして食物や必要な慰安物總てが、外征兵士の家庭へ規則正しく供給されて居る。斯く愛國的にこれまでされて居るもの、今されつつあるもの總てを述べることは、たつた一回の論說では實以て不可能である。ありつたけの愛情を以てそれを支へて――人間の感謝の念を鼓吹し得るあらゆる親切を以てして、その義務以上のことさへ盡くせよと、身分の最も低い兵卒をも勵まして――全國民が軍隊の背後に居るのである。

我々には、兵士を助ける爲めに二錢若しくは三錢を寄附する日本の子供の行爲は、その

戰爭資金への寄附が計幾萬圓の多きに上る薩摩や水戸の貴族の行爲に劣らず、道德的に美しいものである。實際或は子供のそんな寄附の方がもつと意義が深いと自白せざるを得ぬ。といふのは、そんな子供には、大人の寛宏に普通寄與されて居る彼の複雜な動機は、一つも頭へ入り得ないからである。がしかし、或る一人の日本貴族が爲れた特別な一寄進は、實際驚く可きものであつて、最も例外的な個人的愛國心と、忠君の熱誠とを示して居る。その寄進には陸海軍への十萬圓（その各〻へ五萬圓づつ）と、加賀、越中、能登で既に召集された第一豫備軍の兵士の家庭の扶助に六千圓、——帝國海軍水兵に下着用として最上のフランネル二千七百ヤールと、陸軍に下着用として四百五十ヤール、を含んで居つた。なほその上に、前記三州のいづれかに屬して居るもので、戰死した者悉〻くの家庭へ五圓（卒の場合に）から五十圓（士官の場合に）に至る金額を拂ふと約束して居る。この貴族は前田侯爵である。

恐らくはパーシヴル・ローヱル氏型の思想家は、一國民が全部擧つての熱誠の、この絶大な一致は個性の缺乏を暗示して居る、と言うであらう。遠方からそんな批判をするのは容易である。しかし、日本人そのものの内に加はつて、骨を折つて日本人の感情を研究する者は、誰れもそんな意見はとても抱くことは出來なからう。そしてこの人種の個人個人

の個性については何と言ひ得られようと、我々は今、その國民的個性の絕大な力の、驚嘆すべき實證を有つて居るのである。我々は、西洋で『個人の修養』と呼ばれ來たつて居るものの多くは、純然たる自己中心主義の修養以上のことを殆ど意味しないではなからうかと氣遣ふ。心理學の理論家には、どんなにその特色の名を與へられようと、日本に於ける國民的感情の現在の現象は不思議なほど美しいものである。日本の力をば、その物質的資源だけで見積もつてゐたが爲めに、日本を弱いと思つてゐた西洋の政治家に、この現象はまた敎訓を與へるものである。國民的危難に際しては、物質よりも精神が遙かに重きを爲すものである。

一八九四年十月三十一日水曜日

亞米利加に於ける勞働問題

合衆國の鐵道紛議の社會史にかけての有名な一權威ヘンリー・ジエー・フレチャーが、

十月の『アトランチック・マンスリー』誌へ、近年の巨大な鐵道ストライキに包含されて居る諸問題に對して注意すべき一文を寄稿して居る。合衆國に於ける資本勞働間の爭ひは、研究すべき特色を提供して居り、しかも、それを大規模に提供して居るのである。それは社會學者には無上に緊要なものである。それは——より古い文明社會に於ては、恐らくはそれほど分明なものでは無かつたし、それ程恐ろしいものでは無かつたけれども、そして最近の英吉利の石炭ストライキを忘れてはならぬけれども——亞米利加でと同樣、歐羅巴で今行はれて居る、社會改造に向つての偉大な運動の一般の筋道を示して居るからである。我々はまた、その運動の最後の結果は第一に合衆國で——社會の發展が前例の無い程迅速であつたから、社會改造も亦空前の短時期内に成し遂げられさうな合衆國で——到達されるであらう、と敢て豫言し得るであらう。

七十年代の初めに、此の一文の筆者は、亞米利加に於ける勞働資本間の鬪爭がいつも資本の勝利に終はつたことを憶ひ出す事が出來る。有力な種々な勞働組合（トレード・ユニオン）が解散された。そしてその敗戰の直接の原因はストライキ側に組織をする能力が無いといふ點にあるやう思はれたので、思想家は少からず、組織立つた爭ひに於ては、勞働は終に資本に勝つことは出來なからう、と確信を以て豫言した。勞働の弱點は明白に必的なものであつた。その鬪

等は、單に權力としての金に對するだけではなく、權力としての訓練された實務的智慧に對してであつた。ところが、勞働方はそれまで想像されてゐたほどそんなに見込みの無いものでは無い、そして全く理知的なものでは無くて、純然と感情的な或る物が終には、實務的智慧及び能力の遠大な結合に對抗して餘りあるものとなるかも知れぬ、といふことを示す事件が出來して來た。フレチャー氏の論文は、この事實の最初の表明と我々には思へる一事件——一八七七年のボルチモア及びオハイオの巨大なストライキ——の考察で始まつて居る。それは政府が武力を以て鎮定したが——幾百萬の財産を滅ぼし、幾百の生命を失つて初めて爲したのであつた。他にいくつもストライキが續いて起こつた。その間幾多の鐵道會社——交通上の事件にと同樣政治上の事件に——縱まゝに權力を使用したので、公衆はこれに驚いて、終に各州間の商業を規定する法律の可決と、鐵道紛爭を研究する委員の任命とを爲さしむるに至つた。その法律は何の效をも奏さなかつた。委員は、當時の事態に何等變更を强ひる權力を有つてゐなかつたので、報告をしただけで何も仕遂げはしなかつた。そして雇人に對して公平な取扱ひをせよと强ひ得るやうなそんな法律を制定しようといふ企ても全然爲されはしなかつた。しかし、雇人共は自分達の權利を獲得する努力を怠りはしなかつた。彼等は團體を組織しつつあつた。それは、一八九三年十二月に、

北太平洋鐵道會社の管財人等は、幾度も給金を下げたので、ストライキが起こりはすまいかと恐れて、裁判所にそれを防ぐ命令を乞うた、ほどの怖ろしい規模であつた。その命令を判事ジェンキンスが發したので、そのストライキは一時防ぐことが出來た。聯合太平洋(ユーニオン・パシフィック)鐵道會社は、給金を下げようと決心して、同樣な援助を法律に期待した。ところが判事コルドヱルは、配當を支拂はうが、支拂ふまいが、至當な給金は拂はなければならぬと答へた。斯くして鐵道雇人に有利なこの判決は、判事ジェンキンスの下したのと正しく反對な判決の爲めに、ストライキを一つ避けたのであつた。大北鐵道ではストライキを防ぐことが出來なかつた。が、罷業者共は、デブスの統帥の下に、――『七州の商業と四千五百哩の鐵道とを動けなくして』――完全な勝利を制した。

ところが一八九四年の巨大なストライキが――その大いさに於て歴史上空前なストライキが――プルマン會社に對して全亞米利加鐵道聯盟がしかけたストライキが――準備を整へつつあつた。この國の鐵道交通全部が麻痺した。損失は考へるのも恐ろしい程の數字に達した。そしてこの運動は、非常な困難の後、軍隊の力でやつとのこと到頭鎮定された。そして今や各鐵道は合衆國裁判所と軍隊との援助が無ければ鐵道を破滅さしたであらうやうな絶大な組合(ギルド)を破らうと努力して居るのである。

彼等はその組合を崩すことは出來なからう。彼等が戰つて居るのは普通な聯合では無くて、如何なる手段でもが、その組織を破ることの出來る聯合ではない。それは單に、共通な一衝動に對して共に行動する雇員百萬人以上の一團體である。その衝動たるや感情的なものである。衆庶の感情なるものは、訓練された實務上の智慧よりも――可也勝算があれば――より有力なものとなるものである。衆庶の感情は革命を起こすものである。未來に於て一體となつて確に再び行動せんとする――絶えず增加して行く――その百萬の雇人のほかに、幾百萬人を算するその同情者が――比較的少數な者へ富の集中よりして生ずる自然的結果に大か、小か、今苦しんで居る非常に澤山な勞働者達が――居る。

亞米利加の事情は、だからして、かうである。――一方には、その利害は懸かつて鐵道の作業に在る鐵道と產業階級がある。他方には、革命を起こす衆人感情に後押しされて鐵道雇人といふ軍隊がある。間に政府と法律とがある。どういふことが出來るか。

これまでは政府と法律は富者に味方して、銃劍に依つてあらゆる重大なストライキを倒した。ところで、ストライキは流血と暴虐と財產の破壞とを意味することであるから、政府の行動が、少くとも必要であつたか、或は正當であつたかに就いては何の疑問もない。それは避く可からざる事であつた。裁判所の態度はかうであつた、――財產は保護しなけ

ればならぬ。ストライキは財産向けてやつて居る。だからストライキは不適法である、と。

がしかし、この態度に含まれて居る非常に重大な問題が――合衆國の憲法に觸れて居る問題が――ある。財產の權利を尊重しなければならぬことが確であると丁度同じに、勞働を止めるといふ、或は不適當な給金を拒むといふ、個人の權利も亦尊重しなければならぬ。鐵道問題は、市民の自由を侵すことなくして、財產の爲めを謀つてどう法律を遂行して行かれるか、といふ謎を出して居るのである。勞働者にストライキを禁ずるどんな權利を合衆國裁判所は有つて居るか。禁止の命令は憲法の支持し得るところか。

勞働紛議は巨大ではあるが、まだ若い。年毎にそれはより大となりより威嚇的となろう。この問題にはたつた三つしか解決の法はありさうに思はれぬ。第一は、政府が鐵道を引取る（それには、例へば百萬票以上を黨派政府の隨意にさせるといふやうな、非道い政治的な可能事が含まれて居る）こと。第二は、傭主に對して鐵道雇人を保護する法律を可決すること。第三は、革命である。若し政府がこの鐵道の謎を解くことが出來なければ、人民が必らずやそれを解くであらう。

支那に對する同情

一八九四年十一月一日木曜日

日本の開港場に居る外國居留民のうちで、支那の開港場を横濱や神戸の街衢に劣らず熟知して居る人が多い。支那に居る支那人のうちに正眞な德性と生粹な親切とが存して居ることを知つて居る者が幾人かある。さういふ人達のその古い支那時代の記憶は愉快なものである。それてそんな人達は支那に對してその現在の困難に純粹の同情を感じて居る。それを言ひ得べくんば、感情的偏向と呼ばう。それは人情の或る物であり、正しいものである。誰れが一國の全體を、一人種の全體を知らう？我々は或る一國をば多くは、その國のうちで我々が熟知して居るその特殊な部分で判斷する。我々はその國民の性格をば、我々が偶〻親しくなり得た數百人の缺點と美德とて判斷する。その判斷の性質は、その觀察者の個人的經驗並びに個人的性格に從つて固より多少の差異があるに相違ない、が、寬大な、

公平な心を有つた人ならば殆どどんな人でも、東洋のどの國でも、それに數年住居して居ればその間に、有難かつたといふ記憶を起こす程の、人間の善良さについての印象を大抵は十分に受取る。この事を、前に支那に居住してゐた多くの人は、その經驗だと自白する。それてそんな人達が支那人が全體として盛んに侮辱されるのを耳にすることを嫌ひ、日本との戰で全然屈辱を與へられるのを目にすることを遺憾とするのは當然のことてある。

この種の同情に就いては何の咎むべき處はない。むしろ我々はそれが全然缺乏して居るのを咎めたい氣になるべきてある。が、その性質を述べるのが困難な、別樣な全く不合理な、同情がある。それは日本で刊行されて居る某々の英字新聞に強く現はれて居る。その新聞の調子が――少くとも戰の始めに當つて――日本の敗北を希望する意を見せてゐたことは殆ど疑ふことが不可能てある。日本の勝利の官邊の報道は初め大膽に否定され、一方、支那當局が發表した虛僞の報は、事實として熱心に受け容れられてあつた。

だがそんな人達の心の中へ、支那の勝利が何を意味するてあらうかといふ事が、いつか入つたてあらうか。その人達は、日本海軍の滅亡が外國の通商上の利害に及ぼすべき間接の結果を、一瞬時でも考へたてあらうか。そんな不合理な論說を書く人達は、實際、日本の軍艦の保護のお蔭で文を書いて居るのてある。どの開港場が、支那の甲鐵艦に抵抗する

どんな可能性を提出し得るのか。長崎、大阪、神戸、横濱で、支那の一提督の意の儘に、一大災禍が出來するかも知れない。かの筆者共はそんな災禍を望んで居るのか。それとも、日本に對する海上攻撃に於て、支那人は外國人に對してはありとあらゆる識別の法を講ずる、と確信すべき手段を見出して居るのか。

支那を征服しようといふこの絶大な企圖に日本が全然失敗すれば、この國に居る外國居留民は非常に重大な結果を受けることになるであらう。通商の不具――本國での遠くに及ぶ利害の損失――諸工業の畏縮――それに續いて必らずや起こるあらゆる種類の價格の一般的下落――確にこれ等のことは、どんなに猛烈な日本の反對者と雖も希望すべき結果ではない。彼等は、歐羅巴の砲艦が市場を取締まることが出來、下落する株券の價値を引上げることが出來、――或は需用供給の一般的法規を壓倒することが出來る、と想つて居るのか。これに反して、日本の勝利の結果は本國の工業と企業とに最も有利な結果を齎し、日本在住の外國商人總てが直接若しくは間接に、それによつて利する所ある通商に偉大な刺戟を與へる、に相違ないことを彼等は知つてゐるべき等のものである。

また、今我々が指摘した愚な事共は、日本に對してのそんな敵愾心が含んで居る唯一のものでもない。今次の戰爭に支那が勝利を得れば、文明に對して頗る不幸な性質を帶びた

結果を有つに相違ないのである。勤勉で信用の置ける實業家として、或は傭人として——銀行員、仲買者、商人、貿易家、或は婢僕として——支那人に對してどんな好感情を有ち得ても、支那が、一國民として、西洋文明に好意を有つて居るか或は敵意を有つて居るかの問題を論議することすらの可能性は無いのである。若し支那が日本を粉碎し、その上に歐羅巴の侵撃に反抗して自己の地歩を保持する力を示してもすれば、我々は、單に極東に於ける英國の利害に對してだけでなく、將來に於けるあらゆる歐洲文明に對してその究極の可能事を考察しなければなるまい。幸にも支那はまだ、そんな能力のある氣合を一向示して らぬ。

一八九四年十一月二日金曜日

西印度への日本人移住

我々は、日本人苦力（クーリー）をグアドループなり小西印度諸島のどれかなりへ勞働に送り出すが

得策だといふ事について、『ジャパン・メール』紙と全然意見を異にせざるを得ぬ。『メール』紙は、神戸からグアドループへの日本移民四百九十八名の最近の積み送りを、日本勞働者のハワイに於ける使用に伴なうた成功からして、その成功を推測し得られる試みである、と判斷して居る。疑ひも無く『メール』紙のその論文の筆者は、佛領西印度の社會上の並びに氣候上の狀態はハワイのそれに稍〻類して居る、と想像して居るので、緯度と氣溫とが狀態の表示を少しでも提供するものならば、それはそんな意見に力を添へる、と思つたのかも知れぬ。氣候の平均溫度の相違は割合に少い。尤も、我々の信ずるところでは、ハワイは海上氣溫が餘程低い。グアドループでは或る測定に據ると年中いつも七十五度乃至七十七度である。がしかし熱帶地旅行に經驗のある人だけが、寒暖計や緯度は眞の氣候狀態をどんなに少ししか現はさないものか、といふことを實際語り得るのである。濕氣、平地、海流、貿易風、植物が起こす變化は法外なものである。そして我々は、佛領西印度についての我々の個人的經驗からして、その氣候狀態は全然、日本移住民には不適當なものであること、且つまた、その移民實驗は無意識の殘酷であること、を公言しても正しいといふ氣がする。

日本の勞働者が、我々の意見では、佛領西印度で成功する譯がない、といふ二つの大な

る理由がある。――第一の理由は氣候狀態と環境とに基づいて居る。第二のは社會的狀態に基づいて居る。初めに有形上の理由を一瞥しよう。

西印度の佛領にはグアドループ、マルティニーク、マリー・ガラント、デシァード及びより小さな諸島或は諸島の一部が含まれてゐて――その米國に於ける所領は、本土では、南の方は佛領ギアナ卽ちケーエンで終はつて居る。その氣候狀態は、極僅の差異はあるが、それ等の植民地全體に通じて――遙かに惡るいケーエンの徒刑地を除いて――似たものである。島々は火山性のもので、海中から、三千五百呎乃至五千呎の色々異つた高さを以て、峰を爲して屹立して居る。そして平地は極僅しか無いと言つて宜い。山々は、耕作線の上は、頂上まで熱帶森林で蔽はれて居て、土壤の極少しの部分だけが耕作されて居る。主要產物たる砂糖、ココア、珈琲が山腹に二千呎の高さまで栽培されてゐて、或る島ではもつと高い處まで植ゑられて居る。植物は全然熱帶のもので、その中には、その地固有の草木及び樹木のほかに、亞非利加並びに南亞米利加の植物(フロラ)が隨分澤山含まれて居る。言語に絕して美しく、想像も及ばぬ許り繁茂して居る。自然の外貌だけで言ふなら、これより美しい島は世界中に存在してゐない。そして如何なる記述も、その美を正しく傳へる事は出來ない。が、四百年の經驗が、世界のこの地方は決して勤勉な人種の自然的家鄉とはなり得

ない、事を示し來たつて居る。昔時この島々へ白人勞働者を輸入しようとしたあらゆる努力は無慙な失敗となつた。溫帶から來た人達に取つて其處での生活狀態は――その土地で生まれたものでクリーオールと呼ばれて居るものにもさうであるが――比較的不淸潔である。亞非利加奴隷の輸入は、或る一時期は、確に植民者に大なる富を齎した。しかし、亞非利加人が無事無難にあの致命的な氣候に堪へた、と想ふのは頗る重大な謬見である。彼等は白人よりか比較的によくそれに堪へたが、熱病の爲めに幾千となく死んだもので、佛領に今住んで居る現在の變質された黒色人種は、ただ古昔の奴隷時代の最も屈强な亞非利加體質の殘存せるものを表はして居るだけてある。氣候と環境とが白人をも黒人をも共に非常な程度まで變質させた。目立つた肉體的特質を彼等に與へた、と言つて宜い。しかし、黒人クリーオールと半混血だけがその下に在つて榮えて行つた。そして白色人種は島々で、年一年と、着々として減りつつある。その絶對的溫度が堪へがたいといふのではない。寒暖計は日蔭では八十七度以上になることは稀である。しかし、植物性の濕氣が籠もつて居る處での八十七度は、晴れた、乾いた空氣での百度よりも、堪へるに辛い。嚴密に云つて、四季が無い。重くるしい濕つぽい暑さが年百年中續いてゐて、いろんな致命的な熱病が流行つて居る。或る公の報告は、その氣候を健康的だと述べては居る。しかし、如何なる公

の報告も、歴史を、統計を、クリーオール作家の著作を、植民者の經驗を、眼の前へ出されては、それをさうだと證明することは出來ぬ。西印度諸島は――特別な位置に在り殆ど全く平坦な――其處では英人クリーオールがその祖先の體力を維持して居るやう思はれる――バルバドースを恐らくは除いて――總て歐羅巴人には滯在地として不健康である、バルバドースは全群島中一番風上に在つて、森林は一つも無く、一見珊瑚質構成のもので、大氣は遙かにより乾いてゐて、そして恐らくは二十度と赤道との間に位して居る西印度諸島中、その氣候狀態が太平洋上のハワイのそれと殆ど同じくらゐ好都合なものは、この島だけであらう。群島中最も繁榮で、最も興味の無いもので、そして人口は最も稠密である。

　西印度並びにギアナ諸島で勞働者の必要な事は決して人手が乏しいのに困るのではない。これは日本人が十分に承知してゐなければならぬ事實である。これ等の諸島は怠惰な黑人と半混血とに充ちて居る。彼等は――殊に佛領西印度〔バハマを除いた〕では――世界中で一番立派な體格を有つて居る部類のものである。しかし、彼等を造り出したその氣候は、正しく彼等が、それから出て來た處の亞非利加種族に固有な野蠻的懶惰を極度にまで發達させる氣候であつたのである。どんなに暑い時でも爲ようと思へばヘルキュレス的な偉大な努力が出來るのであるが、彼等は、滅多には感じない飢餓に强迫されなければ、全然何等眞面

目な努力をしはしない。奴隷制度廢止後は、彼等は古昔のやうに働くことを拒んだ。そして、勞働は殆ど爲ないでも、自然だけでその僅な欲求が支へて行かれる事を知つて居るから、ただ時々、そして最高の賃金でだけ、仕事をしようとするのであつた。そこで印度人(ヒンドゥー)苦力(クーリー)を輸入する必要が起こつた。非常に多數の印度人が近年まで英國と佛國との植民地へ規則正しく輸入された。今は佛領西印度への印度人苦力のこの輸入は、英國政府の禁ずる所となつて居る。これは現今の西印度移民運動の日本人發起者達が幾分の注意を拂つて然るべきであつた厭はしい一事實である。その眞相はといへば、印度人苦力は、英領植民地ては必らず有てる保護と正義とを、佛領西印度では確保することが出來ない爲めてある。そしてその理由はといふと、西印度の社會狀態が如何なる種類の移民輸入にも極めて不都合であることてある。マルティニークへ送つた印度人苦力の場合に、契約は破られ、多大の不正が見られた。それて今後は西印度にある佛國植民地のどれへも、英國臣民を送り出すといふことは無いであらう。

　溫和健康な氣候に土着してゐる日本人勞働者が、南部印度の氣候と全く同じほど致命的な――恐らくはそれよりももつと致命的なくらゐな――氣候の地に居る南部印度からの印度人苦力に、取つて代はるやうに自然的に適合して居ると想像するのは由々しい誤解のや

うに我々には思はれる。この移民實驗は如上の理由の爲め全然失敗に終はるものと我々は信ずる。支那人でさへ西印度の甘蔗野畠で長い間は勞働は出來なからう。ところが支那人は熱帶の氣候に能く堪へるのである。しかし、日本人苦力を佛領西印度へ送つてはならない理由で今一つ同樣に重大な理由は、其處の社會狀態が、日本人が正當な取扱ひを受けることを保證するやうな性質のもので無い、といふ事である。

それは耕作者その人達の罪ではない。それは佛蘭西共和國が、その人民は多くは野蠻人たる植民地に對して、特別な法律と特殊な政治とを與へてゐない罪に因るのである。佛領植民地の立法權は實際に於て黑人の掌中に存して居る。租税を加減する權力さへ黑人が有つて居る。政治狀態は猛烈に人種嫌惡心に影響されて居る。そして解放されたネグロはその權力を用ひて、その前の主人を壓倒せんとして居る。尤も、グアドループではそんな狀態がマルティニークで見ると同じ程度の烈しさに達したことは未だ嘗て無かつたが、其の地でそれがいつ何時もつと非道いものになるか、ならぬか、判かつたものではない。マルティニークでの移入される勞働者の前途に就いては、その事相は其處へ最後に送られた印度人苦力の取扱ひ方で以て推測することが出來る。黑人立法者は、自分等の怠惰な選擧民と印度人勞働者との間に競爭があつてはならぬと決定して、白人耕作者の反對あるに拘ら

ず、その苦力を印度へ再び船で送還すべきであると命令した。そこで國外へ放逐された。だから英國政府は、今なほそんな狀態で居る佛領植民地へはもはや英國臣民を送らないと決心した。

グアドルーブへの日本移住民が、直に彼等を死なすであらう氣候の他に、爭ふべき他の困難事がある、ことは確實である。土着の――體格では日本人に遙か優さつて居るが、野蠻の點に於ては、その祖先の亞非利加人に殆ど讓らぬ――黒人の兇暴に對して必要の場合直ぐと自衞の道を採らなければならぬであらう。印度人苦力は、優秀な精神的勇氣と、武器の使用に優秀な巧妙さとに依つて、これを爲すことが出來た。恐らくは日本人も同樣に能く自衞することが出來るであらう。しかし、後になつて不意打ちを蒙るであらう。

日本人勞働者を西印度の他の植民地へ置かうといふ他の努力が爲されはせぬかと我々は心配して居る。そして我々は、日本政府はその努力を挫くやうあらん限りの手段を講ずべきであると考へざるを得ない。英國政府が、上記の理由で、その印度臣民の爲めを思うて禁じたことを、日本政府は、その理由もあるが、他にも幾多の理由があるから、禁じて然るべきである。

日本に於ける低廉な勞働

一八九四年十一月五日月曜日

日本に於ける紡績工場の數に就いて最近入手した統計は該工業の異常な發展を示して居る。一八九三年九　末日に於ける作業中の紡錘の總計は三十三萬二千六百八十二てあつた。綿絲の總産額は五千百十六萬千百六十六封度三分の二て、機械運轉に使用した石炭は五千七百二十五噸と少し餘計てあつた。一箇月の作業日の平均は二十六日半て、一日の作業時間の平均は二十二時間半。工場の大多數は晝夜兼營て——十四時間より少く作業して居る會社は三十七のうちたつた二つてある。傭人は女が一萬七千八十四人て、男が五千四百四十五人てあつた。

この統計に見えて居る事實て、頗る驚く可きものが二三ある。女が儲ける平均賃銀は一日僅八錢五厘ばかりて、男が儲ける平均賃銀は十八錢に一寸足らぬ。がこの平均數はもつ

と驚く可き數字から出て來て居る。既に日本では、この種類の勞働に對してすら、與へる報酬は國の方々で非常に異ふ。最高の報酬は鐘淵紡績が與へる報酬らしいが——男に對して二十五錢コンマ七三、女に對して十六錢コンマ六三である。しかし、多數の工場はこの賃銀の半部以下を拂つて居るやうである。女に對して一日に五錢以下を拂つて居る工場が幾つもある——表中には四錢コンマ九〇とか四錢コンマ九一とかいふ數字が見える。三十七工場のうち、女に對して一日十錢といふ賃銀を拂つて居るのは僅八つだけで、餘は四錢と九錢との間をいろいろに拂つて居るが、九錢といふは寧ろ例外である。どんな工場でも男に拂ふ最低賃銀は一日十二錢コンマ七四である。

固よりのこと如上の數字は外國人の眼には驚く可きである。が、他の種の勞働はもつと少い賃銀ですら日本では得ることが出來るのである。實業家でない者が總て訊ねたい氣になる質問は、『どうしてそんな人達は暮らして行けるか』である。しかし、確に日本では幾百萬といふ人が工場で拂ふ最低の賃銀よりも少して暮らして居るのである。その人達は米よりもつと廉い食物で暮らすのであるが、それでゐて歐羅巴人の胃の腑はそれから何等の滋養を攝ることの出來ない食物で生きてゐて丈夫で居る。我々は、內地の或る部分に、家賃が一箇月僅に十錢の——それを家と呼ぶことが出來るならば——家がある、ことを知

つて居る。我々は、幾十萬の家族か一人一箇月一弗以下て暮らして、居ることを知つて居る。日本に於ける或る種の勞働の低廉さは、極々僅て遣つて行ける能力を有つて居るが爲めに、驚くべきものてある。

我々は工場ての直段が昨年拂つた直段の或るものよりもずつと低くなることがいつかあり得るかどうかを疑ふ。過去暫くの間、西洋の諸機械が輸入されたが爲めに、異常な苦痛が起こつて來て居る。勞働を除く機械が日本の女の世襲的な職業を滅亡させようとして居るのてある。前には殆どあらゆる家族は銘々の平常の衣服を、その家内の機て造つたのであつた。そして息女一人或は妻女一人の熟練は、家を支持する男性の者が死んだ後、一家の病弱者若しくは身の利かぬ者を養つて呉れるものとして手緣りにすることが出來たのてあつた。ところが非常に邊陬な地方を除いては、この事は不可能とならんとして居る。手製の衣物は今猶ほ造り、今猶ほ日本人はこれを好んて居る。が、それは工場て造つた物よりか遙かに費用がかかる。殆どあらゆる都會て、古昔のサムラヒ家族の女子達は、その機織りて暮らして行く困難といふ問題を解かうと今猶ほ力めて居る。が、それが織り成す布は、それが少しても固定した市場價値を有つて居るからといふのてはなくて、寧ろ好意の上から、或は血緣關係にほだされて、人が買ふのてある。疑ひもなくこの變化が、今のと

ころ女の勞働を不自然なほど低廉ならしめたのである。

がしかし、賃銀が上がらうが、上がるまいが、日本は最後に西洋の綿絲紡績諸國と競爭するに十分に堪へることが出來なければならぬ、ことは可也明白である。恐らくは殘酷な意味に於てではあるが、しかし、確實な、眞實な意味に於て、食は力である。

歐羅巴の未來

一八九四年十一月六日火曜日

世界で最も偉大な君主が死んだ〔露西亞のアレギザンデル、十一月一日歿〕ことが或は起こらん歐洲戰爭といふ大問題へ一般の思想を當然に向ける。――といふのは、政府の極めて小さな變動もが、歐羅巴がその長の平和をそれに負うて居るあの微妙な權力の平均に影響を與へるといふ結果を今は有つかも知れぬからである。兎に角、平和の十二箇月を加ふる度毎に、戰爭の起こりさうな事が漸次少くなることを反省することは慰安である。年毎に軍備は層一層恐るべ

きものとなる。が、それが巨大だといふ事自體が、攻撃的衝動への妨害となり、千三百萬人許りの軍人が行ふべき一戰爭といふ怖ろしい可能が、漸次國際的悪夢となりつつある。その上に、月毎に、週毎に、二十四時間毎にすら、西洋列强の商業的利害が層一層緊密に相互に依賴するものであり、各國の各産業が他のあらゆる國の産業と層一層密切に關係するやうになり、歐洲貿易の經緯全體が層一層緊密に織り合はされて來る。社會的複雜の驚く可き迅速な進歩の一刻毎に、戰爭のありさうな事が必然的に少められる。といふのは、一國民の工業的生活への如何なる損害も、それがどんなに輕微なものであらうと、必らずや總ての國民がそれを感じ、それに苦しまなければならぬ時が、遠くはないやうに思はれるからである。恐らくは我々は、武裝平和が今二十五年續けば、戰爭なる物は——少くとも歐洲に取つて——不可能な物に、國際的自殺と同じことに、なるものと希望することが出來よう。今のところ西洋に於ける着實なる傾向は、一個の偉大なる工業的聯合の——結合した國民を結合した州として居る一個の巨大なる商業的共和國の——方に向いて居る。

今の時世の今一つの徴候は戰爭の明白な恐怖心である。佛蘭西はもはやその『復讐（ルヴアンシユ）』を口にしない——實際ジユール・シモン氏の雄辯は、この點に關して佛人の忘れ得ない教訓を與へた。公衆總ての眼の前へ——眞實に、明確に、假借無しに——たつた三日間の戰爭

の結果が近代の歐羅巴に於て今何を意味するであらうかを的確に置いて見よ。軍事の光榮を欲する熱烈極まる憧憬も忽ちにして鎭まるであらう。それをシモン氏は爲すことを敢てした。進軍の費用を、戰役の慘害を、病院の悲慘を、財政への衝動を、未だ生まれ出ない幾代もの人達への結果を、氏は『復讐』の叫びが全く止んでしまつた程に描寫した。そして彼の國民はアルサスとロレースの問題について永い間無言でゐた。獨逸に於ては、その年少の皇帝が、その單の專斷でいつ何時歐羅巴を致命的な鬪爭に投ずるかも知れないといふ、その治世の初めに絶えず人々が述べた恐怖にも拘らず、彼はその專斷を平和の爲めに用ひて居ることは今や完全に明白である。英吉利に於ては、戰爭の悲慘を思ふ一般の恐怖心が募つて來て居る。英國國民は多分、自己防衞の（出來しさうにはない）必要に迫られなければ、どんな文明強國との戰爭に同意するよりは、寧ろ社會改革に耽らうとすることであらう。伊太利は、陸海軍の出費で事實破產狀態になつてゐて、戰爭の出來る狀態ではない、ことは言ふを須ひぬ。大強國總てのうちで、戰爭で――戰爭がその巨大な發達の尋常制規の條件であるから――損を餘りしないのは、露西亞だけである。全歐羅巴が露西亞に對して防禦をして居るのである。露西亞が貧乏であるといふ事がその力であつて、その力が永久の威嚇である。それは年毎に增大する威嚇である。獨逸の人口よりも四倍早く增

加する人口を有つてゐて、地球表面の六分の一を含む領土を有つてゐて――純攻擊的活動に對して無盡藏の資源を有つてゐて――將來は總計六百萬人に膨脹すべき騎兵軍の組織を有つてゐて――そして歷史上三たび世界を席捲した、あの亞細亞平原の漂浪人種總てをその軍務に服せしめてゐて――露西亞の絶え間なしの發展は、歐羅巴は共和國か、コサックかになるに相違ないといふ（恐らくは年月の見積りだけ誤つてゐようが）ナポレオンの豫言を立證するかに思はれるのである。

そして確に、コサックになることを避けんが爲めに、歐羅巴は共和にならうと急いで居るやうに思はれる。共和に早、既に歐羅巴は、その工業的生活に於て、なつて居るのである。そして共和にその思想と感情の傾向は、軍國主義の帝國獨逸到るところに於てすら、なりつつあるのである。危險の共通觀念が、西洋の大强國を常に層一層緊密に寄せ集めて居る。一方にまた、工業的利害と科學の進步とが絶えず思想と感情との一律といふ傾向を發達せしめる。この統一が、漸次亞細亞の一强國となりつつあり且つ、その發展の可能は殆ど測るべからざる露西亞に對して、防禦の壘壁である。獨逸、墺太利、佛蘭西、伊太利のやうな國民が、その人口はその領域內では今以上にどんな大程度にも增加し得ないといふ明白な理由の爲めに、軍事的膨脹の極限にやがて達しなければならないのに、――露西

亞はその力をこれからまだ五世紀の間發展し續けることが出來るのである。が、今のところ、歐羅巴の他の處が依然として斯く結合して居る間は、露西亞は西の方指して攻撃はしさうにない。がしかし、露西亞をして斯く爲さしめ得る二條件の危險がある。

その危險の最大なるものは、常に力を増しつゝある所の、そして現狀に對する不滿を證明して居る所の、無政府主義とか社會主義とか、共産主義とか又はそんな何かの民衆運動のやうな國内の紊亂に依つて、國家組織が崩解するか或は弱められでもするか、といふ危險である。露西亞が虚無主義で惱まされて居るのは眞實である。しかし、露西亞の虚無主義はただの表面動搖である。國民生活の急所に觸れはしない。來たらん數代の間、その國民の心に貫徹し得ないものである。これに反して、他の歐洲諸國に於ては、崩解のそんな要素が滲透して居るのは、表面生活ではなくして、社會の一番深い内的生活である。

他の、そして最も少い、危險は、他の或る歐洲强國と露西亞との――露佛間の友情の此の間の假託に暗示されたやうなあんな――結合といふ危險である。我々は假託といふ――何となれば、佛蘭西は露西亞との同盟で、その敵國を脅して、一時はどんな愉快を感ずるにしても、露西亞の友情は獨逸の敵意よりも遙かに怖るべきものである、ことを佛蘭西は知つて居るに相違ない。口言ふべからざる流血と、全歷史に見ざる非常な大戰爭とをした

後で、露西亞の援助を受けた佛蘭西が獨逸伊太利及び墺太利の聯合軍を打破り得たと假定しよう。文明防禦の爲めに獨逸が建てた壘壁が崩れた時、佛蘭西はその地歩を保つことを望み得られようか。歐羅巴は已むを得ずコサックになりはしないであらうか。そして佛蘭西そのものは露西亞の唯だの屬國と終にはなりはしないであらうか。さうなればあらゆる進歩的制度は亞細亞の一專制政治の爲めに確に粉碎されるであらう。個人的生活の自由と共に宗教のあらゆる自由も、過去の物となるであらう。露西亞の法王がノートル・ダームの伽藍で彌撒（ミサ）の式事を營むであらう。そして羅馬並びに希臘の聖禮の昔の分離が、東洋的祭祀法の無上な又無慈悲な支配に依つて、大西洋から支那海へ亘る一大帝國の國教として、永久に決定せられることであらう。

亞米利加の人口増加

八九四年十一月七日水曜日

合衆國の歴史に於て頗る意味深い一事實は、人口の增加が意外にも頓挫した、といふ昨年の發表であつた。この頓挫は、他のいろいろな事もあらうが、生活の困難が非常に增加したことを意味するものであらう。亞米利加に於ける生活の困難が最近十五年內に迅速に增大し來たつて居る事は否定し得られぬことである。二十五年前には、勤勉な貧乏人に取つて、他のどんな國に於ても――恐らくは墺太利に於ての短い或る一時期中を除いて――それまで提供されなかつた程の機會が亞米利加に於てはあつたのである。着實で愼重で、實際にその商賣に熟達して居る職人ならどんな職人でも、數年の間分別して節儉をすれば、一本立ちで開業が出來るやうになるほどの賃銀を貰ふことが出來たのであつた。一本立ち以上のことを斯くして爲し了ほせたものも幾千人と居たのである。農業移民に取つては、西部で豐饒な土地を買ひ求めて、しまひには富裕な身になる、といふ素晴らしい機會があつた。際限無しの平野は、その時分はまだ、澄み切つた青空の途切れ目無しの半圓と接して居る綠の海原であつた。鐵道の今は巨大な網細工がまだその上に紡がれてはゐなかつたし、今日は市街電車が馳つて居る處で水牛が草を喰んでゐたのであつた。大線路が擴がり始まるに連れて、拔け目のない植民者には、買つて建てる、新規なそして驚く可き好機會があつた。ほんの名前だけの直段でその時買ひ求めた幾英町の地面は、今では驚橫樣の十

弗金貨をそれへ一パイに敷きつめても購求することは出來なからう。どんな時にもまたどんな處でも、當時ほど職人或は農夫が尊敬されたことはなかつた。鍛冶工が最上仕立ての夜會服を着けて舞踏會に出席する事が出來た。活版屋がそのシャツの胸當てに、ダイアモンドのピンを着けて歩き廻はつてゐた。そして當時の百姓は、四五年のうちに、歐洲の多數の貴族が自慢し得るよりも大きな地所の持主になれるといふ前途の希望で、その仕事が輕いものに思はれることとてあつたらう。發達し行く西部の都會の警官は、その時分には高給を受けてゐたもので、夏はしやれた制服を着けて、その受持ち區域を巡邏するのであつた。變妙な時代で——永く續くには餘りに變妙な時代で——あつた。奇妙な光景を眼にすることが出來た。今では可也十分に禁制されて居る賭博が當時は、ブレット・ハートの小說に描かれて居るやうに、流行てあつた。今日は堂々たる都會になつて居るカンサスシティーは當時は出來た計りの町であつたが、朝のその街路は、前夜戸外へ投げ棄てたカルタの札て時々眞白になつてゐたといふことてある——賭博者は二度同じ札て勝負するといふ危險は決して冒さなかつたからてある。

一世紀が四分の一經たぬうちに、亞米利加は全く變はつてしまつて居る。平野は、ローマンスの大草原は、もはや存在して居るとは言ひ得られない。それは農場、村落、市街、

都邑で蔽はれて居るのである。鐵道は雷に西部を『築き上げ』た計りではない、工業の膨脹をその極度に立至らしめた。到る處、古昔の葺樣の木造都市ではなくて、石と鐵との、煉瓦とセメントとの、建築が出來つつあり、數世紀の間耐へ得る堅固な市街が採鑛用の假り小舍部落が在つた處に建つて居る。到る處、最近の發明が最も都合よく利用されて居る。——蒸氣昇降機、電燈、電話、地方電信があるのである。しかし到る處、また、社會狀態が硬化し且つ成層化して來て居る。一日で一と身代を造るといふ機會はもはや無い。段々と整理して來て、西部も亦一切の事に於て段々と『精力の盡きた歐羅巴の君主國』のやうになつて來て居る。實際、この巨大な共和國全體を通じて、富が着々と少數者の掌中に集まりつつある。そして資本家は、天才者でなければその中へ割り込めないやうに、旨くその地位を固めて居る。殆ど只だで買へるやうな善い土地は最早ない。高い賃銀は最早ない。そして勞働の値段は着々と下落しつつある。投下された資本の巨大な結合或は集積が競爭を壓伏して、實際上の獨立を得ようとする尋常普通の勤勉の死物狂ひの努力をも絶望ならしめて居る。全く亞米利加に於ける勞働階級の狀態は、歐羅巴の如何なる部分とも殆ど同じほど苦しくなつて來て居り、多分、一層苦しくならうとして居る。少數の人から成る一階級の掌中に存する無限の資本と、それを使用する無限の力とが、確に英吉利にも獨逸に

も不可能な狀態を造り出すてあらう。

人口增加の頓挫は、しかし、生活の困難が增加したといふことに基づくと共に、他の原因にも基づくものかも知れぬ。そして合衆國が今や歐羅巴からの移民を奬勵するよりは寧ろ阻止せんとする傾きのあるのは、恐らくは前述の確信に依つててあらう。人口の未來に於ける增加の見積りは、紙上ては驚く許りに算出されるが、實際の事實は最後にいつもその計算を裏切るのである。人口の增加は、領域の廣狹、資源の性質、或は生活の條件すらとは異つた、別な原因に制限されて居る、といふのが眞相らしい。恐らくはそれは人種性格即ち人種本性そのものに存する或る物に制限されて居るのてあらう。亞米利加人は餘地を――十分の餘地を――有たずには居れぬ人間てある。窮屈な處に閉ぢ籠められたり、締め附けられたりして欣んで屈服する人間てはない。アングロサクソン人種には總てこの感情が目立つて存して居る。そして働くのに大きな場所を、住むのに大きな場所を欲することの愛好心が、我々の文明の進歩と共に、減じはせずして絶えず增して行く。亞米利加の人口は嘗てそれに對して豫言された巨大な數字に達することは多分あるまい。百萬の支那人に十分な地面が一千の有名なヤンキーの絶對的要求を充たすことは殆どあるまい。

金の呪咀

一八九四年十一月八日木曜日

故ジエー・グールドは、その遺言狀の作製に於て、一生を通じてその特徴であつた、彼の拔け目無さと、人間の本性に對するメフイストフエレス的な知識とを示した。氏の遺言狀の或る特別な條項に依つて、その一家族の如何なる者も、他の者全體の同意なくして結婚は出來ないことになつて居る。ところがこの豫防手段は、グールド財產をグールド家の圈內に保全するには足りるけれども、それに鬪はる當事者總ての幸福を確保することは出來まい。腐肉が鳶を惹き寄せると丁度同じて、富はくだらぬ人達を惹き寄せる。この大理財家の娘達の地位は幸福なものではあり得なかつた。生まれながらあらゆる溫雅な品性を授かつてゐながら、嫌惡と恐怖とがその非道い父に對して起こしたあの貝殼追放的絕交の爲めに社會と孤立してゐたので、純然と利己的でない動機の爲めに心を動かされてゐ、

求婚者を得る希望は殆ど有ち得なかつた。しかし、固よりのこと求婚者は現はれた。そして娘を手に入れる爲めに人間の奸智のあらゆる策略が使用された。アンナ孃の場合には加特力教會が最近まではなりさうな求婚者であつたらしく思はれる。ところで今は、英國女皇陛下すらこの問題に興味を有つて居られる、と倫敦から報道されて居る。この傷ましい物語全部は人間の弱點に對する珍らしい評釋である。金といふものは、それをどんなにして得たにしろ、權力たるに變はりはない。そして十九世紀に於ては、その種の權力に對して人の拂ふ尊敬の念は、道德觀念が中世紀の人達が有つてゐた觀念よりも少いことを示して居る。世界最大强國の女皇すら、全世界が數年前その罪を鳴らした一人の男の――營利手段を人間の尋常普通の能力を超越した規模で營むといふのがその唯一の罪惡であつた不思議な猶太人の――女子相續人に興味を感ぜざるを得ぬのである。――そして歐羅巴の公侯が、ただ持參金の嵩に心を喰られて、結婚の申し込みをして、その貪慾心を曝露して以て何の恥ぢとも思うて居ない。いつもこんなでは元はなかつたのである。血統といふ事が嘗ては如何なる富よりも重きを爲して居つた。そして祖先といふ問題が極めて重要であつた。工業主義が爲し遂げた社會變化のうちで、單(ただ)の富を以て貴族の地位を要求し得る權利と　て今日それを認めて居ること、ほど著しいものは何もない。これは或る不愉快な道德

的事實を仄めかせて居る。が、要する所、金を手に入れる上に於ての種々な不名譽事件と金を探し求める上に於ての種々な邪まな茶番狂言との背後に、間接に、富に對する此の近代の尊敬心には、力としての智力に對する尊敬心が含まれて居る、と我々は自白せざるを得ぬ。金を造るには智力が要る。そして成金（パーブニュ）の缺點に對してどんな侮辱を注ぎかけ得るにしても、自分だけの努力で富を贏ち得る成金は、百の中九十九まで、非常に優秀な性來の能力を有つて居る人間である。

が確に亞米利加百萬長者の娘の大多數は、富裕な社會の永年固定した一圏の裡に生まれて來なければ、奇妙にも不幸福かも知れない。グールドの娘達の場合には、事情が極めて殘酷である。富があつても人間の同情が無いことに對して、その富は殆ど慰安にはならぬ。同情を與へ得る者共は、問題のその財産が光つて居るが爲めに、同情を與へることを妨げられたに相違ない。一方、その障壁を恬然と通つて行ける者共の大多數は、價値ある友人か、正直な求婚者でありさうにはなからう。だからアンナ・グールド嬢が終に人間の利己心を遠ざかる避難所を修道院の無言の裡に求めようとも、全く不思議なことではないであらう。百萬長者は、人の心を惹き附ける程の持參金をその娘に殘して置かないか、又は、その娘に與へてゐた手當てを結婚後は撤回するか、するが好くはなからうか、誰れしもそ

れを訊ねざるを得ない。

他の亞米利加百萬長者達の娘共の身の上は、富は祝福ではなくて餘程の呪咀であるかも知れない、といふ事實の幾多の傷ましい實例を提供して居る。最近の十年內に、外國の零落した貴族と結婚して、酷烈極まる罰金を拂つた者がどんなに澤山あることか！最近の一例はマケー孃のであつたと思ふ。數年前に起つた、極めて異例に屬する一事件であるが、長く世人の記憶に殘ることであらう。或る富裕な紐育の女子相續人が巨大な財産に値して居るといふ評判の或るキューバの耕作者と結婚した。その新郎の淺黑い顏色は、「豐かな西班牙オリーヴ色」だと賞められてゐた。諸新聞は、その婚禮の折のダイアモンドの輝きを、讀者の眼を眩ますやうな風に描寫した。キューバへその新婦は行つて、其處でその夫の兩親に――半混血人に！――引合はされた。新婦は直ぐと亞米利加へ歸つた。こんな問題にかけての亞米利加人の感情を理解して居る人達には、その激怒は想像が出來よう。

分限者の娘が不幸なのは亞米利加だけではない。佛蘭西と英吉利とは殆ど毎年、娘達への支度が好過ぎて居るのかも知れぬ、といふ證據を見せる。が登錄として、巨大な個人的財産の數は、他のどんな國よりも合衆國の方が多い。そこで亞米利加の女子相續人は他からして精細に注目されて居る。巴里の「フィガロ」紙は數年前數段に亘つて異常な祕密曝

露を公表して、女子相續人は祕密な結婚周旋業者の爲めに、犯罪人が警察の監視を受けて居るよりも、もつと嚴密な監視を受けて居ること、――それを係蹄にかける術策は常定まりの金儲けになる商賣で、歐羅巴の主要な都市總てにその支店があること、を示した。實際、富裕な者には苦勞があるので、富を詠つたフッドの詩句

打ち延ばされ、刻まれ、槌打たれ、光澤出しされし、――
得るには難けれど、保つには重き、――
黄金、黄金、黄金、黄金、――
汝の働きは如何に多様なることぞ!
救ひもし、亡ぼしもし、呪ひもし、祝福もして、
或る時は善良の女王ベスの像を、
或る時は血なまぐさきメリーの像を捺されて。

は、彼がそれを書いた時よりも、今日の方が餘計意味を有つて居るくらゐである。

合衆國の懸賞拳鬪者

一八九四年十一月九日金曜日

懸賞拳鬪が英吉利では三十年前からどういふ風に禁ぜられて居るか、又この嘗ては『自術の高尙な術』が英國公衆の眼に、どの程度まで下落して居るか、を考へると、郵便船每に受取る亞米利加新聞の實證する、懸賞拳鬪についての合衆國での一般的興味は、稍〻時世遲れのやうに思はれる。英吉利に於ける懸賞拳鬪の衰微は、嘗ては流行であつた大酒の衰微や、種々な殘忍な競技――エリザベス朝の人達の娛樂であつたあの熊の犬攻めのやうなもの――の禁止、と同じ原因に基づいてであつた。英國國民は、力と富とを增加し來たつたに連れて、着々と層一層、人道を重んずるやうになつて來た。今日の敎育ある英國人の神經組織は、十八世紀の英國人のそれよりも、遙かにより有力な機關であると同時に、遙かにより精巧な機關である。近代の佛蘭西人も近代の獨逸人も、英國人と同樣である。

到る處理知の力の増加は、またより高尚な情緒的受容力の増加と、心理學に於て「再現的能力」と呼ぶものの増加と、を意味して居る。そしてその事は、同情心の發達と、殘忍或は野蠻が籠もつて居る一切の見世物に對する否認と、を意味して居る。我々は今日の普通の英國人を決して完全無缺な人間と呼ぶ積りではない。が、今日の英國人は確に、その情緒的生活に於て、その祖先よりも著しく優越して居ることを示して居る。狐狩りは人道に外づれた遊戯ではなからうかとの提言に耳を傾けようとさへ今はなつて居る。その中等學校に於て――その生徒をして此の世界の辛酸に堪へしめる準備の最上の手段として――喧嘩を遣らすことを最早奬勵しはしない。その射撃競技に於て生きた鳥に代ふるに硝子玉を以てしようと欲して居る。活體解剖に抗議して居る。戰爭を非なりとして――嘗てさうであつたやうに、自分の懷が傷むからといふが爲めでなく――その上に、それを不誠實と呼ぶのは不當であらうところの人道上の幾多の理由の爲めに――囂々騷いで居る。その陸海軍で鞭打を廢止した。血腥い種類の小説に對して――單に『流血と雷音』の下劣な種類だけでなく、藝術的文學者の作品すらも――抗議して居る。その愛好せるスティヴンスンを時折穩かに叱責し、またルドャード・キプリング（それを內密には非常に誇つて居る）を手嚴しく非難する――それはこの二人の紳士はその幾頁を唐紅ゐに染めるからである。何

が故に懸賞拳鬪を非難するか、何が故に最早、『專門の紳士殿』をその子等に拳鬪を敎へに傭はないのか、了解するのは容易である。

問題は、アンクル・サムは人道の修養に於てジョン・ブルに實際遙かに後れて居るか、どうかである。それは全然問題にならぬ——南部諸州での私刑、ケンタキーの近親復讐、亞米利加日刊新聞紙上の『遊戲欄』は、普通の亞米利加人がその道德感情に於てまだ半野蠻である、ことを明らかに示して居る——といふ即座の返事を誰れしも期待する。しかしこの一概の判斷は不公平である。新英州は品性の修養に於て老英國にあまり後れてはゐない、移住者が稠密に住んで居る——英國人旅客は、身は再び英國に在るのである、英國の田舍道に、英國の牧場に（雛菊が非常に大きいことを除いて）居るのである、と思ふことが出來る——諸州には、母國の社會と比較し得る十分の價値のある社會がある。英國のどんな都會も、フイラデルフイアほど紀律正しい、或は道德的なものはない。英國のどんな智者も、ボストンの智者ほど立派な修養を有つたものはない。それて、亞米利加の道德的狀態に就いて敢て批判を下さんとする時は、その批判は、知的亞米利加は、知的英國には殆ど後れてはゐない、といふ事實を十分に認めて、いつもその批判を限定しなければならぬのである。固よりのこと、かの內亂の爲めに激動を受け、あの惡むべき黑人問題の爲め

に社會的に混亂に陷つた、南部諸州では事が別である　そこの社會はまだ若い、そして開拓者時代の或る狀態がまだ全然なくなつてはゐない、極西のより新しい諸州では事が別である。

亞米利加の懸賞拳闘は英吉利でもさうなのだが違法である。が、あの巨大な共和國の組織は、現存法律の違反を英國よりも遙かに容易ならしめる。そして輿論なるものが、母國てそれが遂げて居る統一の彼の健全狀態に未だ達して居ない、ことを承認しなければならぬ。新聞紙を大いに責むべきである。といふのは、多數の富裕な新聞紙は、その調子を最も低い平民の水準へ下げてゐて發行高を殖やして行かうとするから、民衆の最も粗野な部分に訴へるものは何でも彼でも公表する。それからまた運動協會共が『財嚢』を募つたり、素指ての闘爭に劣らぬほど殘忍な『手袋はめての試合』を拵へたりして、懸賞拳闘を助け來たつて居る。亞米利加社會の最善な要素は懸賞拳闘をいやがつて居ることは確であると同時に、その要素の勢力が新聞紙を適當にまだ統御をしない事、またこの弊風を處理する法律の努力が、種々な州知事の無爲若しくは冷淡に依ると共に、種々な運動倶樂部に依つて大いに妨げられて居る事、も同樣に確である。

がしかし、この弊風は頗る重大なもので、禁止しなければならぬものであらう。英吉利

てはどんな時にも、懸賞拳闘が合衆國で有つて居るやうなあんな性質を有つたことは嘗て無かつたのである。それは殊に不道徳な部類の者共に――職業的賭博者、刺客、竊盜、强盜に――大都會につきまとふあらゆる危險な犯罪人と兇猛漢に――支持されて居るのである。そんな奴共は、恰も蒼鷹が死體へ集まるが如くに、試合へ群れ集ふ。だから一試合一試合が、その或る地方への重大な天罰降來を意味することになる。四五年前に、或る試合がインディアナであつた。すると犯罪人の恐ろしい多人數が國內到る處からして、それを見に群れ集まつた。その群集は如何にも醜いもので、その拳鬪者が競技場で殺されはせぬかと興行者は心配して、その最も惡るい部類の奴共を間違つた汽車に乘せて他へ送り出してその危險を避けた、ほどであつた。するとさうやつて片づけられた兇漢共は、或る都市を掠奪し、その市民幾人も殺害して、鬱憤を晴らした。殺されたもののうちには、彼等に向つて敢て法律の犯すべからざるを說いた郡長もゐた。ホキードンとヲーカーとの中間のピップブルグ近くでの試合では、兩鬪士の一人が、その相手の爲めに競技場で打ち殺された時、見物人になつてゐた惡漢共が警官と猛烈な喧嘩をやつて、爲めに幾百發の銃丸が發射された。他の或る試合では、その職にかけては一番熟練した者であつたが、その二人は一度もはたき合ひをしなかつた。それはその鬪士二人とも、どつち側でも、少しでも勝ち目

が見えたなら、見物人の爲めに、一人がまたは二人共が殺されることになる、といふことを確に知つたからてあつた、懸賞拳闘者に對して『賭け金』をして居る惡漢は、その賭けに敗けるのだつたら、暗殺が遣れる場合はいつも暗殺を試みずには措くまい。

不幸にも懸賞拳闘を擁護する階級の者は、眞に罪を犯す部類の人達ばかりてはない。巨大な金額を『亂打試合（スラギング・マッチ）』の結果に對して人が賭ける。だからサリヴンとコルベットとの試合後には、幾百萬弗といふ金が手から手へと渡つた。そんな莫大な『財嚢』を造らせるのは、賭博興味の爲めてある。サリヴンは、その一生のうち、五十萬弗以上を貰つて、それを消色に費つてしまつた、といふことてある。過去數年の間幾多の場合に、懸賞拳闘者は一と興行の結果として二萬弗を頑かち取つた。それは懸賞拳闘者がさせる巨額の賭け金といふことて說明が出來るのてある。ニユー・オールリアンズては、サリヴン拳闘の場合——丁度競馬の時のやうに——本式の賭け金が造られた。

その結果は一般に人を殘忍ならしめるものてあつた。懸賞拳闘を不可能なものに且つ破廉恥なものにならせるやうな立法處置を講じなければ、そんな興行を欲する熱狂が乾度續いて起こつて來よう。懸賞拳闘は英吉利てはどんな時にも、今それが亞米利加て成つて居るあんなものてはなかつた。彼の兇猛なサリヴンの出現時よりして、昔『術』と呼んてゐ

たもの——拳闘の純粋な熟練を見せること——眼と手との迅速——に就いては、何の問題すらないことになつてしまつた。それに取つて代はつたものは、俗語でスラギング〔亂打〕と呼ぶもので——試合の興味はただ、出來る限り短い時間のうちに、一人の男が他の男を打いて正氣を失はせる能力如何に存することになつて居る。そんな懸賞拳闘を悦ぶ念からして、もつと惡るい物を悦ぶ心に移るのは、ほんの一歩である。あらゆる文明社會の表面の遙か下に、多大の恐ろしい潛在的殘忍性が潛んで居る、法律で革紐繫ぎされて居るが、その革紐が切れたなら、何時でも飛び出さうとして居る、野獸的熱情がある。劍闘士興行を見て以て快とする感性はまだ死んで埋められてはゐない。一國民を恥辱を以て蔽ふほどに復活することがあるかも知れぬ。

新聞文學に見る中世的迷信

一八九四年十一月十日土曜日

『基督教を奉じて居る國民は必らず基督教を奉じてゐない國民の頭上に生存しなければならぬものと我々は信ずる』これは或る横濱日刊新聞に最近發表された奇妙な信念である。その筆者は『我々は基督教の運命に深甚な信念を有つて居る』と明白に宣言して、その意味を強調して居る。この聲明は、蒙昧主義の普及に專心な日曜學校週刊新聞に載つて居たなら、驚くに足らぬ事であらう。だが、我々が生きて居る時代の思想を反映するものと思はれてゐる日刊新聞に載つて居るのだから驚く。といふのは、そんなことを口にするといふことは、必らずその筆者をば、筆者自身の宗教を否定する地位へか、若しくは中世時代の迷信に執着する地位へか、置くことになるからである。若し基督教を奉じて居る國民が基督教を奉じてゐない國民に必らず打勝たなければ——即ち、敬虔教徒が使ふ言葉を用ひて言つて『頭上に生存』しなければ——ならぬならば、それはその人の意見では、基督教の發達には、『多くの小さな國民の征服といふ事が纏もつて居る』からである。回々教の發達に就いて一回々教徒が述べた同一樣の信念は、回々教の信仰見地からしては、正確に論理的なものであらう。しかし、前記の言葉は、基督教に絶對的信仰を置いて居ると公言して居る人としては、基督教なるものの本性に就いて、彼の筆者の心中には頗る奇妙な考へがあることを思はせる。今日の基督教は、基督が教へたところのものか、又は基督教て

ないかてある。ところが上に引用した觀念を述べた記者は、基督は『小さな國民の征服』と劍の刄にかけて、その敎への普及とを望んでゐた、といふことを證明するのを困難に乾度思ふてあらう。どんな國民でも、『小さな』であれ『大きな』であれ、それを征服することは、確に愛によつて成し遂げらるべきものではない。それは連發銃、機關銃、破裂彈その他種々な破壞的兵器の使用といふことを含んで居る。平明な言葉を使へば、それは莫大な殺人と掠奪とを含んで居る。この理由によつて我々は、かの筆者が抱いて居る基督の敎に就いての思想は、假令絕對的に冒瀆ならずとも、少くとも奇妙だと想はざるを得ない。

がしかし、恐らくは時代後れの幾多の牧師の如くに、かかる驚く可き意見を掲げた筆者は、新約の精神よりも舊約の精神を――『强くまた嫉妬深い神』に對する、ヘブライ人の神に對する、信仰を――餘計に注ぎ込まれてゐて、そのヘブライ信仰を誤つて基督敎と呼んで居るのであらう。多分その筆者は、基督はその法を破毀する爲めに來たのでなくて、それを履行しに來たのだと信じてゐて、自分のこの態度は正當だ、と思つて居るてあらう。兎に角、筆者自身の信仰を抱いて居る國民は超自然的な助けを藉りて他の國民を統御すべきてあると筆者が考へて居るならば、所謂基督敎國民が、それに依つて以てこれまで二三の非基督敎國民を支配し得た彼の戰爭材料の發明と完全とに關して、そんな助けを授かる

ものと筆者は想像して居るのだ、と我々は推論せざるを得ない。ダイナマイト、無煙火藥、速射砲、クルップ及びアームストロング砲の發明並びに使用には神助があつたのだ、と信ずるのは確に醜い信仰である。でも若し筆者が、基督教國民は他の國民を武力に依つて征服しなければならぬ――（ところで、筆者はその征服に他の手段を何か暗示することは殆ど出來まい）――と信じ、またその武力は神から授かるものと信じて居るならば、筆者は前に掲げた地位から脱れることは出來ないのである。筆者は、人間の生命と財産とを破滅する爲めのあらゆる軍事的發明を、聖靈（ホーリーゴースト）の、或は聖なる三位一體の或る人の、賜物であると呼ばなければならぬ。さうでなければ、非基督教國民はこれまで武力は使用せずして基督教國民に征服されて居るのだと、全く不實なことを主張しなければならぬのである。

　我々が批評し來たつたやうなこんな思想を口にすることは、宗教にとつて――宗教といふ語をその道德的意義に用ひて――何の價値のないものである。英吉利が印度を征服し、佛蘭西がアルジエリアを征服し、和蘭が瓜哇を征服したあんな行動を、宗教的行動であると呼ぶのは法外な僞善であらう。そして將來に於てあんな侵略を繼續することが基督の教と少しても關係があるやう主張するのは冒瀆である。この進歩の時代に日刊新聞で、西洋國民はその神を信じない者總てを征服し、滅亡さすやう或る神に輔助を受け來たつて居り、

今後も受けるであらうといふ教義を公表することは、啻に自己を迷信者として辱しむるばかりではない——その上に、自己を思想並びに感情に於て野蠻人だと告白することになる。甚深な宗教的確信をその動機として認めても、あんな言葉は、それは假想的な善を行ふ手段として悪を爲すことを許す信仰を表明して居る、としか言ひ得られないのである。

支那の未來

一八九四年十一月十二日月曜日

支那が平和を熱望して居る事は今や殆ど疑ひを容るべくもないやうに思はれる。支那はその敵手の威力と、己が軍事的準備の不完全とを、餘りに遲く認めた。しかし、この際の平和が、更に戰爭に於て屈辱を蒙るよりも餘計に有利であらうかどうかは確てはない。支那が若し今、巨額の償金を拂ひ、朝鮮に關しての要求擔保總てを與へて、平和を獲るならば、その古昔の昏睡狀態へ直ぐ陷つて、その精力を痲痺し來たつて居る彼の官吏の腐敗と

いふ巨大な夢魔を拂ひ除く努力をしないやうになりはしないか、誰れしも疑ふことを禁じ得ない。これに反して、北京の略取は、苟も喚起し得るなら、自衞の國家的本能を喚起することになるであらう。そして平和の締結後、支那に於ける改革の時代が或は起こつて來るかも知れない。またその改革は來たらざるを得ぬもので、さうでなければ支那は外國に統治されることになつてしまふに相違ない。外國諸强の方ではまた道德的躊躇を期待する要はないので——支那の弱いといふことが、征服し、分割し、分配することの十分の口實となるであらう。そんな征服の結果を考察することは興味あることかも知れない。

支那は、過去に於ては、征服をされても——古昔の希臘領の印度諸州に於て西洋の要素が、融けて土着の人間の中へ入つてしまつて、最後には消えたやうに、その征服者を大部分吸收して——實際に於ては變化しないで元のまゝで居る。支那人の保守主義は恐らくは他の如何なる國民のそれにも優さるものであらう。亞米利加及び他の地方に於て、支那からの移民は、商業上の利害の爲め外國の土地にどんなに愛着を感じてゐても、一切の事物に於て依然として支那人である。支那人はその東洋風な衣服をまとうて居る。その食物を支那から輸入しさへする。異國の何處にゐても、その本國の神々を信仰する。そしてその骨は支那の土地へ混じへる爲めに死後故鄕へ送り還す。それは、金が許す時はいつもさう

である。費用が大き過ぎる時は、その故郷の人達の儀式を用ひて外國で埋める。だからルイジアナの沼澤地に、そして西印度の妙な邊鄙な處に、忘れられぬ支那墓を我々は眼にする。支那人は一定の日に、隨分の距離を——時には幾百哩を——旅して來て、死んだその人達に食物の供へ物を捧げる。我々は、メキシコ灣の海岸で——其處から幾哩内に人家は一軒も無い處であつたが——或る支那人漁夫の墓の上に、料理した雛雞、米、酒——即ち本式の馳走——が殘してあつた、のを見たことを記憶して居る。他に今一つ注意すべき事實は、外國にゐる支那人は、或る都會の中で、その數はどんなに少くとも、その故郷でする と同じやうに、その本國の休日を守り、宗教上の祀祭を營むことである。外國の衣服と外國の風俗とを採用して居る少數者は居る——二度と支那へ歸ることを希望しない者も居る。しかし、そんな例外者は、外國に居る支那人が決してその四周の勢力に概して言つて影響されないといふ、一般的事實を左右するほどのものではない。

露西亞に、英吉利に、或は佛蘭西に征服されても、支那は、その風俗に、その信仰に、その生活及び思想の一般的樣式に於て、依然として大抵は今の支那そのままであらう。東洋人種は外國の征服を受けても變化しないのである。アルジエリア人、チユニス人、カバイル人は、佛蘭西の支配の下に一向變つて居ない。また印度人は英吉利の法律の爲めに變

態してもゐない。尤も、そんな國の富裕な階級の少數者が外國語研究の便宜の爲めに外國へ行きはするけれども、その感情は依然としてその人種の感情である。外國の勢力は決してその表面下には達しない。祖先傳來の習慣、祖先傳來の感情は、四五代や、四五世紀で改造さるべきものではない。支那の場合に於て、十中八九、この國民は、一度彼等に强ひて加へられた新支配を、それを法律と命令とを以てして維持すれば、穩かに受け容れることであらう、そして幾百年間も、その支配者のより優れた文明を採用しようと自ら進んでの努力はしないことであらう。實際、新しい工業上の諸方式や可能な諸方式を多く學びはするであらうが、その智識をば傳統と習俗とに外づれないやうにして利用するであらう。要するに、西洋が支那を支配することは、その國の文明の發展を促すよりは寧ろ後らす、といふことは有りさうである。西洋の文明を被征服民に强ひて、そして好良な又永續的な結果を奏することは有り得ないことである。有效に且つ永續的ならしめんには、日本の場合のやうに、自由なそして向上心を有つた人種が自ら進んで、それを採用し發達せしめなければならぬ。日本は正しく、西洋の文明て自分に必要と或は有效と思つただけを採用して、それ以上採用はしなかつた。日本は依然として思想に於て、習慣に於て、感情に於て、日本である。その個性を失ふこと無くして、その國を强くした。多くの人が嘗て愚かにも

さうと判斷したやうに、模倣的では決してなかつた。日本は實質的に同化力に富んで居る、——その同化の力たるや、世界各國に無比のものである。

支那は、日本との今次の戰爭に覺まされて自助の念を起こせば、地球上最も偉大な强國になるかも知れぬ。若しこの絶大な民衆の頭へ、日本が爲し來たつて居るやうにすることが大切である——新教育制度、新軍事制度、新行政制度を設けるが必要である——己が國の古聖賢が敎へた政治上の純潔の、あの大教訓を不可抗的に勵行するのが義務である——といふ觀念を十分に注ぎ込むことが出來れば、確に世界の歷史は變はるであらう。日本が三十年で爲したことを支那は——同じ統一した目的と賢明な指導とを與へられたなら——爲すことが出來るであらう。しかし、何か非常な必要に迫られて、そんな自己發展をするやうされなければ、支那は相變はらず惰性(ホス・イネルシエ)に賴つて行きさうに思はれる。恐らくは北京の略取が、その雄々しい救治法であらう。

神道の價値

一八九四年十一月十三日火曜日

日本人は熱狂者が基督教と呼んで居るものに改宗しなければならぬ、さうでなければ他の或る國民に「服従」しなければならぬ、と説得しようと力めて居る彼(こ)の甚(アンコ)だ以て善良(グッド・)な人達(フォーク)は、日本を東洋諸國民中の最高位に高めんとしつつある今次の戰爭の一大教訓を明らかに無視して居るものである。その教訓とは、日本は、これまで嘗てないほどに、その本來の宗教の價値を知りつつあることである。日本には、佛教よりも比較にならぬほど古い宗教が――忠義の、愛國の、その帝國を創立した死者への義務の、その國家を守つてその血を注いだ總ての人への崇敬の、宗教があるからである。或る者はこの尊崇を大和魂と呼び、或る者はこれを祖先崇拜と呼び、（それに就いて全く何の理解もない）宣教師はこれを「邪教」と呼んで居る。その眞の名は神道である。それは人間の眞心を正しい行(おこなひ)へのそ

の指導者であると聲明し、人間の眞の義務はその君に、その家に、その名譽に、その皇帝に、或はその國に對する義務を怠らんよりは寧ろ躊躇なく、その生命を抛つに在りと聲明して居る。それは服從を命じ、慈悲を命じて居る　それは、今それが訓練された軍人の魂であるが如くに、古昔のサムラヒの魂であつた。が決してそれは單に一階級或は一姓階(キャスト)の魂ではなかつた。それは常にその人種の最も深奥な感情として今に迨んで居る。それで純神道の復活の運動は、國民生活の表面に見えて居るものよりも無限に深い意義を有つてゐたのである。外國勢力の侵略の爲めに崩解した社會組織を建て直すといふ大きな困難な仕事に助力するやう、その人種に存するあらゆる烈しい、尊い感情への政府の訴願(アピール)を意味してゐたのである。その訴願は十分世界の驚嘆を喚起していいほどの精力を以て應ぜられてあつた。如何なる時代の回々教の熱心も、新日本の建設に注いだ古昔の忠君愛國の精神に優して、異常な結果を生じたことは決してなかつた。三十年間弛まず續けた一大努力に依つて、この國民はそのあらゆる力を養ひまた强めて、眞の獨立を回復せんとのその仕事を成し遂げんと計り、異常なる障碍——貧窮、地震、洪水、大火——にも拘らず、歐羅巴の一二の國と軍事上并びに科學上對等國たるに、そしてその或るものよりも優さつた國たるに、成功した。この巨大なる事業に必要であつた克己心は實に、その古來の信仰の實行で

あつた。そしてその衝動はまだ弱められてもゐないし、また來たらん數世紀の間弱まりさうにも見えない。日本の勝利は全く、その士官の科學的訓練に基づいて居るのであるが、それに劣らずまた、その兵卒の素ばらしい精神に基づいて居るのである。その國家の爲めに戰爭で死ぬる機會を、或は未開な土地での冬期の野戰の無量の困苦に堪へる機會を、拒まれたばかりのことで人をして自殺する氣にならしめる感情の價値は、見積り過ぎることは容易でない。神道を奉ずる軍人には、戰爭で死ぬるのは歡喜である、永久の光榮である。そして國家の爲めに忍び得る苦痛はどんな苦痛も、名譽として歡迎され、殆ど感謝の念を以てして堪へ忍ぶ。そしてこの素ばらしい軍事的精神の背後に、――軍隊を擁護して、それに慰安を與へまた、それに奬勵を與へようとあらん限りの犧牲を拂うて――國民の精神がある。これまた神道である。

當然のこと、西洋の改宗勸誘者共の努力は、金剛の岩壁から跳ね返さるるやうに、この精神的城壘から跳ね返される。そして日本はその信仰を――その神道尊崇も佛教も――中止棄てさうにはない。神道は露西亞併びに英吉利をして喜んでその友情を得んと欲せしむるほどの地位へ日本を高めた。佛教はその藝術と、その禮儀と、その國民性の最も魅惑的な特質總てを構成した。日本はこの二つを棄てさうには、それに對して忘恩な振舞ひをし

さうには、ない。恐らくは日本は、今日のその獨立と、諸國民の中に在つてのその地位の名譽とを、この二つのものに負うて居るのである。

合衆國に於ける共和黨の勝利

一八九四年十一月十三日火曜日

合衆國に於ける共和黨（レパブリカン）の勝利の報道は——該（そ）の黨派が獲得した大多數投票の嵩（かさ）が、次の大統領選擧に際して共和黨候補者が多分成功するであらうことを示すから殊に——種々な可能事を暗示するものである。南部諸州の事件に對して共和黨の態度はどうであらうか、といふ問題が直ぐと起こつて來る。これは重大な問題である。南部諸州は丁度今のところ、その地方的政治に對して政府からのどんな干渉も、それを平靜に受け容れるやうな狀態では居らぬのである。ところがそんな干渉が少くとも唱道されるであらうことは殆ど確實である。出來得る限り多數の民主黨員（デモクラット）を免官して、文官の地位を共和黨員で充たす、といふ

共和黨の昔からの政策すら、今度は南部で異常な憤懣を起こしさうに思はれる。それで南部に於ける共和黨の舊政策を實行せん爲め、政府の力を用ひようと企てて、その爲め古昔の地方的敵意を復活することからして或は生ずべき結果が、何處まで及ぶものか、その限界を推測することは困難である。

がしかし、共和黨の性質が大いに變つて來て居る、と信ずべき理由が一つある。確にあの黨派が勢力を得て來たのは、關稅　題に含まれて居る利害の影響に依つてで、所謂、非南部要素の投票に依つてではない。南北戰爭の情熱は全く燃え盡きて居る。そして北部の教養ある人士は、南部の人種問題は北部の干渉によつて滿足に解決することは出來ない、ことを認めて居る。思想家の意見なるものは、危急の場合に常に必らずしも最も重きを爲す意見ではないことは如何にもそれに相違ないが、政府の銃劍に頼つて南部問題を解決すべしと喧しく言ひ立てる誤つた人道主義は今度は、かの共和國の平和を一般に亂す力を有たぬことを自覺するであらう、と我々は期待することが出來よう。人種問題のごたごたは苟もそれを解決せんとならば、前年唱道した方法よりも賢明な方法で解決しなければならぬ事、また、共和黨の銃劍に依つて黒人投票を支持することは徒に、無限の害惡を齎し得るのみなる事、を北部の强烈なる常識が今は判定して居ることには殆ど何等の疑ひも有り

得ないのである。がしかし、南部問題が新しい注意を受けるであらうといふ事、また、憲法の上に於て、それを修正しようといつた方面の手段を論議することにならうといふ事は、我々は期待することが出來よう。

若し共和黨が北部に於て性質を變へて居るとするならば、民主黨も亦それに劣らず國の南部に於て性質を變へて居るのである。『堅實な南部』は、單にあの南北戰爭の政略の爲めに北部に反對して結合した諸州の聯盟といふことを最早意味してはゐない。南部諸州人は、その爲めに戰つたあの主義を尊奉しなくなつてから久しきを經て居り、國家的結合の必要と價値とをば、その前の敵が常に認めて居たと同じく十分に認めて居る。がしかし、南部諸州人をして黑人投票を左右せざるを得ざらしめた社會的必要は今なほ依然として存在して居り且つ增大して居り、その政治は自衞の必要の爲めに影響せられて居る。しかし、その政治がさういふ影響を受けて居るのはほん限られた程度に於てである。己が州だけの事件を處理するその權利に關しての意見を除いて、他の總ての事柄に對してその意見はその父祖の意見よりも遙かに寬大であり、その精神はもつと進步的である。その利害は、嘗ては殆ど全く農業上のものであつたが、今はその上に大いに工業上のものであり、日々に層一層密接に北部の利害と同一のものとならんとしつつある。南部諸州人は、黑人及び白

人に同様に教育上の機會を發展せしめるのに出來得る限りのことをなして居る。だから人種問題の解決を助ける事ならば、どんな憲法上の改正をも衷心歡迎する事であらう

實際に於て今日合衆國に於ては何等大なる地方的敵意は、尤も、そんな敵意が謬つた政策の爲め急速に復活することはあるかも知れぬが、ないのである。南部はただ單に、或は起こるべき不愉快な事共に對して防衞をして居るので、そんな或は起こるべき事共の危險が全く去つてしまふまでは相變はらずさうしてゐなければならぬ。しかし人種問題の困難を除いては、南部の民主黨と北部の共和黨と何處が異つて居るか、それを判定するのは困難であらう。この兩語はその字句に拘泥しない意味でいへば今は、名稱誤用になつて居るのである。嘗ては、北部諸州では紳士といふ紳士は悉く共和黨員であり、南部諸州では紳士といふ紳士は悉く民主黨員である、と言はれてゐた者である。そして誇張があるものとしても、その言葉は實際に於て一般的眞相に觸れてゐたのである。といふのは、南北兩部の富裕でそして教養のある階級の大部分は、相反して居る旗幟の下に馳せ集まつて居たからである。今日は、南部に於ては民主黨といふ語には平民的な意味は影さへ有つてゐないこと、また、北部に於てはそれは民主的と云はんよりは寧ろ寡頭政治を欲して居る一政黨の現在の歸依者に與へられて居る名である事は、少くとも確實である。共和黨といふ

名は、北部のあの大きな黨派の――戰爭時幷びに再建時代のユニオン黨の――憶ひ出と共に或る要素を、今なほ有つては居るが、北部諸州に於てすら非常に變つたものになつてしまつて、今ては根本的に、自由貿易論者に對立しての關稅黨の意味になつて居る。南部諸州に於ては、それは單に黑人投票を意味して居る。危險は其處に存して居るのである。

外國影響の衰微

一八九四年十一月十四日水曜日

我々は古くからの或る居留外國人が『君に本當の事をいふとだ――今度の戰爭が濟むと、日本人は如何にも高慢ちきになつて、とても仲よくつき合つて行くことは出來ぬことになららう』と話すのを最近耳にした。その人は、その人外の可也多くの人の信じて居ることを反響したのである。日本のことを能く知つて居る人達の間に、戰後には日本人對外國人の關係に或る變化があるてあらう、といふ一般的感情がある。誇張と或る程度の誤解とがそ

れにはあるとしても、この古くからの居留外國人の考へは全然間違つて居るのではないと我々は思ふ。日本人は、支那を征服した曉には、これ迄にないほどもつと我意を張るやうになるであらう。そして我々は、あらゆる外國的――政治上並びに他の――影響が非常に減ずる、ことを豫想すべきあらゆる理由を有つて居る。がしかし、我々はこれをば遺憾とすべき事とも心配すべき事とも思はない。日本が絶對的獨立の地位に進むのを歎いたり、或は力の觀念たる、あの新たに得た、そして絶えず増し行く國民的自負心を非難したり、するのは莫迦莫迦しくも利己的なことであらう。この問題の工業的方面はといふと、日本の工業並びに商業が受くべき莫大な新刺戟と共に、外國商人は得（とく）すること計りで、損することは一つもないから、と我々は確信し得るのみである。

が、少くもない外國觀察者が爲して居る誤解は、その觀察者が、その差迫つて居る極點を認めて居る此の傾向が突然のものである、或は少くとも最近の事件が生んだのである、とする意見に存して居る。日本人生活の表面の少し下を見て居る者共は、もつと能く知つて居る。かの傾向は、日本が開港を强ひられた時このかた、實在してゐないものでは決してなかつた。自分の力よりも遙かに優越な力に迫られて、日本は外國の命令に屈從せざるを得なかつたのである。再び自由を獲得するその唯一の希望は、日本がそれて壓伏された

その戰爭の技術を研究することに依つてであつた。實際その技術を獲得するためには非常に多くを拂はざるを得なかつた。がその費用に愚痴を滾さなかつた。日本は長い年月の間謙遜な生徒の役を演じた。が、歳月の經過すると共に、その學問的敎師を一人一人次から次と罷免しだして、悲觀的豫言があつたに拘らず、敎師なくして豫想外に美事にやつて行けることを示した。日本は己が身を强くするためにだけ訓練を受けたのであつて、强くなると、費用の嵩む敎訓を無駄だと考へた。その次第に募る獨立の態度が窺はれたのはつい昨日の事ではなかつた。幾年もの間それは明白であつたのである。そして支那との戰爭の破裂に先立つて、條約についての長引いた癇癪の下に、決然たる威嚇の調子を取つたのであつた。ところで今、日本は自分の力を知つて居り――それを試して見――それを證明したのだから、日本が外國のどんな命令にも、いつまでも無制限に屈服するもの、と想ふのは頗る不合理なことであらう。砂の中へ頭を突込んで、かうかういふ事は不愉快かも知れぬから、それはさうではないと信ずるのは、何の役にも立たぬことである。

　或る愚かな人達は、西洋に對する日本の忘恩！に就いて、實際に述べて居る。それに對して日本がかう言ひ返して居ると想像しても宜い、日本は西洋に對して恩を感じてはゐない、それは全く恩を感ずべき理由が一つもないからである、――そして正しからうが、誤

つてゐようが、全く反對な或る感情に耽るべき强烈な理由を有つて居ると信じて居ると。日本人は言ふ、『如何にも西洋から私共の電信、鐵道、學校制度、甲鐵艦、軍事訓練の念、其の他を貰つたが、それに對して十分の報酬をさせられたことも同じく眞實である。西洋はどんな贈物も――我々が願ひはしなかつた、しかも要しはしなかつた宗教的教師の齎來を除いて――只ではくれなかつた』成功した他の國民もさうであつたやうに、日本にも實際さうてあるが、日本は、その現在の地位に對して、自己へのほか恩を感ずべきものを一人も有つてゐないのである。これは不快なことかも知れないが、日本は自己の權利を主張しようとして居る、そしてその服從に於て以前ほどおほまかではないやうにならうとして居る、といふ事實を無視するのは我々にとつて無用のことである。

外國の侵略に對して自己を防衞する必要を見た爲めに、日本が間接に得來たつて居る利益に就いて、日本がどんな感情を有つて居るかは別な問題である。その利益は日本は十分に認めて居る、そして今後も認めるであらう――そしてその理由だけでも、無念だといふ態度を日本が取らうとは思はれない。日本の利害は今や、他の工業諸國の利害と一緒に結び附けられて居るのだから、いづれもの害になる事は何一つしないであらう。が、戰前よりも戰後に於てより大なる排外的反動を我々は覺悟しなければなるまい、と我々は敢て思

ふものである。より古い文明狀態へ——それが工業の發展を邪魔しない限り——還つて行く傾向が漸次高まらうと思ふ。街路に見るヤウフクの數が多分少くならう。大都會に於てすら外國の影響を示すものの數が少くならう。しかしそれにも拘らず、日本は、嘗て支那に對して抱いてゐたと同じ感じを終には西洋に對して抱くであらう、と我々は信じて居る。兩方とも日本の師匠であつたのである。そして兩方とも日本を驚嘆すべき弟子と見たのである。日本が嘗て支那に對して感謝したと同じやうに、賞嘆すべき野心を以て、その教師に優さらうと希望してゐながらも、なほ且つ日本は西洋に對して感謝することであらう。

倫理と適者生存

一八九四年十一月十五日木曜日

マクミラン會社が、その美しい『エバスリ叢書』で、つい此の間發行した、ハクスリ教授論文集の最終の第九卷は、この有力な思想家が人間の義務といふ問題に對してこれまで

書いたあらゆる論文の中で恐らくは最も目ざましい、そして最も價値ある論文を收めて居る。我が輩は殊に――一八九四年に筆にせられたもので、その章の表題が示して居る諸題目への教授の極最近の貢献たる――『進化と倫理』と題した諸論文を指していふのである。この英國第一位の科學者は、極めて僅な頁のうちに、隨分と多くの異端を片附け、そして力量並々ならぬ他の思想家達が、それを頗る用心深く取扱つて居るか、或はそれに觸れることを恐れて居るかする多數の困難な問題と大膽に鬪つて居る。

我が輩は異端といふ語をその世俗の意義に用ひて居る。今日の誠實な思想家は、多くの非科學的な學說が――一部は相對關係に於て思索する能力が局限せられて居るがために存在して居る學說が、そして一部は近代知識の全範圍に亘る研究にはどんな研究にも必要な長い間の心的訓練を受ける事を大多數の者が好まないがために存在して居る學說が――當代の自由思想家の中にすら行はれて居るといふ事實を、あからさまに承認しなければならぬ。そしてそんな學說のうちには、自由思索並びに科學の進步に取つて、利益になるよりも寧ろ害になる事をして居る者がある。例へば、社會の完全な狀態に在つては、弱き者愚かな者は情深くも此の世に生存しないやうになるといふ（グラント・アレンがその巧妙な物語の一つでそれを旨く攻擊した）學說の如き、――或は、相互の協力の完全な和合が此

の世界の現在の情態に在つて地上の樂園を造り出し得るといふ（亞米利加での異常な實驗の結果、十分に反駁を蒙つて居る）學說の如き。――或は恐らくは特に、自然は神性といつたやうなもので、或は少くとも嚴密に道德的な智の示顯であつて、その智の版圖では、現在あるところのものは總て正しい、――相對的に正しいだけではなく、その語の我々の純倫理的意義に於て、道德的に正しい――といふ學說の如き、それである。

　彼(か)の適者生存といふ科學的大敎理は、妙な謬見を少からず惹起して居る。それは工業的文明の不道德なまた殘酷な諸相を是認するのに用ひられて居る。そして萬物の永遠の過程に於て力が正義であるといふ敎へだとして僧侶に依つて妄用せられて居る。この場合、他の多くの場合に於けるが如くに、兩方が同時に正しくもあり誤つても居るのである。僧侶の議論は、自然が標型(タイプ)を發展させて行くので暗示して居るその働きは、倫理的敎規と一致してゐない、といふ直覺に基づいて居るものであつたが、反駁の出來ない科學的事實を受け容れる事を拒む點に於て謬つて居つた。心的にまた肉體的に弱い者が優越な奸智と腕力とに壓倒される事を恕(ゆ)るし、かくて進化論をば狂つて居る良心への發布(はつぷ)にしようとする人達の議論は、實際その議論を支持する自然界の事實を有つてゐたのであるが、そんな議論を用ひる人達は、倫理的感念そのものも、野蠻人の熱情や動物の食慾がさうと同じやうに、

永遠な諸力の所產であるといふ事實、及びその倫理的感念なるものをその人達はその社會問題に對する意見に全然無視してゐたのだといふ事實、を全く見落としてゐたのである。しかしそれがなければ、人間社會なるものは決して出來上がる事はなかつたらうし、如何なる文明も發達し得なかつたであらう。そして、人間社會の發展並びに文明の發展は、或る宇宙律に從つたがためでなく、それに背いたがために成し遂げられたのであるといふ偉大な事實は、近代の科學諸説の最も猛烈な通俗論議に十分には認められてゐないのである。

そんな諸問題の道德的意義を論ずるに當つて、回想すべき極めて肝要な點は、『適者生存』といふことは、如何なる抽象的な倫理的意味に於ても、最適者が殘存するといふことを意味してはゐないのであり、また宇宙全體としての自然に關して最適者が殘存するといふことすら意味してはゐないのである。それは、その物を取卷いて居る現在の特殊狀態に在つて、生活をまた生活の愉快を妨げる邪魔物を制御するに最も適した物が殘存する、といふことを意味して居るのである。さういふ狀態といふものは、國を異にするに從つて同一てはない。それは過去に於て同一てはなかつたし、未來幾代にも同一てはないてあらう。或る氣候の下に在つては、最も下等な形式の生物が――例へば、植物の中でいへば地衣類とか、或は北極の雪を彩るあの顯微鏡的微細な植物とかいふやうなものが――最適者てあ

らう。他の狀態に在つては、最適な植物は熱帶地方のあの有毒なマンチニール、卽ちそのたつた一枝を池の中へ落としても、その池の魚が死んで表面へ浮き上がるあの不思議な熱帶植物かも知れない。

同じやうに人間社會に在つても、適者生存といふことの意味は、廣く社會狀態に從つていろいろ異ることであらう。最も下等な野蠻種族の中にあつては、最も能く殘存しさうな者は、最も力强いと同時に最も狡猾で最も獰猛なものであらう。現存の最も高等な文明社會にあつては、生存の競爭に於て殘存するに最も適した者は、最も大なる知的諸力が最も能く結合されてゐて、最も無情に侵略的目的に——その同胞の支配と利己的利用とに——向けられてゐる者であらう。同一社會の各人間の、啻に生きて行く權利のため計りでなく富の獲得によつて得らるべき快樂の最大機會のための、競爭は、人間の本性が今在るが儘に變はらぬ間は、そして人口の壓迫が繼續する間は、依然として行はれるに相違ない。人間の本性は千年を幾度重ねたとて、天使的なものに變はりさうにはないことであり、そして人口は非常に增加しつつある。その上に、智力の發達と共に、快樂の受容力と必要とが常に加はりつつあり、生の渴望が强まりつつある。がしかし、教育によつて、或は奇蹟によつてでも、人間の性質が倫理的に突然改善されて、完全な協力と相互の助力並びに親切

とが人生の一切の事物を調節し得て、出來る限りの最多額の安樂と快樂とを獲ることが出來るやうになると假定しよう。また、人間が、必要といふ刺戟なくして熱心に勞働するに甘んじ、また個人的に利益を受ける希望なくして、人類のためにその最善の努力を用ふるに甘んずると假定しよう。實際、あらゆる內外的狀態について、地上の樂園を創設すると假定しよう。その結果は單に、人間增加の一時的抑制が取除かれると、人口の壓迫が、數代のうちに、その樂園の中へその昔の生存競爭の激烈さを再び持ち込む、といふことであらう。人口の壓迫は、增加が人命維持物資の製產よりも超過しなくなる迄は、あらゆる人間社會に於て持續するに相違ない。製產が豐富になるに從つて人口は倍々增加する。それが減少すればするほど人口增加の數は少くなる。これは競爭の實證である。その競爭は何時止むであらうか。最も偉大な生物學者は言ふ、人智が神經の發達と共に增加するに從つて、人間の產出力は減ずると。また、その原因だけで、出產の年平均數が死亡の年平均數に超過しなくなる時期が最後には到達するかも知れぬと。が、そんな黃金時代は言語に絕した遙か先きのことに相違ない。

理想的な人間社會の計畫を夢想した總ての夢想家は、人口といふこの問題に面と向かはざるを得なくなつて居る。彼等は多くの場合に於て、數を人工的に抑制する或る手段を主

張してこれに應じて居る。幾多の學說に據れば、肉體的に一番强いものだけが、その種族を繁殖することを許されるものである。ところが肉體的に一番强いものは、決して道德的に一番發達したものではない、――それは肉體的に優越になつた者共の進化の歷史が餘りに明白に語つて居る。その主張する策略が無慈悲であること、繁殖の『種馬學說』を人間に適用するの野蠻なことは、言はずとして、――多數の思想家は、最適者をそんな風に人工的に選擇するに就いては、肉體的諸性質よりも道德的諸性質を餘計なくらゐに考慮しなければなるまい、といふに一致するであらう。だが此處に、ハクスリ教授が印象的な數言で概括して居る一つのヂレンマが起こつて來る。――

『性質をどんなに犀利に判斷する者でも、若しその前へ十四歲以下の男兒女兒百人を置いたならば、必らずその國の役に立つ者になるに極まつて居る者として殘して置くべき兒達と、同じく必らず愚かな或は橫着な或は惡るい者になるに極まつて居る者としてコロロホルムで殺すべき兒達とを、誤らず選み出すことが出來るかどうか、自分は疑ふ者である。善良な或は不良な市民の特質なる者は、これを見分けるのは實際狗兒若しくは短角犢の特質を見分けるよりは遙かに困難である。生活の實際の諸困苦が成人を刺戟して十分にそれを働かすまでは現はれて來ない特質が多い。所がそれまでには害をしてしまつて居る』

要するに、我々のあらゆる科學的知識の總額が、人間の本性はどんな法律に由つても完全にはされ得ないものである事、また無拘束の生存競爭の手段が生じ得る結果よりも遙かに惡るい結果を生じないやうな人工的性選擇を爲す手段をどんな理論家でもが工夫して居るかどうか疑ふべきである事、を教へて居る。でも我々はまた、競爭そのものは道德的ではない事を、また、自然は或る倫理的な或は神聖な目的を以て行動して居るのではない事を、承認しなければならぬ。自然は何等の道德をも有つてゐないのである。ゲーテがずつと前に發見したやうに、自然は無限に不道德である。自然に對して慈悲も憐憫も求むべきではない。自然は愛も憎みも、遺憾も感謝も、知つてゐはしない。自然は決して女神ではない。自然は宇宙律を現はして居る。そして宇宙律は、ただの力として、全然人間の倫理を――間接にそれを創造しつつありながらも――認めないのである。

それでは我々の道德は宇宙律とは何等の關係もないものと我々は信じなければならぬか。我々はそれよりももつと怖ろしい事を信じなければならぬ。宇宙は人間を助けることが出來るとも、或は欲して居るとも信ずることを止めなければならぬ。倫理的進步を成し遂げんがためには、人間はその幾百千萬の太陽を具有して居る宇宙の重さ全體へ、その智力と、その意志とを以て反抗しなければならぬ、といふことを認めなければならぬのである。そ

してそれにも拘らず、人間は竟には勝ちを制するものと我々は信頼してよからう。

歐羅巴の軍事狀態

一八九四年十一月十六日金曜日

歐羅巴の現今の軍事狀態は或る點に於ては古代の野蠻時代の組織への奇妙な逆轉を見せて居る。太古の人間社會の或る種族狀態では、强壯な男子は一人殘らず軍人にならなければならなかつた。そしてその大集團の管理は主として老人の――その長命が、靑年が得ることの出來ない大なる經驗をそれに與へた人間の――智慧に委されて居たものである。といふのは、そんな原始時代には、個人的經驗といふものが今日よりもより高い價値を有つてゐて、實際それが戰爭並びに和平にかけて完全に信賴し得る唯一の知識を形成してゐたからである。さて、幾千年經過した後て、最も進步した人間社會が不知不識の裡に野蠻時代の原則へ逆轉し來たつて居るのを見る。軍事科學の異常な進步が、數の價値へ新しい意

味を與へた。そして又もや、强壯な獨逸人卽ちゴール人は一人殘らず軍人とならなければならぬことになつた。更にまた、近代の軍隊の管理は再び――原始時代のそれとは稍〻その理由を異にしては居るが――老人に委されて居る。最高の軍事的知識はそれに通曉するには一生涯の研究を要する、また、年の若い者には到底も二十五萬人の大部隊の操縱は委されぬ、と認められて居る。獨佛戰爭では、勝利を得た軍隊の統帥者は大部分六十歲以上であつた。そして一八九五年に戰爭が一つまた起これば、その大戰爭では靑年天才は後衞の地位を占めなければならぬ、ことを多分見出すであらう。今日は一ナポレオンと雖も迅速な立身の機會は餘り有たぬことゝであらう。戰爭は單に數字の競技ではなくなつて――どんなに花々しい或はどんなに遠くを見拔く直覺でも、直覺だけでは無經驗をして成功の希望を抱いてこれを演ずることをさせない程に、非常に複雜な、非常に巨大な、非常に深奧な競技となつて居る。にも拘らず、戰爭は科學的になつては居るが、その必要條件の社會的結果は、古昔のチユートン人やキンブリ人の――古代のゴート人やヴンダル人の――種族狀態へ我々を後返りさせる。

かしかし、古代の西洋の野蠻人も古代の東洋の野蠻人も、ただ數といふ點に於ては、近代歐羅巴の軍隊を結合した數に匹敵する軍隊は、どんな時にも集めることは出來なかつた。

クセルクセスの軍隊は、從軍行商人共を加へて、總計五百二十八萬三千二百二十人といふ驚くべき數に達してゐたといふ、眞僞を普く論議されて居るヘロドタスの言を假りに正しとしても、今日獨逸と墺太利とが結合すれば六百萬の大軍を戰場へ集め得られる事は疑ひのない事である。佛蘭西は自分だけで容易に三百萬人を召集が出來よう。ところで古代のキンブリ人とチュートン人との聯合軍は僅に三十萬人であつた。古代に在つて一個の旗の下にこれまで集まつた一番多數の騎兵部隊は——窩闊臺汗（オコタイカン）の部隊は——百五十萬騎を算してゐたといふことである。が、露西亞は、命令一下後割合に早く、もつと數の多い部隊を、しかも、近代武器の非常に優越なことを思へば、少くとも千倍は恐ろしい部隊を、集め得ることは殆ど可能以上である。英吉利並びに種々なより小さな歐羅巴諸國を含めないで、歐羅巴の主要な國八つで直ぐに戰爭に出せる軍人の總數は今、千四百萬乃至千五百萬であ る、と言うてよい。若し、豫備軍も含めて、全歐羅巴に使用し得る軍隊全部を合算すれば、總計千七百萬以上に達する。それから歐羅巴の戰艦の總數は——多數の木造艦と水雷艦艇とを含めないで——約千五百艘である。そしてその艦船はいづれも一艘で昔の無敵艦隊（アルマダ）全體を破滅し得るものである。

この威力は實際何を意味するかは、軍事專門家が、伎倆優れた數學者の援助を得て、初

めて見積もることを敢てし得るものである。この巨大な軍隊が手にする近代の戰爭機械の實地の破壞力は、讀者の眼前で計算しても、それを合點することは困難かも知れない——それ程に數字上の額が莫大なものであらう。實際の破壞力に就いては、これは計算するのがもつと容易でないかも知れぬ。最近の歐羅巴での大戰後、あらゆる種類の銃砲に對して爲された改良と、あらゆる主要な軍隊へ機關銃を入れたことは、戰術を非常に變へしめる結果を來たしたので、この次の戰爭は必らずや全く斬新な原理に基づいて戰はれるに相違ない。海軍の戰法もさうである。だからその理由で、最近の戰爭に於て日本海軍が採つた戰術は、最も大なる興味を以て外國で研究され來たつて居る。が、陸戰に於ける新方式の價値如何に就いては、今次の戰爭で多く開發さるゝことを我々は殆ど望むことが出來ない、——といふのは、支那側はその侵入者に抵抗する能力を示してゐないし、日本側は攻擊或は防禦に於て最高の戰術を發揮する好機會を得ずに居るからである。

近代軍備の異常な總額は强く想像力に訴ふるところありはするけれども、それは、戰爭なるものを年每に層一層困難ならしめる幾多の事實を現はして居るのである。聰明な人士ならば誰れも、幾百萬の兩軍を互に對抗せしめ、それをナポレオン時代の軍隊の如くに操縱し得るとは、瞬時も想像し得ない。そんな巨大な軍隊を、ただ師團師團で、動かして養

ふといふことだけでも、近代野戰の最も困難な問題の一つである。そんな莫大な軍隊が眞に意味するところのものは、ただ工業的國民はいづれも、その戰爭材料のありとあらゆる資源が全く盡きてしまふまで敵に抵抗することが今出來る、といふことである。そしてその事は決して、二三の樂觀論者が證明せんと試みる如くに、未來の歐洲戰爭は四五囘の迅速な戰鬪で決定せられるであらう、といふことを意味しはしない。そんな大戰爭に伴なふ可能事件は、それを考へるのは愉快ではない。我々は、軍人の大部隊が姿を更めて大工や勞働者や建築者の大部隊となり、大砲に代ふるに土壤を耕し、收穫物を刈り取る電氣機械を以てするやうな、より大なる工業時代への只だの準備であるといふ、ベラミーの空想を寧ろ抱かんと欲するものである。

一八九四年十一月十七日土曜日

心靈論の唯物論

國民性に關してのピアスン博士の驚くべき書卷中の評言で、新教國と羅馬加持力教國との心理的雰圍氣の異常なる相違に就いて同博士が爲した觀察ほど、著しい或は正當なものは他に無い。西班牙或は伊太利へ入つて行く英國人は全く別な感情の世界へ――自分の世界とは全く異つて居るので、幼年時代に加持力の唯心論（アイデアリズム）に就いて幾分學んでゐないと、身のまはりの生活が到底も合點が行かないし、また表面の下へ届いて居る若しくは表面に觸はりさへして居る生活に對して正當な批判を下すことが出來ない、程の或る世界へ――入つて行く。それは心靈論（スピリチュアリズム）の――そのより深い要素は遠く基督教の發端前に存して居る心靈論の――世界である。誰れも彼れもが超自然的なものに、天使と惡魔とに、伴なはれて歩き廻はつて居る世界である。人間の總ての行動が靈的な諸力に助けられ或は妨げられるものと想はれて居り、人間の全義務は死後の靈的存在に對して祈ることであるとされて居る世界である。それは靈魂の――惡なるまた善なる靈魂の――惡魔と天使の――幻の聖者と處女の――そしてその實在と、その現存とを、信ずと聲高らかに生者が公言する、世界である。ところが歐羅巴に於けるその世界は餘程縮まつた。――が、數世紀前には、その信仰は全西洋の宗教であつたのである。近代の心靈論が何を意味するかの全體を理解するには、誰れしも如上の事實を記憶してゐなければならぬ。

超自然な物を信ずる念の力は餘りに屢〻低く見積もられ過ぎて居る。西洋の基督教諸國に於て羅馬及び希臘の舊信仰が到る處死滅してはゐないし、また北歐神話の昔の神力を信ずる念もまだ死滅してゐないにも拘らず，僅ばかりの教育の力でもつて、それを形造るのに無數の幾千年を要した物をば一代にして滅亡せしめるに足る、と餘りに屢〻想像されて居る。宗教改革後に新教諸國へ輸入された彼の和められた懐疑論が、その後引續き發達し來たつて、その爲め該の諸新教國の人達は、天使と惡魔とに伴なはれて居る事を――聖なる者に助けられることを，また或る種の不可思議な干渉を蒙つて居ることを――殆ど信じなくなつて居る、ことは承認しなければならぬ。最も低級な――救世軍の歴史がそれを證するに十分であらう　くに――宗教的情熱は確に少しも缺けてはゐない。今なほ自己犧牲の機會を求めて居る殉教の熱狂がある。今なほ祈禱の力を信ずる信念がある。しかし，それにも拘らず、そんな改革された人種のうちに依然として或る種の本能的な――その文句の清教徒的意味での――『埃及の肉鍋〔肉慾のこと〕を求むる渴望』が存して居る。幾千年の久しき間，死者に伴なはれて居ると想ひ、靈の指導者に導かれて居るのであると想ふに馴れてゐた幾代の人の子孫に對して、彼のより古い、そしてより靈的な世界がその感化の力をまだ全然弛めはしてゐないのである　この祖先來の慰安は宗教の祖先來の恐怖と共に餘り

に早く消えてしまつた。近代の——嚴粛な、何も生み出さない——祈禱所は、人の想像力に對して、眼見得べからざるものを影ほども暗示しはしない。熱望を毫末も思はせはしない。無限なる物を少しも夢に見せはしない。さうして目下の最も正統な説教は、心靈界との或る同情的な親しみの念を欲する、人間の殆ど無盡藏な渴望に對して　その渴を醫するところが殆ど全く無い。その間一方に於ては、科學的並びに非科學的な教育が、全く別な方面に、信仰の源泉を涸らし來たつて居る。教育なるものがそんな結果を齎すのは當然である。そしてそれは人類の進歩に特に必要でさへあるのである。しかし、不幸にも大多數の人の教育は完全たることを得ない。所謂完成された教育を受けることの出來る人達の場合に於てさへ、その教育はなほ時代後れの傳統の爲めに妨げられて居る。そこで、一つの力としての教育が、慰安になる或る信仰を滅ぼして、學生の內的生活に絕對的な空虛を一つ造り出すほどの分量で與へられて居るが、この世界についての中世的觀念よりも無限にもつと價値のあるものと、驚く可き或る物で以て、その空虛を充たすやうには稀にしか與へられてゐない、といふ光景を我々は眼にするのである。そしてこれは、近代教育の全組織はさかさまだといふことが認められるまで、繼續するに相違ない。我々は教育の過程を謬つた側からして始めて居る。兒童が最初に出す質問は宇宙の祕密に關してである。とこ

ろが、さういふ質問への眞の答へはやつと研究の最も後年に及んで――男女とも成人の域に達した時はじめて――與へられて居る。

近代の心靈論はその存在を、第一に、福音の敎へは比較的に何物をも産み出す力がないのに飽き足らないで、人間の情的本性が起こした自然的反動に負ひ、第二に、不完全な敎育に負うて居る。その缺陷がこの逆戻りを可能ならしめ、また至當として居るのである。勿論、顯著な人間でゐて狐狗狸さん〔強力を用ひず靈の力で卓子を上げ又は動かすこと〕を信ずると公言して居る人達の例外は擧げてもよい。しかし、そんな人達は特殊の方面にはどんなに天賦の才能を有つて居るにしても、心靈論へのその傾向は正確な知識に缺くる處あることを示し、或はそんな知識に通ずる能力を有たぬことを現はして居る、のだと斷言するに我々は躊躇しない。心靈說とより古き宗敎的主情說との關係は二つの事實に依つて可也能く表現されて居る。卽ち、羅馬加持力の心靈論者は一人も無いといふ事實と、その信仰は依然として理性とは全く離れたものといふ事實とである。ポーラス氏或はスラッチ氏が自分は虛僞を說いて居る者だと自白すると、その敎徒共はその自白を僞りだとして斥ける。――彼等は自分達の迷妄を餘りに愛してゐて、それを棄てることが出來ないのである。彼等は、要するに、欺かれて居る愉快の爲めに拂うて居るのである。

それにしても、時好といふものは近代の欺瞞に於てすら變はらざるを得ぬ。そこで新規な時好は、神智學(セオソフィー)とか何とか色んな名を附けて居るえたいの知れぬ物――古昔の狐狗狸さん說を亞細亞の神祕說で維持しようとする企て――である。殆ど外國郵便船の着く度毎に、摩訶都摩(マハトマ)と示顯に――マクス・ミユレル教授(この人は知つて居られる筈である)がそんなものは決して在りはしなかつたと斷言して居る、彼(あ)の深密佛教に――就いて、且つまた、偉大なる判斷力と尋常ならざる多量の常識とを具へてゐたと世界の者が前に考へてゐた懷疑論者が改宗した事に就いて、幾多の粹狂な記事を載せて居る新聞が我々の手へ入る。ところて、オルコツトやブラヴツキのやうな人達が、スペンサーやハツクスリのやうな人達よりも、多數の讀者を有つて居るといふ事は、現代の教育を說明する傷ましい事實である。

しかもその迷妄の全部は、最も下等な唯物論に――この世界をば近代科學の教へと全然反對した物に考へる觀念に――賴つて居るのである　超自然的示顯を求めるこの渇望の多くは、萬物の自然の理法について極めて卑俗な誤解を抱いて居るが爲めで――物質をば物自體だと思ひ、尋常な物體のやうに、視とか聽とか觸とかの感覺に影響を與へ得る超自然な物が存在して居ると思うて居るが爲めである。宇宙に對して正當な觀念を少し有つてさへ居れば、そんな迷妄は決して存在し得る譯のものではないのである。現象は實在して居

るといふ事は、靈についてのどんな信仰、どんな夢想よりも、無限にもつと驚く可き又もつと恐るべき一個の事實である。我々がその中に在つて生きて居る此の世界は、それ自ら、どんな神智論者が知らんと欲し得るものよりも、もつと驚嘆すべき一個の示顯である。最も堅固な觀を呈して居る物も――最も重い金屬も――原子の結合であつて、その原子その物は、我々の今の知識では、まだ發見することの出來ないもので、何等物質的存在を有たぬもので、ただ力の中心として考へられ得るだけである。そして力とは何か、それは我々の知つてゐないものであり、また知り得ないものである。物質は、科學的分析の手が觸れると、全く消えて存在しなくなる。そしてバークレーの假說は最早、嘲笑は出來ないのである。我々がその上を歩いて居る地球――光りを與へ、また影を投ずる太陽――永久に廻轉して居る月――これ等の物は相對的意義に於てのみ事實である。――その究極の本性に於ては、我々の知り得る限りに於ては、只だしか見ゆるものに過ぎない。要するに、科學の最も深い研究は、物質的宇宙なる物は存在しないと宣言する哲學の最も深い研究と一致して居る。ただ現象だけが人間の意識に存在して居るのであつて、その現象を起こし或は人間の五感の背後に存して居る物の本性に就いては、全然何も知られてゐない或は知ることが出來ないのである。堅實な一個の實在の上を動いて居る堅實な實在だと自分共を嘗て

は思うてゐた我々は——今は、より大なる知識の爲めに引下ろされて、一個の宇宙に居る、蜃氣樓のやうに非實在な、魂やうなものになつて居るのである。これはただ單に佛教の教てはない。これは、宇宙(コスモス)を一つの夢として視る東洋の哲理と合致して居る西洋の科學である。だから、その研究に依つて初めてその偉大な結論が全體理解が出來るそんな研究の過程を經て、そして上述の知識に到達した人達に取つては、狐狗狸さんも『靈の遣はしめ』も、人間の愚の示顯としてのほか、何等の興味も有ち得ないものである。そんな知識に到達した人達は、最も平凡な科學的事實の下に、あらゆる無限に到達する形而上學的事實が擴がつて居る、事を知つて居る。そして彼等は、意識の實在は、妙法蓮華經のあの華麗な變幻光景(ファンタスマゴリ)よりももつと不可思議な神祕である、事を知つて居る。かういふ示顯の光明に照らすと、近代の心靈論なるものは、野蠻人の原始的な信仰と同水平のものに沈んでしまふのである。

男女同等の問題

一八九四年十一月十九日月曜日

本紙別欄に、兩性同等といふ問題を一部分取扱うて居る、或る通信員の通信があるであらう。それは同等なことを許容しようと欲して居るので、その提言は我が輩に強ひて二三の評言を爲さしめるのである。

『女で天才者であつたものは一人も無い。女の天才者は總て男である』と、ジョージ・サンが述べたといふことである。この言葉は、絶對的な眞理ではないけれども、一般的な眞理に觸れて居るやうに思はれる。眞に利發な女は、その眞に最高の心的能力を十分に發揮させるには、多數の場合、その生來の運命を犧牲に供さなければならぬ。單獨の一個人としては、或る場合には最も利發な男と競爭が出來るかも知れぬ。妻として母としては、人生の競走に餘りに多くハンデキャップを附けられて居る。固よりの事、偉大な支配者で

あつたまた、偉大な藝術家てあつた女が居ることを認めることは、また、過去に於てよりよき教育的便宜を得てゐたならば、その完全な同等の主張を是認すべきより大なる證據を世界に對して女が與へたかも知れぬといふ確信を述べることは、殆ど必要のない事である。今日は、女が數學者として名聲を博しつつあること、また醫師として法律家として或は相場師としてすら成功しつつあること、を我々は知つて居る。教育方法に徐々たるしかし着實なる改善を以てすれば、彼等には以前には閉ぢられてゐた人生の多くの道に於て、より輝かしい、そしてより數多き月桂冠を彼等が贏ち得るであらう、ことには些の疑ひもない。がしかし、彼等が未來に於て若しかしたなら男と力に於て同等となりはしないかといふ問題は、これは全く別な問題である。肉體的開發に依つて、バルワー・リツトンの『未來の人種』に描かれてゐるやうに、男よりも優さつた者となると假定しても、彼の尋常普通な『ガイ』の判斷力が一社會の男性の年長者の判斷力を抑へつけるものとは我々は決して思ふことが出來ぬ。幾年代が經過して後、合理的に期待の出來る事は、男が全然有つてゐない高等な特殊な能力を女が發達さすであらう、といふ事である。今や既に、女は或る特殊な優越な性質を有つて居ることを認められて居る。女の――古昔のスカンディナギアでは神からの賜物だと考へられてゐた――驚くべき直覺力は、進化して極めて驚くべき豫知の

力となるかも知れぬ。そして、女の魂を深く洞察したことのある男は、女には或る幾つかの能力があつて、その能力の結果の驚嘆すべきことは分かつて居るけれども、それがどんなものかはいつまでも神祕でなければならぬ、といふことを認めずには居れないのである。その上にまた、審美的能力が――藝術に於ける、卽ち繪畫に、彫刻に、詩に、（女には決して音樂的天才を開發が出來ないことを證明しようと力めた、或る亞米利加の婦人が最近ものした巧妙な論文があるに拘らず）音樂に於ける、感情の表現が――未來に於ていつかは頗る高度に分化して來ることはありさうなこと、と我々は想ふ。恐らくは最高級のあらゆる可能力（ポテンシアリテー）が女に潜在して居る、といふことを否定するのは輕率といつてよからう。がしかし、その可能力の未來の活動發達が、それが男に在つて發達する程度に比較さるゝほどの程度に及ぶことが、ありさうだと論ずるのは、それは生物學の最も深奥な法則を全く知らぬことを示すものである。

　兩性の主要な相違は、少しも遺傳し來たつた力の本質的相違に依るのではなくて、機能の相違に依るのである。女一人一人の祖先には、男一人一人の祖先に存すると同じ數の男性的要素があつて、兩性各ゝの遺傳されたあらゆる性癖と能力とを具へて居る。が、性の發展には生理的消費は非常に異つて居る。生物學者が個體主義と創生との反抗と呼んで居

るものがある。生を與へることと生を維持することとの機能、母たることとの機能は人間の他の如何なる機能よりも無限にもつと消費の多いものである。そしてそれは生活力の資源に對して出來る限りの最も重い涸渇といふことを意味して居る。そしてあらゆる理知的展開は、肉體的に言つて、個體の有り餘つて居る生活力からして消費の極めて多い神經機械を造り上げる結果であるから、女が人生のあらゆる道に於て男と同等になるといふことは、男性の努力に遙かに勝さるその努力を來たすことになる、といふ事實は明々白々てある。實際、この位までにすらも女が男にあんなに近く近寄ることが出來て居る事は、過去に於て女の心的努力が、如實にてはないけれど比較的に、男の心的努力よりも大きなものであつたといふ事實の、遠くからの結果なのてある。未來に於て女の少數者だけが母となるやうな世界を想像することが出來るなら、科學の事實が敎へる可能事とは異つた可能事を豫測することが出來るかも知れない。しかしさうてはないのだから、女がその生來の運命を果たす間だけは、丁度その間だけは、女は理知生活の最も高い部門に於てまた、人間性のより深いより大きな諸能力に於て、依然として男よりも劣つて居なければならぬ、と我々は主張せざるを得ぬ。稀有の例外はあるかも知れないが、この一般法則を動かすほどのものてはない。

裸體畫像に對する十字軍

一八九四年十一月二十二日木曜日

倫敦の所謂『純潔黨』が博した一時の勝利は、英吉利の社會は他の總ての文明社會の如くに合理論の方向に徐々にまた著實に動いて居ると思ひ、またその進歩はありとあらゆる方面に於て――教會主義の反對を買ふに相違ない方面に於てすらも――美的情操を修養することに依つて大いに助けられるであらうと思つて居る人達の、確信を少しも亂す譯のものではない。美感は文明に最高の價値を有つものである。一定量の尋常な健全な肉感主義すら如何なる文明にも必要なものである。そして歐羅巴の歷史上、その兩者の發達は利他主義の發達と殘忍性の減少とに併立し來たつて居る。肉感主義に接近して居る一切の物に對しての、從つて又最も高等な藝術たるものの頗る大なる部分に對しての反對を、――その祈誓の爲めに俗人の快樂に與かることを禁ぜられて居り、そして人體を下卑たものと思

ひ、美を眺めるのを惡魔の誘惑と思つてゐた禁慾主義の一時代の精神を緩和された程度に於て今なほ代表して居る――彼の僧侶共に期待しなければならぬことは、これはずつと前に我々よりももつと賢明な人が指摘したやうに、避け難いことである。しかし公平無私な思想家は、そんな反對がいつも不必要な物であつた、と想像してはならぬ。それはこれまで健全な感化力を有つて居る。肉慾主義の方面に於ける變化はどんな變化も、急に成し遂げてはならなかつたのは、近代の文明にとつて結構なことであつた。審美能力を、それによつて生ずる利他主義と共に、藝術的快樂の障壁全部を取除いてしまふより前に、十分に進歩さすといふことは、極めて肝要なことであつた。猫かぶりや僞善者は常に必らずしも全然誤つてはゐなかつた。また彼等を支持した觀念も全然誤つてゐるのではなかつた。一つ時は眞實であつた道德的危險に對しての本能的恐怖心があつたのである。現今の清教徒的運動についての危險すら謬つた動機ではないのである。それは、不合理な方策がかへつて自己の目的とする物を挫いて、それ　防がうと志して居るその弊害を惹起するかも知れない、といふのである。例へば、英吉利の王政復古の初期に於ける、劇場と時好道德とのあの嫌惡すべき腐敗は、公衆娯樂の廢止や、劇場の閉鎖や、私生活に對してそのあらゆる横暴を具へた禁慾主義の負荷の、清教徒の法外な處置に確に基づいて居つた。その反動は、

英國史に空前な最下等の道德狀態を——それを考察して、英國人は美に對し或は人類に對してどういふ風にして不道德になれるか分からなかつたのだ、といふチェーヌの鋭い言葉を誘ふに至つたらしく思はれる一時代を——來たらしめた。ところて、英吉利に於ける現今の純潔黨の了簡違ひは、丁度チャールス二世の清教徒の了簡違ひと同じてある、——それに過度に耽つたならば或は惡結果を齎すかも分からないといつた性質の民衆娛樂に反對して過大な手段を彼等は執つて居るのである。だから、その惡結果その物が却つて當の反對の爲めに惹起されさうだといふ危險がある。王政復古が示した敎訓が忘れられてしまつて居るやうてある。大聲疾呼して非難された當の物は頗る罪のない物てあり、公のものてあつた。その爲めに或は生ずるてあらうと述べられた——決して罪のないものてはない——結果は、他から邪魔される心配は大して要らずに、私かにそれに耽ることの出來るものてある。そして、公に審美的な物が、それを非難して祕密裡、暗黑裡へ追ひやると——人間の一情操として尋常に表現することを拒むといふと——墮落して淫猥なものとなり、邪惡なものとなるかも知れぬ、——といふ事が十字軍諸士の念頭に浮かばなかつたやうに察しられる。その人達の一時の勝利は、十字軍に發生した病氣の豫防若しくは處理に關して、學問と常識とが主張した手段に反對して博し得た彼の勝利の結果に似た結果を我々に見せ

るとてあらう。彼等が非議する展覽會の肩を持つ一般民衆の傾向は、嘗てエンパイア・ミュージック・ホールの場合に取つた處置のやうな處置で、一つ時だけは抑制が出來よう。そして最後には、抑壓に打勝つて、眞の王政復古の調子で展覽反抗をやつて純潔黨に復讐するかも知れない。

老貴婦人が、ジョンスン博士に向つて『あの彫像は非常に淫らだとあなたは考へませんか』と言つた。彼の無作法者は『いゝえ、淫らではありません。あなたの心が淫らなのです』と返事した。英國の大衆の常識は、今その純潔黨に向つて、かの偉大な善良なサミュエルが爲した竹篦返しを以て答へて居る。當の問題は裸體に就いてであつた、――尤もその女は固よりの事肉色の緊衣(タイツ)を着て居つた、――そして一個の作物中の物像の如く、ジエロームやクーマンスの繪よりももつと『徳』に悖つた處は少しも見せてはゐなかつたのである。唐金に鑄たのでは、大理石に彫つたのでは、畫布の上に描いたのでは、賞歎するやうにと我々が敎へられて居るものを、それを肉體に於てなぜ賞歎してはならないか、といふやうなそんな問題に對して、妥當な答へは一つも與へられてゐない。そしてジョンスン博士以來、敎育ある人士で、彼が例のぞんざいに怒つたあの問ひを敢て訊ねようとした者は多くはない。その外に、裸體は上品といふことと反對なものだといふ我々の觀念に、我

我は非道く自家憧着を有つて居る。藝術について少しく知る處ある人は誰れしも、時好の舞踏會での裸體が暗示するところのものは、イヴの衣裳（眞の裸體）が一〇〇〇のうち九九の場合にあり得るよりも、肉感的表示として一層有效であること、をまた知つて居る。羅馬人及び希臘人、幷びにその前の埃及人は、實體を一部分隱蔽することは、生きて居る實體そのものに優さることを認めた。それで彼等の踊り子は普通半透明の衣服を着けた。我々西洋の舞妓（ダンシューズ）は、赤裸々が起こすよりももつと肉慾を唆るやうな錯覺を起こす衣裳を着る。だから純潔黨の人はもつと多くの理由を以て、その方をエンパイア・ミュージック・ホールでの見世物よりも餘計に罵つていいのである。眞の裸體には――現に生きて居る野蠻人の裸體には、――肉感的な處は少しもない。不快の念を催さす處は少しも無い。が、この事は、熱帶地方に餘程長く住んでゐた人達だけが個人的經驗で知つて居る事實である。赤道眞上の太陽に照らされて居る健康な活潑な人間の裸體は、何等の肉感的觀念を惹起こしはしない。――だが、被蔽を除くことが思はせるあの暗示に對しては――西洋の流行社會が許容して居る、あの目論見あつての半露出と肉感的姿勢とが傳へる、淫らになりさうな行爲を思はせるものに對しては――さうは言ふことが出來ない。

裸體に反對する西洋の敵意には二つの動機がある。――一つは宗教上のもので且つまた

嚴肅なものである。他の一つはただ外觀だけ傳統的なものであるが、眞實は本能といつたやうなものに根柢を有つて居るものである。前者を詳しく語ることは不必要であらう――清教徒が熊の犬攻めを（『それが熊に苦痛を與へるからといふのではなく、見物人に愉快を與へるからといふ理由で』）禁じたと丁度同じ理由で一切の唯美主義を禁じようと欲する、あの方面に關しては述べる要があらうか。そして他の方の反對は、これは人工的理想の創製である。社會的なと呼ばれて居る因襲――時好――流行――高價な衣裳の錯覺――寶石の閃き――どんなものでも美に近いものを一層高める無數の工夫――樣子の優雅さを增す訓練――優美（これは眞實の自然に在つては、力の最高の節約を現はして居るあの最も完全な肉體的平衡よりしてのみ出現し得るものである）の絶好な模倣の訓練――實存はしない四肢と胴體との線をば衣服の下にほのめかさうとする無數の發明――如上のもの幷びに他の一百の考案と技術とが、その一切のものが迷妄たる仙鄕のやうなものを造り出した。その迷妄境は、普通の心意には、天國的な物に見え――仙鄕の雰圍氣を漂はす。社會では、アミエルは言ふ『人々は恰も甘露を食として生きてでも居るやう、そして尊いことのほかどんな利害にも心を勞することがないやう、振舞ふものと期待されて居る。……現實は悉く野鄙だとして禁制される。……あらゆる激烈なことも、自然界の如何なる叫び

聲も、あらゆる不謹愼な馴れ馴れしさも、あらゆる眞の苦しみも、情熱のどんな純粹の氣合ひも、この環境（ミリユー）にあつては人を驚かす物であり、人を不快ならしめるものであつて、一般の同意が築き上げた靈雲の宮居を滅ぼすものである』ところが、凡俗人の傳統的天國での裸體は、固よりのこと餘りに現實に過ぎて居る。それは、自分共は神樣であると信じて居る男女に、やはり自分共は普通の人間と同じ材料で出來て居るのである。血が自分共の血管を流れて居るのでアイコルが流れて居るのではないのである。といふことを憶ひ出さしめる。裸體になつて見ると、その肉體は自分共がこんな風でありたいと思ふやうな姿ではないことが判かる。その肉體は、大多數の場合、純潔な空氣の中で健全な勞働をやつてその身體が力と優美さとを開發し來たつて居る筋骨美はしい勞働者やしなやかな田舍娘とは、十分に比較が出來ないのである。そして凡俗者流でない他の幾多の人の間に於て、衣服に蔽はれてゐる我々は甚だしく美しくはない、といふ確信が募りつつある。例へば、フラワー博士が數年前指摘したやうに、西洋人の足は西洋の履物の爲めに醜くなつて居る。人間の足なるものは、その自然の恰好では甚だ美はしい物であるけれども、浴場で今日は人目に見えぬやう我々の足を隱さなければならぬ。コルセットの爲めに骨骼が不恰好になつたことは、それを隱すのが結構な他の災害を起こして居る。完全な身體は萬物のうちで

一番美しい物であると思はれて居た、且つまた世界が今猶ほ賞讃するその彫像で以てそれを證明した、彼の希臘世界と我々とはどんなに隔たつて居ることであらう！でも、人體美は今なほ存して居る。そしてそれを隱してゐなければならぬといふ理由としては、清教主義が『流行と不具』との助けを藉りて主張して居る理由外に、何等より堅實な理由は他に無いのである。思ふに、裸體美を至當に鑑賞することは、肉體の練磨向上に、學校で敎はるよりももつと善い敎訓を民衆に敎へる上に於て必要である、といふのは優しさも美はしさも健康が所有するものであつて、虛弱と奢侈とが所有するものではないからである。將來に於ける人間の進歩は、心の修養と共に身體の修養を要求して居る、――肉體的天稟はこれを重んじ、これを賞讃し、これを世話しなければならぬことを要求して居る。完全な人間を作成するに必要な最高の自重自尊は、己が身體を不純なものとして賤しみ、蜉蝣的な迷妄を永久に續く現實よりも好しとする、者が有つて居る譯はないのである。

新しい『禁止書目』

一八九四年十一月二十三日金曜日

公の慈善事業及び宗教上の企畫に對する莫大な金額のほかに、公共圖書館を創立する爲めに二百萬弗を殘した、最近物故した亞米利加の一百萬長者の遺言狀は、次記の如き條項を含んで居るので特に注目に値する。

『自分はその建物が趣味のあるもので、鞏固なもので、そして耐火性のものであるやう、且つまた未來永世に通じてその圖書館の必要品を備へそれを維持する爲め、十分の資金をその建築費よりも多く取除いて置くやう、希望する。自分はその書籍と定期刊行物とが、一般民衆に健全な道德的弁びに基督教的感念を起こさしめまた、それを維持せしめる目的を以て選擇さるゝやう、且つまたあらゆる卑猥なるもの弁びに不道德なるものを排除せらるゝやう、希望する。かう言うても讃美歌集と說教集とのほか何も置いてはならぬ、とい

ふ積りではない。汚ならしい佛蘭西の小説や、あらゆる懷疑的なやくざ物、その道德的調子がいかがはしい作品、さういつた物は決してこの圖書館に置いてはならぬ、といふ積りである。自分はその雰圍氣が基督教的純潔なものであり、その目的が品性を作り上げるにある、ことを欲する。そして自分は、自分が名ざした友人達が如上の委曲に就いての自分の志望を果たさるゝ、ことと安堵して居る』

上記の文は、――ジョン・クレラーの意見の特癖を具體化して居るからでなく、公共圖書館は總て本質に於て『基督教的』で（といふことは、物事に就いての彼等の意見では、本質に於て宗派的で）なければならぬと思ひ、また多數の公共圖書館は非常に廓清の要があると思つて居る、修養の乏しい大部類の人の一般感情を表明して居るから――注目に値するのである。實際、クレラーの遺言が定めた主義に從つて一圖書館を設立するといふことは、とりもなほさず、州立の――もつと自由な方針で管理されて居る――自由圖書館の性質に對する抗議となることである。あらゆる文明國に於けるあらゆる公共圖書館は、合理的に『猥褻な文學』と呼ぶことの出來るものを除くやうに、處理して居ると想像されて居る。しかしながら、その引いてある限界線は確にクレラー氏が引かんと欲する處に引いてありはしない。基督教の僧侶がその線を引けば、文學修養に必要缺くべからざる――希

朧幷びに拉甸の原文のものはさうでないにしても、そのまだ削除してない飜譯物も含めて――古典著作物の非常に多數のものが、正統の『禁止書目』(インデックス・エキスパーゲートリウス)の上に載つて居る、ことを我我は見出すであらう。それには、固よりのこと、單に『汚ならしい佛蘭西の小說』が載つて居る計りではない、ディデロー、ヺルテール、百科辭典著者の著作――モンテーヌとルーソーの著作、――多分モンテスキューの、そして確にブラントームの著作――一點の疑ひもなく文藝復古七詩人とラベレーとの著作――ギロンのもの、ブロヴンサル詩人のもの、――十八世紀と十三世紀の間の佛蘭西の散文或は詩歌の最善な作物殆ど全部――が載つて居るであらう。近代の佛蘭西作家についていへば、浪漫作家は確に削除せらるるであらう、或は高だか少數の選擇で代表さるるであらう。そしてフローベル、ドーデー、ブルジエ、モーパッサン其の他を含んで居る一團の後期の作品は嚴然禁止さるゝであらう。これを要するに、佛蘭西の文學史の知識は少しも許されないであらう。獨逸の方面では、ゲーテを探してもないであらうし、ハイネも見つからぬであらう。削除された英文學の比例は、この單簡な論文でその範圍を暗示することさへ不可能なほど、廣大なものであらう。餘程奇妙なことには、目今フィールディングとスモレットとを公共圖書館から排除しようとする努力がある。そしてこの事實からして、我々の想像し得る排除廓淸の一般的性質はこれを

推測することが出來よう。

クレラーの遺言にある所謂『懷疑的なやくざ物』の部門へやつて來ると、最近五十年間の重要な科學的著述の殆ど全部がその項目中に含まれるやうにされる、ことは殆ど疑ひ得ないことである。といふのは、一八五〇年以來書かれた、眞に重味のある科學的著述で、貝殼と堅い正統思想と大か小か衝突してゐないものは一つも無いからである。そして、スペンサーの哲學の如き、人智の最大な勝利を示すもので、確に禁止されるものが少しあるであらう。それからまた、多分、ガルトン、ハックスリ、クリフオード、テインダル、モーズリ、ダーキン、ラボック、タイロア、その他非常に多くの大家のものも、探してそれにはないであらう。勿論その主管者の正教思想の硬軟如何に賴るであらう。舊派の强硬な教徒には、エマスンは危險と――カーライルは不法と――ラスキンは冒瀆と――フイスクは嫌忌すべきものと――考へられることであらう。哲學の部門は、少しでも價値のある十九世紀の思想は一つもないことであらう、そして藝術の部門は、希臘、羅馬、或は埃及に關して價値のあるものは何も含まぬことであらう。

我々は、全く宗派的な目的を以て創立した圖書館は、二百萬弗の費用をかけても、文學、藝術、哲學或は科學の如何なる部門にも何等公正な知識を人に得さしめ得ない、といふこ

とを示す爲めに、この問題に觸はつただけてある。そんな圖書館は、苟も存在せんとには、主として敎訓的なものでなければなるまい。ところが敎訓的な文學といふものは大部分興味のあるものではない——また、單に道德的目的て書いた書物は、讀むに堪へぬのが多い。例外はあるかも知れぬ。しかしこの規則は爭ふべからざるものである。究極、文學社會の外では、文學と宗敎とは全く別なものである事、——古昔は宗敎と結合してゐた藝術は宗敎とは離れたものになつたといふ事、——嚴正科學に基礎を有つて居る近代哲學は神學とは獨立して考へなければならぬ事、を認めることになるであらう。一方てはまた、單に舊式な淸敎徒的觀念を維持せんとして圖書館を創立しようとする努力はどんな努力も比較的失敗たらざるを得ない。公衆は知的娛樂と知的修養とを欲して居る。そしてその公衆は兩者を、日曜學校の圖書館てない圖書館て求めるてあらう。造らうといふその圖書館に就いて何事かを敢て豫言せんとするならば、その開館後多年ならずして、その管理者はクレラー氏が暗示した主義とは頗る異つた主義て、その圖書館を處理して行かなければならぬやうにならう、といふことてある。

公共圖書館からして、似非謹直が命ずるところのものに一致しない一切の文學を排除しようといふことに與かつて居る人達の感情は、嘗て我々の聞いて居る處て、或る信心深い

人が口にした言葉で例證されたのであつた。その人は、自分でも可也優れた音樂家であつたが、世界最大の音樂家の一人が歌をうたつたのを聽いてから、『あの女の心があの聲同樣に美しくないとは、なんといふ殘念なことであらう』と叫んだ。（その女は少し前につまらぬ夫と離婚したのであつた）宗教的訓練の下に出來たものでもなく、その爲めに動かされたものでもない物に、その有用なることを或はその美なることを許容するのを斯くいとふことが、その訓練自らの目的を壞はしてしまふのである。あらゆる禮節如何に拘らず、世間の人は其の美しい歌ひ手或は踊り子の處へ走つてその歌を聽き、その踊りを賞めて、その藝術家の私生活が傳統拘泥者に賞讚されようが非難されようが鐚一文ほども氣に掛けはしない。そして公衆は、宗教的でない書物を引續き買うて右に劣らず殆ど何等の良心の呵責を覺えはしない。役者は神聖な地處では埋めて貰へない時代が嘗ては、——正統思想でない書物を書いた作家は生き埋めにされる危險を冒した時代が嘗ては、——在つた。しかしながら近代の文明は、これは間違ひであつた、といふ事を確信するやうになつて居る。今日は、最上階級の藝術家は——役者であらうが、歌ひ手であらうが、繪かきであらうが、彫刻家であらうが、作家であらうが——僧正や牧師よりも遙かに多くの注意を受けて居る。實際、最善の藝術がいつも稍〻瀆神的であり、表現に於て稍〻懷疑的であり、『基督教的

調子』と呼ばれて居るものに稍々反して居る、ことは非常に遺憾に思はれるかも知れない。が、文明の批判はいつも藝術の肩を持つて居る。結論は――心ぐるしいことであるかも知れないが――所謂『基督教的調子』には謬つた處があるといふこと――偏狹な處があるといふこと、あらゆる大藝術の背後には、永遠の眞理存す、といふ現實を見てゐない處がある、といふことである。

　しかし、古昔の精神はまだ死んでゐるどころではない。物故したクレラー氏の寄附金のやうなあんな寄附金で、生き殘るやうにと大いに援助されて居る。自由圖書館の管理が市政の爲め屢々變ずる亞米利加の都市では、この舊精神と新精神との間に面白い爭ひが起こる。或る圖書館管理者の幸にも短かつた管理中、巨大な費用を投じて、その市の爲めに購求した、藝術書の素ばらしく立派な蒐集の殆ど全部が、祕密博物館（ミュゼ・セクレ）といつた取扱ひを受けてゐた、ことを我々は記憶して居る。閲覽者はドレの插繪のある書卷すら――聖書、ダンテ、ミルトン、ラベレー、その他幾十冊も含めて――見ることを許されなかつた。――その理由は、その插繪が『醜汚な物で、青年の道德を墮落せしめる物と思はれた』からであつた。好事家（ディレッタント）が出版したものに收められてゐる、古代の大理石や寶石の美しい彫刻も、――王者の富ほどの費用を以てして遂行された、佛蘭西の埃及考古學者の偉大な著作も、

――部屋から持ち去ることを禁ぜられ、ただ美術の參考の爲め保存してある、他の幾多の書卷も、――閲覽申込者の潔白な意志を保證する文書に認めた命令がなくては、これを見ることが出來なかつた。がしかしこの精神は、ターナーの繪の一つへその松葉杖を突込んだあの狂熱的な倫敦の不具者の精神同樣、もはや許容は出來なからう。公衆は絶えずその精神に反抗する。そして一度一度前よりか損害の少い、非常に注意深い、敗け方をして、その度每に公衆は再び權力を恢復する。これは珍らしいほど眼先きの利かぬ術である。トマス・ペーンの著作が公共圖書館の廻覽書目から削除される度每に、理性の時代は一層多くの讀者と一層多くの購買者とを得る。チャット・アンド・キンダス社がドレの挿繪四百二十五枚附けて出版した、バルザックの『道化物語』に對する僧侶側の告發は、その驚嘆すべき書物の仕合となつた。ヘプタメロンとデカメロンとに對しての十字軍は、その賣り上げを非常に增加した。否、デカメロンの場合には、宗教的批評家の決して期待しなかつた或る結果を齎した。――猥褻な書を――特に注文して白耳義から取寄せた繪を――それに綴り込んだのを私かに賣り出すやうになつたのである。そして――他のいろんな場合は言はずとも――自由公共圖書館に對する十字軍は、その度每、無教育な部類の讀者の注意を呼んで、その人達が前には耳にもしなかつたものであるが、今はみんなが餘りに能く知

つてゐて、その爲め無類の廉價出版が、その新需要に應じて賣り盡くされる程といふ、結果をもまた齎すに至つた。ペトロニアスのやうなあんな古代の作家の飜譯は、俗衆の讀物として分類さるべきものでは確にないのであるが、熱心を穿き違へたが爲めに、衆人の讀物にされてしまつて居る。人間といふものは『禁じられた』果實をいつも追ひ求めるものてある。自分に選擇を委せれば、そんな果實は自分の趣味に合はぬと思ふかも知れない。古代の作物を掲げた彫刻の書物で、その中の裸體の男神女神に線を引いて消したのを男の兒に與へて見給へ。或はジューヴナルかカタラスかの書物で、幾頁か切り取つたのを與へて見給へ。――するとその兒は、前者に猥褻な處を見附け出さうと眞實力めるてあらうし、私かに讀んで見る爲め後者の頁を切り取らぬものを求めようと力めるてあらう。或る書物をそれは邪惡なもので讀むに適しない、と普通の成人に話して見給へ。――するとその男は乾度それを讀んで、恐らくは原著者が思ひもしなかつた意味を、その中に發見するてあらう。どんな方法てても、その人の思想か、感情かを堰き止めて見給へ、その人は丁度、一番惡るい方向さして、その障壁を突破るてあらう。

自分て物事を考へる自由を止めようとする一切の努力の大なる誤りは、人間の本性を誤解して居るのである。品性は合理的な自由の下に在つて、最も善く開發されるものである。

それは、書物一冊熟讀したり、又は人生の暗黑な方面に一時親しんだりした爲めに、全然變へることが出來るほど薄弱なものではない。それを構成するのに數世紀を要した物は、一瞬時の感化で變更され得るものではない。傾向は一時は方面を誤ることがあるかも知れないが、それは祖先傳來の遺傳が指示して呉れる道へ直ぐとまた戻るものである。青年男女總てが、この世界にあり得る惡事を絶對に知ることなくして養育が出來るものなら、結構であらうが、そんな事が不可能な問は、さういふ有り得ることを自由に知るに委せて、それに面と對ふやう訓練しなければならぬ。若しも人類の進歩なるものが、古代の信仰を放棄せざるを得ざらしめる科學を少しも研究しないで成し遂げられ得るものなら、多くの人には氣が安まるかも知れないが、事實は、その心を、その時代の思想に開かない者共は、人生の競爭に於て後へ殘らなければならぬ、といふ事である。

支那に就いてピアスン博士の眞の意見

一八九四年十一月二十四日土曜日

『セント・ジェームス・ガゼット』紙からして昨日の本紙に轉載した頗る注目すべき論文は、今次の戰爭に關して英國の新聞紙にこれまで現はれたもののうちで、最も哲學的なものである。それは、日本が支那を統治するの可能を認め――またその統治の全世界に及ぼす結果を認めて居る。その論文は、『スペクテートル』誌や他の週刊紙が公表した奇妙なそして不合理な論文に比して、支那の傾向についても亦遙かに多くの知識を有つて居ることを示して居る。そしてそれは、日本が一强國として突然に眞に思慮深き人士の心意に映じた非常に突然な重要さを實證して居るものとして、特に注意するに値して居るものである。『小さな日本』が、『亞刺比亞夜話』のアフリートのやうに、雲突く許りに大きくなつて、物凄い影を全世界に投じたのである。そしてあの秀吉の素晴らしい威嚇――『余

は大軍を集め、大明國を征伐して五百餘州の滿天を余が刀の霜に充たさん』――は今や實現されさうどころてはないのてある。

上述の論文には、ピアスン博士の未來の支那統治についての意見に對して、ピアスン博士の著書を讀んてゐない人達に誤解を來たさしめるやうな、曖昧な論及がある。そしてそれに對して評論をして居る批評家のうちで、殆ど一人もその著者の意見を公平に解釋して居るものがない。『國民性』に於て、ピアスン博士は、支那が軍事的强國として西洋文明に恐るべきものとなる可能性がある、と考へてはゐないのてある。博士は、これを以て支那の文明が白色人種に加ふる眞に可能な危險とは信じてゐないのてある。博士はその危險を寧ろ工業的なものと考へて居る。西洋の文明と西洋の工業的方策とを採用するやう强ひられた支那は、生存競爭に於て抵抗しうべからざる競爭者となるてあらう、と思つて居るのてある。しかし博士は、この事に關して、その國民を指しててなく、その人種を指して言うて居るのてある。西洋の一國民が支那を統治しても、少しもその可能性を變ずることはないてあらう。五億の人間を絶滅しなければ、完全に白色人種の未來の安全を保證することは出來なからう、と博士は思うて居る。ところがそんな事は夢想だもされぬことてある。

ところでピアスン博士の最も顯著な意見は、白人が支配すれば、或は英語の意味での開化した法律と命令とを強ひ得る人種が支配すれば、或る種の被征服人民は異常にその數を增すものだ、といふ意見である。博士は、解放後の合衆國に於ける黑人の增加と、和蘭、佛蘭西或は英吉利の支配の下に劣等な種々の人種がその數を增加した事と、を引證して居る。固よりのこと、白人に出會ふと消えて無くなる――北亞米利加の遊牧印度人や太平洋諸島のマオリ人種の如き――人種がある。が、そんな人種よりかより屬畢であつて、生れつきの才能がより優れて居る人種は、消えてなくなりはせずして、生命と財產とを保護する法律が、彼等に提供するところの生活の改善狀態を利用して、却つて非常にその數を增加する。赤色人種は文明に觸れ合うてさへ直ぐ死滅するが、亞非利加の黑人は奴隸制度に堪へて行くことが出來る。マオリ人は生活の爲めに働かなければならぬといふ狀態に陷ると死んでしまふが、カッフィル人は英國の支配の下で增加する。それから、比較的に開化して居る人種の場合では――ヒンドゥー、瓜哇人、錫蘭人の如き場合では――增加は異常なものである。それでは支那に於ける高等文明の結果はどうであらうか。少くとも黃色人種が全世界に瀰蔓することを意味するであらう。といふのは、歐洲諸人種とは異つて、支那人はどんな氣候にも適應することが出來るからである。早既に彼等は、その行くことを

許容されて居る到る處に於て、驚く許りに擴がつて居る。そして熱帶諸國に於て、馬來人を押し退けて生活されなくし得るその能力を示して居る。彼等は商人として西比利亞へ赴き、亞細亞の大平原の寒氣に平氣で堪へて居る。彼等は南亞米利加に群を爲して居り、西印度に於て太平洋諸島に於けるが如くに繁榮して居る。

支那は過去に於てその過剩の人口を、幾千年の間、殆ど規則正しい間隔を置いて、巨大な點では西洋の歷史中如何なる物にも優さる、十四世紀の黑死病の荒廢若しくは十字軍の殺戮にすら優さる、幾多の災禍に依つて、救はれて來て居る。太平叛亂は近代に於て二千萬許りの人命を失はしたといふことである。そして西部に於ける囘々教徒の小謀叛は二百五十萬の人間の頭を斬つて片づけられたといふことである。現代でのそんな事件は、支那では太古からしてその匹儔を有つてゐたものである。だが惡疫、幾州の人民を絕やす飢饉、幾百萬の生命を掃ひ去る洪水は、支那の人口に對するもつと頻繁な、もつと有效な抑制であつた。そこで、支那に對して科學的文明を强ひた結果を、――巧妙な土木に依つて河川が整理せられ、實際の山林經營に依つて洪水が減少し、都市に有效な衞生法が行はれ傳染を防ぐに利用しうべきあらゆる防禦的醫法が用ひられて流行病が無くなり、印度に於けるが如く迅速な有效な交通制度の助けを藉りて飢饉に對する防備が出來、强硬な法律で嬰兒

殺害が禁止された、その結果を——想像して見よ。比較的に短い年代のうちに人口抑制のあらゆる自然的不自然的な拘束が斯くして除かれれば、支那の人口豐富は實際總てのこと、歐羅巴に於てすら、白色人種の生存に威嚇となるかも計られない。それは歐洲人種を支配する、卽ちその上に立つて生きる、といふ問題ではなくして、その下になつて生きるといふ問題であらう。そして支那の智慧が、支那の眞面目が、支那の忍耐が、支那の機械的熟練が、どんなに容易に英吉利或は亞米利加の最善の老練な勞働者をすら押し退け出し得るか、それは濠洲とカリフォルニアとが證明して居る。日本が支那を統治するのが、露西亞或は他の或る强國が統治するよりも、西洋にとつて一層大なる危險を意味して居るといふことに就いては、『セント・ジエームス・ガゼット』紙が提出して居る意見を維持するに足る何等立派な理由を提出することが出來ない、と我々は堅く信じて居る。日本は、無論のこと、その天皇の一系が無限にまた普通に統治を擴げ行く手段として支那を使用するといふやうな事件を夢想して居るかも分からない。しかし、露西亞がさういふ風に支那を使用しようとして居ることは、これは何等の疑ひの有り得ない事である、想像し得られる限りの最も突飛な、最も奇妙な可能事を認容しても、支那に於ける日本天皇の主權は、ツアーの主權ほどに恐るべきものとは我々は考へ得ないのである。

佛教にとつての新機會

一八九四年十一月二十六日月曜日

日本の支那征服、及び日本がそれに依つて諸國民の間に得るに相違ない新地位、とからして出來しさうな他の結果のうちに、佛教の國家的復活が[illegible]望の最も少きものではない、とのやうに我々には思はれる。一八七一年に佛教の國教たることを廢する際、政府が該の宗教の廢止を本氣に考へてゐた、と想像するのは全く大誤解であつたことだらう。國教たるを廢した政策の下に存する總ての動機を知つて居る風を我々はすることは出來ないが、佛教諸宗派が日本の歷史中實に危急を極めて居た時期に際して政府に反對して當時使用することが出來たやうな力を弱める必要が、その主たる理由であつたことは我々は十分に想像が出來る。佛教は中世時代の加持力主義の如くに、昔は日本帝國の青年の教育に携はつてゐたのであつた。固よりのこと、いつも宗教に關係のない學校も幾つか在つた。が、德

川が權力を繼承する前は、殆ど總ての教育は佛徒のものであつたし、その後も、その大部分は――普通の人民の教育は――なほ依然として佛徒のものであつた。西洋の教育方法を輸入することは、公立諸學校を俗化することになるのであつた。それでこれに對して佛教の力は强固な反對を提出するかも知れなかつた。他の、しかももつと眞面目な、反對が、國家再建の政府の努力の成功になほ一層致命的なくらゐな事柄に對して、佛教の方から豫期されるかも知れなかつたのである。そしてその上に、言ふまでもなく、公共の出費をば、それを減じて然るべき場合は何處にも、國家的に節約する必要があつたのである。

しかし、政府が望んだ改造が希望してゐた成功に優した成功を以て成し遂げられたので、政府は佛教に對して同一の態度を維持する重大な理由をば恐らくは最早、何も有たぬのである。通俗な宗教として、佛教は、宗教教育の特殊の方面に於て、またサンスクリット或は支那の言語學的並びに哲學的研究の特殊の範圍に於て、健全な影響を與へうるやうそれを助け得る合理的な援助を少くとも必要として居る。日本の最も信心深い佛教徒は、學問のある僧侶が比較的に缺乏して居る、そして大多數の者が比較的に無學である、ことを認めてこれを歎いて居る。尤も、今なほ僧侶のうちに立派な學者が少しは居るには居る、が、それは非常な費用をかけて外國て教育されたもので、その特殊な研究は、寺院へよりか寧

ろ研究に――說教師及び司祭者たらんよりは寧ろ著作家及び編制者たるに――適せしめて居る。我々は思ふに、より富裕な宗派の一二のものだけが、眞に感心の出來る學校を――京都の眞宗大學のやうなのを――建てて居る。大多數の宗派は餘りに貧乏でそんな學校を維持することが出來ない。それからまた、僧侶內の腐敗といふことが大いに云々されて居る――そのうちの或る物は惡意からのであるが、しかしそのうち隨分と事實に――思ふに、それは無學にも基づくのであるが同じくまた全くの困窮にも基づく事實に――根柢を有つて居るものがあるに相違ない。數箇月內のことであるが、或る佛教僧侶が食物の缺乏に依る長の苦しみの爲めに自殺をした傷ましい實例があつた。日本では生命を支へて行くのには費用は多くは要しない。そして僧侶の食物は、大多數の宗派の場合、その品質は普通人のものよりか廉いものに制限されて居る。――僧侶が食ふほどの物が貰へぬといへば、その管區の狀態は驚くばかりに不幸なものに相違ない。にも拘らず、それほどの貧困は有り得るのであり、屢々想像されて居るほどそれ稀珍らしいものでも或は無いのである。日本の多くの地方に於ける僧侶の貧困は想像を絕する。より智慧のあるもので、その本職でない手段で生命を支へて行くことの出來る者が多くあるが、そんな人のうちに在つてすら、幾月のあひだ金の顏を見ない者が多い。特殊な法要の禮金或はその教區の納入すべきもの

を、米や粟や野菜物で拂ふ。そして他の必要物は、哀れな百姓の慈善で、不足勝ちに且つ長い間を置いてたまたま、供給せられる。寺院は修繕の金が無いので消滅する。そして無數の貴重品が――最善な時代の藝術品が――飢饉を防ぐ爲めに僅許りの金額で賣られて居る。金持ちの僧侶を贅澤だとか、傲慢だとか、狹量だとか言つて責めるのは甚だ結構であるが、餓死せんとして居る僧侶を無學だとか、不德だとか言つて責めるのは、さう結構なことではない。どんな階級のものにも、缺乏と飢餓との狀態を造つて見よ。不德と無學とは勿論の事として、それに續いて生じ來たるものである。

日本の思想家で、日本は『全然何等の宗教無くして遣つて行ける』といふその信念を公然表明したものが少くない、といふ事は寧ろ不思議な事實である。この信念が實際に出版されて世に出て居る。これは社會學的事實の驚く可き無智を示して居るものである。我々は、倫理的發達の未來の或る時期に於て、現今存在して居るどんな人類よりかも優さつて居る人類が、現存のあらゆる形式や教義を用ひないで濟ますことが出來るやうになるかも知れぬ、と思つて居る人達の意見に反對する積りではない。そんな假定は適法な學說の領域に屬するものである。我々が一個の科學的事實として知つて居る事は、民衆的宗教はどんな宗教でも、それを奉じて居る人種の情緒的生活とは如何にも密接な關係を有つて居る

もので、賢明な政府ならばその宗教が腐敗墮落の狀態に在るのを放擲して置く事は出來ないほどのものであるといふ事である。民衆的宗教なるものは一人種の倫理的經驗を示して居るものである。だからその有用なることを否定するといふことは、社會に對しての人間の良心の價値を否定するといふことになる。民衆的宗教といふものは、社會發展の或る時期に於ては、貧乏な者と無智な者とが——あらゆる事情の下に在つていつまでも一國民の大部分を構成せざるを得ない貧乏な者と無智な者とが——それに依つて相互間の義務に就いて單純な知識を幾らか容易に得ることの出來る、且つまた、人生の殘酷な謎に對して幾分の慰安を得ることの出來る、人爲の手段となつて居るものである。社會發展のそんな時期に於て、宗教に、威嚴をではなくとも、責任を維持することを得さすほどの輔助を——それに、仁慈的な博愛的な感化の力を施すことを得さすほどの輔助を——宗教に與へることは、殆ど國家的義務のやうに我々には考へられる。だが此の事は、宗教の本來の範圍を越えて居る事柄に干渉したり、或は思想若しくは行爲の道德的自由を支配したり、する力をそれに假す、といふ事とは頗る異つた事柄である。

この理由に依つて、政府たるものは板挾みといつたやうなものを目前に有つて居る。我我は、佛敎を輔助しようといふ方に肩を持つ强烈な感情が或る方面にある、と思つて居る。

帝國陸軍を構成して居る兵卒の大部分は、その出發の前夜、主要な衛戍地の練兵場で行はれた美しい儀式で、嚴かに阿彌陀に献身したのであつた。陸軍の將軍のうちには佛教學者がある。佛教にして神道たるこの軍隊は、日本を諸國民中の最高な地位へ、擡げつつある。そして近代の歴史に於て初めて、最高な科學的文明を採用して居る一國民は佛教徒にして兼ねて神道家たるものである。であるからして、佛教は非常に進歩した文明の宗教として普く承認されるに相違ない。西洋の學者は、その信仰が哲學的に優越なものである事、またそれが科學の最も深奥な教へと調和し得るものである事、を長く認め來たつて居る。だが、外國に於ける俗衆の意見は必然的に——西洋が征服した人種が、それを奉じてゐるといふが主もな理由で——それを劣等人種の信仰だと思つてゐた。俗衆の意見は日本の成功に依つて變ずるであらう。佛教は西洋で、これまで一度も見なかつた尊敬を——だが、それへは西洋の學者が道を十分に準備した尊敬を——博することとであらう。

近代戰爭に於ける勇氣

一八九四年十一月二十七日火曜日

火薬の輸入と共に終りを告げた騎士道時代のころ、騎士(シユヴァリエ)バヤードが有つてゐたとしてある性質に就いての古昔の話は、『恐怖を有たずまた非難を有たぬ』この騎士(ナイト)の死後各〻の世紀に於て反駁され來たつて居る許りではない、戰爭のあらゆる未來の歴史を通じて層一層反證を擧げられさうである。個人の勇氣が、槍と金屬の鎧との時代同樣、完成された飛び道具の今の時代に於ても、それを示す大なる機會を有つて居る許りではない、――中世の武士に對するよりも近代の軍人に對して、一層高級な勇氣が實際に必要とされて居る。尤も、ただの肉身の力が戰闘に於て多大の價値を有つてゐた時代は――ノルマンディーのヰリアムがこの絕大な腕力を以てしてセンラックの防壁を壞はした時代、英國の或る王が包圍された或る町の城壁の前を上手(かみ)下手(しも)へと馬に乘つて、戰はん者は出て來たれと挑んだ

けれども、誰れも敢て出て來なかつたといふ時代は――過ぎ去つて居る。それどころか實際、肉身の優越といふ天賦は、最上の人間を二哩の距離で狙撃兵の手で徐に射倒すことの出來る時代には、丈の高い人間は望遠鏡的照尺を有つた小銃には丈の低い人間よりか善い標的になる時代には、寧ろ不利益である。その上、軍事上の他の目的の爲めに、小さな人間の方が巨人よりも善い、ことが分かつて來た。小さな人間は運搬するのに重さが少いし、概して言つて、行進が最も敏速である。しかし個人的勇氣は古代の戰爭に於けると全く同じやうに近代の戰爭に必要とされて居る、――しかもその個人的勇氣たるや、バーシャカーの猛烈さとは、或は鋼鐵に包まれてゐた中世後期の元氣とは、頗る異つた種類のものである。現代の歴史中の戰爭で、中世時代の年代記に或は古代の歴史に記錄されて居るどんな勇壯とも同じやうな氣高い勇壯の實例を示さない戰爭は、これまで殆ど一つも無いのである。啻に個人ばかりではない、聯隊を成す人や旅團を成す人が我々のこの十九世紀では、殺されるのが義務であると申し聞かされ、そしてその人達は、常に必らずしもその敵に對して一度の攻擊を加へる滿足を有つことすら無く、直にそれを實行する。ライヒスホーフエンでの胸甲騎兵（キイラシア）の全滅は恐らくは近年での此の種の最大な出來事であつたらう。――强襲を三たび續けて見込みのない攻擊を行うたといふ事實で殊にその名が聞こえて居る。―

―第二線の騎士は第一線の全滅を見に立つて居り、第三線のは第一、第二兩線の全滅を見に立つて居るやうなものであつた。そして何れも普魯西の砲兵隊へ達する見込みは少しもないことを知つてゐたのである。あの砲火の地獄で死んだ者は一人殘らず、古代の如何なる英雄にも確に匹敵するものであつた。だからその祖國は、その一人一人を立派に記念して忘れはしない。年々その死者の名簿を、佛蘭西の一番大きな野營陣地で聲高に讀み上げ、そして埋められてゐる胸甲騎兵一人一人の名に、生きて居る聲が『はい』と返事する。―
―氣高いものは決して死ぬるといふことはないからである。

眼に見える死よりも遙かにもつと恐ろしいのは、人間の眼の視野を越えた距離から――距離と速度とが共に殆ど年毎に層一層致命的な發明の爲め增してゐるので――眼に見えぬ速力で來るところの死である。ところが近代の戰爭では、眼に見えない敵からの砲火を浴びて、屢々數時間もじつとして、しかもただ命令を待つてじつとして、ゐなければならぬ。あらゆる努力を抑制の下に遣りつづけなければならぬ――待つてそして命令の下に死ぬほか他に爲すべきことはないのである。しかも兵士は待つてゐてそして死ぬのである――歌をうたひながら。だが恐らくは精神的勇氣を要するあらゆる位置のうちで、水雷艇と甲鐵艦とにゐる人達の位置が最も多くそれを要する。彼等は實際に水雷艇といふ棺に入れられ

て居るのであり、――巧く狙つた一打ちで水に沈んで震るへるかも知れない鋼鐵の殼といふ牢に入つて居るのである。どちらの場合にも、總ての者の生命はその安全如何に依つて居る一つの機械に握られて居るのである。事故が一つ出來すれば總ての者が絶滅する。逃れる希望は全くない。そして近代の海戰での死はややもすれば殊に怖るべきものがある。それからまた、近代の爆發物には、その發射の衝動だけで、そして身體に外的傷害を加ふることなくして、神經組織に極めて重大な結果を齎すものが幾つもある、と人は云ふ。でも、科學的に訓練された兩軍閥の近代の戰鬪には、騎士道時代よりも恐慌は少いらしい。

日本の陸海軍人が、それを期待し得られなかつた樣な境遇の下に在つて、人間の本性が發し得る限りの偉大な勇氣を今次の戰爭で示したといふ事は、眞に注目に値する事實である。それは彼等にとつて、戰鬪的人種としてのその經驗が少ししか彼等に準備せしめ得なかつた全く新規な境遇に在つての、戰爭であつた。でも、最近の會戰に對しての最も苛酷な批評家からして、勇氣と結合した科學を天晴れ美事に示した爲めに、最高の賞讃を贏ち得て居る。勇壯の個人的實例については、陸軍も海軍も啻に命令の下に眞の最後の一人に至るまで死なんと欲する計りではない、許されれば、その犠牲に他人よりも先きになる名譽を爭はんと欲することをば、海軍軍人も陸軍軍人も我々に悟らせるに足るものを與へて

居る。

近代の戰爭は勇氣にとつて確に舊式な戰爭よりも苦しいものである。——キプリングがその物語り唄に仄めかして居るやうに、

八日卷き時計の心(しん)にゐて
眼には見られぬ死を待つは
英國者(もの)にはふさはない

のである。

だが我々は、長い射距離で戰ふことの、そして機械に對するに機械を以てすることの、次第に増し行く必要が、舊年の相接しての鬪爭と比べて、人情を増す一種の力を有つてあらう、ことを信ぜざるを得ない。躬ら己が手を以てして人の命を絶つといふ感じは、同じ事を視野外で成し遂げる機械力を放つ感じとは、全く異つた感じである、騎兵の襲撃が元(もと)込(こめ)の砲火に逆らつては出來ない事、また銃劍が近き將來に於て流行後れの武器になりさうだといふ事、は恐らくは道德的により善いことであらう。戰爭なるものが個人に對して殘忍性をより多く増す力は、科學の爲めに——しかもまた、工業的文明が戰爭行爲に於ける相對的人道を國際的必要事となして居るその時代に於て——除去せられつつあるのである。

日本の藝術と西洋とを論ぜる一日本人

一八九四年十一月二十八日水曜日

亞米利加に居る、ケー[註]・浮田といふ日本人（他の或る人を權威にして、佛教は女を墮落さしたといふ、申し開きの立たぬ聲明をしては居るが、多分基督教へ改宗をした者ではなからう）が、『僧侶に對しての、宗派には關係の無い宗教的な一文』を——幾分の注意を惹きつつある日本と亞米利加との婦人に關しての論說を——『インデペンデント』に寄稿して居る。浮田氏が自分自身の意見なり感情なりに依賴して居る時は、人の興味を惹くことが出來、また大なる眞理に觸れることが出來る、といふことは注目に値する。それが外國の書物や教師に依賴して居る時は、奇妙な間違ひをしたり、或は傳道者がそれに就いて殆ど何も知つてゐない題目に就いての昔の因襲的な傳道者流の陳述を繰返したりして居る。だが日本人感情の面白い程率直な表明が氏の論文の到る處に散在して居るが爲めに、讀者

はそんな間違ひを容易に宥恕することが出來る。一體、新派の日本人は、西洋の事柄に就いて極めて率直にその意見を述べるやうに、或は自分の國についてのその衷心の確信を西洋の聽衆に向つて語るやうに、誘はれることはどちらかと言へば殆ど無いといつて宜い。古昔は、恐らくは、そんな率直さは、日本の禮儀の――他人に對するあらゆる非難を咎め、且つまた自己に對し或は自己に關する事柄に對してのあらゆる賞讃を咎めた禮儀の――あの高尙な觀念に依つて禁ぜられたことであらう。ところが、日本の藝術に存すると等しく日本人の生活に存する眞に善良なるものに對しての外國人の鑑賞が、不正當な非難に對しての國民的感受性を覺ますのに好結果を近時奏して、兩方の題目に對して日本の批評家の口から自由な言說を聽くやう間接に促した。がしかし、そんな自由な言說を平易な英語で述べてあるのには我々は滅多に出會はないから、例へば

『西洋の美術は甚だ美しい。しかし、餘りに寫實的で、美術と寫眞との間に殆ど差別がない。』

と、浮田氏が述べて居るやうなのを耳にするのは、頗る爽快である。

理想主義と寫眞との間に存する無限の距離は言はずとも、藝術の寫實と寫眞の寫實との間の相違は何處に存するか、これは我々西洋人は浮田氏よりも善く知つて居る。しかし氏

の所說は、不正確であるに拘らず、興味のあるものである。それは、眞に己が國の藝術を胸に感じ得る一日本人に對して、西洋の藝術が起こした第一印象を、率直に表明して居る。そして若し氏の寫眞に就いての行（ぎやう）を除くならば、西洋藝術の寫實主義と日本藝術の理想主義とについての浮田氏の意見は、我々の主要な批評家中の或る者の批判と正しく一致して居る。日本人が小さな物を理想化する技倆は——蟲や鳥や蛇や魚の運動と樣式的特徵とを捉へて、絹や紙の上に固定さす、日本藝術家の殆ど魔法的な力は——それに比ぶべきものを我々は絕對的に有たぬほどに、西洋のどんな藝術よりも遙かに優さつて居る。日本人が他の審美的方面に於て、それ程には成功してゐないといふ事は、この事實には何の關する處がない。日本人自らが愛好してゐる藝術分野に在つての、その熟練は全く以て魔術であるといふ、そして我々の風景畫や彫刻が彼等には餘りに寫實的に思はれるに相違ないといふ、眞實は否定し得難いものである。

その意見を我々が非常に尊重して居る或る英國の友人が、嘗て丁度この題目に就いて述べて、『だが、大きな動物を——馬とか牛とかを——描いての日本藝術家は成功といへるかどうか』と我々に語つた。實際、二た筆三筆で以て、生きて居る螽蟖や鳥やセミや蝙蝠や蝶を造り出し得る日本人が、牛をば骨違ひをして居るもののやうに描く。蜻蛉と水——

灌木林に潜む兎——檐嘴に巣籠もつて居る鳩——を現はした欄間て我々を恍惚たらしめる彫刻家が、勇ましい馬を造ることは全く出來ないやうに思はれる。これはどういふ理由か。また、日本の風景畫は仙郷の夢の如くに美しい。が、前景の大きな像若しくは群像は、描きやうが拙いので全く失望させることがある。どういふ理由か。人體を描いた日本の繪が總て拙い、といふ積りではない。古昔の繪本にある女の繪は、屢々藝術的理想として非常に完成したもので、希臘藝術の或る時期に於ける、希臘の花瓶裝飾の模樣に十分匹敵出來るほどである。にも拘らず、一般に言つて、日本の藝術的勝利の眞の驚異は、これを——大きな物にではなく、寧ろ——小さな物に求めなければならぬのである。ところでこれに對しての滿足な說明がこれまで與へられてゐない、やうに我々は思ふ。

だが我々は、この謎の少くとも一部分への手掛りを提供しさうな事實を一つ、認めて居る。それはかうである、——日本の藝術家が、その像が小さく見えるやうに、遠くて動いて居る牛や馬を描く時は、成功する。迅速な一瞥の範圍卽ち半徑內の尺度で、「運動を捉へる」技倆は——運動の表現は——本質的に日本人の一特徵である。がこの力は、手近な大きな像の場合には、使用が出來ないのである。

この論文を書いた日本人の、西洋の事柄についての觀察に、——例へば、亞米利加では、

亞米利加の女の氣象が男性的だから、女と男との間に差別が殆ど無い、といふやうな、――『日本人の理想は西洋國民のそれに優さつて居る』といふやうな、――西洋の女は非常に上品ではあるが、『半文明諸國の女と一緒に部類分けしても宜い程に、高尚な理想を缺いて居る』といふやうな、――それから、『上品な、精神的な、道德性と社會の正義とについては、日本は西洋に優さつて居る』といふやうな、――觀察にもう少々批評を加へたいのであるが、今のところ紙面が許さない。我々は今は、西洋の事柄に對して一日本人批評家が、その自信を外國語で述べるといふ勇氣を示したこの觀物（みもの）に滿足の意を表するだけである。外國にゐて外國の感化を受けた日本人が書いた莫迦氣た物が、これまで澤山にあるから、自分の總ての意見を他人に造らせようとはしない人のこの實例は、我々には稱揚に値するやうに思はれるのである。

註。浮田和民氏であらう。

英國人は天使か

一八九四年十一月二十九日木曜日

十月の十七日に經育て、駐英合衆國全權大使が爲した演說を報道した速記者が、その信賴を裏切つたのでなければ、バヤード氏は英國民は翼の無い天使であるといふ意見を抱いて居られる。自分が受けられた心盡くしの熱誠に毫末も劣らない熱誠を以て演說をされるといふ事は、豫期し得る事であつたかも知れない。そして疑ひもなく、この亞米利加の代表者が『自分は友愛なる手と、深切なる言葉と、立派の奉仕の申し出てとの外、何物をも見出さなかつた』と公言された時は、正しく眞實を、眞實全部を、述べられたので、眞實を越したことには何も述べられなかつたのである。卽席演說なるものには放言があることを斟酌しても、バヤード氏に對して與へられた彼の『最も無限な』深切についての物語は、眞實を言ひ現はして居るものと受け容れてよからう。それからまた、英國人は法律を尊重

するといふバャード氏の報道には、エマスンの『英國人の特性』を奇異にも憶ひ出さしめるものがある。氏の報道は、同時に一つの事實の兩面を、エマスン同樣、見ようとするバャード氏が示したその不可能さを認める以上には、問題とするに足らぬものである。がしかし、驚くことは、次記の如き――一行に繋がれてゐる――發言である。

『人民の感情に對して役人が顧慮を拂うて居る。より下級の役人に權化されて居る法律の精神に對して人民が從順である 英國に於ける一年半の居住中、手に官杖若しくは棒を有つてゐた巡査を一度も見たことがない。誰れかが人を打つのを見たことがない。どんな人の口からも粗暴な言語を聽いたことがないし、どんな人もが粗暴な行ひをしたのを見たことがない』

倫敦に居る外國の公使が、あの大都の生活が有つて居る不愉快な物事を目にし得るやうな、そんな位置に置かれてゐようとは、ありさうにないことである。だから『英國はおつそろしく紀律正しい』のを氏が賞讃するのは頗る當然である。或は我が讀者諸君は、氏がこんな結論をされたかどうか、疑ひを抱かれるかも知れぬ。バャード氏自らをして語らせるがよからう。――

『海の波が岸へ打寄せるが如くに、倫敦の街路を通して群れ集ふあの交通機關の大海に

於て、交通がその最も盛りを極めて居る時、そして車馬が次から次と殆ど重なつて居る時、巡査の制服を着けた物靜かな男が一人、その大群集の眞中へ歩み出て、その背をその車馬の方へ向けて、手を擧げる、のを目にするといふ事は、啻に日々のそして時々刻々の光景である許りではない、殆ど永久の光景である。その男は法律の權化であつて、そのただの巡査の擧げた手は、從はれまた重んぜられ、それを下ろす迄は、その交通は續けようと試みはしない。これは倫敦の一番人混みの街路のどの部分に於ても毎日目にする處である。それは何を私に意味するか。隨分多くのことを意味する。その人は己が義務を履行するのに訓練された人間であり、それを躊躇なく履行しつつあるのである、といふことだけではなく、その男をば一般の法律の道具だと認めて居るその國民の心中にこれに應ずる琴線があつて、正直に實行して居る法律に從ふに依つて初めて身の安全がある、といふことを敎へて居ることである（大喝采）私は國家の行爲に對して必要な物事を了解して居る、幾多の表示に述べ移ることが出來る。私は、かの英國民を一貫して居る强固な尊敬主義について、述べることが、しかも感深く、述べることが出來る』

　バヤード氏はかくして、倫敦では不愉快なものは何一つ一度も見なかつたといふ事實をば、ただ法律に對する尊敬心に歸しはせずして、他の或る物に對する尊敬心にも歸して居

る。——

『私はどんな家で夜を過ごしても、その家内の人達が世界の支配者に對して一同の祈禱に毎朝跪かない、のを見たことが一度もなかつた。到る處それは、その人達の衷心からして爲され、殆どその人達の普通の實行である。私は長らく彼地に居たが、呪咀の言葉を耳にした記憶がない。私は長らく彼地に居たが、饗宴の際、人がその妻や妹や或は娘に話すのを憚るやうな冗談や話しを耳にした記憶がない——否、ないことを確信して居る（大喝采）』と續いて言うて居る。

この最後の文句は寧ろ驚くべきである。亞米利加の公使たるものがそれへ招待されるやうな饗宴で、貴婦人が耳にするにふさはしからぬ冗談や話しがなかつたといつて、バヤード氏は驚愕の念を表明すべきであらうか。それでは亞米利加での習慣は……。いや、我々は危險な處へ近寄らうとして居る！それよりも、あの不可思議な言葉遣ひのしてある文句——『私はどんな家で夜を過ごしても、……その家内の人達が毎朝跪かない、のを見たことがない』——を考へて見よう。これは、我々は想像するに、眞實である。そしてこの亞米利加公使が倫敦での、その一年半のうち其處で『夜を過ご』された異つた家々の數が實に頗る少數のものであつた、といふことも我々は想像する。だが、バヤード氏の推論はど

うてあるか。單にかうてある、――即ち『到る處それはその人達の衷心からして爲され、その人達の殆ど普通な實行てある』

バヤード氏が倫敦て、それについて隨分多くを實際に學ばれた事は、その神聖な實利主義てあつたといふこと、又、絲目が見えて古くさい舊慣墨守主義の埒外に居る英國人は、羽の生えてゐない天使のやうに、そんな特徴附けをされることを喜びはしなからうといふこと、を信ぜざるを得ない。反省的な英國人は、それは疑ひもなく好意を以てあるが、そんな追從をば全くさかさまのお世辭だと思ひがちてある。

一八九四年十一月三十日金曜日

日本婦人と敎育

松江（出雲）の一新聞紙が、同市の女子尋常師範學校は――今それに殘つて居る生徒がその勉强を終へてしまつたなら直ぐと――廢止される、と傳へて居る。これは日本に於け

る女子の師範學校の——その女子學生が才能に於て少しでも缺けて居る處があるからといふのではなくして、日本の女子が西洋の法式に從つての或る種の教育に依つて眞に利するところあるやうな時代はまだ來てゐないといふ國民的信念の爲めに——失敗した又一つの實例である。それなら、その缺點は、若し缺點ならば、匡正することが出來さうなものだと思へるかも知れぬ。その不平は——あらゆる場合に於て（この出雲の學校の場合には、確に根據が誤つて居る、と我々は信ずるのであるけれども）根據を誤つてゐないものであ——それは、日本の女子は、西洋の教育訓練を受けるとその最も魅惑的な諸性質を失ひ、性質が變つて來て儀容が硬くなり、そしてその爲め妻としてまた母として、のその本來の運命に適しなくなる、といふのであつた。女子の性質が、そんな訓練の爲めに、男子の性質が變はるよりも餘計に變はるものかどうか、西洋人には疑はしく感ぜられるかも知れないが、その疑ひは尤もである。しかし何が故に女子の師範學校を別な方針で改造しないのか。そんな學校のうち或る物の教育は、法式に於て、ただ半歐羅巴式であつて、半日本式であつたのだ。それならば何が故に女子尋常師範學校を法式に於て全然日本風にしないのか。女子の卒業生は、制服は着けない極めて小さな小學校で、極めて小さな男女の生徒だけ教へなければならぬ。それに對する返事は、極めて小さな初等學校すら今は西洋の方針に從

つて改められてゐて、机(デスク)があり、腰掛(ベンチ)があり、地圖があり、地球儀があり、黒板等々があるといふこと、また、そんな小學校での女教師になるにさへ、女子が受くべき訓練だと思つて居る日本の思想とは多少反對して居る訓練の途を通つて行かなければならぬといふ事、てある。日本の婦人の居場處は家の中で――疊の上にしとやかに坐つてゐて、息女として妻として或は母として家庭の職務だけに從事してゐるものと考へられて居る。革の靴を穿き、男子のやうに歩み、椅子に腰かけ、髪を「束髪」に結ふやうに仕附けたならば――日本人の意見では、見苦しくなり、無風流になり、ふしだらになり、女らしからぬ者になる。それに外國語と外國の科學――化學、哲學、博物、等々――を教へたならば――それによつて生ずる心的緊張は後年善良なる母になれないやうにする。日本はその古來の婦人の理想を――あらゆる賞讃に眞に値する、生得の上品さと愛らしさとの理想を――急に棄てることはすまい。また日本は、實驗をした後で、西洋式訓練の結果はこの理想を破滅する、と信じて居る。日本の理想的な人妻は、あらゆる境遇の下に在つて如何に優美であるべきかを知つて居り、妻としての一切の職務に完全に仕附けを受けて居り、その職務に從事して倦む所のない、その技藝は本質的に家庭的な、その名譽心は悪事を行はんよりも寧ろ即刻(たちどころ)にその生命を捨てんと思はしめる女である。即ち、簡單にいへば、日本の理想的な人妻

は必然的に學校訓練の所産よりも寧ろ家庭の仕附けの所産である。舊い日本の淑女の特徴たるあの特殊な魅力ある性質はどんな學校訓練もこれを形造ることは出來まい。で、從つてまた、その結果が完全な婦人は斯くあるべしとの民衆の觀念と合致しない教育組織は如何なるものと雖も、嫌はれるに相違ないのである。

　だがこれはこの問題のただ一方面である。今一つの、しかも愉快ではない、方面がある。それは婦人を獨立の地位へ向上することをその目的として居る改革はどんな改革でもそれに肩を持つことを欲しない國民的傾向である。恐らくは保守派の日本人批評家は、前述の文句にある『向上（エレヴエーシヨン）』といふ語を使用することすら反對するであらう。この事實を理解するには、日本の社會制度について、且つまた殊に家族の組織について、幾分の知識を必要とする。女が教師、電信技手、速記者、タイピスト、商店員、政府傭人になることは望ましいこととは考へられてゐない――況んや醫師、辯護士、或は知的職業の如何なるものに於ても、その實地の熟練家になることは尚ほ更である。確に日本にはもつと自由寬大な政策を根氣強く主張する人がこれまであつたのであり、又今なほあるにはある。が、一般的感情は我々が『婦人解放（フイーメール・エマンシペーシヨン）』と唱ふるものにはやはり強く反對で、――女子をして醫藥の業に入らしめることを許容することに對して、また生得殊に能く適應して居るやうに思はれる

――例へば植字の如き――種々な地位に婦人を傭用することに對して、現時に於てすら、西洋てどんな反對が爲され來たつて居るかを思へば、驚くに當たらぬことて尤もな次第てある。その上に、日本のやうな貧乏な國ては、勞働者が女の勞働に對して、西洋諸國て爲し來たつて居りまた今なほ爲しつつあるよりも、もつと盛んな反對を爲すてあらう、といふことは期待しても無理からぬことてあらう。そして最後に、外國て大都會の生活を研究した慧眼な日本人は、商店員やタイピストとして女を使用しての道德的結果について、口にすべき善い事は何一つ有つてゐないのてある。

がしかし、たゞ一と事我々は確信してゐることがある、――卽ち、他日、獨立に向つてのより大なる機會が日本に於て婦人に提供されるてあらう、といふ事てある。これ等の事柄について西洋の感化に對しての反動は、輕々に非難すべきものてはない。日本が採用した方法は現在の日本人の觀念とも或は日本人の性格とも一致して居なかつた、ことを實驗がこの國民に納得させて居るからてある。敎育の全系統が、その思想もその感情も我々のとは非常に異つて居る一人種の必要とする處と完全に合致させるやうに、年々實著に改造されつつある。婦人は敎育に於て再びその本來の地位を得るてあらう。そして人口の絕えず增し行く壓迫は、今は拒まれて居る、人生に於ける幾多の機會を婦人に開く結果を最後

には多分齎すことであらう。婦人の古昔の理想的な家庭敎育は、絕えず募り行く生存競爭と共に、また絕えず增し行く國民生活の活動と共に、竟には棄てなければならぬのである。尤も、その美を失ふことを——世界がこれまで見たうちでの一番美はしい女の標型の一つを造り出すその能力を失ふことを——人は惜むかも知れない。しかし、いゝ、より多忙なより苛酷な時の必要事に依つて運命づけられて居るのである。その時代に到達すれば、日本の女も、佛蘭西の女が與へられて居るあらゆる人生の機會を少くとも有つであらうし、同じ才能を以てしてそして、殊にその獨得の東洋的優美さを以て、その機會を充たすであらう、といふことを我々は希望することが出來よう。

一八九四年十二月五日水曜日

民主的な或る謎

亞米利加の市政を論じた、『タマニーその道を指示す』といふ題の、ヘンリー・シー・

マーキンの注目すべき論文の拔萃を我々は本紙の月曜號に載せた。その拔萃は、それ自體に於ては頗る意味深いものであるが、しかし、その論文の目的に就いては何等の觀念をも與へない。『タマニー』〔タマニー・ホールを本部とせる紐育の市政機關の名〕は――亞米利加ては純正な都市政治を形成し且つこれを維持せんとする企ては全然失敗に終はる、といふことの外に――何へ道を指示し得たと讀者は思ふか。マーキン氏は、しかし、タマニーの支配に――紐育民衆の權力に――別な意味を見出して居る。氏が讀者の考慮を願うて居る特別な事實は、『タマニー』が提供した、忠實といふ感念が市政に對して有つ價値の、例示である。日本人には氏の文は頗る妙な意味に思はれることとてあらう。亞米利加の誰れかが、競爭的な個人主義に反對して居る忠實といふことが西洋文明にとつて價値がありさうだといふ事を、ついこの間發見したのだ、といふことを示すやうに思はれるてあらう そして日本人は、算へきれぬ幾千年の間、日本と支那とては認められて居る或る事柄が、かく突然に西洋人の心に啓示されたことを、必らずや微笑するであらう。

政治的改革をば單に教育的方法だけて期待するのは、不合理であることを指摘した後、――教育なるものは、倫理的改革の手段として利用し得るものであつても、亞米利加の市政を支配するあの人達には、その感化の力を及ぼすことは出來ないことを示した後、――

喜ばしくはないが明白な（ずつと前にラスキンが十分に認めた）事實として、教育の程度の低い階級の者の方が、全體として、一番道徳的であることを示したのち、――マーキン氏は、民衆は感情に依つて支配されるものであつて、議論に依つて支配されるものではない、金錢に依つてすら支配されるものではない、ことを實際に斷言して居る。（この事實は亞米利加及び英吉利の勞働同盟罷業の歴史に明示せられて居る、と當欄で既に詳しく述べたことがある）目下の少數政治の人達とは異つて、職人階級は或る理想的權利に對してどんな自己犧牲でも爲し得るものである。富裕な階級とは異つて、勞働する人達はその利害を相互の義務よりももつと重要なものと決して考へさせられないものである。そして教育ある階級とは異つて、無教育な階級は――その事には全く理窟なしに――忠實の爲めには一切を犧牲に供するものである。どういふ風にといふ事を紐育が示して居る。當然のこと、かく民衆を統御し得る人は、民衆の人で――その國民を完全に理解して居る人で――その感情を鼓舞し得る人で――その尊敬を保持し得る人で――なければならぬ。その人は、その語の古昔の希臘の意味での、眞のデモクラットで――古昔の羅馬の意味での、プレビーアンで――即ち、近代の俗語を使用すれば『プレツブ』で――なければならぬ。紐育は今『プレツブ』によつて支配されて居る。『タマニー』を維持して居る勞働階級は、分捕

物の分配を受けてはゐない――それを欲しはしない。勞働階級はただ仕事を要求するだけて、そしてそれを得て居る。そしてゐて掠奪免除の賦課として『タマニー』へ支拂ふ巨額の金は、大多數者の信任を得て居る狡猾な少數者の懐の中へ入つて行く。

上述の事をば、新聞の一回の論說の範圍內て示さうと我々には企てられないほど、總てを巧みに示してからマーキン氏はかう訊ねて居る。――純正な政治に背いて目下使用されつつある該の政治機關を、純正な市政の爲めにどうして利用しないのか。亞米利加の大都市て普通選擧を行へば、そんな都市の政治は全然敎育階級の手から離れるに相違ないし、金持ち階級の支配さへ受けなくなるに相違ない、といふ不愉快な眞理をどうして認めないのか。亞米利加の都市民主政治は彼等の權力を知つて居る。そして恐らくは如何なる少數政治も、革命があるかさなくば亞米利加憲法の根本的改正をするかしなければ、その權力を彼等から奪ふことは出來ないのてある。どうしてこの事を告白して、そして經驗がこれまでに與へた知識を出來るだけ利用しないのか。『タマニー』の爲めに今捧げて居る該の不拔の忠實の精神を、道德的に利用することが出來ないのか。國民中の純正な人達を、國民中の不純正な人達が今有つて居る權力の地位に高めて、そして最善の目的の爲めに民衆的支配を行ふやうにさせることは出來ないのか。

確にこの提議はそれを考へて見る價値のあるものであり、またそれを世人は考へて見ることであらう。だが若し過去の教訓からして議論しても宜いならば、近代の米國都市の民衆が、マーキン氏がその支配を見たいと望んで居るやうな、さういふ標型の人の統帥に從ふであらうかどうか、疑ふべき理由がある。古昔の希臘の諸都市に於ける民主主義の歴史は、そんな希望に有利な證據を餘り見せては居らぬ。また古昔の伊太利の諸市に於ける民主主義の歴史もさうであり、佛蘭西革命の歴史もさうである。これに反して、それに奬勵を與へる二三の實例が、中世時代のフランダースの、和蘭の、また他の、自由都市によつて提供されて居る。そして我々の人種に緣のある人種は、どんな種類の自治にも優れた能力を有つて居ることをいつも示した。だが現世紀に於ては、亞米利加だけが、北歐人種の人達が住んでゐて、そして首府で、否、寧ろ數多くの首府で、『民主主義の勝利』の眞の光景を我々が見せられて居る、唯一の國である。亞米利加では民主主義が――ただの一黨派の民主主義ではなく、少數政治に反對しての希臘の意味での民主主義が――終にはどの州にも凱歌を奏しさうな兆がある。事情は新しい。だからその道德的結果を豫言するのは輕率であらう。

無上の權力をその掌中に有つて居る聰明な人達はどんな人達も、當然己が階級の價値あ

る指導者に從ふよりも寧ろ無價値な指導者に從ふであらう、といふ事は、それは不道理な推論であらう。しかし事實は、如何に民衆を制御すべきかを知つて居る眞の人民の人の大多數は、道德的意味に於て最善な指導者では無いものである。そして道德的に最善な指導者となり得る人達は、制御に必要缺くべからざる組織と理解との能力を缺いて居るか、或はさうでなければ、その民衆の心を捉へる人格の諸性を缺いて居るものである。望ましい天賦や性質を總て具備して居る指導者は一世紀に一度見出されることがあるかも知れぬ。が、それよりも數多いことは稀だらうと思ふ。社會の進化に於て、民衆の指導者として成功する人達は、大抵は利己的な諸性質が道德的なものを犧牲に供して發達し來たつて居る人達に相違ない。遠き將來に於て、道德の美が理知の美よりも優さつて居ると認められる時に、マーキン氏の主張する政策は、今よりかもつと實行可能に思はれることとであらう。

寛大の必要

一八九四年十二月十日月曜日

ミチー氏が『ジャパン・メール』紙へ寄せたその近時の抗議に於て今次の戰爭に反對して述べたあの純正な感情の或るものには賛意を表さざるを得ない。氏は言ふ、『地球の表面に住んで居る國民のうちで最も絶對的に平和な國民であり、實際に世界の眼から見てその主要な罪は彼等があんなにも平和であるといふ事である、といふ國民に對して、戰へと日本人に激勵する人達は、その企圖に含まれて居る十分の結果を全く理解して居るのかどうか』自分は屢〻怪しんで居る。自分は太平(タイピン)の叛亂の折、その餘程の部分をその地で暮らした程の——不幸にしてとすらそれを言はない——老年者である。その光景は自分の記憶から褪せてはゐない。あんなものはもう二度と見ないやうにと望んで居る。が、どんな事が出來(しゆつたい)しようと、自分は、個人的な希望として、アダムの他のどんな子孫とも同樣に自分の道を辿つて自分の生涯を送つて行く權利を有つて居る或る無害な國民に或は落ち來たら

ん幾多の災害の衝動へ、一毫の重きを加へんよりは、寧ろ平和調停者の見放された最後の希望と共に沈まんことを欲する』如上は、支那を能く知つて居り、そして支那國民に對して强烈な同情を――その賞讃すべき多くの性質を觀察した上で出來た同情を――抱いて居る、人の言である。その言たるや、思考する人達には重みを有つべきものであり、また、支那の爲めに今氣遣うて居る經驗ある幾多の歐洲視察者の意見と完全に合致して居るものである。戰爭の諸事件が起こす印象といふものは普通は戰爭精神だけを反映するものでて――あらゆる猛烈な感情がさうなければならぬやうに一方に偏したものである。日本の素晴らしい勇氣と戰鬪力とを嘆稱すると共に、我々はともすれば被征服者をただ卑怯者、不具者、泥棒、無賴漢と考へがちである。支那の兵卒にはそんな者が多い。そして支那人生活は確に僧アーサー・スミスが我々に信じさせようとするほどの、あんな夢魔ではないけれども、我々の眼にしない他の一面をそれで以てともすれば我々は判斷しがちな、暗黒な一面を有つて居る。惡るい事は直ぐに認められて聲高に傳へられ、善い事は――新聞紙でもさうであるが――認められないで人目に立たずに居る。支那人には――規則正しい間隔を置いて如何にも精密に我々に報道せられる野蠻な法律や野蠻な殘忍事があるに拘らず――同情を呼ぶ多くの點がある。支那を知つて居る人達は、その國民の大衆に美德として屬し

て居るところの、驚く可き忍耐、倦まざる勤勉、不拔の忠實、此の上無しの困難極まる境遇への不平を鳴らさぬ服從、を知つて居る。支那人はその罪人に依つて或はその社會組織の弊風に依つて判斷すべきものではない。

しかしながら、日本の論辯に從へば、自分が挑發した戰爭に打破られたからといふだけのことで、或はより勇武な一人種が、その弱さを世界に曝露し得たからといふだけのことで、支那に同情するといふのは莫迦莫迦しい感傷癖であらう。それどころか、殘酷な教訓を教へられたといふことは、寧ろ支那そのものに利益である。世界は支那が世界の命令に從ふまではその儘にして置かぬであらう。その命令の一つは、科學的原理に賴つて戰ふことが出來るといふことを見せることである。支那の主要な罪はその平和的なるにあつた、といふミチー氏のあの皮肉には深い眞理がある。日本が今受けて居る賞讃と名譽とが證據である。また、この一見不道德らしい感賞には――我々が既に指摘したやうに――幾分の理由がある。勇武の力は訓練を意味して居り――或る種の道德的鍛錬を意味して居り――非常に優秀な心的鍛錬を意味して居り――多くの重要な科學に通曉して居ることを示して居る。支那は戰ふことを學ばなければならぬ。少くとも、それを學ぶか、又は、一帝國として存在することを止めなければならぬ。

が支那はその教訓を得たのである。その征服者共の利益は殘酷なほど極端まで推し進められるかも知れない。世界は今や支那の爲めに心配して居る。尤も支那の弱さは極めて惡るい種類の政治的腐敗の結果であつた、のは眞實である。あらゆる種類の官憲の惡弊の爲め、その實力を奪はれてゐた爲め、己を防ぎ守る實力が無かつたのである。でも、惡政の如何に惡るい結果と雖も、支那にとつて、革命の――一般的無政府の――結果ほどには恐ろしいものでは決してあり得なかつた。これが今、支那にとつて恐るべき危險なのである。そしてまた、その恐怖に對しては確實な理由があるのである。

日本は無政府狀態の支那を制御することが出來ようか。我々は甚だ多くこれを疑ふものである。支那の無政府狀態は、我々は眞實これを信ずるものであるが、日本をしてその戰勝の結果總てを失はしめるかも知れない。それは日本が北京までその軍隊を進めることを主張しない、といふことを意味するのか。必らずしもさうではない。しかし我々は、日本が支那をして內亂の恐るべき狀態に陷らしめるやうなどんな手段をも、出來うる限り、避けようと力めるであらう、と堅く信じて居る。內亂は支那では長く繼續する。時には數代の間繼續する。無政府の支那からして、その要求するであらう戰爭償金を得ることを、日本はどれだけ期待することが出來よう？これは考察に値する事件である。

我々は全日本國民が心から支那に敵意を有つて居るものとは信じない。この戰爭の初めに、これを遺憾とする日本の學者や思想家が多くあつた、と我々は思ふ。そしてそんな思想家は、日本軍の成功を至當に誇つて居るかも知れないが、また日本がその隣人を犠牲に供して得た、世界諸國民のうちに於けるその新位地を誇つて居るかも知れないが、——支那は嘗ては日本の師であつた事を、また、兩者は今なほ人種に於て、血統に於て、信仰に於て、因襲的慣習に於て、同種である事を、忘れることは出來ない。日本は適當な時期に能くその舊時のセンセイを勘辨して、賭け金の支拂ひを主張しながらも、義俠な鬪士の如くに、負かされた敵手へ手をさし延べることが出來る、と思ふであらう。

一八九四年十二月十一日火曜日

未開と開化

日本の戰勝に對する『土曜評論（サタデー・レギュー）』の惡意を有つた社説に就いて我々が手にした一通の手

紙に鑑みて、『未開人』といふ語の意味が、それを使用して居る人達のうちの大多數のものに明白に了解されてゐないといふ事、それでその或る定義が我が讀者に興味を有ちはしなからうかといふ事が、不圖頭に浮かんだ。この語は、開化してゐない或る生活の相を意味して居る事は誰れしも了解して居る。しかし、野蠻が終はつて未開が始まるところの線か、或は未開と開化との境界を明らかにする線か、を參照無しに直ぐと引くことを敢てせんとする者は少い。『バーバラス』〔未開な〕といふ語は、希臘語から拉甸語を經て我々へ來たもので、希臘語ではそれは『外國の』といふ意味であつた、——そしてその希臘語の語原は吃ることに關係を有つて居るから、外國語の發音を耳にして起こした感じの爲め、初めはそれを外國人のことに用ひたものに相違ない。

ところが『開化してゐない』といふ後になつての意味でのこの語を、筆に書かれて居るその歷史の、人が知つて居るどんな時代でもの日本國民へ、適用してそれを科學が正當とするかどうか、これは否定の言葉で力强く返事の出來る問ひである。が、詳細に亘つてこれに答へる事は、野蠻と未開との或る定義を必要とする。頗る妙な事には、今は主もな語原學者が採用して居るその野蠻と未開との定義を試みて初めて首尾能く樹て了ほせたのは、ルキス・モルガンといふ亞米利加の科學者であつた。舊世界が示して居るどんな文明でも

異つた、現存して居る文明の形相のあることを發見して、それに含まれて居る幾多の問題の困難が初めて明白になつたのは、亞米利加に於てであつた。そしてその發見そのものが近い頃のことであつたから、モルガンの作つた定義もやつと一八七七年に出來たのであつた。氏は初め先づ、陶器の製造で引かれる一線が、どんな人種の進化に於ても、野蠻が終はつて未開が始まる時代を正確に限るものかも知れぬ、と提言した。ところがこの提言は科學上の一般的援助を見出して居る。社會學の學徒の目的には、野蠻は明白に區劃されて居る三つの人種學的時代に分かたれて居る。今のこの短い論文の目的だけには、野蠻のその三つの人種學的時代の考察を省略して、未開として分類されて居る社會學的狀態の三時代の、出來る限り簡單な定義を試みることだけにしてもよからう。——

第一期。——陶器の發明と犬ならざる他の動物の飼養。原始的農業。

第二期。——灌漑による農業。銅及び錫の如き金屬を細工すること。

第三期。——鐵の製錬。

かく定められた區別はただ一般的のものと稱し得べきもので、その適用は兩半球で少々異らざるを得ない。亞米利加では、征服前には、どんな人民も未開の第二の階梯の上にさへ昇つてゐなかつた。そしてメキシコとペルーとの偉大な文明に就いての古昔の話は全部

虛構だと分かつて來た。眞の開化の濫觴は、書いた記錄と、それから聲音表示の字母(アルファベット)と、に我々を面と向かはせるものである。『これが開化の埒内へ日本人を齎す』と、ジョン・フィスクは言つて居る。今日の日本人をではない、古昔の日本人をである。氏はそれから進んで言つて居る、――『だが字母(アルファベット)の聲音表示の性質を餘りに狹義に主張するのは宜しくはなからう。鐵を知つて居る國人が、支那人や古代の埃及人の如くに、歷史的記錄と文學の興味とを多く象形文字に鎭座させて居る場合には、これ等の國人はまた開化して居る國人として分類しなければならぬ』だが、德川時代に日本が、開化の初期をどのくらゐ遠く越えて進んでゐたか、それを判斷するには、『土曜評論』の評者の知識より遙かに優れた知識を要する。フィスクは言うて居る、『非常に開化して居る日本人とその滿洲の從兄弟達との間には、文化の差異はモホークとメキシコ人との差異よりも遙かに大きい』

亞細亞の國民を『未開な(バーバラス)』とか、『殘忍な(クルエル)』とか、呼ぶ我々の權利は、近年一度ならず、科學者から手非道い非難を受けて居る。實際それ等の科學者は、世界中で一番開化して居ると主張する國は――英吉利は――その社會學的缺陷の或る物に於て、單に開化して居る亞細亞諸國民よりもではない、眞の未開な人種よりすら、もつと未開である、ことを指摘して居る。この事實に關して、序に彼の偉大なる博物學者兼旅行家たる、アルフレッド・

ラセル・ワレースの書から、次の非道い叙述を引用しても宜い。――

『我々は世界での一番富んだ國である。だが我が人口の殆ど二十分の一は窮民であり、三十分の一は罪人と知れて居る人間である。これへ發覺を免れて居る罪人の數を加へて見よ、我が人口の十分の一は實際に窮人と罪人とである、ことを信じて宜い。……罪を犯さなければ暮らして行く手段がなく、いつまでもその儘でゐて社會に害を及ぼすもの、と知れて居るものが一萬人以上あり、無智と惡徳との裡に我々の眼前で生長して、次の代へ訓練された惡人を供給する、子供が幾千人とあることを我々は認める。これをば、――富のその迅速な增加を誇り、その巨大な商業と絶大な工業とを誇り、その機械的熟練と科學的知識とを誇り、その高級の文明とその純潔な基督教とを誇つて居る國で――自分は社會的未開の狀態と呼ばざるを得ない。我々は又、我々が正義を愛する念を有つて居ることを誇り、法律は富者も貧民も同じく保護することを誇つて居る。しかし、我々は今なほ金錢科料の一個の刑罰とし、正義を得る第一歩すらをも出費事件として居る。兩方の場合に於て、貧民にとつては、未開化的不正義か、正義の拒否か、になる。……眞の社會科學については、我々はまだ未開の狀態に居る』如上は猛烈な言葉である。しかし、ワレース氏が用ひた最も猛烈なものではない。氏は他の處で、我々は『野蠻人のよりよき階級よりも』（一

社會として）『眞に或は大いに、優越はしてゐない』と公言して居る、我々は、一八九二年版の『馬來群島』から引用して居るが、この書の一讀を『土曜評論』批評家に勸める。

極東に於ける三國同盟

一八九四年十二月十二日水曜日

現時は確に、極東の未來に關してどんな說でも許容される時期である。そこで我々は、これまでまだ十分に論ぜられてゐない說が一つある、と敢て考へる。歐羅巴の新聞も日本の新聞も、日本と英吉利との間に、露西亞と日本との間に、英吉利と支那と日本との間に、攻守同盟の可能を論じ來たつて居るが、それと全く同樣に可能に我々には思はれ、しかももつと尤もらしくさへ思はれる、同盟を――西洋の侵略に對して自己防衛の爲めの極東三強國の同盟を――提議したものを我々はまだ認めない。今やその實力を意識し且つ恐らくはその自治に確信を抱いて居る日本が、英吉利或は露西亞がどんな事情の下に在つてもど

うかしていつか關係の有てるよりも遙かに密接な關係を自國に有つて居る人種を向うへ廻はして、西洋のどんな强國と同盟を結ばうとも、我々は驚きはしない。明治時代に社會改造事業の全部が、日本の自治の恢復に——獨立と、繁榮と、諸國民からの尊敬とを確保するに必要な實力の獲得に——向けられてあつた。それを日本は成し遂げた。そして、若し世界に人種同情といふやうな物があるならば、日本は西洋の强國を輔助して——分捕物の分け前を貰ふといふ條件があつても——その從兄弟の支那人を、或はその從兄弟の朝鮮人を、征服する事はありさうに思はれない。一時日本は、露西亞を向うに廻はして英吉利との同盟を或は結ぶかも圖られないが——東洋人を敵とする戰爭を援助する爲め、その軍隊を送り出すことになるやうな條件では結びはすまい

日本がその巨大な隣人に戰を挑んで、あんなに僅な努力で、それを打負かした光景は、或る日本の批評家によつて、獨逸が一八七〇年の佛蘭西へ——自分の力を恃み過ぎてゐて、それにも拘らず實際は戰爭の準備をしてゐなかつた佛蘭西へ——の侵入に喩へられて居る。日本が北京を占領すれば、獨逸軍が凱歌を奏して巴里へ入つたのに匹敵するものを極東で造ることにならう、と述べられて居る。確に普佛戰爭の歷史を、またそれに先立つ幾多の戰爭の歷史を、支那との戰爭を少しも考へないうちに、日本の政治家は熱心に研究したの

てあつた。しかし、今次の戰爭の鼓吹を歐羅巴の戰爭から日本人が得たものと假定すれば、もつと正當な匹敵を七週戰爭の事件を藉り來たつて描く事が出來よう、と我々は思ふ。敵對行爲前の日本の支那に於ける關係は、一八七〇年の獨逸の佛蘭西に於ける關係よりも、一八六六年の普魯西の墺太利に於ける關係に餘計に似て居つた。そして今次の戰爭の結果は七週戰爭の結果が結局墺太利の利益となつたに劣らず、支那の利益になるかも知れない。

日本國民は支那に對する嫌惡の念に驅られたのだと想ふ人達は全く謬つて居る、と我々は眞實信ずるものである　この問題に對して熱烈な愛國心の爆發――日本諸新聞の激論――今日耳にする日本の軍歌の皮肉――これ等は總て、過去に於ける日本の內亂の歷史の特徵となつて居る、あの全く地方的な感情表現以上に、深い意味は有つてゐないのである。支那にゐる日本の軍隊は――想像し得らるゝ限りの最も惡るい事情の下に在つても――その住民を、內亂の場合に日本の一州の住民を取扱ふよりもつと苛酷に、取扱ふことはないてあらう。愛國的或は忠君的感念の現時の大爆發をば、支那に對する深い敵意を表示するものだと、誤解する一般的傾向がある。これは全然正しくないもののやうに――全く間違つた推論に基づいて居る謬見のやうに――我々には思はれる

宣戰のその間際まで、日本の支那に對する昔の感情は死んではゐなかつた。また今日も

死んてはゐないと思ふ。この帝國のあらゆる階級を通じて、支那の物に對しては一種の崇敬の念があつた。明治にならぬうちは、この帝國の教育は支那風のものであつた。そして明治後も、あらゆる西洋風の革新にも拘らず、支那の學問は依然として教育系統の重要な部分を爲して居る。兒童の家庭の仕附けは支那の倫理を根柢としたものであつた。寺院での法要は支那の言葉で述べられてゐた。富裕な階級はあらゆる繪畫に勝して支那の古大家のものを珍重し、自國のあらゆる銅器陶器に勝して支那から父祖が持ち歸つた小石像や花瓶を珍重した。歐羅巴へ行く希望を抱くことの出來ない貧乏な幾千の學生には、支那へ行くといふがその熱望とする所であつた。そして日本の大きな都市で、支那にゐたことのある日本人を見出すことの出來ぬ都市は一つもない。そしてそんな人達のうちには、現時ではない他の時にはいつも、その支那にゐた時の經驗に就いて感謝の念を以てして溫情を以てして語る者が少からず居る。また宗教にとつては支那に日本人のパレスタインであつた。如上の疑ふべからざる事實に加ふるに、社會制度、習慣、祖先崇拜、兩者の文明の倫理が、今なほ同一であることを以てせよ。日本が眞に支那を嫌惡して居るといふ奇怪な陳述を信ずることは全く不可能である。支那は、スカンディナギアが英吉利に密接であると殆ど同じく、日本に密接である。それで、一八〇七年に於けるコペンハーゲンに對しての英吉利

の敵對行動が、眞の英吉利人が悉く今なほ感じて居る彼の北國との友愛な同族感念を滅ぼしたといふに勝して、現時の敵對行動が、古昔の人種同情を滅ぼすに少しても多くの效果があらう、といふ何等の理由をも我々は認めない。我々はなほ一層進んですらも敢て言ふ。旅順口に於て狂暴な殺戮が行はれたにも拘らず、日本の軍人は歸國してから、支那と支那人とについて頗る溫情を以て語るであらうと想ふ。彼等の進軍は、彼等の祖先には聖地であつた處を、多く踏ましめることであらう。彼等は、その人種の最も深奥な感情に訴へるに相違ないやうに、彼等の來るのを待つて居る場所に接して、感銘するところがあるであらう。

そしてどうして日本は極東に於て普魯西の役を演じないだらう。支那は今や己が國の救濟に必要な手段に氣附いて居るに相違ない。どうして支那は結局日本と攻守同盟を結ぶやうさせられないのか。日本と支那と指導を受けての朝鮮とは、露西亞の侵略か或は西洋の他の國の侵略かに對して、東洋の保全を維持するに足る三國同盟を立派に造ることが出來よう。公然支那の分割を絶叫する彼の東京の日本人新聞の短見を我々は悲まざるを得ない。支那は、外國に支配されては、日本にとつて――日本は今は自分は强大だと信じてゐるかも知れないが――非常に危險な隣人となるかも知れない。支那の保全は我々には日本の安

全の爲めに肝要なやうに思はれる。て我々は、日本がそれに非常に多くを負うて居る彼の帝國の破滅に力を添へるのは今非常に重大な失策であらう、といふ我々の確信を再び繰返してもよからう。

謎の朝鮮

一八九四年十二月十三日木曜日

國民的歡喜の眞中にあつて、世界の平和は決してまだ保證されてはゐない、事を思ひ廻らすのは稍〻不愉快なことである。日本の勝利は日本の偉大を確立し、支那の弱さを曝露した。しかし、朝鮮問題は解決してゐない。その問題は依然として畏るべきものである。偉大な軍人たる事と、偉大な行政者たる事とは――幾多の著名な軍隊の首長の歷史が示して居るやうに――全く別てある。日本は有名な行政者と有爲な將軍とを共に有つて居る。日本はその將軍を用ひて驚く可き成功を博した。だがその行政力を朝鮮で用ひることが出

來るであらうか。若し日本がそれを用ひなければ、今次の戰爭の世に公言した目的は——尤も、朝鮮が暫時或る他の外國の保護の下に置かれるのでなければ——達せられないことにならう。若し日本が朝鮮を管理しようと實際企てれば、露西亞が起こす葛藤が生じて來るに殆ど極まつて居る。そして他の諸强國がその葛藤に引き入れられるかも知れない。露西亞は不幸にも東方歐羅巴と、印度國境て、そして同時に支那國境て、禍ひを釀すことの出來る力を有つて居る。

　朝鮮は自己を改革するものと當てにすることが出來ないし、改革を强ひる出來さうな唯一の手段は軍力の援助を要するといふ事實に、大なる困難が存して居る。日本は無政府狀態の朝鮮に——殆ど信じられないやうな種類の弊政に對して反對を起こした朝鮮に——加勢した。その政府を破滅せしめないやうにと、日本は改革を加へることを引受けた。しかし、どうして改革を加へるかは頗る重大な謎である。提供された忠告は立派なものであつた。唱道された諸制度はそれ自體に於ては健全なものである。朝鮮の諸大臣が公言して居る同意すらも或は眞面目なものであらう。しかし、政府の機關全部が幾代の久しき、如何にも紊亂されてゐて、それを運轉さすべき梃子(てこ)の命に從ふ事を拒む。ても運轉はするてあらう、——が、有害な或は危險な方面だけにである。官吏の不正が啻に一般的規則となつ

て居る計りではない傳統的實行となつて居る處では、改革の途に横たはる障碍は實に無數である。政府の首腦はその思ふが儘に指揮しても、手が濫りに働いて壞はしてしまふ。五萬の官職所有者を免職しても、次の五萬人は恐らくは前よりか惡るいものにならう、――全く以て飢ゑた狼に代ふるに養ひ十分の狼を以てするものである。朝鮮の改革は單に一流の――經濟學の法則を理解して居る――大臣を得ることによつて、成し遂げることは決して出來ない。改革は、政府のあらゆる部門と社會のあらゆる階級とから、公務の極の最下等の地位に至るまで、議論よりももつと力強い或る物によつて强行されなければならぬ。これを英吉利は埃及で行つた。しかしそれには、それを用ひる日本の權利が多分否定されるであらうやうな手段を必要とした。そんな手段を用ひずしては、朝鮮改革には一縷の望みもあり得ない。そして朝鮮は、改革をしなければ、依然として世界の平和に危險の一根源となつて居るであらう。

日本は、若し日本の獨占的な軍事保護國でない何か他の事がその所要の結果を齎すなら、朝鮮問題に單獨政策を主張しはせぬであらう、と我々は思ふ。ところが、軍事的保護國でないものといへば他に一つしかない――卽ち、それに關係のある諸國が結合して、その聯合の保護と共同の壓迫の下に、獨立した國家として朝鮮をどうかして改革する事である。

それには、日本はその利害關係が至當とする所の、管理の主要な部分を委託され、そして露西亞勢力の優勢を適當に警戒しなければならぬ。語を換へて言へば、日本は歐羅巴の精神的援助を以て朝鮮を改革することが出來ると思ふ。そして日本はそんな援助無くしては——今次の戰爭はそれと比べてはただの兒戲であるやうな一大戰爭へ東洋を投ずるといふ危險を冒さなければ——さうする希望を殆ど抱き得ないのである。一方また、日本の軍事的並びに行政的手腕に對する歐羅巴の信任は、今や非常に堅固なものとなつて居るから、主要な諸强國は、多分欣んで朝鮮の妥當な管理を保證し且つ援助するであらう。支那がもつと進步した狀態で居れば、この問題はもつと容易に解決するであらうが、支那も亦不幸にも現在は、その政治的並びに軍事的弱みの爲めに、世界の平和にとつて危險の一根源である。

『金誡』に就いて

一八九四年十二月十四日金曜日

サーディが引用して居る亞剌比亞の或る諺に、『實にや惡しき者に善きことを行ふは、善き者に惡しきことを行ふに劣らず不善なり』といふがある。總ての人が等しく正當に、何が惡か、何が善かを正確に判斷する事が出來れば、前述の諺は、普通に善行或は惡行として認められて居るものに關して、非難を受けるものかも知れない。ところが、不幸にも、人間といふものは、一般に言つて、自分が直接若しくは間接にその行爲に依つて影響さるるところがなければ、行爲そのものを判斷する能力を缺いて居るものである。といふだけでなく、或る國に於て善であることが――單に理論上ではない、社會狀態の相違の爲めに、事實上――他の國では惡かも知れない、といふ事がある。また、ただ一つの、同社會に對してさへ――社會の變化は倫理の變化となることであり、變化は世紀毎に來るから――善

行若しくは惡行の一般法則を定めるほど困難なことはない。他のあらゆる問題同樣に、道德の問題は、時間と、場處と、境遇とに應じて、必然的に相對的なものである。判斷の事柄には人間は誤りがちであることを十分に許容して、ただ相對的にだけ考へて、サーディの諺は多大の眞理を含んで居る。社會の――社會を、文明生活の到達し得る最善の狀態といふ意味にだけ用ひて――社會の敵に輔助と機會とを與へることは、社會の味方に勝手な不正行爲を加へるよりも、一層有害なことが屢〻あることは疑ひを容れない。これはまた、一般に言つて、文明社會の發達に――誤つた慈善といふ方面に異常な失策をしたことはあるが――人間が遣り來たつた行爲の一原則であつた。より惡るい救濟策を用ひて、爲めに困窮を進ませ、また避く可からざる不幸を增す社會が爲した經濟的並びにその他の了簡違ひについては、――普通提供さるゝ辯解は所謂『金誡』〔『馬太傳』七の十二參照〕に基づいて居るものである。

今日はこの嘗ては非常に尊重されてゐた敎訓は、頗る嚴しい非難を受けつつある。ハーバート・スペンサーは數年以前に、遺憾は、個人にとつても、社會にとつても、道德的義務である事が多い、ことを指摘した。そして當の金言に就いて彼はかう述べた――「凡て人に爲られんと欲ことは、爾曹また人にも其のごとく爲よ」といふのは、寬大と正義と

を併せて一つにする命令である。先づ第一に、それは公正といふことを根據に、諸君が他人に對して爲せよと言はれる事と、深切といふことを根據に、諸君が爲せよと言はれる事とに、何等の區別を置いてゐない。それから第二に、それはそれを行ふ者の我々が呼んで權利(ライト)と稱へて居るあの要求(クレーム)を、公然にも暗々裡にも、少しも認めてゐない』ハクスリ教授はその近著『進化と倫理』の中で、この問題の事實を更に平明に、且つ目ざましく述べて居る。——

『行爲のそんな法則の寛大さをどんなに多く人は賞めようとも——一般普通の人間はその法則をその十分な論理的結果まで實行しないものだと完全に手繰りにすることが出來よう、とどんなに人は信じても——しかし、そんな結果は文明な國家の存在とは兩立の出來ないものである、といふ事實を承認することが望ましい』

言ひ換へれば、『金誡』を基に行動しては社會は存在する事が出來なからう、といふのである。教授は進んで言うて居る、——『といふのは、惡事を行ふものはいづれもその最も望むところは、己が行爲の苦しい結果を逃れようとするにあるであらうと思ふ。若し自分の物を盜んだ男の地位へ自分を置いたならば、自分は科料に處せられまい、牢屋へ入れられまいといふ非常な願望に自分の心は捉へられて居ると思ふ。……嚴密に言へば、金誡

は法律を破る者に對して法律を運用せしめることを拒んで、法律を否定することになる。……それは、それを否認する社會の保護の下に初めて、一部分でも、我々は從ふことが出來る。そんな庇護がなければ、金誡を守る人達は、天國に入る望みに耽ることは出來ようが、他の人達が、此の世の主人となることを確實に承認しなければならぬ」

上述の事は全く眞實である、しかも頗る眞實である。そして目今旅順口の虐殺に對して法外な程不正な非難に耽つて居るあの新聞達に一考を求むべきものである。世界は完全なものではない、これまで決して完全ではなかつた、多分またいつまでも完全にはなるまい。それならば、世界が今よりももつと善くなる迄は、人間が戰時に何等の遺恨を外に示さぬことを期待するのは、理窟にかなはぬことである。我々が要求し得る最大なことは、その遺恨の念が現世紀の道德的判斷がそれに置く限度を越えない事、——女と子供と、そして手緣りない非戰鬪員を殺さない事——である。平和な時の生活でさへ金誡どほりに行へないなら——戰時にあつてはどんなにか行へないことであらう。

がしかし、我々がそれを批評し來たつた誡律の標準は、絕對的にそれを守るには餘りに高いからといつて、それでその價値を損じはしない。それは、あらゆる文明な國及び時代に、一部分人間の行爲に影響を與へたものである。世界が道德的進步の道を辿るのに助け

となつて居る。人類は、到達し得られない理想に達しようと力めて——不可能なるものゝ神聖な誘惑に賴つて——初めて進步するものである。

隨筆八種

或繪の物語

『ローマの祭日のために屠殺されて』――バイロン

この頃發行のベルリン『繪入雜誌』にガブリエル・マックスの『最後の告別』[註]と題する繪の著しく立派な版畫が出たが、ミュンヘンにある原畫に相當の出來である、――この繪は一度これを見た人に取つては決して忘れられない物である。現代の畫家のうちでは、恐怖と悲哀とを調和するやうに混和する技術に於て恐らくマックス程の人はあるまい、そしてこの人の作では、この『最後の告別』よりももつとこの特色の現れた物はない、この繪は着色と構圖の驚くべき傑作で、魔法使の鏡が不可思議に眞に迫つた過去の生きた影を反射するかと思はれる程に珍らしい繪の一つである。

美しいローマの少女が野獸に喰はれるためにコロシウムにさらされて出て居る。彼女の

手足のやさしくほつそりしたところと、美しい小さい薔薇色の顔の子供らしいやさしさから判斷すると、未だ十八歳になるかならずであらう。その顏を彼女は多分野獸のやうな劍士のために裂かれた立派な黒い被ひの殘りで、無恥の民衆の無禮な凝視を避けようとしてゐたが、無駄である。彼女は大きな石塀を背にしてよりかかつて、黒豹の熱い恐ろしい息が彼女の素足の上にすでに温くかかつて居るが、何等恐怖のしるしを示さないで靜かに彼女の運命を待つて居る。數尺離れた彼女の右手には豹と大きな熊が互に噛み合つて居る。左の方にはもう一つの洞穴が今開かれたところ、そして入口には碧玉のやうに輝く眼をした非常に大きな虎の恐ろしい頭が見える。

諸君は、この場内の黄色の砂に落ちて、血と罪惡のその場面を照して、野獸がなめないで殘して置いた人間の黒い血の溜りを乾かす烈しい夏の太陽の炎熱を殆ど感ずる事ができる。諸君は上の方の十萬の聲の深いつぶやきと、下の方の鬪つて居る野獸の恐ろしいうなりを聞く事ができる。諸君はその殘酷なる見物人の大群集のうちに、人情のかすかな衝動、『かあいさうに』と叫ぶだけの舌が一つでもあるだらうかと疑ふ。

そんな物はない、ただ憎むべきささやきにつづく野卑な笑聲があるだけ、下の列には恐るべき無頓着があり、上の席からは血に渇した性急があるだけ。

二人のローマの武士は妙な賭け事をしてこの單調な場面を紛らして居る。
『あの女をあの虎が先きに取るとして百セステルシアス（約一圓）賭けた』
『黑豹に二圓賭けた』
『よし、きまつた。ところで獅子はどうした』
「さあ、あの野蠻人の畜生めが今朝最後の三頭を、片端から殺してしまつた。獅子のうちで上等の物ばかりだつたが』
『誰の事を云つて居るのだ、——あの背の高い淺黑のスレース人かね』
『いや、あれは獅子を殺したその劍士にその前の日に殺された。あの金髪の巨人——あのゴート人の事さ。あいつは何でも本國では酋長とか何とかだつたと云ふ話だ。何だらうが誰だらうが相手になつた物はこれまで皆殺してしまつた。そこで今朝裸にしてマーミロウ[註二]のもつ盾と劍を一口だけもたせて場內に出して、獅子を一頭づつけしかけたのさ。おれはあの小さいヌミディア（アルジエリア）產の獅子に十圓賭けたが、あのやつ、跳びかかつて來るのをたつた一つきて殺してしまつたのでおれは十圓損してしまつた。本當にあのゴート人なら十二頭位は相手にできるな』
『なる程えらいやつだな。木劍だつたのか』

『デュリウス・コルトナスの話てはさうだと云ふのだ。おれは十圓損したので餘り癪にさはつて、あとは見ないて歸つた』

『あの虎の畜生め、――あいつあの娘を恐ろしがつて居る』

＊

『おや、あんないゝ手足の女を獅子に食はせるのは馬鹿馬鹿しいな』この頃ローマに着いたばかりのギリシャの商人が叫ぶ。『全く眼ても髪てもヴィナス・アナディオメネのやうだ。奴隷市場へもつて行つたら一かどの財産になるのだがな――』

『馬鹿な事、ローマの奴隷市場だやさうはいかんよ。ルクルスなどは八つ目鰻をふとらせるためにもつと綺麗な女を魚の池に投げ込んて居るよ。あの虎の畜生、地獄に墮ちてしまへ』

＊

その虎はやはり未だ動かない、大きな頭と赫々とした緑の眼は洞穴の入口に丁度見えて居る。豹と熊はやはり闘つて居る。黒豹は次第に、そつと、音を立てずに、その哀れな賴

りない少女に近づいて來る。

突然鮮かな眞紅のばらの花が、ずつと上の方の席から投げられる、それは誰か古い女人――事によれば兄、事によれば（あゝ神よ）愛人からのこの世に於ける最後の挨拶、最後の告別のしるしてある。それが血に染まつた砂の上に落ちて、少女の足もとに芳香を發する破碎物となつて散る。

彼女は自分の前に紅い花びらの散るのを見て驚く。石塀から離れて哀れな破れた殘りの被ひを大膽に押しのけて、憐みを知らない顏の大海を見上げる――やさしい子供のやうな、櫻桃（さくらんぼ）のやうな唇のある顏と、大きな黑い、穩かに悲しいローマ風の眼で見上げる、――愛の最後の眼つきてその人に禮を云ふために。「それは誰だらう」

誰もこの少女を知つて居る人はない。彼女はただ殘酷な野卑の顏の殆ど限りの知れない列、野獸のやうなローマの民衆の顏、――生きた人間のからだの四肢が獅子に裂かれて人肉の紅い細片となつて砂の上に散亂するのを見て喜ぶ顏を見るだけてある。……

突然恐るべきしかしなつかしい眼が、彼女自身の視線と合つてそれを止める――鋼鐵の刃のやうに鋭い冷たく青い眼つきてある。流れるやうな黃色の髮をした嚴しい立派な北方人種の顏てある。暫らくその鐵の唇が憐みの微笑に和らぐやうに見える。そして鋭い青い

眼はもつと輝いて來る。その哀れな告別てその眼が合つた穩かな黑い眼も同じやうになる。
彼女はその知らない友人を見つけたのである
……突然倒れる音——烈しいうなり——かすかな賴りない叫び——溫い輝いた血汐。

*

『あゝ、カイウス、君は一圓損した。今日は君の運が惡いよ』
『畜生、忌々しい。君はあのばらの花を投げたあの馬鹿を見たか』
『黃色の髮をした大きな背の高いやつか』
『さうだ。あれが例のゴート人だ』
『何、獅子を幾匹も殺したあの劍士か』
『さうだ、今朝それて自由を得たやつだ。見給へ、あの馬鹿者は今眼をふいて居る。あのゴート人と云ふやつはヘラクレスのやうに戰ふが女の子てもどうかなると女のくさつたやつのやうにめそめそ泣くのだ。何ても北方ては女と云ふ物は不滅の神樣のやうに禮拜する事になつて居る。あの赤い髮のやつを引出してあの虎の畜生を殺さしてくれるといゝとおれは願つて居るのだが』

註一　この繪はもとミュンヘンにあつたが、カザリン・ウルフと云ふアメリカ婦人の購ふところとなつて、その外の繪と一緒に二十萬弗の保存費と共にニュ・ーヨークの美術館に寄附されて、今同館の二階第十七室に陳列されて居る。今はこの繪の題は「最後の記念」となつて居る。ガブリエル・マクスは一八四〇年生れのアウストリヤの畫家。

註二　マーミロは兜に魚の形をつけた劍士の事。

地獄の門に咲く百合の花

ダンテの『地獄篇』の第五章にあるあの不滅の挿話は、四百年以上も文明世界の文學と美術に感興を與へて來た、今日に於てもそれによつて興味が益々引き起されるところを見ると、『神曲』の傑作は永久に生きると云つたヴォルテイアの豫言も正しいやうに思はれる。その偉大なる三部曲のうちで、それ程やさしいそれ程藝術的眞實をもつて微妙に震動して居る事件は外にない。カーライルはそれを『永遠の黑色の土の上に虹て織り出された物』と云つた。リー・ハントは同じやうな烈しい感情でそれを『タルタラス(ギリシャの地獄)の入口に咲く百合の花』と云つた。それを題にした名高い油繪やスケッチが澤山ある、しかしドウレのあの恐るべき美しい畫(デザイン)として知られて居る物程廣く知られて居る物はない、——その繪は私共の眼界に『全く光の達しない』廣大な場所を表はす、その中には戀愛のために永久に失はれた人々の無數の群が黑い嵐のために『空中に長い列をつくつて

……丁度鶴の飛ぶやうに」あちこちへ掃き去られて居る。

ダンテを少しでも讀んだ人々、或はボッカチォの解說にあるそしてリー。ハントの『イタリヤ詩人の話』にも出て居るこの悲劇の珍らしき說明を讀んだ人々によく知られて居るこの話――フランチエスカ・ダ・リミニの話を物語る事は、たとへ私共の目的であつたとしても、恐らく不必要であらう。しかしこの一文を書く氣になつたのは巴里のチエ・ロスチャイルドで出版されたばかりの美しい小さい書物を讀んでからである、著者はシャール・イリアルテと云ふイタリヤの中世紀の特質及び偉大なるフロレンスとヴエニス時代の美術史に精通した名高い人である。『傳說及び歷史に於けるフランチエスカ・ダ・リミニ』と云ふのがこの面白い書物の題て、その中にはその話を說明する爲めの名高いアングルやアリ・シエフアの畫(デザイン)の立派な飜刻が加へてある。怪奇的な裝飾の複雜な圖案が每章の始めと終りに出て居る。珍らしい、少し化け物じみたダンテの肖像もある。

この書物のうちにシャール・イリアルテ氏はこの挿話に關する一切の歷史的事實を集めて、この問題に關する殆ど凡ての疑を晴らした程、明快にそれを解決すると云ふ著しい考古學的の功績を示したのであつた。彼自身の詩的の言葉を引いて云へばかうである、――「この時代の歷史は全く不明である、しかしこの事件の眞相を私共に敎へて、丁度犧牲者

遂の決して別れる事のない疲れた魂が地獄の第二界の悪臭の空氣の中に浮んで居るやうに、歷史を通りぬけて傳說的狀態に浮んで居ると今も思はれる事件について正しい概念を私共に與へるやうな極めて重要なる書類によつて定められた疑ふ事のできない色々の狀況がある』

　こんな疑ふ事のできない事實をさがす事は多くの人々に取つては飛んで行く影のあとを追ふやうにも思はれるだらう、しかしイタリヤに於て多年考古學的經驗をもつたイリアルテ氏はリミニに於て、ペザロに於て、サン・アルカンヂエロに於て、フランチエスカとパオロ及びこの二人の虐殺者ヂアンコットウ或はヂオヴアンニの跡を發見した。ところどころその跡が歷史的の塵の中で見えなくなるが、もつとさきの方で又現れて、結局一つの著しい結果を示して居る。

　ダンテの挿話は、詩人が通り行く亡靈に向つて話すやうに懇請した戀愛の話の外何事をも語らない。名も示してない、場所も說明してあるだけで表はしてはない。これに反してボッカチオの話は色々の詳細な點も出て居るが巧みに書いてあるだけに信用ができない。しかし『デカメロン』の作者によつて與へられた手がかりはこの考古學者の調査を助けるのに充分であつた、そしてその調査の大體の結果は、その舞臺に上る人々に關するつぎの

信ずべき報告となつたやうてある。

　フランチエスカはギドウ・デイ・ラムベルトウ・デイ・ポレンタの娘であつた、この人は同じ名のギドウで老ギトウとして知られて居る人と區別するために若いギドウと云はれてゐた。この若いギドウはラヴエンナの貴族であつた、僧であり又軍人であつた、即ちその不思議な時代には人は大名と僧正と大將を兼ねてもよかつたからである。イタリヤは澤山の封建の諸國に分れてゐたばかりでなく、又絕えざる內亂で惱まされてゐた。それは十三世紀の半ばであつた。ギドウは勇敢にして大望のある烈しい性質の人、運命の種々の變化を見た人であつた、――時々叛徒のためにラヴエンナから追放されたが、又歸つて來て前よりも一層苛酷にその土地を治めた人であつた。彼は娘のフランチエスカをリミニの貴族ヂオヴアンニ・マラテスタに與へた、――この人はその後メディチ家の人々にふさはしい才能とボルヂア家の人々にのみ比べられる程の猛惡性を示した一族の人であつた。青銅と大理石に殘されたマラテスタ家の人々の頭は今もなほ見る人に感嘆と恐怖の混じた感情を起させる。この人々は古風な鷲のやうな顏つきと、――アウガスタス風の誇りと、――體育的の勇敢と、――憤怒も慈悲もない巨大なる力の現れた顏をもつてゐた。この人々のうちの一人――ジギスモンド――が跳び乘つた時、最も猛惡な馴れない馬が慄へて從順に

なつたと云ふ話がある。フランチエスカの夫もこれに劣らない型の人であつた。しかし彼はたけの低い、不具の、言葉の粗い男であつた、一方の腰に故障があつて、歩く時にびつこを引いたので『びつこ』と云ふあだ名がついた。フランチエスカは彼の三度目の妻であつた、そしてこの結婚は疑もなく政略的結婚であつた。ラヴエンナの大名は、戰爭ではいつも成功して、平和にはその人の執念深き憎惡のために畏怖されたこの有力なる武士との同盟を必要とした。その當時イタリヤの共和國の或市では公衆が信任する事のできる誰か無關係の他人に、その權力を委任する事が習慣であつた、こんな支配者を『ポデスタス』（主權者）と呼んでゐた。ヂオヴァンニは三つの市でこの地位をもつてゐたと云ふ事實、――その上一二七八年と一三〇四年の間に共和國以外の地方でも四度くりかへして選擧された事實から、この人の行政上軍事上の手腕は充分に證明されて居る。フランチエスカと結婚した頃は、彼は三十歳であつた。彼がフランチエスカの父を助けてラヴエンナの暴動を鎮めたのは一二七五年であつた、そして疑もなくその功勞の報酬としてこの美しき少女の手を得たのであつた。フランチエスカ・ダ・リミニによつて彼はコンコルディアと云ふ娘をあげた。

妻と夫の人物について分つて居る事實はそれだけである、殘つて居るのは地獄の第二界

にあるその人の影から彼女は『決して別れる事はない』と云ふその愛人の事である。ダンテは名を示してゐない、ただフランチエスカの亡靈の口からかう云はせて居る、――『カインの地獄の界は私達の生命を止めた人を待つて居る』――そこでボッカチォの斷言のやうにこの殺人は弟殺しであつた事を推論してもよいやうにしてある。歷史は事實を證明して疑を殘してゐない、――即ちフランチエスカの愛人は、このびつこの猛惡な大名の弟――『美男子のパオロ』と云ふ有難い名前で一般に知られて居る程兄とは似てゐない弟であつた。恐らく兄の勢力によつて、パオロは色々の高い役にゐた、彼は立派な風采の男であると共に手腕もあり頓才もあつた。十七歲の少年の時に、或伯爵の娘のオラビレ・ビアトリチエと結婚して六年を經てフランチエスカを見たのであつた。中世紀の文書から集めた多くの證據は、彼は兄の代理となつてフランチエスカに求婚した事、彼女は――その當時僅か十八歲――ひそかにに彼を愛した事、――後になつてその戀愛が爛熟して、詩人、彫刻家、畫家及び音樂者が必死となつてその天才を捧げるやうな悲劇を生むに至つた事を證明して居る。その事件が起つた次第は多分ダンテが知つてゐたらう、ダンテはフランチエスカの父の親友であつた、そしてフランチエスカが子供の時分にダンテがあやしたりなどしたらうと思はれるからである、――

……或日の事私達は、なぐさみに
戀に惱んだランスロットの話を讀んでゐた。
私達だけであつた、恐れる事はなかつた。
それを讀みながら度々眼が合つた、
そして私達の顏の色が變つた、
しかしただ一つの點て私達が負けた。
こんな立派な愛人にキスされて
そんなに待つてゐた微笑の浮んだ事を讀んだ時、
この人、私とは永久に離れる事のないこの人は、
慄へながら私の口にキスした。……
その日はそれからさきは讀まなかつた。

その書物は『湖のランスロット』と云ふ古いフランスの傳奇てあつた、――この書物は南フランス語、フランス語、ラテン語の三國語てその當時イタリヤて博く讀まれた物てあつた、この二人はこの話のうちの最も危險なところを讀んてゐた、彼等の燃える頰が觸れ

た、眼が合ふ、唇がからむ……その日はそれ以上彼等は讀まなかつたのであつた。しかし怒れるマラテスタが殺しに入つて來たのはその時ではなかつた。

事實よりもむしろ好みによつて、ボッカチオやペトラルカのもつと言分けになりさうな說——『憐みのために氣絕した』その不滅の詩人の叙述によつてことに同情を催ふすやうになつたその說——を取つて、——詩人、小說家、彫刻家、及び畫家はフランチエスカは彼女の心から選んだ人を欺き取られて、彼女の唇が愛人の唇に始めて觸れた丁度その瞬間に嫉妬深き夫のために犧牲になつた美しい若い花嫁として表はす事を好んだ。或は又この題はそれ程やさしく取扱はれて居るので、私共はフランチエスカに對して感ずる事、なほバルザックの「怨すべき罪」の女主人公——全く罪はあるがひどく責める事のできない婦人——に對して感ずるやうである。私共はマラテスタがツーレインのロッシユ・コルボンの大名、老ブルインのやうにやさしければよかつたと思ふやうに敎へられて居る、同時に美しいパオロの犯罪は美少年の小姓ルネの過失よりももつと非難すべき物とは思はれない。悲しいかな、——リミニとラヴエンナにある記錄のうちに、イリアルテ氏が發見した證據はさうではなかつた。

パオロはマラテスタに殺された時、オラビレ・ビアテトリチエに結婚してから十六年經

過してゐた、フランチエスカは悲劇の時にはヂオヴアンニに結婚して十年になつた。彼女は結婚した時が十八であつた、——それ故死んだ時は二十八であつた。フランチエスカの結婚以前にこの二人は愛してゐた、それから私共は、最初の罪のキスは操正しき十年の期限をへて始めて交換されたらしいと想像する事もできない。フランチエスカがマラテスタに對して不忠實であつたと同じ程度に、パオロもキラビレに對して不忠實であつた、そして二人の愛人共すでに子供があつた。數百年の後、その憐れむべき人間の過失の歴史は赤裸々に露れた、そしてその眞相を隱す幕としてその上にかけてある美しい被ひを永くそのままにして置く事ができない事、なほ今もバラッザ・ガムパルンガに陳列の枠に入れてある金絲入りの絹の片を、フランチエスカが死んだ時に着てゐた絹の上衣の一片であるとは本當に思はれないと同じである。私共は今犯罪の事實を知つて居る、——私共はそのすばらしい思ひ切つた犯罪の時代に於ても、それがどんな風に言分けされたかを知らない。

しかしそれにも拘らず、私共が知らないからフランチエスカに對して一般の人々が同情と容赦をしてもよいだけの事情があつたのだらうと信ずる權利がある。彼女の殺害のために同情と憤怒が嵐のやうに起つた事、それから愛人同志が一つの墓に埋められたと云ふ相當に根據のある事實、——これ等はこの事件に不思議な哀感を添へるリミニの公衆に知ら

れた物があつたが、過去の外の記憶と共に永久に過ぎ去つたのである事を示して居るやうに思はれる。マラテスタが自分の弟を殺さうとした時、心ならずも妻をも殺したと云ふ事、及び彼は『自分自らの生命よりも彼女を愛した』と云ふ事などは、その殺害のあつた翌日直ちにウゴリノ・フアンタリニの寡婦、ザムブラジナと結婚したと云ふ新しく發見された事實によつて充分否定される。

この薄弱なる傳説はこの通り相當にまとまつた史實の列擧に結晶した事になる、――イアルテ氏の著書は、ところどころ言葉の消えて居る中世紀の文書が明るみに出されやうである。恐らく數世紀の過去がその埃だらけの指で何物かを消した方がよかつた、何故なればその何物かがないので私共が穩かなる疑をいだく事ができる、そしてその隙間へ神秘なる憐みを入れる事ができるからである。私共はダンテを讀んで居る間に、パオロとフランチエスカの今明らかになつた人間性を殆ど忘れる、そのフランチエスカの著しい美については凡ての歴史家と歴史的文書は一致して居る。私共は無數の亡者の間にあるその二人のまぼろし、――希望なしにやはり愛して居る、そして過去の幸福を思ひ出す程不幸の間の悲みはないとささやきながら、永久に最初のキスの記憶に建つて居るこの二人のまぼろしによつて始めて起されたと同じ不思議な同情を感ずる事ができる。

イツアルテ氏によつて明るみに出された新事實で、研究の價値のある物がある。パオロ
ー法王の記錄にも美男と書いてある――とオラビレ・ビアトリチヱとの結婚は愛の結婚で
はなくて、丁度フランチヱスカとマラテスタの結婚も選んだ結婚ではなくて政略上の必要
てあつたと同じやうに、不和確執を和らげるために行はれた結婚てあつた事てある。

ハメリンの笛手

一二八四年六月二十六日、ブランスウィックのハメリンと云ふ妙な古い都、——名高いハノーヴァ市の近くの都に非常な事件が起つたと云はれる、——疑もなく私共の多くの讀者はそれに關するブラウニングの有名な詩をよく知つて居る事と思ふ。見知らぬ、妙な顔つきの、化物じみた眼つきの、變な服裝の男、——そこのよい市民のうちで誰も前に見た人のない男が、市役所に入つて來て、そこの市を惱ませる無數の鼠を退治する代りにいくらかの金を貰ひたいと申し込んだ。この鼠はたしかに十二世紀頃始めて歐洲に現れた黒い種類の物であつた、そしてその數と事實について澤山の傳說が未だ存して居る、——その中には三人の異なつた僧正が鼠に喰はれた傳說もある。コロンニュのアドルフ僧正は一一一二年に鼠に喰はれたと云はれる、それてハメリンのよい人々も自分等の生命のために恐れる理由があつたらしい。彼等は喜んでその見知らぬ男の親切な世話を受け入れた、そこ

てその男は直ちに一本の笛を取り出して、人間がこれまで聞いた事のないやうな最も不思議な音樂を奏し始めた。幾百萬又幾百萬と云ふ鼠が彼の周圍に集まつた、音樂が鼠を穴から引き出したのであつた、それから鼠はその不思議な樂人のあとについて水際まで來た時に、その男はその鼠を皆落して亡ぼしてしまつた。ところで市の役人達は彼に金を拂ふ事を拒絶した。彼は再び笛を奏した、そしてその市の子供等を悉く自分のあとへ引きよせた。爾親達は子供等をとめたかつたが、力が及ばなかつた、そして惡魔のやうな笛手が百三十人の子供をコッペンベルグと云ふ大きな岡のわきまで連れ出すと、その岡は口を開いて、それを入れて、歸られないやうに岩の顎を閉ぢてしまつた。逃れた者はただ一人であつた、その子供は跛で仲間と連れだつて行けなかつたからであつた。『まだらの着物の笛手』のあとから行つたあとの子供はそれからどうなつたか分らない。

私共はこの不思議な傳説を餘りはつきり覺えてゐない人々、或はブラウニングの半ば滑稽な、半ば物すごい詩をよく知らない人々のために、この傳説にある出來事の要點を述べただけてある。ところで注意すべき事には歐洲の外の地方で同じ傳説が外の形で存在して居る。別の妙な笛手は同じ道理でロルチの子供等をタンネンベルグ河へ笛を吹いて誘つた、魔法使のやうな胡弓ひきがブランデンベルグの子供等を胡弓で誘つてマリエンベルグの山

へ入れた。最もよく知られて居る傳說——ハメリンの傳說——の日附はすでに云つた通り——十三世紀の末——一二八四年六月二十六日としてある、そして鼠に喰はれた名高い人物の多くの傳說は——そのうちの一つがサウジーの名高い物語歌の題材となつた——皆もつと古い。歐洲が鼠のために惱まされたのはその前の世紀の事、東洋から黑い鼠が始めて移住したあとの事である。一般の人心に强い印象を與へた異常の出來事はそのうちに誇張されて神話になるか、或は歪められて歷史的に分らない物になる事がよくある、それてハメリンの笛手の妙な寓話が實際十三世紀に起つた或異常な事件にその源があると推測するのは許容すべき事である。傳說のうち鼠に關する部分はもつと以前の時代に歸した方が安全であらう。單純な事實が復雜な寓話になるあの不思議な變形作用によつて互に混和する二つの別々の神話、或は一つの神話のうちの二つのはつきり分れた分子を私共は區別したいと思ふ。とにかく鼠の神話の起原がぼんやり曇つて居る間に、迷兒になつた子供等の話は笛手がまだらの服裝をしてハメリンに入つて來た以前半世紀に起つた極めて妙な歷史的挿話に遡る事が明瞭にできる。

その時代は妙な徵候と妙な疫病の時代であつた、本當の狂氣、——迷信の狂氣、宗教的熱中の興奮、罪惡の狂氣——の時代、魔法の時代、道德的肉體的不淨の時代、——それか

ら先きのもつと悪い世紀の狂氣のやうな癲癇踊と恐ろしい病氣の先驅となつた癲病の時代であつた。恐ろしい物でない物は怪奇的であつた、惡くない物は愚かな物であつた、――人々は何でも信じ何でも敢てする事が可能になるやうな無智と恐怖の狀態にゐた。そして後に種々の舞踏病と自ら鞭ちながら歩く人々の行列になつたやうな神經的刺激感受性は、ヘッケルでも深い心理學研究によつても當分は分らないと云つたあの異常なる情緒、及び『子供の十字軍』及び子供の巡禮を起すやうになつたあの異常なる情緒に現れた。こんな運動は三回より少くはなかつた、――第一回は一二一二年に、第二回は一二三七年に起つた、第三回はこのうち最も重大でない物だが、一四五八年までは起らなかつた。私共は第一回の子供の大移動、或は子供の十字軍の事を云ひさへすればよい、それは種々の明瞭なる移住運動であつた。

一二一二年六月頃ドイツのコロンニュとフランスのヴアンドームとで殆ど同時に、二つの大きな子供の大軍が、子供の豫言者の召集に應じて集つた、この豫言者は天から神託を受けて居ると信じた、或は信じて居ると裝つた。大多數は少年であつたが、數千の少女もゐた。その豫言者の長は歷史ではクロアのエティエンヌ(スティヴン)及びコロンニュのニコラスとして知られて居る――兩方とも十二ばかりの少年であつた。これ等の少年は異

致徒のサラセン人に對する十字軍を起す說教をした——血の十字軍でなく、祈禱の十字軍、赤坊や乳呑兒の口から出る祈禱の十字軍であつた。少年達は海まで行く、それが昔イスラエルの人々のために開いたやうに開いてパレスタインまで足ぬらさずに行く事ができると云ふのであつた。そこへ行つて彼等はイスラムの大將達を改宗させて、異教者に洗禮を施し、祈禱と信仰によつて無數の王公や諸侯や武士などの武裝した人々のなし得なかつた事をなしとげようと思つた。この說教が及ぼした傳染的興奮は、私共の今日の心では充分に理解のできない物であつた、——多くの都市の全部の少年分子はこの情緒的疫病に打たれて運び去られた、——この病氣を止めるためには道理も、切諫も、淚も、暴力さへも無効であつた。兩親のために監禁でもされると少年はひきつけのために死ぬか或は次第に衰弱して行つた、——彼等の神經の興奮は道理にも聾とならせ、愛にも盲目とならせた、そしてこの狂氣は貧しい人々や町人に限られないで貴族の家まで侵入して、その城から武士や男爵達の相續者までも引き出した。最後にこの狂氣を押へようとして烈しい方法を採用した凡ての人々に對して異端の叫びが擧げられた、そして迷信と宗教狂の聯合した力のために七萬の家族は親權を剝奪された。餘り時を隔てないで、ドイツの少年の二隊の武裝しない軍勢——殆ど凡て十二歲以下——が海を越えて聖地へ行くために、コロンニユを離れた——

―第一隊は名高いニコラスに、そして第二隊は名の知られない主將に導かれた、――その聯合軍の數は四萬であつたと信ぜられる。その中に澤山の少女もゐた。同じ月にフランスの少年の別軍はスティヴンに導かれて同じ『十字軍』でヴァンドームを出發した、それには少くとも三萬人はゐた。ドイツの少年は恐るべきアルプスの峠を横ぎつた――(如何なる名將と雖も恐るべき艱難を經ないではそこを通過した者はなかつた)――そして海に達するためにイタリヤに下つた。ニコラスはモン・スニを横ぎつて一萬三千人を失ひ、名の知れぬ主將はサン・ゴターを横ぎつて一萬七千人を失つた。フランス軍はマルセイユに達した時は二萬人に減じてゐた、暑熱と飢とて無數の屍が途中一面にできた。多分この十字軍に從軍した七萬人のうちで、再びその兩親に消息の知れたのは二萬人以內であつたらう。生き殘つた少年の大多數は外の者と一緒に行けない者――ハメリンの笛手に隨行できなかつた跛の少年のやうな者共であつた。

ドイツの子供のうちでは三萬人失はれたと知られて居る。フランス人のうちでは多分一萬五千人は歸らなかつた。ニコラスの軍勢はゼノアへ達した時は痛ましく減少してゐた、そして海が開いて通してくれなかつた。そこで解散になつたが、ピザまで行つてそこから船で聖地へ行つた少年もあつた、知られない指導者の軍隊に屬する外の少年達はブリンデ

イシに到着して、そこから『パレスタインへ船出した』――恐らくこの世でない聖地へ行つたのであらう。多數は祕密にサラセン人の奴隷に賣られたらうと想像すべき理由がある。五千人のフランスの少年は同じやうに不運であつた、――それは二人の狡猾なるマルセーユの商人は『聖地へ向ふ船に乘る』やうにと云つて誘き出して、その航海に生き殘つた者を悉くマホメット教徒の奴隷商人に賣つたからであつた。もしヂエルサレムに達した者があつたとすれば、それは奴隷としてであつた。

この不幸な十字軍に關する歴史の知られた斷片は悉くヂョーヂ・ザブリスキーの物語、或は『子供の巡禮』に關するヘッケルの論文のうちに發見されよう。これ等の記者はドイツの十字軍の子供の話を非常に詳しく述べて居るので、生き殘つた者の數は私共が暗示したよりも少いと云ふのが本當らしい。賢い情け深いゼノア人は澤山の者を救助した、しかし殺されたり、誘拐されたり、奴隷として賣られたり、飢と困苦のために死んだ子供の數は恐るべき程であつたに相違ない。少女のうちで本國へ歸つた者は殆どなかつた。ヘッケルはこの運動を動物の移住に現れる大きな本能的衝動に比較して居る。ところで動物の移住はいつも大勢の殺戮者につきまとはれる、それでこれ等の少年達は始めから終りまで餌食をあさる者――金と人肉の富んだ獲物を收めたに相違ない下等な男と腐つた女、泥棒と

人さらひ――につきまとはれてゐた。

今日最も偉大なる病理學者が明らかに說明のできない、そして十三世紀に於て全地方から小兒を全く奪ひ去るに至つた衝動を、數千の人々は當然惡魔の仕業と考へた。僧侶までもこの運動を『惡魔の工夫』だと云つて攻擊したが――多分別の大人の十字軍を起すためのインノセント三世の工夫である事を知らなかつたのであつた。或人々はこの運動を魔法の故だと云つた、又或人は、その時代には市中を裸體の女が走るやうな精神的錯亂の多くの徵候が現れたと確言した。異端と攻擊されるのが恐ろしさに言論の自由は束縛された、しかし多くの人々は內々豫言者は卽ち魔法使であると考へてゐたに相違ない、そしてニコラスやスティヴンのやつたやうな事業は迷信的傳說のためにすぐに物すごい笛手の物語に歪められる事ができる。事實ニコラスは狂氣の笛を吹いて、多くの都市の子供を山中に導いたのであつた、そして山が氷の牙をもつて彼等を嚙み、玄武岩の口で彼等を呑んだと云ふ點で、歷史はその物すごい傳說の正しい事を示して居る。彼等は實際山の中に眠つて居る、――しかしコッペンベルクやマリエンベルグやタンネンベルグではない、――スプルーグンとサン・ゴタールの下、及びウーリ河の物すごい峽谷に彼等の無數の墓がある。

……私共の説のためには不幸にしてハメリンの笛手と同じ結果になる古い支那の寓話がある。それにも拘らず私共の臆説には或歴史的根據があるやうである。

女劍士

ヴィヂアンの『復古時代の劍術の教師』――私共はすでにいくつかの拔萃をした面白い書物――を讀んで行くと二つの名高い傳奇のうちの事件をはつきり思ひ出す。それはデ・クインシーの『スペインの尼』とテオフィル・ガウティエの傑作『マドモアゼル・ド・マウパン』とである。私共の讀者の多數は多分このデ・クインシーの不滅の隨筆をよく知つてゐて、隨つてその物語は正確な文書に基づいて居る事、それからカタリナの流浪は現代歐洲の殆ど凡ての國語で書かれて居る事を承知の事であらう。恐らくデ・クインシーの物語は時々少し冗長であり、その哀感もデ・クインシーの特長ではなかつた。しかし彼が取扱つた事實はそれ程驚くべき物であり、その哀感も異常であるから、この話を讀む人でその話に感動しない者はない。しかしカタリナの事績のうちには超人間的な物もある。私共は容易にその少女――武士の娘――が自分の意志に反して入れられた修道院の紀律を守る事

がてきなかつた事が分る、――私共は彼女の脱走の話、森の中で始めて着物を仕立てようと試みた事、この『少年』の立派な形と立派な服にひどく魅せられて絹とびらうどの制服を着せてくれた金持ちで喧嘩好きのスペイン紳士の家來の一人に取り入れられた事を信ずる事ができる。それ程信じられない事はその少女の驚くべき劍術の達人であつた事――無數の決鬪に出ていつても勝利者となつた事である。その當時の非常に美しい、繪のやうな軍服を着たそんな立派な人が、澤山の烈しい嫉妬を招きはかない戀愛を受けた事は如何にも自然であつた、しかし如何なる困難をもその恐るべき熟練で切りぬけて、――遂に三人の達者な劍客を相手に一人で戰つて怪我をして、その驚くべき變裝の發見されるやうになつた事は全く理解に苦しむところである。その上その當時スペインの劍術は有名であつた事を考へねばならない、さうするとカタリナは彼女自身の美しい鳶色の皮膚を保護するためには澤山の『巧みな細身の劍』を打ち負かさねばならなかつた。

一方これ等の事がカタリナの在世中に信じられてゐた事を私共は知つて居る。彼女の女性であると云ふ祕密が發見されたあとで、王公でも彼女と結婚する事を誇りとしたであらうが、カタリナは家庭の平和を見出したらしくも、愛の平和を知つたらしくもない、そして最後に亂される事のない安息の地をどこで見出したかと云ふ事は『マドリッドにあるス

ペインの陣營の父にも、——ローマにあるカトリナの魂の父』にも決して知られなかつた。『スペインの尼』から『マダモアゼル・ド・マウパン』に向ふのは、事實の世界を去つて詩的空想の樂園に出るやうな思があるだらう。ガウティエの若い騎士の肖像は疑もなく空想であるが、十九世紀に於ける如何なる空想よりも美しい。……『私はその騎士が馬から下りるところを見ただけて妙な愛着を感じた。もつと立派な人はあるまい、非常に丈が高くはない、しかしからだつきがしなやかに上品であつた、歩きぶりや一々の身振りにも何となく穩かなしとやかなところ——何とも云へぬ程人の氣に入るところがあつた、大勢の女がこんな足や手を羨むのも當然だ。彼の唯一の缺點は彼が餘りに美しい事、——彼の容貌は男としてはやさしすぎる事であつた。彼はこの世で最も美しいと思はれる黑い眼をしてゐた、——それには何とも云へない表情があつた、そしてその眼で見られると誰でも負けない者はない、しかし彼は未だ甚だ若いから、そして髭のしるしも見えないから、顏の下の方の穩かな完全な輪廓はその鷲のやうな眼の銳さを和らげて居る、彼の黑いつやのある髮は頸の廻りに大きな卷き毛になつて垂れて、彼の頭に甚だ特色のある樣子を與へて居る。……そこに何だか凄いところがある。……全くどうも分らないところがある。神は決してそんなに黑い、そんなに長い絹のやうなまつ毛を人の目ふたにつけた事はなかつた。

……しかもこれは全く亂暴な騎手であり、向ふ見ずの決鬪家であり、思ひ切つた獵人である、……』

その舞臺は勿論丈の高いしなやかな姿の婦人が自分の性を容易に隱す事のできる繪のやうな服裝の時代に置いてある、しかしこんな『少年』が女らしく見える事はたしかにただ血で拭はれる外はないやうな侮辱を時々招く事になりさうであつた。新しいコンクヱ版にあるルイ・ルロアの挿畫はガウティヱの叙述に背かないで、立派な藝術家でない人にもその事件の繪のやうに美しいところを理解させる、――シャルパンティヱ版のヂラウドの版畫は餘りに型にはまつて平凡である。メイソニヱの繪を知つて居る人々は數百年前のフランスの貴族社會の彼の描いた恐ろしい決鬪の場面をやはり思ひ出すであらう、――ラファヱル風の顏をした立派な青年達だが、その型にはまつた微笑には氣味の惡い意味がこもつてゐさうである。これが『マドモアゼル・ド・マウパン』の世界である。

恐らく私共の讀者のうちには、このフランスの小説家の巧みにつくつた想像は實は事實に基づいて居る事――『テオドール・ド・セランヌ』にはやはりマウパンと云ふ名の本當の女のモデルがあつたと聞いて驚く人もあるだらう。劍術の歴史の書類に通じた名高いヴイチアンはこの婦人について私共に少し語つて居る。彼女はサン・シモンの敍述して居る

あの華やかな時代に活躍してゐた、そして劍士としてと同じく騎手としても巧妙であつた。彼女は始めて細身の劍を使用する事を習つたのはその術では稀代の名人、バロン・ド・セザンヌについてであつた、そして長い間劍術で生活を得てゐた。最後に舞臺に立つて見ようと思ひついた、そして相當に成功した。不幸にしてこの人は氣の荒い人であつた。或晩彼女は舞臺のうしろでデュメニルと云ふ名の役者が何か彼女の噂をして居るのをちらと聞いた。翌朝デュメニルが劇場へ行く途中、手に劍をもつた若い騎士が突然彼の前に現れた、そして特に銀鈴のやうな聲で云つた、――『デュメニルさん、昨晩のやうなあんなひどい事を仰つた以上、私とちよつと果し合ひをなさる事に御異存はないでせう』當時は誰でも刀を帶びてゐた。デュメニルは恐ろしい女劍士をそれと知つたので、賢くもその決鬪を拒んで、馬を鞭つて脫れてやれやれと思つた、

ラ・マウパンはいつも私生活では男装してゐた、ガウティヱの美しい『テオドール』程變裝が巧みでなかつたので、色々の强がり連が時々彼女をひやかして見ても大丈夫と考へた。大丈夫な事は殆どなかつた。デュメニル事件があつてから間もなく、ラ・マウパンは前に述べたやうな種類の三人の紳士を公然侮辱した、そして三人に癇癪を起させた。この女は叫んだ、『皆さん、私はあなた方の滿足なさるやうに致します。一人づつ順々にでも、

皆一時にても、どちらの方法てなりとも戰ひます、――どうでも私には差支ないのですから』若い騎士達は一人づつ戰ふ事に同意した、――彼女は三人共皆殺しにした。しかしこの事件のために彼女に對して警察が動き出した、それて彼女は巴里から逃げ出さねばならなくなつた。……これがその人の話を聞いてテオフィル・ガウティエに『マダモアゼル・ド・マッパン』を書くやうな靈感を與へた不思議な女てあつた。

＊

劍術の祕密を殆ど知らない人々に取つては、カタリナとラ・マウパンの事蹟は或は信じられないやうに思はれよう――殊に上流社會の人々は殆どきまつて彼等のすぐれてゐた技術を心得てゐた時代だから。女の細腕て筋骨逞しい騎士や專門的の劍士と眞劍勝負をするに必要な自由自在な力をどうして得られよう。女は昔の半開時代に於けると同じく今日も戰鬪の勤務に必要なる力量と勇氣を充分に表はさない、――タシタスの時代以來、女は美しくなつたが、その代り、强さを失つたに相違ない、今は『石等の强さをもつて』石を投げる事のできる白い乙女の腕は殆どない。しかし劍術に通じて居る人々のよく知つて居る事は、眞劍勝負の際にただ暴力だけては冷靜なる熟練にかなはない事である、そして劍術

の歴史は私共に巨大なる力が科學的訓練のために破れた著しい例を澤山與へて居る。今日でも私共は巴里――そこでは劍術が又貴婦人の間の流行の競技となつて居る――の日刊新聞に、普通の劍士でやさしい女劍士を本氣に怒らせる事が甚だ危險であるやうな例が出て居るのを見る。女でも訓練によつてはどれ程の者になれるかと云ふ例は、ヂャン・ルイの娘に關するヴィデアンの記事で恐らく最もよく分る。

實際シュヴリエ・ド・サンヂョーヂ（同じくサン・ドミンゴ生れ）とヂャン・ルイとの二人のうちどちらがこの技術の完全なる師範であつたかをきめる事は困難であらう、しかし私共はヴィヂアンと共に、ヂアン・ルイの方がいつでも「十九世紀の劍術史に於ける最大の人物」として殘る事を信ずる事ができる。ヴィデアンの父はヂアン・ルイ（つい一八六五年に死んだばかり）について永く修業した、そして今ではヴィヂアン自身がその技術の最も偉大なる教師の一人だが、間斷なしに十年間ヂャン・ルイの法則に隨つて練習して居る事を認めて居る。ヂャン・ルイ自身がどれ程の技倆であつたかと云ふ事はずつと以前にこの欄で公けにした十三人の劍士との名高い決鬪の話から讀者はすでに分つたてあらう。ヴィデアンの言葉を借りて云へば、彼は劍術の大恩人の一人であつた、――即ち凡て無用の劍の遊戲、凡ての奇抜な劍術を禁じて、今日の比類のない嚴重なフランス流の劍法にし

て、フロレンス流、その外の外國流よりも遙かにすぐれた物にしたのである。

この非常に完全なる方法を彼は彼の娘に教へたのであつた、幾分は娘自身の願を滿足させるためであつたが、重なる目的は疑もなく彼の教によつて若い少女でもどれ程の事ができるかを示すためであつた。二年の練習の後、彼は娘のすぐれた腕前を見せるために巴里の最もすぐれた劍術家を幾人か招いてもよいと思ふ程になつた。彼女の最初の相手は專門の劍術の先生であつたが、十九歳の少女に恥づかしくも負けたと認める事を殘念に思つたので、ヂャン・ルイ孃が双方の試合刀の鋒（きつさき）のボタンを取り除けようと云ひ出した時やうやく自分の敗北を認めたのであつた。最も巧みな素人劍術家も同じやうに負けた、そしてこの若い婦人は教師として彼女の父につぐ事ができるとさへ考へられる程異常の技倆を示した。しかしこの著しい勝利のあとで、彼女はトゥルーズのドクトル・ヴエィヤールと結婚して、試合刀を永久に捨てた。この結婚は幸福であつたが、ただ暫らくであつた、卽ちこの若い妻はその年のうちに死んで、夫を慰めるための子供をさへ殘さなかつたからである。しかし彼女は忘れられなかつた。モンペリエの劍術家の間に、——ヂャン・ルイについて學んだ事を今も誇つて居る劍士の間に、彼女は彼女の父と殆ど同じ尊敬をもつて記憶されて居る、そして老人達は今も彼女の事を話す場合には、カタリナ尼がアンデス山脈の向ふ

から大西洋を越えて、——彼女の本國スペインへ凱旋した場合に迎へる程の武士的な賞讃の尊敬をもつて話すのである。

巨人と矮人――侏儒と怪物

人間の性質に於ける巨大なる物に對する趣味は、巨人や異狀の者に對して普通人が大騷ぎをして感嘆するところを見ても、大きな所有慾、宮殿のやうな建築、大げさな住宅に對して教養のある人々が上品な渇望を有して居る事を考へても、凡ての人々に共通な點てある。王公はいつでも宮殿の建築に富を浪費する、そして民衆は肉體の力と巨大なる發達とに對して驚嘆の眼を見張るのである。ローヅ島の巨像（コロッサス）は世界の七不思議の一つであつた、そしてナポレオンの最も誇りとする記念物はアウステルリッツとマレンゴーではなくてむしろ彼の愛した巴里のために彼が建てた壯麗な建築と彼が工夫した改良工事てある やつと歩き出した子供に話される巨人殺しのヂャックの話は歳月の移り時の飛ぶと共に消える事はない。恐らくどの時代から見ても最も成功した諷刺家はラブレーとスゥイフトてあつた、前者はガラガンテュアを創造し、後者はブロブディングナジア人の國を創造した。も

う一人セルヴアンテス——を附加してもよからう、ドンキオーテは世界に珍らしい馬鹿の最もすばらしい巨人であつたからである。奸計に富んだギリシヤ人がトロイを征服しようと考へた時、巨大な木馬を工夫して、その途方もない大きな物で輕信なトロイ人を造作もなく欺いてしまつた。信心深いバンヤンが恐怖に滿ちた民衆を恐れさせようと思つて絶望の巨人を發明した。聖書には巨人の話が澤山ある。神の選民達は身長のもつと高い無數の半開種族と無數の戰爭をした。ノアの船でも凡ての人類を救助したわけではなかつた、神託を受けないイノックの云ふところによればバシヤンのオグはノアの箱船のわきを膝までの深さで渡つて、魚を捕へて日に乾した物を喰ひ一丈三尺五寸の長さのある鐵の寢臺に眠つたからであつた。しかし怒つた神の四十日の雨を逃れる事はできたが、外の人々のやうにどことも知れぬ國へ逃げ出すと云ふ芝居じみない方法でなく、かへつてもつと悲劇的な運命に遇ふ事になつた、卽ちオグは六哩もあるイスラエル人の野營を見て大きな山を引き拔いて、それを高く上げてまさにそれを思ひ切つてその野營の群に投げようとした途端に、巨大な蟲がその山を二つに食つたので、この巨大な怪物はその割れた山の下に埋沒して亡びたのであつた。これはガザの塀を引き倒したら不幸にも自分の頭に落ちたあの巨人サムソンの力業と同じ運命に遇つたのであつた。口の廻らない幼年はその氣のきいた諺のうち

に餘り眞面目でないつぎの歌をもつて居る、

ちびのダビデは石投げて、
ゴリアテめかけてほうり投げた、
頭にゴリアテ石あてて
ばつたりゴリアテ死んぢやつた

ギリシャ、ローマの古代にも巨人の話が多い、そして悲しむべき破壞荒廢を行つて居る。自然の大變動、火山の大爆發、恐るべき嵐、凡てこれ等の物を現代の科學は自然の法則、氣象の變化或は氣候の原因て說明するが、詩人と哲學者の鮮かな想像ではこれを巨人同志の怒れる爭鬪或は巨人よりもつと巨大な力に對する狂氣の罵詈に歸した。それて嵐は大きな口をして居る怪物の呼吸てあつた、ヱトナの火山は輾轉反側する毎に、或はその巨大なる胃袋の經驗する胃弱の鬱氣或は嘔氣を催ふす毎に火と煙を吐く巨人の體の上にあると云ふのてあつた。熱した地球から電氣を受けた雲の結果てあると今日云はれる雷は怒れる神の命令の聲てあつた、或は天を通る神の車の音てあつた、同時に電光は神の威嚴を表はす後光てあつた。今日は天體の所在と光の或關係て說明される天の河は、ギリシャ人の心に

はいたづらの巨人の惡童ヘラクレスが彼の早熟の食慾を滿足させるだけの乳を得ないので大きな口一杯の唾を空に對して吐き出した事に原因して居ると思はれた。よだれかけやむつきをつけて、迷信と空想の搖籃で搖られてゐた科學の幼年時代が理解する事のできなかつた凡ての自然現象を巨人の仕業として說明する昔の普通の方法の無數の例を見ると、その時代の賢人が巨人をこの通り禮讃して居るのであつた。古人は巨人の記錄を大きくする事を愛したが、私共は時々彼等自身の力がこんな巨人或は勇士と張合つて引けを取らない事を示すやうな調子で描かれて居ると考へたいやうな事もある。ホーマーの英雄ユーリセスは一つ目の食人種のポリフィマスを醉ひつぶして、眞赤な燒け木をその眼の中につきさして、その恐ろしい脚の下からその男の達しないところへ逃げ出した。しかし時はどうしても人間の巨人に對する感嘆を少くしてゐない。詩人は巨人について常談を云ひ、哲學者は理論を述べ、旅行者は新しい巨人を發見し、輕信の好奇心に富んだ公衆はそれを見せてくれるバーナム一座やその外の見せ物師の懷中をふくらませた。もつと特別な例を取つて云へば、或詩人は漁獵の趣味の巨人をつぎのやうに述べて居る、

彼の釣竿は丈夫な樫の木でできて、

絲は嵐にあつてもこはれない太い針金だ、
鉤に龍の尾をつけて、餌にして
そして岩の上に坐つて鯨を釣つた。

ミルトンは『樂園回復』のうちに地の巨人を認めて居るが、つぎのやうに云つた古い作者の思想を忘れて居る、『神は地球を護るために天使を置いた、しかしこの天使達は人の子の魅力に魅せられて五千尺の高さの子供を生んだ』即ちミルトンはサタンをしてベリアルにかう云はせて居る、

洪水以前、お前の强壯な仲間と一緒だつたが、
地球をさまよへるまちがつた根性の神の息子が
人間の娘に猥らな眼を向けて
彼等と一緒になつて人間種族をつくつた。

しかし珍らしいベン・ヂョンスンはもつと道化た調子で『長いメッグ』として知られたその當時のよく知られた女巨人の事を語つて居る、この女は色々お轉婆らしいいたづらを

やつて、『居酒屋』を營んで一生を終つた。

　ウエストミンスター・メッグが、
　鶴のやうに長い――
　長い長い臑(すね)をして、
　鉋(かんな)のやうな足をして、
　二つの車の輪ほどの
　幅のある二つの踵をしてる。

バイロンは『ドン・ヂュアン』に巨人の洞穴の事を云つて居る。哲學者もそれぞれ云ひたい事を云つて居る。英國には生きた巨人をさがしたり、死骨を集めたりして一生を送つた人が出た、それから醫師達は解剖するためにそんな人々の體を熱心に求めたので、それで巨人を雇入れる人は死後クリスト教徒らしい埋葬をすると云ふ契約書を作らなければならぬ程一時は巨人を雇ふ事は容易にできなくなつた。『英國銀行』の巨人の書記の唯一の遺言狀は『下らぬ醫師』につかまらぬやう銀行の構内に埋葬して貰ひたいと云ふ事であつたと云ふ話はよく人の知るところである。

フランスには、巨人と侏儒は海の空氣、極に近い事、及び氣候の關係でできると論ずる一人の學者が出た。空氣の濕り勝ちな海岸の人、たとへばスコットランド人やアイルランド人は大きい、しかるに內地の山の多い空氣の乾いたところではスウィッル人のやうに背が低い。それから極では小さいが、赤道では大きい。しかしこの說は丁寧に調べると誤つて居る、卽ち北極のエスキモウ人は一般に小さく、南極のパタゴニャ人は一般に大きい、そしてデユ・シャイユでもスタンレイでも赤道に近いところに居る侏儒の事を云つて居るからである。外の學者は巨人を嘲つてうちわにの扁平足の低能の、短命な人種だと云ふ。しかし現代の巨人は餘り長命でもなく、又大した精神的能力を示してもゐないと云ふ事だけは事實である。

クックー以後の旅行者は巨人の記事を多く殘して居る、そしてこの最後の一世紀の間には、どんな見せ物でも巨人がゐないでは物足りないと思はれた、一七八四年にあつた見せ物には三十人も一時に出たのがあつた、そして非常な人出があつた、ところが數年後に公衆はもう巨人には飽きて來たやうである。

私共は巨人はどこか特別の土地か場所に固有な物である事は知らないが、現代の凡ての國々の中ではアイルランドが巨人の母國であるらしい。或は彼等は『巨人の步道』(ヂヤイアンツ・カウイーエー)(アイ

ルランドの地名）にゐたのであらう。こんな話がある、トリビガンと云ふ名の男が「土地(ランヅ・)のはて(エンド)』（英國の西端）に住んでゐて、長い腕をのばして通る船から水夫をつかんだ。これは船員に物語るに適當な話である。アイルランドに絶壁がある、そこへ見物人が行くと大きな岩を見せられる、四十人でも動かす事ができない、それに巨人の指紋のやうな長い深いあとがついて居る。昔ここに女巨人がゐた、暗くなると蠟燭をつけた、通りかかる船がそれに欺かれて下の岩で難破する、哀れな船人達は無造作にこの女巨人の餌食となつて喰はれた。或晩リーガンと云ふ名の快男兒がそれを吹き消した、そこで彼女は怒つて大きな丸石を取つて彼に投げつけた、そこで今日でも見られるやうな長い、次第に細くなつて居る百合のやうな白い指のあとを殘したのであつた。これ等の及びこのやうな化物から、七尺ばかりあつた故人のネッド・オウバウルドウィンの日に至るまで、アイルランドには巨人の數は甚だ豐富であつた。十八世紀の終から十九世紀の始めにかけて、その數は全く澤山であつた。二十人もロンドンで見せ物になつた、そしてオウブライアンと云ふ名の男――八尺三寸――は非常に有名になつたので、彼が他界したずつと後まで大膽なる見せ物師はロンドンと田舎の町で引札にこの男の名を殘して置いた。

これは心靈論者に取つてよい例であらう。

アイルランドの巨人の最後の一人はシャウナボントリーてあつた、この男は一八五六年十二月六日、七十の高齢で死んだ。身長七尺で四人の子供を殘した。彼の同輩の一人、一八五七年に死んだマーフィは九尺に數寸足りないだけてあつた。
それからつぎのやうなのもあつた。

デョン・マックファスン
不思議な人だ、
靴をはかないて、
六尺二寸、
そしてウォタルーて
殺された

現代では多くの人は一八四八年にニュ・ヨークへ來たノーフォークの巨人を覺えて居るだらう、この男は身長七尺五寸、體重五十五貫五百匁、胸圍五尺、腹圍五尺一寸、肩廻り二尺九寸、股の廻り二尺九寸、それからふくらはぎの廻り二尺二寸と云ふ全くの巨大なる怪物であつた。

一八六四年二月、興行師バーナムはかけねなしに四人の巨人を抱へてゐたが、廣告の文句によると銘々八尺の身長で、體重の總計百八十貫以上であつた。

支那人は昔都市の門を守るために一丈五尺もある巨人がゐたと云つて居る。何年か以前オハイオ州のマリオンで三十ばかりの骸骨のうち二十八が男の物であるのを發見したが、それは八尺と云ふ驚くべき身長であつた。

私共はウエッブの『ロンドン郊外及び市の一瞥』から長身の法律家の事を書いた部分の拔萃をしてこの巨人の記事を了る。

> 彼は一度短脚（コッブ）の馬に乘つたつもりでゐたが、實はただ歩いてゐて、その馬の方が云はば彼の保護の下に彼の兩脚の間をちよこちよこ歩いてゐた事が分つた。或日食事のあとで暫らく坐つてゐて、突然立つて伸びて見ようと云ひ出した。讀者がその驚愕を見たらどうであつたらう、或は私がそれを記述する事ができたらどうだらう。彼は三つの馬車で旅行すべきであるのに、一つで行くと頑強に主張する、ところで決心して乘つて中に入ると、人々は屋根に穴をあけて頭と肩の出るやうにした、そこで議會で定められた以上の高さの荷物を屋根に積んだと云つて告發された。着物の寸法を取る時に、仕立屋は利口な男だから梯子に上つた、しかしこんなところに馴れないその仕立屋の職人達は落ちて頸の骨を折つたと云はれる。何か笑ふ時には外の聽衆が笑つてしまつてからでないと笑つ

た事がない、滑稽を聞いてそれが彼の耳から横隔膜に達して、それからそれを笑ふやうに刺激するのに相當の時間がかかるからであつた。

聖書には個人的及び種族的の巨人が澤山あるが侏儒の直接の記事はただ一個所しかない。『利未記』二十一章二十節に、侏儒は神壇に食物をささげてはならないと云ふ法律を示してある。もう一つ間接に『矮い身長』のザアガイの事を云つて居るところが一つある。彼は、

神を見るために
木に登つた
人であつた。

ローマ人、殊に品格の高い婦人達は、侏儒を多く家に置いた。アウガスタス皇帝の娘ヂユリアは身長僅か二尺のカノーパスとそれからもう一人アンドロメダと云ふ者をもつてゐた。彼女の父は容貌のよい者なら好きであつた、その點では恐ろしい醜い畸形のせむしてある場合にのみそれを養つたスペインの宮廷と違つてゐた。ラファエルとヴエラスケスの二人が宮廷の場面を描いた繪があるが、その前面に現れた氣味の悪い顔がある。セント・

バーソロミユの虐殺で醜名の高いそしてその人が毒を使つた犯罪を書いても一冊の書物になる、そしてその人の叛逆と奸計と陰謀では何冊の書物でもできるあの惡者のカザリン・ド・メディチは侏儒が好きであつたので、注文通りに侏儒の國民を殖して見ようと思つたが、この實驗は成功しなかつた、そしてブランデンブルグの選擧侯ヨーチム・フレデリックの最初の夫人も同じ目的で男女の大勢を集めて見たが、つまらぬ仕事だと分つてすぐに中止した。しかしピーター大帝は一度侏儒の結婚を盛大にあげた、疑もなく外の人々に同じ冒險をやるやうに勸めるためであつた。一七一〇年であつた、ピーターは國内にひろく結婚の豫告を布告して直ちに首府の二百哩以内にある侏儒に悉く出席を命じた。彼等のために立派な饗宴が行はれた、何よりも今日の人形の茶話會に似たやうな極めて小さい皿、食卓、椅子などを使用した。遲れて來た人は先きに來た人々の給仕を命ぜられた、誰が先きにどこに席につくかと云ふ事で彼等同志の間に大分喧嘩があつた、しかし見ものは舞踏が始まつた時であつた。花嫁花婿は先導した、何れも三尺一寸六分であつた。

チャールス一世は宮廷侏儒ウィリアム。ギブソンの花嫁の親もとになつてこれを引渡す役をつとめた、そして女王は花嫁にダイヤの指輪を與へた、その場合には今では忘れられた宮廷詩人ウァラーは何かつまらぬ詩を作つた。實際チャールスは侏儒が好きらしかつた、

そして朝廷に澤山ゐた、チャールスはそれを相手にして色々ふざけてゐた。或時宮中の宴會で、冷いパイの中に一人入れて置いた、細身の劍をつけて小さい兜を冠つてその中から適當な時に跳び出した。王は上機嫌で士爵を授けた、そして對等の條件で女王の猿に或は言ひ寄つたり或は喧嘩したりさせた。

文學には餘り侏儒は關係はない。バイロンは東洋の記事によく侏儒を出して居るが、それに關する彼の意見は低くかつた、彼はつぎのやうに云つて居る、

『彼女の身長は高い――私は太く短い女を憎む』

スコットは恐ろしいそしてスコットランドの賤民の一人を『ヴェヴァリー小說』中の一人の女主人公として居る、そしてサー・アイザック・ニュトンの母は、彼が赤坊の時にクォルト瓶（六合三勺）に入れたといつも云つた。ギリシャの哲學者フイレタスは餘り小さいので風に吹き飛ばされぬやうにポケットに石を入れて步いたと云はれる。鶴と戰つて鶴の王子の殼で家を造つたと云ふ傳說時代の侏儒は恐らくデュ・シャイユとスタンレーの叙述して居る甚だ矮小な人種に近い。『ガアディアン』雜誌に侏儒のくらぶの事が書いてある、そのうちに淩り者のティム・タック及び美人を口說き落した如何なる優男に負けない瀟洒な小男トム・ティップトゥもゐた。侏儒の珍らしい古い廣告のうちのつぎの物を選ん

て見る。

珍物御好みの凡ての紳士淑女その外の方々に御知らせ申上げる次第ですが、この頃フランスから身長は一尺七寸二分だが、指極は六尺四寸あると云ふ四十六歳の男子が參りました。手で歩くのがこの人の得意です、地上一尺三寸二分離れて體を上げて歩きます、片手で約三尺の高さのテーブルに跳び上ります、手の外何も使はないで或は體を地に觸れないで跳び越えます。さながら脚で立つて居るやうに手で調練を少しやつて見せます。もしお客様の御招きならどこへでも參ります。フランスの宮中でも、英國皇太子殿下及び皇太子妃殿下、及び多くの貴顯の方々の前に御目通りの光榮を有しました。

しかし恐らくこれまで知られて居る最も著しい侏儒はボルウラスキ伯であらう、この人は一七三九年ポーランドに生れ、ド・タルナウ伯爵夫人に引き立てられて最後にマリー・アントアネットの母、アウストリア女王マリヤ・テレサに贈られた。それを受けて女王は膝の上に置いてヴィエンナて見た物のうちて最も驚いて感心した物は何かと尋ねた。朝臣らしい頓才と如才なさて彼は『只今まのあたりに見て居る物』と答へた。女王は『それは何』と尋ねた。『そんなに偉大な婦人の膝にそんなに小さい男の坐つて居るのを見る事』てあるとボルウラスキは答へた。女王が指輪をはめてゐたが、それにはダイヤて女王の頭

字を組合せてあつた。彼の手を女王の手で取つて、その組合せのダイヤが綺麗かどうかと尋ねた。彼は答へた、『陛下の御ゆるしを願ひます、私は指輪を見ないで陛下の美麗なる御手ばかり拜見いたして居りました。どうかキスする事を御許し下されますやう』と云つて同時にその手を彼の唇にもつて行つた。これは女王の虚榮心を喜ばせるのに充分であつた、そこで何か報酬をせねばならなくなつた、そこでその當時未だ少女であつたマリー・アントアネットを呼んで彼女の指から立派なダイアの指輪を取つて伯爵に與へた。この伯爵はドイツ語とフランス語を流暢に話し算數を理解し、讀む事も書く事もよくできた。ミユンヘンに居る頃同じ大きさのビーベと云ふ名の侏儒がこの人に與へられる親切をひどく嫉妬して或日の事彼を火の中につき落さうとしたが、丁度都合よく止めた者があつて、彼の命は救はれた、彼はその後英國に渡つた、そこで彼は音樂會に出たり見せ物になつたりして大した財產をつくつた。彼は九十八歲の高齡まで生き長らへた。妻と子供が一人あつた。身長二尺八寸であつた、一八三七年九月五日英國ダラムで死んだ。私共が侏儒の最も多い國民を選ぶとすれば、それはロシヤであらう。そこでは彼等は大事にされる、そして旅客ばスウエデン、ラップランド、ノルウエー、ロシヤ、及びフィンランドではオランダースと云ふ矮小人種が居る事、その母親達は子供の幼少な時に生酒を飲ませて生長しない

やうにする事を述べて居る。

シシリーのガリバルディに隨つて戰ひたいと志願して來たが、委員會で拒絕された侏儒の話がある。彼は將軍のところへ行つて、志願の許される事を願つたが拒絕された。戰爭が一つ終つてから、將軍のところへ驅けて行つて云つた、『御覽なさい、將軍、あなたは私を採用なさらないでも、私の來る事は拒めないでせう。私は立派に戰ひました、全くです、そしてその上負傷しました』彼を覺えてゐたガリバルディは叫んだ、『えらい、ところで負傷はどこだ』少し躊躇しながら彼は肩の間の傷を見せた。『駄目だ』將軍は云つた、『うしろ傷だな。お前はだから駄目だと思つた』侏儒は當惑したやうであつた。又一つ戰爭があつたあとで、彼は又將軍に挨拶した、『將軍、又負傷しました、しかし今度は正しい場所です』そして心臟の傷を見せながら、彼は將軍の足もとで倒れて死んだ。

屍の利用法に關して

先日メーン町の或名高い皮革商の店で、新聞通信員が遇ふ事を喜ぶやうな人々の一人、珍らしい種々の經驗をもつた人と幸運にも遇つてちかづきになる事ができた。この人は英國生れの鞣皮工で、筋骨逞しい立派な老人であつた、以前拳鬪家として著しい名聲をもつてゐた人、そしてこの自衛術の最も名高い師範の拳鬪術の種々の流儀の特色について語る事に倦きなかつた。私共がこの人が鞣皮工の使用する大きな兩手の庖丁を使つて獸皮から纖維狀の廢物を削り落す熟練な手際を見て居ると、當然私共の方でこの商賣に關する色々の興味ある事實に關して質問して見たくなつた、それから續く會話のうちに、彼はこれまでの生涯のうちで最もむつかしいと思つた仕事は人間の皮をなめす事であつたと語つた。

『私も未だ隨分若い頃でした』彼は云つた、『そしてロンドンのイズリントンで私の商賣をしてゐました。或殺人犯人の皮をもつて來てなめし革にしてくれるやうにと云はれまし

た、そこでその場所で働いて居る若い者達は皆來てその仕事を少しづつやつたのは、人間の皮をなめす手傳をやつたと云ひたかつたからです。その殺人犯人は大きな男でしたから、皮は大きかつたが、餘り強くないから餘程注意して扱はねばなりませんでした。それは蒼白色の美しい柔かな革になりましたが、その一部分がその後書物の表紙になつた筈です。醫者達がその男のからだを下げて貰つたのです、そこで私の記憶がまちがつてゐないとすれば、その醫者のうちで皮をなめして何冊かの醫學の書物の表紙にして見ようと思ひついたのでした。もうしかしそれは三十七年前の事で、その男は何のために死刑になつたか全く忘れました。勿論革は甚だ薄くて柔かです、腹の皮でも羊の皮よりも薄い、――御承知でせうが、その腹の皮は人間では最も厚いところです。恐らく先づ始めに羊皮樣の物に改造でもしない以上、書物の表裝にするより外の役には立たなかつたらうと思ひます。仕上げて見ると柔かな綺麗な物です』

この小事件から、私共は昔から屍が利用されて來た種々の異常な方法に關する歴史上の記憶を次第に喚起した。或はそれが讀者に興味があらう。僧侶や魔法使が非常に古くから人間の皮膚を冒瀆的に使つた事は云ふまでもない、それから古代の人々が屍に對して畏敬の念をもつてゐた事から、當然その安眠を妨ぐる人を迷信的恐怖をもつて見るやうになつ

た。この感情は古い僧侶的妖術者によつて、近世では魔法の人々によつて强くされて居る、この人々は納骨堂の臭氣ある腐敗に浸る事は無學な輕信な人々の恐怖心を起すのに一層有效である事を知つた。昔の醫師は半ば魔法使と一般から考へられた、それは治療からでなく、むしろ解剖學的知識からであつた。

私は死人の脂肪で蠟燭を造つた。
墓掘り人足は私の奴隷であつた、
私は生れない赤坊を壜につめ、墓から
盗み取つた心臟や肝臟の乾物を造つた。

これがサウジーの『外科醫の警戒』と題する物語歌にある臨終の醫者の言葉であるが、その物語歌にある物すごい感情は全く今日の古い世界の或農夫達が醫者に對して抱いて居る感情と同一である。しかし、何よりも醫師的魔術師の最も得意とするところは、屍體の恐ろしい利用法を知つて居る點だと考へられてゐた。彼は人間の皮で羊皮紙をつくり、屍の爪でペンをつくつて、魔法の文字を濃い血で書いた。その物語歌に云ふ、

書齋の机の上に一冊の書物があつた、
それをアグリパ自らがその日讀んでゐた、
中のページは人間の皮で造り
文字は血で書いてあつた。

魔法使が利用する屍に關する同じ迷信から、疑もなく殘酷な勝利者が彼等の犧牲者の屍に對して最も恥づべき取扱をするやうになつたのであつた。そして神聖なる死に對して最も殘虐なる冒瀆を試みた者はいつでも勝利者であつた事を見るのである。或名高い韃靼の酋長は著名なる敵の死體の皮を剝いて、その皮を鞍に仕立てる事を命じた事は記憶すべきである。パースイヤ人サポルがローマ軍を破つて(紀元二六〇年)ヴアレリアヌス皇帝を生擒つた時、あらゆる汚辱と侮蔑を與へられるだけ與へて二年間虜にして置いた。この不幸なる皇帝が死んだあとで、サポルは死體の皮を剝いて、巧みな[illegible]製を造らせた——パースイヤの寺院の一つに恐るべき戰勝記念物となつて長い間懸けてあつた。ペルーの史家ガルシラッソー・デ・ラ・ヴエガの說によれば、中央メキシコの印度人アズテッカス族はいつも捕虜の皮を剝いて太鼓を造つて、戰爭の始めにいつでも盛んにその太鼓を打つた。死

んだ虜の一族はこの恐ろしい太鼓の轟きを聞いて直ちに恐慌を來して逃げると信じてゐた。又或場合には虜を殺して皮を剝いだあとで、未だ血の滴つて居る皮を著名なアズテッカスの會長達がつけて、往來を練り歩いて人々から寄附を要求した。皮が腐敗するまでこれが續けられた、受け入れた寄附は宗教上の目的に費された。中世時代のトルコ人はよく圓楯のうらに人間の皮を張つた、さうすると如何なる武器も透らないと信じたからであつた、こんな圓楯がいくつも數年前イタリヤのボロニアで展覽會に出た。人間の皮で表裝された書物はボストン在住の或紳士の所藏のうちにあると私共は信ずる。そこで、人間の皮の利用法に關する私共の記事を終る前に私共が讀者に思ひ出して貰ふ事を忘れてはならぬ事がある、それは少し以前殆ど凡ての新聞に出た可笑しい遺言狀の事である、そのうちにこんな意味の條項がある、卽ちその人の屍は皮を剝いで太鼓に張つて、毎年七月四日（アメリカ獨立記念日）日出と共にバンカ・ヒル記念塔の影でヤンキー・ドウドルの樂を奏して貰ひたいと云ふのであつた。この遺言狀のこの驚くべき條項は幾分實行されたかどうかは、私共の未だ知らないところである。

死人の脂肪はついこの近年まで甚だ恐ろしい方法で利用された事には疑のない證據がある、しかしこの習慣の元は非常に古い。つい數日前、私共と仲間の記者と談話のうちに、

偶然人間の脂肪から取つた蠟燭の話に及んだ時、この人はインディヤナ州ノース・ヴァノンに於ける彼の不思議な經驗談を述べた。彼はこの冬その町の小さい宿屋で一夜をあかした、そして床につく前に階下の酒場で坐つて居る間に、同じ泊客の間の甚だ妙な會話をもれ聞いた。そのうちの一人は行商人で、その仲間に物語つて居るのであつた、或時その男の家に幾人かの泥棒が入つて部屋部屋をさがし廻つて、その男と妻の寢室に入つて、引出しを皆無理にあけて、着物を全部隣室に持出して何か取る物をさがすためにポケットを全部しらべて、枕の下から時計とピストルを盜んだ、實際極めて科學的組織的な方法で家中をかすめたが、誰も眼をさまさなかつた。この盜難にかかつた男は最後に自分は非常に眼ざといのだから、これが非常に不思議だ、どうしても分らないと云つて物語を了つた。そこでそこにゐたポーランド生れのユダヤ人は氣味の惡い變な微笑を浮べて、その謎は容易にとける、――その泥棒共は死人の脂肪で造つた蠟燭を携へて家中を徘徊したに相違ない、その魔法のやうな蠟燭の煙は眠り藥のやうに眠つて居る人をもつと深く眠らせるのだと云つた。こんな蠟燭の燃えて居る部屋では何人も動く事も口を利く事もできないのである、しかしこのユダヤ人はこんな蠟燭の製造法については知らないふりをしてゐた。

ところでこの製造法はグロースによつて發表されて居る。そして私共の讀者のうちで、

それをサウジーの『タラバ』の註の中に發見した人があらう。それは珍らしいから、未だ見ない人々のためにそれを全部ここへ轉載する。

光榮の手

絞首に處せられ、大道にさらされて居る罪人の右の手でも左の手でも取つて、かたびらなりきものなりの一部にそれを包んで、よく絞つて殘つて居る血を少しでもよいから取る、それからそれをよく粉末にした智利硝石と鹽と胡椒と一緒に壺に入れて置く、それからそれを取り出して相應に固くなるまで土用の日中に乾かす、それでも充分でなければ羊齒（しだ）類や馬鞭草を焚いたかまどの中に入れてもよい。それから絞首の刑に遇つた人の脂肪と、ラプランドの新しい蠟と胡麻を加へて蠟燭を造る。光榮の手はこの蠟燭に點火する時に使用する蠟燭臺となる。その効能は、この恐ろしい道具をもつてどこへ人が行つても、それを受ける人は動く力がなくなるのである。

この迷信はスペイン、フランス、及びドイツに盛んであると云はれる。しかし住宅の戸が『黑猫の膽、白い牝鷄の脂、このはづくの血』から取つた油を塗つて置けば、人間の脂肪でできた蠟燭も効果がないと云はれる。歷史家トルクマダはメキシコの盜賊が家屋侵入の場合に同じやうなまじなひを使用する事を述べて居る。彼等は初産の時に死んだ女の左

手左腕を取つて、盜まうと思ふ家の表ての戸を一度たたく、戸を二度たたく、敷居を二度たたく。さうするとその家の人々は魔法にかかつて深い眠りに陷ると想像されて居る、人間の脂肪を塗る事は中世時代の魔法の研究者に知られてゐた。

人間の頭蓋骨は凡ての時代に於て種々の神聖でない目的に使用された。ヒッポクラティスに随へば、野蠻なシシア人は敵の頭の皮を剝いで、その頭蓋骨を杯に使用した、そしてこの杯はバイロンの名高い杯のやうに内部に銀を張つてはなかつた。しかし頭蓋骨を重に使用したのは古い寺院の裝飾、或は大きな戰勝祝賀の裝飾のためであつた。歷史家はタメルランがその征戰のあとに髑髏の三角塔（ピラミッド）を建てた事、バッグダッドの廢墟に九萬の髑髏の塔を建てた事、イスパハンの都に七萬の髑髏の三角塔を建てた事、それから思ひがけない抵抗力で防禦した小さい都を強襲によつて陷したあとで、いつもの高さの勝利の塔を建てるだけの髑髏を得る事ができなかつたので、血だらけの髑髏の列の間に粘土の層を置かねばならぬ事になつた事を知つて居る。メキシコのクエッアルコアトルの大寺院はアズテック族の榮えてゐた時代に巨大なる木製の枠で飾つてあつた、その上に軍神の祭壇に犧牲として捧げられる髑髏が總て結んであつた。コルテスの部下のスペインの兵士が、御苦勞にもこの恐ろしい戰勝記念品の數を數へて見た、そして十三萬以上あつたと斷言した。印度

の神話の種々の怪物めいた神々が髑髏の頸飾をして居る、それからオセアニアの多くの寺には捕虜の肉　征服者の凱旋の御馳走になつたあとて、その髑髏を食人の神々の神社の前にかけるか、或はその中にある怪奇な恐ろしい偶像の前にならべて置く。アシヤンティで殺された虜の髑髏は一時クーマッシーの國民の大きな陣太鼓の裝飾に用ひられた、そしてアシヤンティ人に對して下手な不幸な遠征で戰死したサー・チヤールス・マッカシーがプラー河に向つて出發した時、その黑人の王は使をよこして何れその頭はアシヤンティの大きな陣太鼓の飾りになる事と思ふと云はせた。そして英國軍が敗れてサー・チヤールス・マッカシーの心臟が猛惡な土人に食はれた時、彼の骨はクーマッシーに運ばれて、頭は長い間その太鼓の飾りとなつてゐた。

　人間の腦味噌は凡ての時代に於て食人種に非常に美味と考へられてゐた。しかし外にも利用されてゐた、偶然私共の手に入つた甚だ珍らしい古いアイルランドの歴史によつて、昔のケルト人種の酋長は敵の腦味噌を變じて恐るべき攻撃の武器とした事が分るのである。腦味噌は、形を破壞せずに化石する何か特別な作用で、堅い石灰石となる、その腦味噌の丸を強い革紐につけて飛道具として相手に致命傷を與へるのである。野蠻なアイルランドの酋長がこんな腦味噌の丸を使用して恐ろしい殺戮を行つた記事は、今云つたやうな傳說

的の記事に眞に迫るやうに書いてある。

しかし人間の腦味噌よりも人間の骨の方がもつと廣く恐ろしい武器製造に參加して居るに相違ない。股の骨が棍棒になつたかどうか明言はできないが、もつと強いもつと堅牢な材料と競爭して見ると人間の骨格全部のうちでそんなに役に立つ程充分に強く力のある骨はないらしい。しかし人骨は野蠻人種の槍の穗や矢の根に屢々使はれた。何年か以前北ウヱールスのバンゴアの或個人の博物館で、記者は南洋の各地方から採集して來たと云ふ立派にできた槍や投槍を澤山見た事があるが、それには（記者の聞いたところでは）人骨の尖つたのがついてゐた。これは好きな形に巧みに彫んで、鋸の齒のやうな小さいとげを兩方に細かくつけてあつた。一丈六尺の槍がその陳列品のうちの最も珍らしい物の一つであつた。黑檀のやうにみがいた彈力のある黑い木材の柄がついてゐた、そして穗から一尺のところで四邊形になつて四列の刄をつけられるやうになつてゐた。強いひもで綺麗に結びつけた重に鮫の齒でできた百以上の刃があつた筈である。そしてこの恐るべき武器のさきについてゐた長い鋸齒狀の細片は人間の犧牲から取られたと云ふ事であつた。人骨を細工した物は色々の時代に博物館で見せられたと私共は信ずる。

しかし人骨を種々の器具に製造する事は野蠻人によつてのみ行はれたわけではない。こ

の氣味の惡い技術に於けるカプシン僧の熟練は普く知られて居る。殆ど凡ての博覧の讀者はパレルモの近くの修道院の事を多少知つて居る、そこではカプシン派僧侶の死體は悉く上着と頭巾と帯をつけて壁の凹所に置いてある、それから或部屋の壁は骨と髑髏の恐るべき意匠で裝飾されて、多くの家具――食卓、椅子、腰かけ、その他――は骸骨の破片でできて居る。

戰爭で殺された兵士の骨は不謹愼な農夫によつて彼等の土地の肥料及びその外の冒瀆的目的のためによく使用された。ローマの大將メーリアスの軍隊のために現在のフランス南部のエイスに近いところで殺戮されたテュトン人の骨はそんな風に利用されたと云はれる、そして史家アンペールに隨へば、その大虐殺の跡は今日でも明白である。その場所は永く『腐敗の場所』と呼ばれてゐた、そして、その村の名ラ・プリエルはラ・プリテュル（腐爛）の訛りであると云はれる。それからピエモンに於ける今日のヴエルシアルのあるところに近いランディアの野で殺された十四萬のシムブリ人の骨は久しく畠の柵の代りに使はれてゐた。

しかし最も奇異な、そして特に恐るべき人骨の利用法は人の食物とした事である。この恐るべき食人の記録にある最も名高き例は、巴里の第六回の包圍中、ヘンリー三世が包圍

軍の陣中で或僧侶のために暗殺されてからあとの歴史のうちにあると私共は信ずる。この戰爭は宗教戰爭の頑迷なる宗教的狂暴と獰惡の特色を帶びてゐた、包圍は約五年に及んだ、そして巴里の住民の數千又數千は飢餓のために亡びた。ナヴァルのヘンリーは最後に完全なる壘壁を廻らしてこの不幸なる都市の糧道を絶つた、しかし舊教同盟の熱狂は抵抗の望みが全くなくなつたずつと後までその包圍を長びかせた。木皮、草、動物の皮、鼠、古靴の革までをも　包圍されて飢餓に迫つた人々は貪食した、そしてこれが驚くべき價格で賣れた。エルサレムの最後の日の恐怖が悉く再現された、ティタスの時のやうに、母は子の肉を食つた、往來にあつた屍は飢の狂氣のために狼(ハイエナ)になつた飢餓の人々によつてむしろ取られて食ひつくされた、そして狼は市街の大通をさまようた。その時舊教同盟のスペインの大使は死人の骨を共同墓地から發掘して骨粉に碾き碎いて(シ・ケックの肥料工場に製造される肥料と餘り違はない)それからパンを造る事を勸告した。そこで墓は死人を提供し、死者の休息所は亂され、粘着せる蟲類はその食物を奪はれる事になつた。恐るべきパンは造られ、分配され、盛んに貪食された、しかしそれを喰べた人々は悉く不思議な恐ろしい病氣にかかつたが、この病氣は何人も前に聞いた事のない物で、又どんな醫師も直す事のできない物であつた。

人骨を食物にする方法から思ひ出されるのは、ペルーとグアテマラにある或アメリカ印度人の種族が彼等の酋長の死體を火葬にしたあとで、その灰を水に和して一同それを飲むと云ふ事實である。忠實なる寡婦が死んだ夫の灰を飲むと云ふ例は歴史にない事はない。中世紀の醫者は髑髏を骨粉にして藥として使用した。同じ珍らしい祕藥のうちに、『死んでから一年にならない青年の骨』が供物の藥として勸めてある事を私共は見出す。

こんな事から當然私共は甚だ古い食人の問題に移る、それには骨、血、腦味噌、髓等悉く加はつて居る。私共は古代の食人種族に關して、及び頭が肩の下について居ると云ふ人種、及び神話にある恐るべき食人種族についてはたしかな知識をもつてゐない。しかし如何なる小學生もカリブの食人種族及び南洋の食人種族の事、彼等の偶像に對して不都合にも敬意を缺いたためにカピテン・クックを食つた人々、及び彼等がその肉を食つた犧牲の目錄を石を列べて作つて置くと云ふ猛惡なるフィジー群島の人々の事は多少讀んで居る。近頃の旅行者の斷言するところでは、若い酋長がその人に大きな石の巨大なる列を示して彼の父がその列にある石の數だけの人を食つたと云つた、そこで旅行者は石を數へて見ると五百以上ある事を發見した。フィジーの名高い食人の酋長は多く人肉を食する事から起つた病氣で死んだ、人肉は多くの食人種の一致して云ふところによれば最上等の豚肉のや

うな味であるが腸に惡い結果を及ぼす。『宗教信仰の起原』と題する書物の第一卷で私共の記憶に誤がなければベーリング・グールドは食人は惡い事だが止むを得ない事だと云つて居る。彼は立派な科學的根據によつて、人間は當然肉食を必要とするが、南洋では固有の哺乳動物はないので――豚でさへ輸入された物――食人によつて種族は絶滅しなかつたのである事を主張して居る。これは聞いたところでは道理らしく思はれるが、又現代のこの人種が惱んで居る最も恐るべき、治療のできない、名のつけ難い病氣の原因は人肉を食する習慣から來て居ると主張する相應に有力な學者もある。しかし又食人は或場合最も恐るべき結果が伴ふて居るやうに見えるが、南洋の食人種族の大多數はこの氣味の惡い食物によつて榮えて來たらしい事は認められねばならない。タヒティ人、ニユ・ジーランド人、トンガン人、フィジー人、ニユ・カレドニャ人及びその他の種族はその立派な體格で著しい、そしてオセアニアの或人種の間に流行する癩病と象皮病は食人のためではない――事實その種類の病氣は文明が食人の習慣を廢止させた地方にかへつて遙かにひどく擴がつて居る。人肉が肉屋の店で賣つてあると云はれるアフリカの或食人種族の部落では癩病その他の妙な病氣は全く知られてゐないらしい。人肉を食ふ習慣は必ずしも――その字義通りに――野蠻人に限つたわけではない、卽ちアズテックのやうに高い文明をもつた國民は昔

くそれに就つたらしいからである。彼等の犠牲になつた虜の肉體の一部分は不可思議な儀式と莊重のうちに軍神ウヰツィロポチトリの禮拜者によつていつでも食はれた。メキシコの僧侶は又或場合に玉蜀黍と人間の血とで偶像の形に一種の團子をこねて、それを儀式用の供物にして喰べるやうにしてゐた——これはローマ舊教の『聖餐』のやうである。犠牲者の心臟はよく僧侶の食ふところとなつた、彼等は捕虜の胸を割いて未だ動いて居るのを食つた。もつと高い程度の文明を有した國々に於ける食人の例は現代に於ても知られてゐない事はない、時として驚くべき好奇心から來る事がある、たとへば解剖室の死體から人肉を切り取つて料理して食つたために、大學から放校になつたあの英國の醫科大學生の場合に現れたのがそれであつた。

脅迫して人肉を食はせる事が中世紀の拷問者によつて時々行はれた。十五世紀の後半、マジャルの貴族に對してハンガリーの農民が謀叛した時。その首將となつたヂョーヂ・ドズサが敗北して虜になつた時、彼は赤熱の釘抜きで骨から肉を引きちぎられる宣告を受けた、それから幾日もわざと食物を與へないで置いた彼の部下の人々はそれを食はねばならなかつた。歴史には脅迫食人肉のもつと恐ろしい例がある——たとへば囚人を拷問して彼自身の肉の一部を食はせる事などはそれである。先月の『コーンヒル』雜誌に現れた『供

物用の薬』と題する甚だ巧妙な論文て、その作者は僅か二百年以前眞面目な英國の醫者が食人の習慣を鼓吹した事實を擧げて居る。この醫者の著述に『みいらの精髓』は『八月の中頃天命によつて死にかけて居る健全な青年』の股からつくらるべきてある、その『みいらの精髓』は葡萄酒の精と鹽とで食ふべきてあるとの處方がある、それから春死にかけて居る健全なる青年の血から不思議な强壯劑をつくる處方もある。

人肉を動物に食はせる習慣は古代には珍らしくはなかつた――私共はローマの圓戲場の野獸に人肉を食はせた方法をここでくりかへす必要はない。アウガスタス時代の歷史家によつて物語られて居るカリグラに關する物語がある、それはここて興味があらう。公けの競技に出る野獸に或時食物が不足してゐた、その事實を皇帝に正式に報告した。そこて彼は直ちに近くの監獄に行つた、そして囚人を一列にならべた　その列のうちに二人の禿頭があつた。この怪物の皇帝カリグラは最後に叫んだ、『その禿頭からこの禿頭まで別にせよ』それからそれまでの行列のうちの人數約五十人ばかりをその場內の飢えた獅子と豹との生餌として投げやつた。ところてそのうちて法律て調べられた者は殆どゐなかつた、ただ微罪のために取調べを待つて居る人々ばかりてあつた。

ギリシヤ、ローマの神話には、馬に人肉を食はせた王の話がある、それから梟を人肉を

食ふやうに馴らした或鬼のやうな印度の王族の記録がある。アズテックの神殿に犠牲として捧げられた人々の屍體の大部分は、皮を去り、旨いところを別にしたあとで、神社の構內に飼つてあつた野獸に投げ與へられた。バーナル・ディアスの云ふところでは、メキシコ人はこの目的のために豹その他の野獸を飼つたばかりでなく、屍は『尾の端に鈴のやうに鳴る物を何かもつて居る』そしてその叱咤の聲が『地獄を思はせるやうな』蛇にも與へられた事を云つて居る。これ等の獸及び蛇は今日の屠殺場に豚を飼つて置くのと同じ目的て、神殿のあたりに置かれたらしい。

　タメルランも人體を尊重しない點ではたしかに何人も劣らなかつた。私共はすでに彼の髑髏の塔や頭の三角塔の事を云つた、しかし彼は外の恐怖すべき方法によつて時々この建築の單調を破つて居る。彼の無數の軍勢がコーラッサンの地方を席捲した時にそれに從はなかつた都のセブセウアの守兵、或人に二千と云はれ、或人に一萬と云はれる人數が、最も奇拔な恐るべき方法で殺された。その虜は手と足とを固く結ばれた、そしてその體は生きながら――漆喰と一緒になつて堅牢な城壁となつた、丁度それだけで石をセメントで固めたやうであつた。ホスピタラーと云ふ騎士團體の歷史を讀むと、生きた橋或はむしろ人體の堤防道が、タメルランの恐ろしい城壁建築に於て用ひられたと同じ方法で造られた記

事を見るのである、——しかしこの場合に於ける犠牲は志願であつた點だけが違つて居る。サラセン人がエークルを圍んで、セント・ヂョンの騎士團がパレスタインから退去する少し前にそれを防いだ時、攻圍軍が一方を破つてそこの壕を埋める事の必要に迫まれたが、城壁から飛道具が雨あられと來るので殆ど不可能であつた。この時に囘々教の熱狂者が彼等の主將に從つて幾千となく——カルティウス[譯者註一]のやうな人々の群が——口を開いた壕の中へ身を投じて埋めてしまつた——そしてその生きた肉と骨の動いて居る堤防道の上を通つて、突撃隊が攻撃のために突進した。しかしこの逸話は十字軍の兵士がエルサレムを略奪したあとで馬の手綱までの深さの血の中を乘廻したと云ふ意味のよく知られた話と恐らく匹敵の逸話であらう

人の血はたしかに色々の妙な方法に使用されて來た——猛惡なる山賊が相手を恐怖させるために着物を染める事もあつた、時としては飲まれた、又沐浴にさへ使用された 人間の血を飲む事は古への魔法の儀式に關係する人のよくする事であつた。フランス大革命當時の襤褸の暴民の食人に關して語られた多くの物語の中に、血を飲む珍らしい話の例がいくつかある、——たとへば『貴族の血』をコップに一杯飲んで父の命を救つた若い貴婦人の話もその一つである。トミリス[譯者註二]女王の復讐物語をここに說く必要はない。凡ての人間の

怪物のうちで最も怪物らしい男ヂル・ド・ラースは人間の血の風呂に時々入つたと云はれた。ド・ラースは十五世紀にゐた男で一四四〇年に刑せられた。彼は富んだ勢力のある貴族であつた、オルレアンの少女ヂャンヌ・ダークの下で戰つた、チャールス二世の部位を助けた、そしてその軍事上の功勞のために元帥杖を賜はつた。彼が行つた恐るべき罪惡は大部分彼が魔法を信じた事に歸せられて居るが、彼の兇暴なる行爲の或物はそんな哀れな言分けさへも無效であつた。ナントに近き彼の居城の近傍に住んで居る農夫達が時々彼等の子供等が誘拐される事、及びド・ラースがその誘拐に關係があるらしい疑のある事を訴へた事から始めて事件が明るみに出されたのであつた。城の地下室を搜索した結果、百四十人以上の子供の黑焦げになつた屍が發見された、それだけの子供を彼がその後白狀したところによると虐待、變態性慾、及びここに暗示する事もできないやうな醜い憎むべき所業で苦しめて殺したのであつた。彼の高い地位を尊敬して火炙に處する筈の刑はこの場合絞刑に換へられた、そして彼の死體は光榮にも「高い地位の少女」の手によつて埋められた　私共の現代の犯罪者と同じく、ド・ラースは天國に行かれると云ふ固い信仰を述べて死んだ。

私共は人體の神聖冒瀆のこの小さい記錄に於て、モルタの包圍中、時々捕虜の首を打ち

落し、市街の方へ大砲てその首を發砲した事、それからホスピタラーの騎士團の總大將てあるラ・ヴレットは又トルコの虜の首を大砲に入れてその挨拶に答へた事を云ふ事を忘れてはならない。

この小論文に於て子供の大網膜[譯者註三]を迷信的に使用する事（ついてだが、時々「ロンドン・タイムス」にその賣物が廣告に出る）或は人間の髮と人間の齒の不都合な現代の利用法、――流行的な頭飾りや最上等の齒科のためにする事に論及する事は殆ど不必要である。しかし、私共は昔、弓づるは時々人間の髮てできた事を云ふべきである、そしてスカンディネヴィアの神話には死人の手の指の爪、足の指の爪に關する珍らしい寓話がある。昔のエッダには何時神々の恐ろしい沒落が來るか、何時怪物が逃げるか、何時大地を取りまく大蛇が海にあるその住居を去るか、何時

山々が一緒にぶつかり、
巨人が一緒に走り、
人は地獄への道を行き、
そして天は二つに割れる

か、――それから何時北方から恐ろしいナグルフアの船が、巨人フリムの揖取りて、怪物のリムスイルサに指揮されて航海するかを教へて居る。海は餘りに荒くて、魔法の船でなければ浮ばない、そこでナグルフアの船は全部死人の爪でできた魔法の船であらう。ナグルフアの航海はエイサーの神々に取つては色々の禍になるから、北方人種に取つては魔法の船を造る材料をなるべく供給しないやうにできるだけ爪を短く切つて置くのが長い間の宗教的習慣であつた、さうするとその船の來るのがおくれるからであつた。

人體の最も可笑しい冒瀆は恐らく埃及のみいらを薪に使用する現代の利用法に於て見られる。氣の　なみいらは充分に乾いて居るのと、みいら師が燃燒物を入れて置いたのとでよく燃えると云はれる。しかし爐でみいらを燃やす事を敢てする人は、來世の觀念について甚だ懷疑的であるに相違ない。

私共は髑髏を變じて家具にする事をすでに述べたが、或イタリヤの發明家の恐ろしい技術については未だ云はなかつた、この人は人肉を食卓の板、洗面器の石板等に變ずる事を云ひ出して、實際自分の製作品の見本を廣く見せた。彼は人體を化石させて、石のやうな肉に綺麗な光澤を出す方法を發見したらしい、そして彼は化石した內臓でできた小食卓を

出品したが、内臓の回旋狀のひだでも、纖維でもよく分る程にみがいてある。少くともそんな話である。その發明家は偉人の死體を取つて、化石して、みがいて、臺の上に置いて、そして彫刻の種類などは絶滅させようと建議して居るのであつた。政府はこの人の望んで居るやうな特權と特許を與へて保護する事を拒んだので、彼は悲歎の餘り死んだのであつた。それで彼の不思議な祕密も彼と共に死んだ。しかしこれは或は巧妙な虚報かも知れない。

醫學生は墓及び永眠の神聖を少しも尊敬しない事、彼等は墓をかすめる事を少しも躊躇しない事、彼等は職業的發墓鬼のもつて來る屍に對して四十五弗ばかり拂ふ事、彼等の解剖室で時々屍の斷片を投げ合つたりして戲れる事、大概の若い外科醫が彼等の書齋に齒をむき出した髑髏、或は奇怪な骸骨をもつて居る事が一般に知られて居る。しかし醫學博物館のために骸骨を洗つたり晒したり關節をつないだりする事はそれだけで立派な商賣になるので、或都會では中々の利益を收めて居る事は恐らく一般には知られてゐない。解剖刀で骨から肉を全く除いて、大きな鍋に入れて十時間乃至十二時間煮る。これによつて刀の達しないところにある肉や多くの脂が取れる、しかしそれでも未だ骨をつなぎ合せるのに適當とは云へない。忽ちのうちに恐ろしい臭氣を發して來る。煮沸しただけでは骨の組織

に染み込んで居る脂を除く事はできない。そこでその煮沸した骸骨を一つ一つ骨を外して大きな桶に入れて、全部隠れる程水を注いですつかり蓋をして置く。こんなにして水に漬けて置く事半年乃至一年に及ぶ。この順序を『浸し漬け』と云ふ。そして大概は骸骨から脂を悉く除く事ができる。しかしこの浸し漬けて置く期間はその骨　年齢次第である、若い人、殊に女や子供の骨は半年以上はかからないが、老人の骨は大概は甚だ脂が多いのでもつと永くかかる。半年乃至一年の終に骨を桶から出す。その頃には骨は炭よりも黒くなつて、浸し漬けのために出て來た油のやうな煤のやうな沈澱物で蔽はれて居る。これを細かい刷毛で取つて、それから日に曝らして白くする。煤けて黄色になつてゐたのが次第に白くなつてそれから針金で關節をつないでまとめてもよいやうになる。

譯者註一　カルテイウスはローマの傳說的英雄。紀元前三六二年ローマに大地震があつて大きな裂口ができた時、自ら進んで軍装をして軍馬に跨つてそこへ投身した。そのためその裂口がもとの通りになつたと云はれる。

譯者註二　マツサゲテイの女王トミリスにかつて自分の王國を征伐した事のあるサイラスを破つて、これを殺し、その首を血を入れた樽に投じて『お前の飲みたがつた人間の血の中へ入れてやるから、充分に飲め』と云つた。

譯者註三　胎兒をつつむ羊膜の一部分が時として生れる子供の頭に殘つて居る事がある。これをもつて居ると溺死しないと云ふ迷信が航海者のうちにあるので、十八世紀には五十弗から百五十弗までの價格があつた。今日もこの迷信が殘つて居る。

毒殺者

犯罪史奇聞

少し以前に、商業會議所から餘り遠くない或大商會の建物の玄關番である一人の若い黒人が、偶然の話のついでにシンシナーティてはたしかに未だ魔法醫術が行はれて居る事、その魔法の術者は重に醫者の外面の下に本當の職業をかくして居る老人の本草醫師占師である事、黒人社會の最も無學な人々はこの魔法師を非常に恐れる事、それから一旦この魔法の祕密を知つた以上どうしてもその祕密を洩らす事はしない事――もし洩らしたらそれを詳記する事もできない程の苦痛によつて罰せられるからである事を語つた。彼はさらに進んで、男女の愛人がその愛に絶望しかかつて居る場合に、その望みを達するために何か魔法的の助けによつて戀愛の妙藥或は靈符を得ようとして、これ等の魔法の醫者を訪問するのが習慣だと私共に語つた。求婚に失敗した青年或は立派な容貌の青年を夫にしたいと望んで居る若い婦人のみならず、さらに敵に復讐したり、競爭者を負かしたいと望んで居

る人々も同じくこれ等の評判のある魔術者を訪問した、そして『魔術をかけたい』と思ふ相手の髪の一房か或は着物の一片をもつて來るのが習慣であつた。この魔法は中でも恐ろしい物だと私共の話相手は云つた、そして彼自身よく知つてゐたわけは三四年前この男に戀をした女があつて、この男に魔術をかけるために或魔法の醫師を訪れたからであつた。『御覽の通り私は今跛のやうな歩き方をします、私の左足がひどく萎びてしまひました』彼は云つた、『それでその時から、私はもう以前のやうな人間でなくなりました』

私共はとにかく愛して居る者に苦痛や損害を與へるのは普通の人情に反して居ると云つた。それからさらに進んで今の話の女の方では復讐でもせねばならぬやうな何かひどい目に遇つたのではないかと云ふ意味を暗示した。

『いゝえ、どう致しまして』彼は答へた、『あなたは未だこの魔術者のやり方を御存じないのです。たとへば、あなたが或少女を愛したが、それが思ふやうにならないと云ふ場合に、その魔術者のところへ行くと、その魔術者はその女に魔法で恐ろしい事をします、女はひどい病氣になつてどんな醫者でも直す事ができません。しかし女の方であなたと結婚する氣になれば、魔術者の方でその魔法を取り除いて直してくれます』

『しかし女の方で魔法にかけた男と結婚するよりは一層死んだ方がよいと思ふ場合には』

『その場合は勿論女は死にます、しかし又外の魔術者に賴んで反對の魔法で、始めの魔法を取り去る事もできるのですが、それでも以前と全く同じ女にはなれません。それが丁度私の場合でした。私に魔法をかけた女とはどうしても結婚する事はいやでした、そこで魔法を除いて貰つたが、未だ元の通りになりません、なる見込もありません。どうして魔法にかかつたか分らないが、その女には分つてゐます、その女が魔術者のところへ行つたその日に私は突然からだが痛くなつたので、自分の部屋へ運ばれて歸つて來る事になりました。それから私の足が全部腫れ上つて大きな腫物が出て來ました、それて私は幾日もうなつて寢て居る外はありませんてした　たうとう私は魔法にかかつて居る事が分つて來たので、魔術者を一人迎ひにやつたら、その人は二十五弗で直してやると云つてくれた。何だか水のやうな物の入つて居る小さい壜をくれて一日に少しづつ三四回飲むやうにと云ひました。それから三日もすると少し歩けるやうになつたが、御覽の通り萎びて居るやうてす。勿論この魔法を除かなかつたら死んだてせう。いや全くこの魔法と云ふやつは恐ろしいやつてす、全く』

　私共はこの青年の話に少くとも好奇心を起すだけの興味は充分にあると思つた、そこで彼の病氣とその治療の簡單な話を彼から聞く事ができた。彼は恐ろしい魔法にかかつた結

果左足に潰瘍ができて同時にひどく、腫れ上つて困つた事、それから烈しい疼痛に惱んだ事、及び足にひどく燒けたやうな痕が殘つた事を話した。彼を治療した魔法の醫者は彼にただ内服藥を與へただけであつたが、又小さい壜に入れた何だか不思議な物を彼に與へて、『魔法を破る』ために家の入口の前に埋める事を命じた。彼はその品物は何だか知らなかつた、彼の病氣は祕密の毒藥の結果であつたかどうかも知らなかつた、魔法の醫者が祕密の毒藥の調製と處置に熟練して居るかどうかも承知しなかつた。しかし彼は外の病氣で惱んだ事のない事、彼がかかつた普通の醫者達は皆彼の苦痛を和らげる事も、その病氣の原因を説明する事もできなかつた事、それから彼は『どうしてもそんな魔法の醫者を怒らせるやうな事はしない』事を承知してゐた。彼はシンシナーティにはこんな魔法の醫者は澤山あるが永住して居るのではない事を附加して云つた、——彼等は時々外の町へ旅行して、澤山金を儲けた。彼を診察した魔法の醫師を彼は説明して、『赤い眼の』白い髪の、見ても氣味の惡い恐ろしい顏をした甚だ黑い男だと云つた。勿論私共の方にその氣さへあればその魔法の醫師の一人にいつか紹介して貰ふ事もできたらうが、どうしても新聞記者と云ふ資格では紹介する事を承諾しなかつた、その上彼はそんな事をすると私共に非常に危險が伴つて來ると警告した。

私共はこの話をした男が正直で評判の男である事、それから又私共が信ずべき方面から同じやうな魔法の醫者の話を聞いたのはこれが始めてでない事を考へなかつたら、この話を全部面白い迷信の例或は巧みな作り話として一笑に附したかも知れない。凡てこんな場合に、所謂『魔法』の結果は何か祕密に與へられた強い腐蝕性の毒藥を使つた事を暗示して居る、そしてこの若い門番の苦痛は魔法の毒物學に精通した人にして始めて治療のできる地方的毒害の例かも知れないとも思はれる。數年前『チユリア叔母』として知られた老婦人が、跛の黒人で魔術者と云ふ評判を取つた男のために毒殺されたらしいと云ふのでコヴィングトンの黒人間に話の種子となつて相當のさわぎになつた事があつた。この跛の男は彼の知人から中々恐れられてゐた、そして何か妙などうしても直らぬらしい病氣にかかつてゐて彼の犠牲となつたと云はれる婦人は彼の力の恐るべき例を示して居るのであつた。この老婦人は或時膝に疼痛を感じた、そこで『老豚足』と云ふ名で最もよく通つてゐたこの魔術者は、その痛い足を洗ふための透明な洗滌藥をもつて來た、それを使つたすぐあとで激烈な疼衝と膨脹が起つた、その結果若い門番が話したと同じ結果になつたと傳へられて居る。又別の場合に外の黒人の話したところでは或魔法の醫者が何かつまらぬ原因で復讐のためにその黒人とその黒人の父母兄弟姉妹悉くのために毒を盛つたので、死んだ者が

多かつた、生き殘つた者もそれから一生片端になつたと云ふ事である。私共に報告されたこの種類のどの場合にも、その犧牲はいつでも跛になるらしい、そして毒は右か或は左の膝を冒すやうに用ひられるらしい事が何だか不思議である。

矢の毒に關して近頃書いた人の云ふ通り、これ等の評判の魔法の醫者が彼等の黒人の同胞に對して及ぼす勢力は、たしかに烈しい敗血症を起す性質の或不可思議な毒の知識に殆ど全部基づいて居る事は疑ふ餘地がない、そして[illegible]法の醫術の勢力の性質は黒人勞働者の大きな團體を使用する人々によく認められて居るので、もしそんな魔術者と適當な了解があればその雇人達の行儀をもよくし、よく働かせる事もできる事がたしかであるので、そんな人が一人二人づつ黒人の勞働者の如何なる團體にも見出されるのである。この魔術の醫學はアフリカから來て居る事、それから元來アフリカの魔術者と云へば熟練なる毒殺者である事は云ふまでもない。中央及び南アフリカに於ける或土人の間に普通行はれる毒の試罪法及び毒の死刑は近代の旅行者の著述で餘りによく知られて居るから、ここに詳しく述べる必要はない。しかしサー・サミユエル・ベーカーに隨へば、或種族の使用する矢の毒の效果は合衆國に於ける魔術者によつて調製される祕密の毒の效果と云はれる物に似て居る、毒の働きは全身的でなくて局部的であるらしい、疵は腐爛し肉は脫落して骨が露出

する。或人はこの毒を熱帯地方に繁茂する有毒な蔦類から取つた物と想像する、又或人は腐敗した動物素がその成分にあると想像する。魔法の醫師はその毒薬を草から取ると云ふのがこの都の黒人達の一般の信仰である。この祕密の毒の知識は父から子へと傳へられる、そしてこんな知識は殺人の場合に望ましき物ではあるが甚だむつかしい物である事は歴史の證するところである。

　この問題は當然私共をして歴史に於て最も珍らしい、しかも最も知られてゐない章の一つ――祕密の毒薬と云ふ一章を考へさせるやうになる。この章は神話の時代から現代まで延長してゐて比較的現代に於て文學的奇事を求むる人に少なからざる興味を與へて居る。しかし法醫學毒物學等に關する近世の著述家は祕密の毒の歴史には殆ど或は全く注意を與へない、それでこの問題に關する英語の著述は殆どない。しかしドイツ人はこの問題を根本的に研究したらしい、それて古代の毒及び毒殺者に關する種々の著述がドイツ語にある。こんな事に關する近世の知識の源は當然非常に散亂して居る、そして更に祕密の暗殺に關する短い暗示に存して居るに過ぎない、それを種々の歴史家の作のうちのここかしこから拾ひ上げる事ができるだけである。昔の政府は大概祕密の毒薬に關する知識の擴がる事を禁止する事に全力をつくした、そのために昔の歴史家は大概できるだけこの問題に觸れな

い事を彼等の義務のやうに感じた。しかし私共がこれ等の歴史家から學び得る事のできる物は非常に又特別に興味がある。

サーシやメデュサの有害なる妖術、ユーリセスとヘラクレスの毒矢、半神を殺した致命的の着物及びデエソンの花嫁に贈られた恐ろしい着物に關する古いギリシャ、ローマの神話は、戰爭や暗殺の目的で毒を使用する事は有史以前の時代に知られてゐた事を示して居るやうである。しかし恐らく祕密結社によつて行はれた毒殺を美術として扱つた例はリヴイの第八卷にある。紀元前三二九年頃マーカス・クラウディウス・マーセラス及ヴァレリウス・フラッカスの執政の時代にローマの死亡率は非常な割合で增加したので、市民は恐慌を來した、そしてその死の性質は暗殺の祕密結社があつて、何等の痕を殘さないで毒を使用するらしく思はれた。政府は長い間その禍の源をさぐらうとしてゐたが無效であつた、ところが或日の事、一人の女中がふるへながら裁判官クインシアス・ファビアス・マキシマスの前に現れて、自分の女主人の罪惡に加擔してゐたのを赦して貰ふ條件で恐ろしい祕密を白狀する事を約束した。その少女の告白によつてコルネリヤ及びセルヂャと云ふ或貴婦人達の主宰して居る數百人の既婚の婦人達の組織した祕密暗殺團のある事が發見された。百七十人のローマの主婦は取調べられて刑せられたので、ローマの每日の死亡は驚くべく

減少した。古代及び近世の歷史にあるこの種類の殆ど凡ての祕密結社は重に既婚の婦人でてきてゐた事、及び古代の殆ど凡ての名高い毒殺者は婦人であつた事は甚だ奇妙な事實である。コルネリヤ及びセルヂャが使つた毒藥の成分の事はリヴィは何とも云つてゐない、そして甚だ適當にも政府は拷問その他の方法によつて得た祕密を洩さなかつた事は外に記錄がある。

セオフラタスはアルカディアのスラシャスと云ふ男がそれを服用してから二秒から二年までのうちに死を來すやうに調製のできる毒藥の發明者である事を云つて居る。スラシャスの弟子のアレキシスはその師よりも遙かに高い程度に祕密の毒害術に長けてゐたと云はれる、そしてコルネリヤ及びセルヂャの主婦達の恐るべき術も、この毒殺者アレキシスから直接或は間接に習つたのであると考へて居る人もある。この種類の毒、或はそれに甚だよく似た毒の事を演說者クィンティリアン及び歷史家プリユタークも說いて居る、卽ちこの人はマセドンのフィリップはシシオンのアラタスに次第に智慧を鈍くし肺を滅ぼすやうな漫性の毒藥を與へた事を云つて居る。カルセージ人の捕虜になつた不幸なローマの大將アルティリアス・レギユラスは或歷史家の說によれば捕虜交換の交渉のために誓約をしてローマに歸される前にこの種の毒を與へられたと云ふ事である。レギユラスは元老院に對

してこの種の申込に應じない事を勸告して同時にたとへ自分がローマに殘つても餘り役に立ちさうにもないから、約束通りカルセージに歸る事を殘念に思ふ事は無用であると云つた。この話はレギユラスの壯烈に關する、人の熱情をむしろさますやうな事になりさうである。

セヂアナスのドルーサス毒殺、アグリッパのクラウディアス毒殺、ネロのブリタニクス毒殺、ドミシアンのティタス毒殺、マルシアのコムモーダス毒殺はローマの共和政體の時も皇帝の時も同じやうに祕密暗殺の術が盛んであつた事を充分に證明して居る。名高いローカスタがアグリッパ及び彼女の子ネロの兩人の手先きとなつて毒藥を入れた蕈の料理でクラウディウスとブリタニクスを暗殺した事は恐るべき記錄に出て居る。ブリタニクスの死が明らかになつた時、ローカスタはその外色々の罪によつて死刑の宣告を受けたらしいが、その死刑は行はれなかつた、それはこの女は未だ用ひられるからと云ふ皇帝の考に多分よつたのである。彼女は始めネロの命によつてブリタニクス毒殺の準備をした時、皇帝はその强さを試驗せんがためにそれを少し仔山羊に與へた、ところがその動物は五時間苦悶したあとでやうやく死んだ。そこでネロは自分の手でローカスタを打擲して、目の前でもつと强いのを餘議なく調へさせた。ローカスタは効能が餘り突然に現れると人の嫌疑を

招くから毒を弱くして置いたと云つたが、ネロはたしかに結果など顧みなかつた。第二回の毒藥のできた時、彼はそれを少し豚に與へた、それが電光にでも打たれたやうに卽死した。そこで宮中に開かれたそのつぎの宴會でローカスタの準備した毒を入れた蕈の一皿がブリタニクスの前に置かれた。彼がそれに口をつけると同時にさながら卒中の發作でも起つたやうに椅子に倒れた、そしてその部屋から死人となつて運び去られた。ネロはローカスタを赦して大きな土地と多くの富を與へて、さらに毒藥の製造法を習ふために弟子をこの女につかせたと云ふ事である。

勿論ローカスタのやうなこんな毒殺者の用ひた恐るべき毒藥の本當の成分を考へる事は困難である、しかしこの問題に關する古い話を少し調べて見るのも面白い。恐るべき毒の或種類は拷問を受けて死にかけて居る人間の口から流れる泡から調製されたと云はれて居る、たしかにローマ人の間にその當時魔法使は子供を誘拐して、毒藥や媚藥の材料を得るために拷問して殺すと云ふ信仰があつたらしい。ホレースはオヴィッドの第五にカニディアが苦悶せる蝮蛇で亂れた髮を飾つて、これから一人の少年を拷問して殺すつもりだからと云ふので從者に命じて死者の墓から折つて來た野生の無花果の木、糸杉の枝、蟇の粘液で汚れた玉子、ふくろふの羽、飢えた狂犬の口から奪ひ取つた骨、それからイオルカスと

スペインの毒草とをもつて來いと云つて居る事を叙べて居る。それからその少年が赦して貰ひたいと云つても聞かれない事、續いての威嚇、魔女達の殘酷な容貌、彼等が死を與へる方法など目に見えるやうに記してある。その少年を首だけ殘して地中に埋める、少し離れたところに立派な飲物と食物を置く、それから飢餓のために死ぬやうにして置く、同時に少年の視線は徒らに達し得ない食物の方へ向く。そんなにして殺された人間のひからびた肝臟と乾いた骨髓には特別に不思議な効能があると思はれてゐたのは、丁度今日の南アメリカのヤマス族のインド人が彼等の死んだ近親の骨髓に不思議な滋養があると云ふのでいつでも死者の骨を碎いてその中の髓を食ふのと似て居る。昔の魔法使が拷問を行つた事に關して、凡ての文明國に同じ傳說のある事から察するとそんな殘酷な事が實際行はれたと信ぜざるを得なくなる。『拷問して死に處した人間の泡』は恐るべき毒であるかどうか、私共は決定しようとは思はない、しかし苦しめて殺した豚の泡はローマの毒殺者によつてこんな方法に使用された事を色々の著述家が記して居る事をここに云つて置く價値がある。豚を逆につるして火で燒いたり、庖丁で切つたりして苦しめる、その間に口から流れる泡は大事にしまつてローマのカムパニアで見出される或蝮蛇の毒と混和される。この毒を嘗めて死ぬ人は苦悶の豚と同じやうななき聲と妙な叫び聲をあげて恐ろしい苦悶の中に死ぬ

と云はれる。珊瑚蟲の肉も亦毒として使用されたと云はれる。

古代現代共にイタリヤにはこの種の犯罪がいつても多かつたらしい。中世紀の法王の宮廷はこの種類の殺人てよく穢された、法王アレキサンダー六世はセザール・ボルヂア（彼の弟、實は私生兒）のためにローマの富有なる貴族の富を得るために、それから法王自身の權力增大の畫策に反對のあらゆる可能性を滅亡するために、貴族の半ばを毒殺したと云はれる。しかし法王自身たうとう一五〇三年毒のために死んだ。その話はかうである。法王はアリアン・デ・コメトー大僧正を除いて、その大僧正の富を得たいとしきりに望んだ。そこて法王は彼を毒殺しようと決心した、そして計畫の熟した頃、大僧正は或晩、法王と彼の弟ヴアレンティス公爵セザール・ボルヂアが晩餐を共にするために來る、それから晩餐は携帶して來るとの鄭重なる通知を受けた。大僧正は鋭敏にもこの訪問客の目的を推測する事ができた。そこて直ちに法王の料理頭を呼んて莫大な賄賂と思ひ切つた約束とを與へて自分の味方に取り込む事ができた。料理頭は法王の都合のよいやうに或菓子の箱に毒をえれてある事を大僧正に告げた。そこてその高貴の客の到着した時、アリアン大僧正は自分で法王自身に給仕すると主張した。食事の終りに菓子は大僧正自身によつて配られた、大僧正は有毒の菓子をこれ等推參の客達の前に置いて、無毒の物を食卓の自分の場所の前

に置いたが、その眞相を隱して置く方がよいと思つて豫防のために吐劑を飲んで置いた。法王はそれから數時間のうちに死んだ、大僧正は巧みに病氣を作つた、セザール・ボルヂアは少し病氣になつたが、すぐに回復した。しかしセザールは力の强いたけの高い巨人であつた、それでこの人の體格の非常な强さだけでこの人は恐ろしい死から免れたのであつた。コムモーダス（ローマの皇帝）のやうにこの人は競技運動にすぐれてゐた、そしてコムモーダスのやうにこの人の放肆な素行はこの人の力を害しなかつたやうである。勿論毒はこの人を目的にしたのではなかつた、中世紀の毒殺者は、その目的とする犧牲者の肉體に注意してその毒藥の分量を加減する事をいつも忘れなかつたからである。その時代の毒殺者、毒殺された普通人は云ふまでもなく、王侯貴族の數、及び毒殺遂行の非常に完全な程度などに關して書いたら數冊の書物ができるであらう。何人も安全ではなかつた。どんなに警戒しても無駄であつた。或王妃に捧げられた花束の花の香に揮發性の毒があつた、或よく繁昌する店で買つた手袋にも、始めて手を入れてから數時間以內に死ぬ事になるやうなひどい毒が或はあるかも知れなかつた、書物の紙に毒があるので「アラビヤ物語」の回々教主の流儀で紙をかへすために指を嘗めた人は脣へ死をもつて行つた事になつた、見たところ綺麗な盃でもそれを拭ふ切れに毒が仕込んであつた、武器と裝束がよく所有者に

死をもつて來る事があつた、そして甚しきはその毒が室內にあるだけで、或は數滴に少し撒布してあるだけて死を來すやうに使用された事もあるとさへ云はれる。祕密の仕かけと小さい牙のある、うつろになつたところに毒を入れてある指輪は暗殺者の手にはまつて居る、こんな人は相手を殺す場合には友情の假裝の下にただ握手さへすればよかつた。こんな指輪でできる極めて小さい疵は殆んど分らない、犧牲になつた相手にも感ぜられないと云はれて居る。ヴェニスの暗殺者はガラスの短刀を使用したと私共は聞いて居る、その刃はうつろになつて毒を仕込んである、そしてその刃はいつても疵の中で折れる事になつてゐた。

所謂イタリヤの毒殺者のうちで最も名高いのは疑もなくシシリー島の人トフアナであつた、この女は『トフアナ水』と云ふ名高い煎藥の發明者であつた。彼女は最初パレルモでその術を實地に行つたが、ナポリで評判を取つたのであつた、そこではトフアナ水のために殺された數の方が、その兩年疫病がその町を襲うた時に死んだ數よりも多かつたと眞面目に斷言された。トフアナ水は水晶のやうに透明で、無味無臭であつたが、二三滴で卽死する程非常に激烈であつたと云はれて居る。それにも拘らず、注文通りに死を來すやうに加減する事ができたから、犧牲者によつては數年も死なずに居る事もできた。毒物學の著

作者の云ふ外のもつと古い毒のやうに、それは慢性の毒として使用すれば肺患と同じ結果を來す事もできた。その當時パリのセント・ニコラスの墓からにじみ出ると云はれた水或は油のやうな液は非常な不思議な効能があると云はれて、それを壜に入れたのは、丁度今日『ロールヅのマリアの水』を熱心なカトリックの信者が壜に入れて、盛んに眞面目な人人に買はれると同じてあつた。トフアナはそれと全く同じやうに毒を壜に入れた、その壜に『パリのセント・ニコラスの神饌』と云ふ札があつて、セント・ニコラスの像が外に張つてあつた。彼女はこの壜を重に若い既婚の女て夫をなき者にしたいと思つて居る人々に賣つた、そしてこんな女が大勢あつたらしい、それからこの毒は又殆どイタリヤの凡ての町に送られて、その札その他によつて僞物てない事を證明してゐた。政府は永い間トフアナを捕へようとしたが無駄であつた、彼女は烈しく追はれながら修道院から修道院へと逃げた、そしてどうしても發見のできぬ程巧みに變裝して自分のかくれ場からいつでも出て來た。その當時は修道院は神聖なる避難所と考へられてゐた、そしてナポリの大僧正ピグナテリ教主がもしトフアナを出さないやうなら全市を破門すると威嚇して、最後に彼女が隱れてゐた事の分つた修道院から無理に彼女を奪ひ取らうとした時に、人々はまさに暴動を起さうとした。しかしこの興奮は速かに鎭靜したのは、トフアナは凡ての井戸、穀倉に

ある凡ての穀物、及び凡ての春の果物に毒を入れるやうな陰謀をやり出したと云ふ意味を宣傳したからであつた。最も信ずべき説によればトフアナは牢屋で絞殺されたと云はれるが、その審問の次第などは全部祕密にされた、そして彼女の毒の眞相を隱すために、法王は『強い水』の製造と販賣を禁ずる法律を設けた。しかしそれでも人々はトフアナ水と強い水とは甚だ違つた物である事を發見した、そしてその毒は不幸にして發明者と共に死ななかつた。それは一七八〇年までイタリヤで知られてゐたと云はれる。トフアナ水の成分について色々の説がある、しかし本當の成分は多分知られてゐない、そしてその効果に關する多くの話の多數は寓話として考へられねばならない。ヌムトデルはそれは腐蝕性を有する揮發性の毒と鉛糖とでできた物と考へた。ガガニはそれを必ずしも致命的の毒ではないが、刺激劑で、重に斑猫と阿片からできてゐたと考へた。彼はそれを直すためになされた方法がかへつて死の重なる原因となつたと考へた。しかしこの説はこの水が岩清水のやうに透明で無臭であると云ふ根據のある記述と一致しない。ハルレは拷問して死に處せられた人間の泡からできたと云つた。ガレリは無毒の植物アンティリヌム・シムベラリアの液を混和した結晶の砒素に外ならぬと云ふ。レモンの液を多量に飲めば、有効な解毒劑になつたと傳へられて居る。

ところで一六五九年、或人によればトフアナの刑の少し以前、或人によればその事件の後、暗殺の目的でできた若い既婚の婦人の祕密結社がローマにあつてヒイロニマ・スパラと云ふ名の女が主宰してゐた。その時トフアナ水が使用された、そして或記者の説によれば、殆ど凡ての貴婦人が化粧箱にその毒藥の壜をもつてゐた程博く使用されてゐた。その結社を好都合に解散するために、拷問、死刑、さらし、笞刑、追放を行はねばならなかつた。私共の聞いて居るところでは、その結社は夫を除きたいと思つて居る及び外の人を助けてさうさせたいと思つて居る若い既婚の婦人から重に成立してゐた。身分のよい婦人達も大勢それに屬してゐた、そしてそれが六百人の犠牲を出したと稱してゐた。

十七世紀の名高いフランスの毒殺者はその術をイタリヤ人から習得したと云はれて居る。エキシリとデスティネリとして知られて居る二人の犯罪者は錬金石を求めて得なかつたので財産を蕩盡してから、巴里に落ちついて、今では痕がなくなつた毒藥を調製販賣して財産を回復しようと企てた。その結果、通俗史家の言葉を引用して云へば、「巴里は殺人事件で溢れた、どんなに警戒しても安全は得られなかつた、どの日常品の間にも死は潜伏してゐた。手袋、香水、一杯の水、一冊の祈禱書もそれぞれ反逆者の役をした。友人は友人の贈物を受ける事を恐れた、父はその子供の御馳走を疑惑の目で見た、そして子供は父

の手を握る事を恐れた、若い美人は彼女の化粧臺にあるコスメティックを見て、それから眞面目な主婦は彼女の數珠にある記念物を見て、身ぶるひをした、それから兵士は疑はないで武器を取る事ができなくなり、裁判官はその文書を見る事も恐れた」エキシリとデスティネリはバスティル監獄に入れられたが、彼等は入牢中にも外の人々にその恐るべき祕密を傳へた、そして彼等の行つた禍害はその後數百年生き殘つた。ゴダン・ド・サン・クロアと云ふ冒險者がエキシリが未だそこに幽閉中の頃にバスティルへ送られた、ゴダンはドリユ・ドウブレイと云ふ高官の不興を蒙つたのは、その人の娘ブランヴィリエ侯爵夫人と醜聞があつたからであつた。バスティルに居る間に彼はエキシリから祕密の毒藥の術を習つた、それから出獄すると同時に彼の姦婦である侯爵夫人に傘くそれを敎へた、そこで彼女は結局犯罪毒物學の歷史に於ける最も名高い人物の一人となつた。

この二人のイタリヤ人が拘引された頃、前に話したローマやナポリの團體と同じやうな四人の祕密結社が彼等の世話てできた。名高い女占師ラ・ヴォアザンはラ・ヴィゴルーと云ふ女と外に二人の僧侶とがこの妙な結社の重なる人物であつた、そこて富んだ親戚をなき者にしてその遺産を得たい人々、敵に對して復讐したいと考へて居る人々、或は夫なり妻なりを除きたいと思つて居る人々は、これ等の毒殺者によつて與へられた機會を利用す

る事を忘れなかつた。ラ・ヴォアザンは死に關する彼女の豫言の正確なる事と、決してまちがひなく望み通りの結果を得られる『相續散藥』の包みで有名であつた。これ等の婦人達は拷問にかけられて火刑に處せられたが、白狀せずに死んだ。しかし、外の方面からこの結社のうちに地位の高い人々のある事の報告が得られた、そのうちソアソン伯爵夫人は最も罪の重い方に屬してゐた。彼女の地位を尊敬して、彼女はただ國外へ追放されただけであつた。彼女は最後にスペインの宮廷に入る事を許された、そこで彼女は昇汞水と想像される物を入れた乳を一杯チャールス二世の妃マリヤ・ルイザに捧げて毒殺した。これはマリヤ・ルイザの母、英國のヘンリエッタがチコリ水（珈琲代用品）を不幸にも飲んで死んだ時に使用されたのと同じ毒であつたと信じられて居る。この場合にはチコリ水の入れてあつた茶碗になすりつけてあつた。これ等の犧牲者の胃、及びブランヴィリエ侯爵夫人の父の胃は檢査したところでは半ば毒のために腐蝕してゐた事が發見された。肝臟は燒けた肉のやうになり、胃の壁は黑くなつてきれぎれに脫落してゐたと記されて居る。

　ブランヴィリエ侯爵夫人はオテル・ディユと云ふ病院へ毎日患者に菓子やビスケットをもつて見舞に行く習慣であつたところから、最初患者を相手にその毒をためして見たと云はれる。喰べた人は皆死んだ、それで巴里で諺ができた、始めて實地をやるどんな若い醫

師でもブラヴィリエ程に墓地へ人をやる事はできないと云ふのであつた。彼女は父と二人の兄弟を毒殺する事ができたが、甚だ彼女に取つて困つた事には妹を毒殺する事は失敗に歸した。話によれば、彼女はゴダン・ド・サン・クロアと結婚せんがために度々夫侯爵を毒殺しようとしたが、サン・クロアはどうしても彼女と結婚する事を好まなかつたので、いつでも侯爵に解毒劑を與へて彼女の目的を遂げさせなかつた。ブランヴィリエのその殘忍兇惡な行はサン・クロアの死に至るまでは露れなかつた、ところがサン・クロアは或日彼の實驗室で人事不省になつて倒れてゐた、明らかに何か有毒な藥品のガスのために窒息したのであつた。彼はいつもガラスのマスクをかけて實驗をする習慣であつたが、これがすべり落ちて死を招いたのであつた。實驗室には色々の種類の毒を入れた箱があつた、或物は壜に入れて動物實驗の結果を記した札をつけてあつた、或物は粉末になつてゐた、或物は名高いトフアナ水に非常によく似てゐた——それからこれを造るために使用される材料も澤山あつた、それには澤山のアンチモニーや硝酸銀や硫酸は云ふまでもなく、昇汞水だけでも七十五ポンド以上あつた。この箱のふたには、所有者の死んだ場合に、これは外の人には役に立たないから開かずにブランヴィリエ侯爵夫人のところへ送つて貰ひたいと書いてあつた。侯爵夫人はその箱が政府の役人によつて押へられた事を聞いて賄賂てそれ

を取りかへさうとしたが、目的を果す事ができなかつたので突然國を逃げ出した。サン・クロアの執事のラ・シヤウシはすぐあとでその毒を要求する程向ふ見ずであつたが、その報として轢殺の刑に處せられた。侯爵夫人はベルヂアムのリエージの或修道院に隱れて居るのをつきとめられて、僧の變裝をした巧妙な探偵のためにおびき出された。それから拷問にかけられた後火刑に處せられた、彼女が自分で書いた懺悔と彼女の裁判調書は彼女と一緒に燒かれたと云はれる、これは彼女の兇惡な術の祕密が他日人に知られるやうになる事を恐れたからであつた。

　幸にしてこんな祕密の毒殺術は今日の化學によつて容易に解かれる、毒の分析に分光器までも使用される。しかし中世紀の毒殺者の術は中世紀の醫術よりも進んでゐた、そしてブランヴィリエをして醜名を轟かしめた犯罪は一六七六年の彼女の恐るべき刑死と共に止まなかつた。一七六五年十二月二十日、ルイ十六世になつた人の父なる皇太子（ダウフイン）は毒殺された、そして皇太子妃は同じやうに一七六七年に殺された。この犯罪はフランスとイタリヤに限られたのでは決してなかつた。スウエデンのチヤールス十一世は非常に腐蝕性をもつた毒のために死んだと云はれる、それで死體檢査をして見ると、內臟は無數の潰瘍で穿孔してゐた事が發見された。（ダイアモンドを粉末にした物或は毛髮を碎いた物からできた

內臟の毒が古代の毒殺者の間に盛んに行はれた。しかしどこの宮廷と雖も、ロシヤ皇帝の宮廷程祕密の毒殺者の術が成功したところはなかつた。

古い東ローマ帝國の習慣に隨つて、昔のロシヤ皇帝は、首府の宮中の密使が首府に集めて來た帝國中のあらゆる美人の中から皇后を選ぶ事になつてゐた。醫師と產婆が集まつてその少女達を檢査した、そしてイヴァン・ザ・テリブルが第三の妃を選んだ時の例によつて見ると恐らく三千人のうちから首尾よく試驗を通過した者はいつも二十人はなかつたてあらう。こんな妙な結婚の歷史は甚だ面白いが、又甚だ恐るべき物てある。皇帝の妻として王宮へ乘込んだ皇后は當然自分の一族を權威と勢力の地位に引上げると同時に前皇后の親戚から權勢を取上げてしまつた。こんなところから必ず競爭と憎惡が起る、そして大概單純な心の農婦である皇后は非常に祕密の毒藥の知識に富んだ勢力のある陰險な敵に圍まれて居る事を直ちに發見するのてある。ロシヤ宮廷の暗殺者はその犯罪を發見される事は殆ど或は全くなかつた、そして彼等の犯罪はイタリヤて行はれた如何なる物とも比べられるのてある。早い頃のロシヤ皇后て中年まで生きる人は殆どなかつた、そして如何に人力て警戒しても暗殺を防ぐ事はてきなかつた。あの恐ろしいイヴン・ブシリエヴィッチはこんな風にして代る代る三人の妻を失つた。イヴンは僧正達の會議て彼の第三の妻マリア・

ソバキネは結婚後僅か三週間の後毒殺されたと不平を云つた、それてイヴンは罪の有無に關せず殺してしまふやうな狂氣じみた考で彼の貴族を虐殺したのは殆ど驚くに足りない。ボリス・グーデノフは彼の家族一同にロシヤ皇后の食物、着物、或は飲料に毒を入れようとは決してしないと云ふ意味の誓をさせた。

中世紀の毒のやうなそんな毒の性質はただ推測するより外はない、しかしそれは文明世界の現代の自殺者又は祕密の暗殺者が普通使用する鑛物質或は植物質の毒や砒素などで簡單に解決されるときまつてゐない事だけはたしかてある。今日の文明世界は眞に祕密の毒の一種類だけしか知らない、それは中央アフリカの種族の使用して居る物（多分アメリカの魔法醫者の使用して居る物と同じてある）及び南米インド人とマレイ半島の土人の使用して居る物てあるが、それ等の國々ては土人は矢に毒を塗るのてある。この頃これ等の毒の問題についてウィア・ミッチエルその外の人々によつて大なる注意が與へられた。そして殊にアメリカ土人の矢毒に關する多くの珍らしい事實が發見されるに至つた。蛇の毒がその成分に多く入つて居ると云はれるがこの矢毒は蛇の毒と同じく組織に存在の痕を殘さない、そして醱酵的の性質をもつて居るらしい。或種類の物は有毒の蛇の液汁から造られ、或物は腐敗した動物質から、或物は種々の成分から造られる。ガルシラソ・デ・ラ・ヴエ

ガは人肉の腐敗素がインド人の或種族に使用される事を述べて居る、そしてこれ等のインド人は赤毛のスペイン人の肉がすぐれた種類の毒を造る事ができると考へて居る事を注意した。これ等の或野蠻人は、もし或動物の膿汁が外の動物の脈管に注射されたら、その第二の動物から取つた膿汁はもつと有毒になる、そして第三の動物の肉でさらに强くなる事を發見したやうてある。しかし旅行者の報告が色々相違して居る事から考へると、殆ど凡ての種族は色々違つた毒を製造すると云ふのが事實らしい。現代の科學研究てはこれ等の毒の正確なる性質を發見する事も、その解毒劑を發見する事も全然未だできてゐない事は、丁度蛇の毒の性質を發見する事ができないと同じてある。動物界植物界共に人間に材料を供給して居るが、その破壞力に對して私共の毒物學は未だ殆ど無力である事は否定する事がてきない。

ビダサリ

恐らく一千年以前、――恐らくもつと以前、――ビダサリの傳說は、その人の名は分らなくなつたが、誰か聖い托鉢僧によつて音樂的なマレイ語と、歌の調に作られたのであつた。……その作者自身も自分の記憶を殘したいとは思つたらしくない、――その理由はこの書物の最後につぎのやうな不思議な文句があるからである、――『私の心にかかる感情を晴らすために作つたこの歌の文句は弱くて缺點が多い。餘りに悲しく餘りに心が惱ましいから書きたい事も書かなかつた、しかし書いてしまつたので、私はそのために多くの幸福を得た』……そしてこの歌はもと六章に分れてゐた。

昔椰子の葉の屋根の都インドラプーラにリラ・ヂユハラと云ふ名の商人があつた、チヤヤの奴隸を千人と、その外の國々の奴隸を大勢と、その國で同じ階級のどの人よりも大きな富とをもつてゐた。世の中は彼に取つては純粹の蜜の流れのやうに滑らかに樂しく流れ

た、彼の望みは何でも滿たされた、――ただ一つだけ例外があつた、それは子供のない事であつた。彼は色々の若い綺麗な妻を大勢もつてゐたが、大地と海の創造者である神はその幸福だけを彼に決して與へなかつた。

ところで或朝の事この商人リラ・ヂュハラは彼の最も氣に入りの妻と朝早く、丁度朝日の黄金の光が竹藪の扇形の頂に上つた頃、川岸へ行つた。そしてリラ・ヂュハラは子供の泣き聲――やさしい聲、そして笛のやうに透き通つた聲を聞いた、そしてそれが川を下つて來る小さい船から聞えた。そこでこの商人は一所懸命に船に漕ぎついて、それを岸に引き寄せた、見るとその中に立派な顏をした女の兒がゐた。商人と妻は非常に喜んだ、そして子供をうちに連れて歸つた、そこで家中の人が喜んだ。四人の美しい奴隷がこの子供に仕へるために、二人の乳母が夜晝世話をするために選ばれた、リラ・ヂュハラの住宅は皇太子の應接室のやうに裝飾された、そして凡ての部屋には橙色の壁かけと同じ色のカーテンがかけられた。特に子供のために選ばれた部屋は壁かけと光と香料とで立派にしてあつた、この子供は熱心なる祈りに應じて神から與へられたらしかつたからであつた。リラ・ヂュハラと彼の妻はその子供を見ると生みの子供に對すると同じ喜びを感ずるのであつた。子供の顏はこの世にある何物もこれには比べられない程美しかつた。彼女を見た凡ての人

人は彼女の容貌をラヴァナの妻メンヅダリの容貌に比した、そして彼女の手足を天の女神達ヴィドダリの手足に比した、それでマレイの言葉で『美しい花』を意味するビダサリの名が彼女に與へられた。

それから商人リラ・デュハラは出て虹の色を悉く具へて光つて居る小さい魚を捕へた、そしてその魚の魂が祕密の術によつてビダサリの魂と交換された、それで子供は魚の生命と共に生き、魚は子供の生命と共に生きる事になつた。化身の効力を信ずる人々、及びこのやうに運命が互に相依れる二人の間に神祕的な同情をこんな風に作る事ができると考へる人々の間では、かうするのがマレイの國に於ける習慣であつた。「人間が魚の生命をもつて生き、魚が人間の生命をもつて生きる事は不思議ではない、いかに外見上違つてゐても、凡ての生命は同じく絶對精神の分出に過ぎないから」

それからその小さい魚を貴い箱に入れて不思議な池の底に置いた、その池はリラ・デュハラの命によつてペランガム國の風に色々の裝飾を施して特別に造つた物であつた。そして池は最も美しい花園の眞中にあつた。

ビダサリはこの商人の家庭に生長して、日増に綺麗になつた。何でも彼女の望みは得られた、リラ・デュハラは彼女に對して何物をも拒む事はできなかつた。しかしデヤワのど

の王女よりも遙かに立派な衣裳を彼女に與へたが、彼女は最も貴重なダイアモンドをガラスの枠に入れたやうに見えた。彼女が成人した時に、その土地では品位と美と姿勢に於て彼女に比べられる者は誰もなかつた、――彼女の皮膚は純金のやうに黄色であつた、手足はパディの木のやうにしなやかであつた、そして彼女の髪は漆黒の房の川となつて足もとまで流れてゐた。彼女の眼を見た人は皆沈默した、――彼女の容貌の美はそれ程すぐれてゐたが、彼女の心の善良なところはさらに驚嘆すべきであつた。

※
※ ※

その當時のインドラプーラの國王はヂュハン・メンギンドラであつた、――若い立派な君主でリラ・サリと云ふ王妃があつた。この二人の愛情は肉體と精神の結合のやうであつた。ところが或晩の事、王がリラ・サリに向つて千度目に自分の愛を宣言したあとで、彼女は偶然王に向つていたづらにこんな事を云つて見た、――『愛する人よ、もしあなたが私よりもつと美しい女を見た場合、あなたの心はその女の方に向きはしませんか、――その女を娶りたくはならないでせうか』

しかし王はただ微笑して何とも答へなかつた、――そこでリラ・サリの幸福の前に、丁

度太陽の前の蝙蝠のやうに、一つの暗い思ひが通つた、――事に よれば私よりもつと美しい女が居るかも知れない。それ故彼女はつぎのやうに云ひ張つた、『返事をなさらないところを見ると、きつと私の云つた通りでせう。……それなら何故私に對してそんな愛の事など云はれるのですか』

そこで王は用心してためらひながら答へた、――『私の美しき者よ、この世に御身のやうに美しい者がどうしてあるわけがあらう。しかしそんな者がもしあるとすれば、あゝ私の心の人よ、私の魂の中の純金よ、――もし生れも姿も御身に比すべき人があるとすれば、その時にはその人を御身と同じ境遇の人として必ず取る事にしよう』

ところで王妃がこの言葉を聞いた時、彼女の心は寒くなつて、彼女は心の激動のために身震ひをした、それから王の顔に長い狹い眺めを與へて立ち上つた。しかしデュハン・メンギンドラは彼女のあとから行つて、彼女の腰を抱いて彼女を連れ戻つて、彼の膝の上に置いて撫でさすりながら云つた、――『私の心の紅玉よ、私の魂の黄金よ、私の云つた事に對して怒つてはいけない、――私の眼の光よ、正直に御身の問に答へたと云ふわけで怨んでくれては困る』

それから彼の脣のキスの下で、丁度月の面から風が雲を追ひ拂つた時のやうに王妃の顔

は晴れ上つたやうであつた。しかし彼女はただ夫を恐れて微笑したのであつた、彼女の心はその疵のために引續き失血した、そして心の中で彼女は考へた、『「もしこの國に自分より美しい少女があつたら、私は工夫して私の力の及ぶところへ連れて來て、巧みな方法で亡き者にしよう」』さう彼女は決心した、そして王が去つた時に、彼女は隱れて泣いた。

＊
＊　＊

淡紅色の美しい朝が又歸つて來た時、リラ・サリは彼女の四人の美しい侍女を呼んだ、そして彼女は一百の色の寶石を散らしてある黄金製の驚くべき扇を渡して云つた、「私の忠實なる侍女達よ、この扇をインドラプーラの都の方々へ持つて行つて、賣るやうな風をなさい、しかし私よりもつと美しい少女を見ないうちはその價を云つてはならない。そこでもしそんな少女を見たら巧みに誘つて私の宮殿へ連れて來て貰ひたい、私はその女を見たいから。……」

そこで侍女達はその都の方々の區域、商人の區域、僧侶の區域、外國人の區域へ行つた。一萬人以上の美しい婦人がその扇に關して彼等に質問したが、王妃よりも美しくはなかつたので彼等は返事を與へなかつた。しかしその時偶然商人の區域を通りかかつたビダサリ

はその扇を見て立ちとまつて、その侍女達に話しかけたが、彼等は彼女の美しさに見とれて返事もできなかつた。ビダサリの美は天からの出現のやうであつたからである。彼女はペカン花の圖案の刺繡のある着物、——西の國ぶりの花のある黃金の房のついた繻子の外衣と、黃金の蛇の彫刻のボタンをつけた橙色の絹の上衣を着てゐた、——彼女の頸には黃金の頸飾があり、耳は廻る車輪のやうに工夫してある黃金の耳輪で飾つてあつた、そして彼の姿の品のよさ、彼女の衣裳の美しさ、彼女の若々しさの香ひは、最も貴重な花瓶にある最も珍らしい花が人間の眼の達する限り遙かにその芳香を放つて居るやうであつた。

かうして侍女達が、王妃よりももつと美しい少女を見出す事になつた、そこで彼等は彼女の養父母の家まであとをつけて行つて、巧みにリラ・サリの面前へ彼女が彼等と同行するやうに工夫した。

＊
＊　＊

しかしビダサリを見て、王妃の眼は驚嘆をもつて暗んだ、そして口が利かなくなつた、如何なる女神の像でもビダサリの肉體程上品ではなかつた、——どんな花でも彼女の顏程そんなに美しい花やかさを示さなかつたからである。それから王妃の心に嫉妬が燃え出し

た、それから宮殿の離れた場所へ彼女一人だけを連れて行つて、祕密にこの少女を監禁した、そして如何なる方法によつて國王に知らさぬやうに彼女を亡ぼすべきかを徐ろに工夫する事にした。

それからその翌日、國王が狩獵に出た間に、王妃はビダサリがただ泣いてばかり居る部屋へ來た、――そして彼女に向つて叫んだ、――『あゝこの憎いうそつきの女、お前のその憎むべき美しさを何のために見せびらかすのか私には分つて居る。しかし私の競爭者とならうと思つたり、王に貰はれようと思つたり、或は又この部屋から生きて出ようと思つたりする事は駄目だ、王妃であるこの私はお前を憎んで、お前を殺さうと思つて居る お前が大きな聲で泣けば泣く程、私はお前のためにひどい苛責を與へてやる。……』リラ・サリは言葉で彼女の激怒を滿足させるだけでなく、さらに言葉の荒々しさに打擲のはげしさを附け加へて、ビダサリが彼女の面前に氣絶した程苦しめたのであつた。それでも彼女は續いてその少女を打擲した、――それから激怒して彼女の上に跳び上つて踏みつけた、それでもしビダサリがリラ・デュハリの池に未だ生きてゐた小さい魚によつて前に與へられた妙な活力をもつてゐなかつたら、彼女は實際死んだであらう。

しかしその翌日、それから翌々日、それから間斷なしに幾日も、王妃は恐ろしくビダサ

リを苦しめた、――同時にこの少女が――殊に食物も飲物も與へられなかつたから――どうしてそれに堪へて生きて居るのかと不思議に思つた。リラ・デュハリの池の中のその美しい魚は段々に痩せ段々に細くなつて行つた、その色は焔の色になつた、その圓い眼は火の輪のやうに輝いた。それにも拘らずその富んだ商人は彼の愛兒に對して行はれて居る事を少しも知らなかつた。

ところで最後にビダサリはこんな責苦に遇ふよりはむしろ死んだ方がよいと思つた、そこでリラ・サリも聞かないでは居られないやうな風に彼女は云つた、――「王妃様、不幸な者は生きてゐたくはありません、私は身に何の覺えもありませんが、あなたのお氣に召すやうに死んでこの苛責から免れるやうにと神様に祈つて居ります。やはり私を殺したいとの御考なら、王妃様、あなたの侍女をやつて私の魚の入つて居る箱――私はいやでもその魚の生命をもつて生きて居るその小さい魚の游いて居る箱をここへ取りよせて下さい」

そこで王妃は侍女をリラ・デュハリの池へやつて箱の中に游いて居る魚を取りよせた、――その魚は黄金のやうに光つて、色々に變る色をして圓い焰のやうな眼をしてゐた。そこでビダサリは云つた、『あゝ王妃よ、私の生命の魂はその魚の中に潛んでゐます。毎朝それを水の中から取り出して、毎晩その中に戻して下さい。さうすれば私も遠からず死ぬ

事になります』それからリラ・サリは箱から魚を取り出して、その體の廻りにリボンを結んで、それを彼女の頸にかけた。そこでビダサリは死んだやうになつた。

そこで王妃は非常に喜んだ、そして侍女に云つた、『彼女を父の家に歸せ』

そこで侍女達は彼女を兩親のところへ運んだ、兩親は死んだと思つて激しい悲嘆をもつて彼女を迎へた。しかし侍女達が歸つたあとで、彼等はビダサリの魚が池から取り去られた事を發見した、そこで彼等はその恐るべき理由を推察した、それからこの少女に對して又新しい迫害の企てられる事を恐れて森の中にある秘密の場所へ彼女を移した、そして彼女を死んだ者として公けに弔つた。ビダサリは死んだのでなかつたが、毎朝彼女は氣絶して夕方まで人事不省になつて寢てゐた、そして夜だけ生きてゐた。そして夜になるとうちの人々は色々の滋養物や慰安をもつて來た。

この事があつてから間もなく國王デュハン・メンギンドラ及びその部下が狩獵中に路を迷うたのは神の意志であつた、そして運命は彼の足をビダサリの父が彼女を隱して置いた夏の家に向けた。王はこんな大森林の眞中に大きな樹に蔽はれてからみ合つた蔓のために半ばかくされたそんな上品な家を見て驚いた。どこも鍵がかかつて閂をしてあつた。住む

人も見えなかつた、ただ鳥と森の動物の外には何の聲も聞えなかつた。

そこでそんな不思議な物を見た王は好奇心を起した、そして侍臣達が妖怪が住んで居るかも知れないから、ここを通過するやうにと歎願したのを顧みないで、命じて門を破り鍵を壞させた。それから一人で入つた。

内部は一切の物が立派で贅澤であつたが、墓のやうに靜かであり、寺院のやうに薄暗かつた。部屋から部屋へと王は通つた。最も柔らかな、最も厚い敷物の上を歩く時彼の足は何の音もしなかつた、そのやうにして彼は一番奥の部屋に達した、そこには芳香を發する油をともした燈火があつて、絹のカーテンのかかつた大きな龍の形の寢臺があつた。寢臺のふもとに立派な着物と女の穿くやうな華奢な靴があつた。凡てこれ等の物は甚だ王を驚かせた、しかし彼が絹のカーテンを引いて眠つてゐたビダサリの美を見た時には、彼の眼は眩んで、息が殆ど止まつた。未だ曾てチユハン・メンギンドラでもこんな美しい人を夢にも見た事はなかつた。

やうやく我にかへつて、彼は龍の寢臺に腰をかけて、乙女の芳しい頭を膝にのせて、ビダサリを撫でさすつて一千度もキスした、彼女を彼の紅玉、彼の心の黄金、彼の生命の珠玉と呼んで見たが、彼女の眼をさまさないのを不思議に思つた。ところで侍臣達は妖怪を

恐れて居るのて入らうとはしなかつた。
　ビダサリの神々しい美しさに魅せられたチュハン・メンギンドラが訝りながら待つて居る間に、夜になつて月が出た、——月も王の膝にある顔程には美しくはなかつた。その時ビダサリは彼女の天女のやうな眼を開いた、それから王は彼女の顔に雨のやうにキスを浴せた、そして恐れないやうに、彼女について問ふ事に答へてくれるやうにと頼んだ。
　ところでビダサリの恐れを鎮めて、彼女がこれまで經て來た話をするやうに誘ふためには、王のあらゆる說得術と愛情と、王の權威までも持ち出さねばならなくなつた。それから王が殘らず聞いた時、彼は王妃に對する怒で氣も狂ふばかりであつた、それから彼はビダサリをやさしく抱いて云つた、『私の生命の珠玉よ、きつと正しくして上げる、私の心の紅玉よ、安心して下さい、——魚の箱をもつて來て上げる、——私の女王にする。……御身はメンヅダリのやうだ、天人界の女王のスプロボのやうだ、——もう誰にも御身に害を加へさせない、私の心の一部分よ、黃金の偶像よ』
　かくして、惡い王妃の邪心によつて、ビダサリが國王に發見されて愛せられるやうになつた、王はリラ・サリの胸から小さい魚を取つて新しい女王にかへした。それから間もなくビダサリはケムバヂャットの國王の娘である事が發見された、この國王がその娘の生れ

た時彼女を捨てたのは自分の意志でなく、神の意志からであつた、神はかくして、これまて書いて來たやうに凡ての事のなり行くやう、それからこの物語のうちに書いて來た凡ての人の心を喜ばせるやうにと疑もなく望んだのであつた、――ただリラ・サリは別である、彼女は不平と不幸の中にひとり生きるやうに罰せられたのであつた。

あとがき

『きまぐれ』

これは『印象作家の日記』と同じく、先生のニューオーリアンズ市に於ける新聞記者時代（一八七七年――一八八七年）に發表された短篇を集めたものである。編纂者チャールズ・ウッドワード・ハトスン氏が、アイテム新聞及びタイムズ・デモクラット新聞の古い綴込みから熱心に調べ上げて、蒐集の結果、一九一四年に、ボストン市ハウトン・ミフリン書肆から出版されたのてあつた。題名は先生自身、この種類の短篇を總稱して『きまぐれ』と名づけてゐた事實に基いたのてある。

昭和三年一月

落合貞三郎

『神戸クロニクル社説』は、大正九年頃故マックドーナルド氏が小泉一雄君と共に神戸に赴き、同じく當時在世の故ヤング主筆にはかり、氏がヘルンの筆になつたと認めた物を集め歸り、のちマックドーナルド氏の自費によつて出版された物であつた。ここに出た物はその全譯である。

ヘルンの永いアメリカ新聞記者生活時代の作のうち、『異常な物、不可思議な物、變つた物』に對するヘルンの趣味を最も發揮したと譯者が考へた物をさらに八種選ぶ事にした。

「或繪の物語」　一八七四年八月二日發行の『デグラムプス』第七號に出た物。『デグラムプス』はシンシナーティに於てヘルンが友人と共に發行した繪入日曜新聞、八號まで續いた。

「地獄の門に咲く百合の花」　一八八三年二月四日ニユ・オルリアンスの『タイムス・デモクラット』に出た物。

「ハメリンの笛手」　一八八三年七月八日『タイムス・デモクラット』に出た物。

「女騎士」　一八八四年二月三日『タイムス・デモクラット』に出た物。
「巨人と矮人――侏儒と怪物」　一八七七年二月四日シンシナーティの『コムマーシャル』に出た物。
「屍の利用法に關して」　一八七五年十一月七日『コムマーシャル』に出た物。
「毒殺者」　一八七五年十二月十二日『コムマーシャル』に出た物。
「ピダサリ」　一八八三年四月八日『タイムス・デモクラット』に出た物。この一篇は或は『異文學遺聞』に收めらるべき物であつた。

昭和三年一月

田部隆次

第十一巻

要目索引

Fantastics　きまぐれ

Contents	內容
The Night of All Saints	萬聖節の夜
The Devil's Carbuncle	惡魔の紅玉
Les Conlisses	樂屋
The Stranger	旅人
A Dream of Kites	紙鳶の夢
Hereditary Memories	遺傳的記憶
The Ghostly Kiss	幽靈の接吻
The Black Cupid	黑い愛の神
When I was a Flower	私が花であつた時
Metempsichosis	輪廻
The undying One	不死の人
The One Pill-Box	唯だ一個の丸薬函
The Little Red Kitten	赤猫

Creole Sketches　クリーオール小品

Contents	内　容

Editorials of the Kobe Chronicle　神戸クロニクル社說

Contents　內容

A Dead Love	死んだ戀人
At the Cemetery	墓地にて
"Aida"	アイーダ
The Idyl of a French Snuff-Box	佛蘭西製嗅煙草盒の一挿話
A Kiss Fantastical	怪異な一接吻
The Bird and the Girl	鳥と少女
The Tale of a Fan	或る扇子の物語
The Gypsy's Story	ジプシイの話

Eight Essays 隨筆八種

Contents	**內 容**
The Tale a Picture Tells	或る僧の物語
A Lily in the Mouth of Hell	地獄の門に咲く百合の花
The Piper of Hamelin	ハメリンの笛手
Women of the Sword	女劍士
Giants and Dwarfs—Pigmies and Monsters	巨人と矮人——侏儒と怪物
Notes on the Utilization of Human Remains	屍の利用法に關して
The Poisoners	毒殺者
Bidasari	ビダサリ

小泉八雲全集第十一卷飜譯分擔

落合貞三郎　きまぐれ

大谷正信　クリーオール小品
神戸クロニクル社説

田部隆次　隨筆八種

第十一回配本

小泉八雲全集第十一巻

第一回豫約菊判背革裝　大正十五年八月配本開始　昭和三年一月配本完了
第二回豫約菊判總布裝　昭和四年六月配本開始　昭和五年十一月配本完了
第三回豫約學生版　昭和五年十月配本開始　昭和七年三月配本完了

最初申込金五十錢（これは最終回の會費に充當）
豫約者に限り毎月一圓五十錢

家庭版【第四回豫約】
昭和十二年十月十五日　印刷
昭和十二年十月二十日　發行

著作者　小泉八雲全集刊行會代表　田部隆次

發行者　東京市麹町區三番町一　長谷川巳之吉

刊行所　東京市麹町區三番町一　第一書房
振替東京六四二二三
電話九段三三四四

[illegible]町一九八
印刷者　[illegible]

（家庭版）小泉八雲全集 全十二卷 內容

第一卷
異文學遺聞。
支那怪談。
チタ。ユーマ。

第二卷
佛領西印度の二年間

第三卷（上）
知られぬ日本の面影

第四卷（下）
知られぬ日本の面影

第五卷
東の國から。
心。

第六卷
佛の畠の落穗。
異國情趣と回顧。
日本お伽噺。

第七卷
靈の日本。
影。
日本雜錄。

第八卷
骨董。
怪談。
天の河緣起。

第九卷
神國日本。

第十卷
文學論。

第十一卷
きまぐれ。
クリーオール小品。
神戸クロニクル社說
隨筆八種。

別册
小泉八雲。